

相国寺旧境内・上御霊遺跡 発掘調査報告書

2 0 2 0

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市上京区相国寺門前町 709 番地で実施した、相国寺旧境内・上御霊遺跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 18S390)
- 2 調査は、旧京都産業大学附属中学校・高等学校校舎解体及び屋外施設解体事業に伴い実施した。
- 3 現地調査は、学校法人京都産業大学より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、辰巳陽一、望月麻佑、辻 純一（文化財サービス）が担当した。
- 4 調査期間は令和元年 11 月 27 日～4 月 30 日である。
- 5 調査面積は 1822.0 m²である。
- 6 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）である。
- 7 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は辰巳、望月、田邊貴教が行い、編集は辰巳、望月、吉川絵里（文化財サービス）が行った。
- 9 現地での記録写真撮影は辰巳、望月が行い、出土遺物の撮影は写房楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。
- 10 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 11 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 辰巳陽一、辻 純一、望月麻佑、廣瀬八郎、田邊貴教、田中慎一、小林一浩、吉岡創平（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕 辰巳陽一、望月麻佑、多賀摩耶、吉川絵里、森下直子、場勝由紀菜、神野いくみ、植村明男、上野恵己、甲田春奈、西尾知子、若山美帆、赤羽香、溝川珠樹、内牧明彦（以上、文化財サービス）
- 12 自然科学分析については、龍谷大学文学部 北野信彦教授に依頼した。
- 13 出土遺物の年代観は、土器については

平尾政幸 「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019、中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995 に依った。

瓦については

浜中邦弘 「Ⅳ 遺物 2. 瓦・塼」『同志社大学歴史資料館調査研究報告第 13 集 相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査 第 4 次～第 6 次』同志社大学歴史資料館 2015 に依った。

- 14 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示、御協力をいただいた。記して感謝いたします。

(敬称略)

國下多美樹（龍谷大学）、浜中邦弘（同志社大学歴史資料館）、鈴木久男（京都産業大学）、
学校法人京都産業大学、株式会社玄武管財

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	5

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	7

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	12
2 検出遺構	12
(1) 第1面	13
(2) 第2-1面	13
(3) 第2-2面	18
(4) 第3面	20
3 出土遺物	26
(1) 第1面遺構出土遺物	26
(2) 第2-1面遺構出土遺物	27
(3) 第1層出土遺物	34
(4) 第2-2面遺構出土遺物	34
(5) 第2層出土遺物	36
(6) 第3面遺構出土遺物	37

第Ⅳ章 まとめ

1 遺構の変遷	41
2 禁裏御用水について	43

附章

1 禁裏御用水出土のガラス瓶について（株式会社文化財サービス 田邊貴教）	49
2 京都市内出土資料の分析調査（龍谷大学 北野信彦）	60

図版目次

図版 1	調査区東壁断面図（1：80）
図版 2	調査区南壁断面図（1：80）
図版 3	調査区北壁断面図（1：80）
図版 4	調査区南北セクション断面図（1：80）
図版 5	調査区東西セクション断面図（1：80）
図版 6	調査区全体平面紙割り図（1：300）
図版 7	第 1 面 調査区全体平面図（1：300）
図版 8	第 1 面 調査区平面図 1（1：100）
図版 9	第 1 面 調査区平面図 2（1：100）
図版 10	第 1 面 調査区平面図 3（1：100）
図版 11	第 1 面 調査区平面図 4（1：100）
図版 12	第 1 面 調査区平面図 5（1：100）
図版 13	第 1 面 調査区平面図 6（1：100）
図版 14	第 1 面 調査区平面図 7（1：100）
図版 15	第 1 面 調査区平面図 8（1：100）
図版 16	溝 0001 平立面図（1：150）
図版 17	溝 0001 断面図（1：40）
図版 18	第 2-1 面 調査区全体平面図（1：300）
図版 19	第 2-1 面 調査区平面図 1（1：100）
図版 20	第 2-1 面 調査区平面図 2（1：100）
図版 21	第 2-1 面 調査区平面図 3（1：100）
図版 22	第 2-1 面 調査区平面図 4（1：100）
図版 23	第 2-1 面 調査区平面図 5（1：100）
図版 24	第 2-1 面 調査区平面図 6（1：100）
図版 25	第 2-1 面 調査区平面図 7（1：100）
図版 26	第 2-1 面 調査区平面図 8（1：100）
図版 27	礎石建物 0508、溝 0041 平面図（1：150）、 溝 0041 断面図、礎石建物 0508 断面図 1（1：50）
図版 28	礎石建物 0508 断面図 2（1：50）
図版 29	礎石建物 0508 断面図 3（1：50）
図版 30	溝 0124、柵列 0509、柱穴 0047 平断面図（1：40）
図版 31	第 2-2 面 調査区全体平面図（1：300）
図版 32	第 2-2 面 調査区平面図 1（1：100）
図版 33	第 2-2 面 調査区平面図 2（1：100）
図版 34	第 2-2 面 調査区平面図 3（1：100）
図版 35	第 2-2 面 調査区平面図 4（1：100）

図版36	第2-2面 調査区平面図5 (1:100)
図版37	第2-2面 調査区平面図6 (1:100)
図版38	第2-2面 調査区平面図7 (1:100)
図版39	第2-2面 調査区平面図8 (1:100)
図版40	濠0039平面図 (1:200)、断面図 (1:50)
図版41	溝0275平面図 (1:150)、断面図 (1:40)
図版42	柵列0510、0511平断面図 (1:50)
図版43	柵列0512平断面図 (1:60)
図版44	井戸0250平立断面図 (1:40)
図版45	土坑墓0335平断面図 (1:40)、土坑0148平立断面図 (1:40)
図版46	第3面 調査区全体平面図 (1:300)
図版47	第3面 調査区平面図1 (1:100)
図版48	第3面 調査区平面図2 (1:100)
図版49	第3面 調査区平面図3 (1:100)
図版50	第3面 調査区平面図4 (1:100)
図版51	第3面 調査区平面図5 (1:100)
図版52	第3面 調査区平面図6 (1:100)
図版53	第3面 調査区平面図7 (1:100)
図版54	第3面 調査区平面図8 (1:100)
図版55	溝0145平面図 (1:150)、断面図 (1:40)
図版56	柵列0513平断面図 (1:50)
図版57	柵列0514平断面図 (1:50)
図版58	掘立柱建物0515平断面図 (1:50)
図版59	掘立柱建物0516平断面図 (1:50)
図版60	竪穴建物0164平断面図 (1:40)
図版61	竪穴建物0217、竪穴建物0219平断面図 (1:40)
図版62	竪穴建物0218平断面図 (1:40)
図版63	竪穴建物0363、竪穴建物0364・0468平断面図 (1:50)
図版64	竪穴建物0389(拡張後)平断面図 (1:50)
図版65	竪穴建物0389(拡張前)平断面図 (1:50)
図版66	竪穴建物0421平断面図 (1:40)
図版67	竪穴建物0164竈検出状況平断面図 (1:20)
図版68	竪穴建物0164竈支柱石検出状況、完掘状況平断面図 (1:20)
図版69	竪穴建物0219竈、竪穴建物0389竈平断面図 (1:20)
図版70	出土遺物1 (1:4)
図版71	出土遺物2 (1:4)
図版72	出土遺物3 (1:4)
図版73	出土遺物4 (1:4)
図版74	出土遺物5 (1:4)

図版75	出土遺物 6 (1 : 4)
図版76	出土遺物 7 (1 : 4)
図版77	出土遺物 8 (1 : 4)
図版78	出土遺物 9 (1 : 2、1 : 4)
図版79	出土遺物 10 (1 : 4)
図版80	出土遺物 11 (1 : 4)
図版81	出土遺物 12 (1 : 4)
図版82	遺構 1. 調査地全景 (調査地より御所方向を望む) 2. 第 1 面 溝0001検出状況 (北から)
図版83	遺構 1. 第 1 面 溝0001西壁水面痕跡 (東から) 2. 第 3 面 竪穴建物0389竈検出状況 (西から)
図版84	遺構 1. 第 1 面 溝0001完掘状況 (北から) 2. 第2-1面 調査区全景 (東から)
図版85	遺構 1. 第2-1面 礎石建物0508、溝0041全景 (北から) 2. 第2-1面 地中梁D内溝0124掘削後状況 (南から)
図版86	遺構 1. 第2-2面 調査区全景 (東から) 2. 第2-2面 濠0039掘削後状況 (東から)
図版87	遺構 1. 第2-2面 柵列0510・0511全景 (西から) 2. 第2-2面 柵列0512全景 (西から)
図版88	遺構 1. 第2-2面 土坑墓0335遺物出土状況 (東から) 2. 第2-2面 土坑0148底部礫検出状況 (南西から)
図版89	遺構 1. 第 3 面 調査区全景 (西から) 2. 第 3 面 竪穴建物0164床面検出状況 (西から)
図版90	遺構 1. 第 3 面 竪穴建物0218床面検出状況 (南から) 2. 第 3 面 竪穴建物0219床面検出状況 (南から)
図版91	遺構 1. 第 3 面 竪穴建物0363・0364・0468床面検出状況 (北から) 2. 第 3 面 竪穴建物0389・0421床面検出状況 (西から)
図版92	遺構 1. 第 3 面 竪穴建物0389 (拡張前) 状況 (東から) 2. 第 3 面 竪穴建物0164竈検出状況 (西から)
図版93	遺構 1. 第 3 面 竪穴建物0164竈遺物出土状況 (西から) 2. 第 3 面 竪穴建物0164竈支柱石検出状況 (北西から)
図版94	遺構 1. 第 3 面 竪穴建物0219竈セクション断面 (東から) 2. 第 3 面 竪穴建物0389竈セクション断面 (南から)
図版95	遺物 1. 第 1 面 溝0001出土遺物 2. 第2-1面 瓦溜り出土土器類
図版96	遺物 1 - 8. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦 1
図版97	遺物 1 - 2. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦 2 3 - 5. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦 1

図版98	遺物	1 - 4. 第2-1面	溝0041出土軒平瓦2
		5. 第2-1面	柱穴0047出土水晶製品
図版99	遺物	1. 第2-1面	溝0041出土鬼瓦
		2. 第2-1面	溝0041出土埴
図版100	遺物	1. 第2-2面	濠0039出土遺物
		2. 第2-2面	土坑0128出土瓦
図版101	遺物	1. 第2層	出土遺物
		2. 第3面	溝0145出土遺物
図版102	遺物	1. 第3面	竪穴建物0164竈出土遺物
		2. 第3面	竪穴建物0218出土遺物
図版103	遺物	1. 第3面	竪穴建物0219出土遺物
		2. 第3面	竪穴建物0363・0389出土遺物

挿図目次

図1	調査位置図（1：2500）	1
図2	調査経過写真	2
図3	調査区地区割り・基準点配置図（1：300）	4
図4	天明大火後の境内図	6
図5	既往調査位置図（1：5000）	8

表目次

表1	既往調査一覧	9
表2	遺構概要表	12
表3	遺物概要表	26
表4	遺物観察表	45

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図1）

京都府京都市上京区相国寺門前町 709 番地に位置する旧京都産業大学附属中学校・高等学校跡地において、旧京都産業大学附属中学校・高等学校校舎解体及び屋外施設解体事業が計画された。当該地は相国寺旧境内および上御霊遺跡の範囲内にあたる。そのため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が実施された。その結果、相国寺旧境内および上御霊遺跡に関連すると考えられる古代から中世の遺構および遺物の存在が確認され、発掘調査を実施することとなった。調査は、学校法人京都産業大学から株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託された。

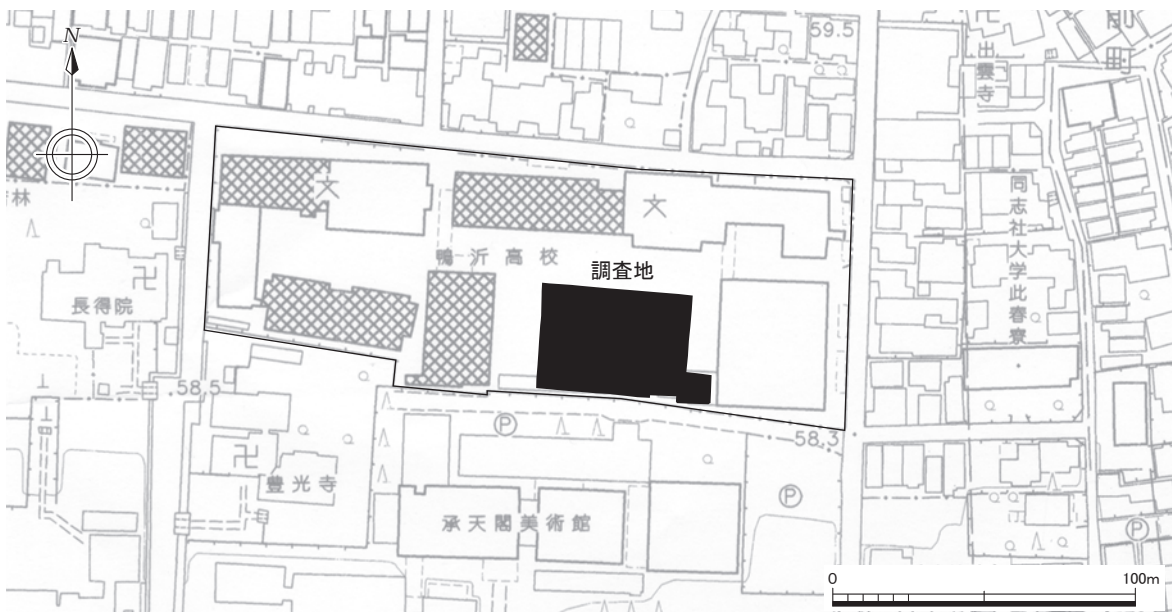


図1 調査位置図（1：2,500）

2 調査の経過（図2）

発掘調査は2019年11月27日から現地作業に着手し、2020年4月30日にて全ての工程を完了した。調査区は、文化財保護課の指導により北辺で東西50.0m、南辺で東西58.0m、南北35.0m、面積1,822.0㎡の調査区を設定した。

近現代整地土および盛土を重機掘削によって除去したところ、調査区東端部において禁裏御用水遺構と考えられる南北方向の石組み溝を検出した。そのため、当該遺構検出面を第1面として遺構検出を行った。その結果、上記石組み溝に加え、東西方向の溝1条、北西から南東方向の溝数条、および南西から北東方向の溝数条を検出した。これらの溝内には土管が埋設されており、北西から南東方向、南西から北東方向の溝は東西溝に接続して魚の骨状の平面プランをなす。これらの溝は、調査地が旧京都産業大学附属中学校・高等学校のグラウンドであったことから、グラウンドの排水用暗渠であったと考えられる。石組み溝内の堆積土には磁器、ガラス瓶、プラス



1. 調査前（北東から）



2. 重機掘削作業（南から）



3. 禁裏御用水掘削作業（北東から）



4. 禁裏御用水公開風景（北から）



5. 層間掘削作業（北東から）



6. 第3面遺構掘削作業（南東から）



7. 埋め戻し作業（北東から）



8. 調査完了後（東から）

図2 調査経過写真

チック製歯ブラシ、櫛、乾電池など、近代の遺物が多量に包含されており、塵芥の溜り場になっていたと考えられる。

第1面においては、これらに加えて中世のものと考えられる遺構を検出した。そのため、同一面ではあるが、第1面および第2面を設定し、禁裏御用水、近現代攪乱を第1面、中世遺構を第2面に属する遺構として扱い、人力にて遺構掘削を行い、記録作業を実施した。

次に、人力によって第1面および第2面の遺構ベース層を掘削、除去し、第3面の精査、遺構検出を行った。その結果、白鳳時代から奈良時代のものと考えられる柱穴、掘立柱建物数棟、竪穴建物9棟を検出した。これらを人力にて掘削後、記録作業を実施した。

記録作業が完了した後、調査区を埋め戻し、資機材を撤収して現地作業を終了した。

なお、写真撮影機材は、35 mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35 mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

また、禁裏御用水については禁裏に関連する遺構である貴重性と、遺跡調査の公開の重要性を鑑み、学校法人京都産業大学の主催で周辺住民および相国寺関係者を対象として遺構の一般公開を実施した。また、2020年3月2日から7日にかけて、京都産業大学むすびわざ館において、速報展「写真で見る禁裏御用水の遺構」が開催された。加えて、調査の進捗に合わせて現地説明会を開催する予定であったが、2020年3月以降に発生した新型コロナウイルスの流行および、それを受けて緊急事態宣言が発令されたため、ウイルス感染リスク回避の観点から現地説明会の開催を断念し、4月21日に調査成果に関する報道発表を行い、一般公開に代えた。なお、現地説明会の代替として、現地解説動画を作成し、弊社HPにて公開を行った。(URL: <http://bunnkazai.co.jp/report/#movie>)

現地調査においては、適宜、文化財保護課の臨検および指導を受けた。また、遺構検出段階および掘削段階において、本調査の検証委員である龍谷大学教授國下多美樹氏、同志社大学歴史資料館准教授浜中邦弘氏、京都産業大学教授鈴木久男氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

3 測量基準点の設置と地区割り (図3)

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にK.1、K.2、K.3を設置し、その2点からトータルステーションによりK.1-K、K.1-1を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

K.1	X = -107105.759 m	Y = -21554.938 m	H = 59.590 m
K.2	X = -107151.879 m	Y = -21589.082 m	H = 59.254 m
K.3	X = -107143.941 m	Y = -21647.885 m	H = 59.568 m
K.1-K	X = -107147.907 m	Y = -21556.154 m	H = 58.525 m
K.1-1	X = -107120.466 m	Y = -21593.059 m	H = 59.706 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3 mグリッドを設定した。Y軸にアル

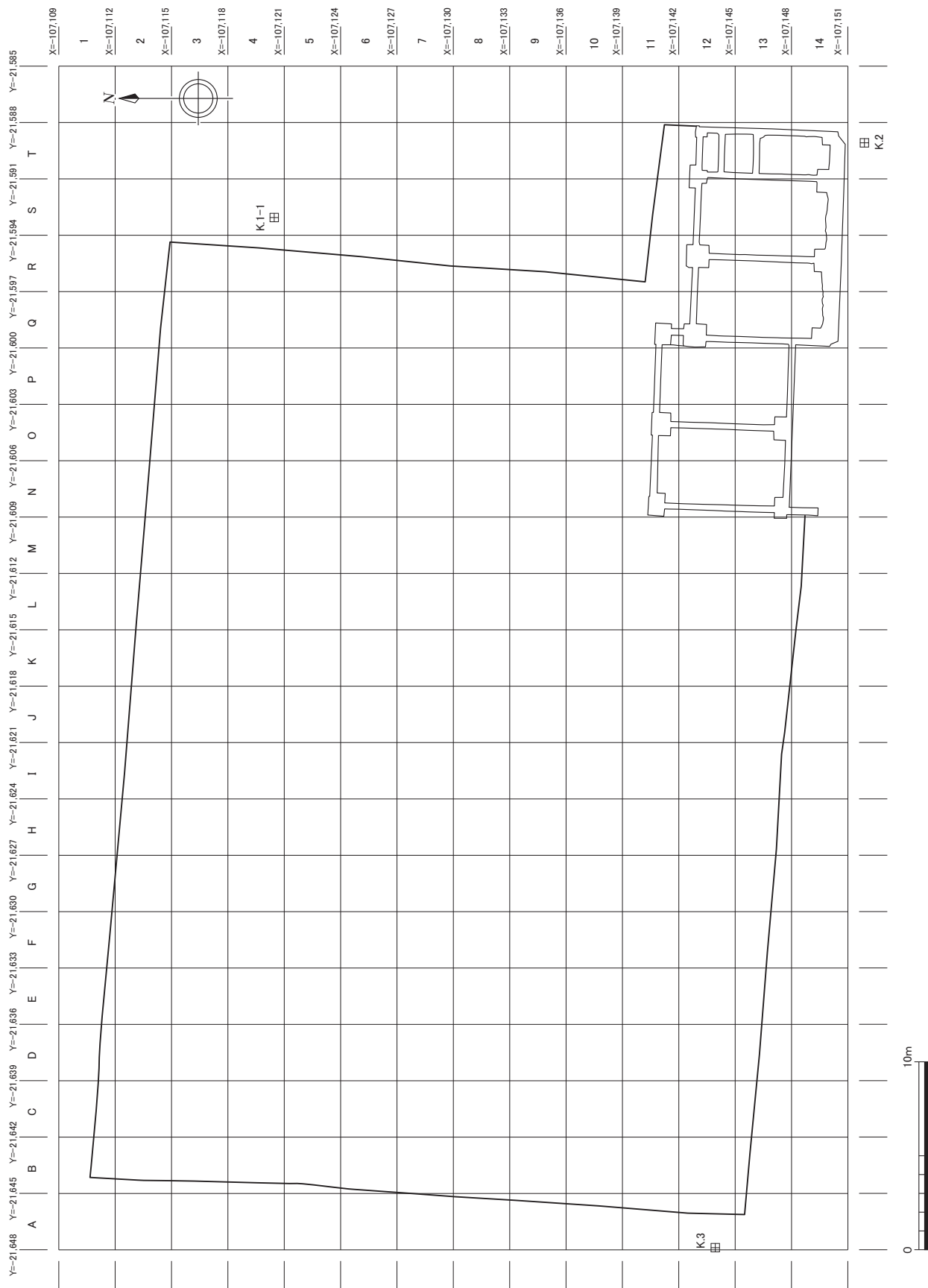


図3 調査区地区割り・基準点配置図 (1 : 300)

ファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの南東角を基準とした。

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した辰巳陽一、望月麻佑、田邊貴教、編集作業は辰巳、望月、吉川絵里が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境

調査地は賀茂川に沿って発達した扇状地上に位置する。当地は、相国寺境内北東に建つ承天閣美術館の北に隣接しており、相国寺の旧境内に包含される。また、調査地の北西約 200 m に位置する上御霊神社境内からは薬師寺・本薬師寺で出土している軒丸瓦（6121 型式 A 種）と同文の軒丸瓦、同範の軒平瓦（6647 型式 G 種）が採集されている⁽¹⁾。調査地を含めた上御霊神社一帯の地域は山城国愛宕郡出雲郷にあたり、賀茂川を境にして左岸が上出雲郷、右岸が下出雲郷に分かれる。正倉院紙背文書として残された神亀三（726）年の『山背国愛宕郡出雲郷雲上里・雲下里計帳』の雲上里は上出雲郷、雲下里は下出雲郷に比定され、現在の相国寺一帯は下出雲郷に含まれると考えられる。出雲郷は出雲氏の本拠であり、上御霊神社境内がその氏寺である「出雲寺跡」と想定されており、調査地を含めた周辺地域が上御霊遺跡の範囲内に含まれる。その後、室町時代に至って相国寺が創建され、調査地はその境内に包含される。相国寺は永徳二（1382）年、室町幕府第三代将軍足利義満の発願によって創建された寺院で、臨済宗相国寺派の総本山である。建立に際しては、『続史愚抄』永徳二年十月六日条に「近辺居宅不依貴賤皆遷他所。福原遷都外無例歟云。」、『荒暦』永徳二年十月三十日条に「近辺貴賤遷居於他所、如此事、福原遷都之外無例云々」と見えるように、既存の屋敷や寺院が強制的に他所に移転させられ、寺域が確保された。同年十月二十九日には仏殿および法堂の立柱が行われ、至徳二（1385）年に仏殿が完成、翌至徳三（1386）年には五山第二位に列せられた。明德二（1391）年に法堂が開堂し、明德三（1392）年には総門、山門、仏殿、土地堂、祖師堂、法堂、庫裏、僧堂、方丈、浴室、東司、講堂、鐘楼、塔頭などが整い、落慶供養が行われた。相国寺創建当初における境内の様子については詳細が不明であるが、天明の大火以降の境内図によれば調査地は劫外軒の敷地北半部にあたる。（図 4）劫外軒は中華承舜を開山として天正年間（1573～1592）に創建され、明治六（1873）年に廃絶したとされる。『光源院文書四』慶長十二（1607）年十一月二十五日条に「劫外軒之儀申置條々 右當軒者數年斷絶之儀、舊跡難捨餘、承本喝食取立候之間、豊光・大光之儀者、不及申、以心華爲頭、養源・小補・大通

くの配当を受けており、諸塔頭の中でも有力な塔頭であったことを窺うことができる⁽³⁾。また、天明八（1788）年の『天明八年戊申正月晦日回祿之記』には「法堂之外、諸伽藍及塔頭二十一箇院、至辰刻灰燼」とあり、天明の大火によって法堂と数院を除き相国寺境内の大半が焼失したことが判るが、大火後に書かれた『類焼御断書』に劫外軒の名を認めることができ、天明の大火によって焼失したことが判る⁽⁴⁾。一方で、『塔頭記 天保十四年癸卯五月 末寺改簿』には建物が存在する塔頭として劫外軒の名が見えることから、天保十四（1843）年には再建されていたと考えられる⁽⁵⁾。その後、明治六（1873）年に廃絶し、成安女子学園が相国寺から土地を賃借して昭和二（1927）年に当地へ移転している。

註

- (1) 前田義明「御霊神社境内の採集遺物」『研究紀要 第10号-(財)京都市埋蔵文化財研究所 設立30周年記念号-』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007
- (2) 相国寺史料編纂委員会編『相国寺史料 第1巻』1984
- (3) 相国寺史料編纂委員会編『相国寺史料 第1巻』1984
- (4) 相国寺史料編纂委員会編『相国寺史料 第6巻』1990
- (5) 相国寺史料編纂委員会編『相国寺史料 第9巻』1994

参考文献

- 『相国寺旧境内・上京遺跡発掘調査報告書 同志社大学烏丸キャンパス建設に伴う発掘調査』同志社大学歴史資料館調査研究報告第12集 同志社大学歴史資料館 2013
- 『相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査（第4次～第6次）』同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集 同志社大学歴史資料館 2015
- 『相国寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005

2 既往の調査（図5・表1）

相国寺旧境内内では、同志社大学および京都市埋蔵文化財研究所などによって多くの発掘調査が実施されている。また、西に隣接する室町殿跡においても数次の調査がなされている。図5において黒実線で囲んだ範囲は周知の遺跡として登録されている相国寺旧境内と室町殿（花の御所）、破線で囲んだ範囲は現在の相国寺境内、グレー実線で囲んだ範囲は江戸時代の相国寺境内推定ラインである。今回の調査地近辺では、1976年（13）、1977年（14）、1978年（17、18）に成安女子学園敷地内で実施された調査において遺構には伴わないもののチャート製細石核が出土しており、奈良時代の柱穴、土坑、室町時代の東西溝、江戸時代の東西溝、土坑が検出されている。また、調査地の南に隣接する承天閣美術館地点では1981年～1982年（22）、1986年（24）、2004年（29）に発掘調査が実施されている。1981年～1982年の承天閣美術館建設に伴う調査では、相国寺創建期のものと見られる南北方向の土塁および溝などが検出されている。この調査地は近世においては豊光寺および劫外軒の敷地に比定される。1986年の調査では、北東の承天閣美術館増築用地の

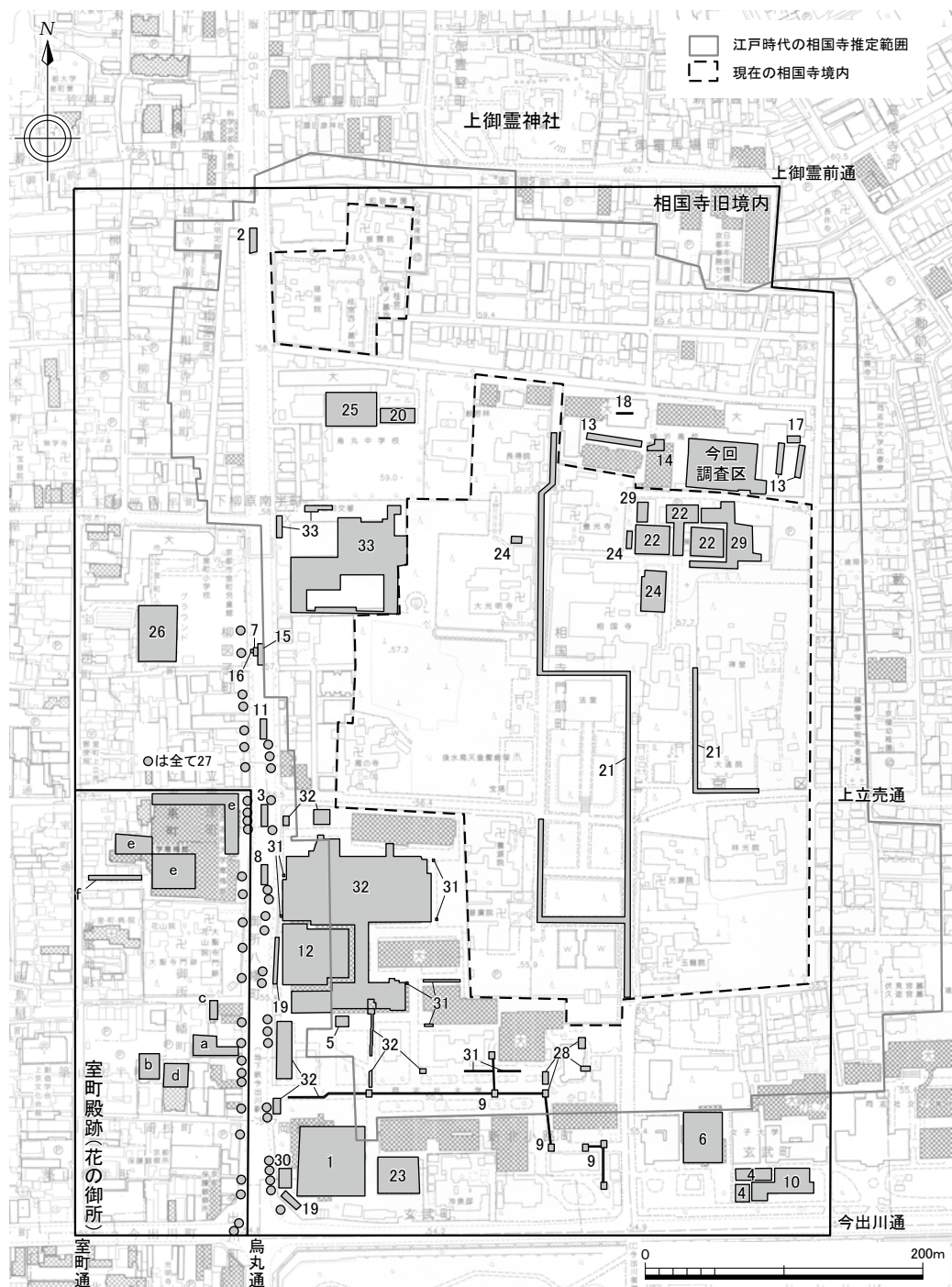


図5 既往調査位置図（1：5000）

トレンチで相国寺創建期の溝や石組み井戸が、南の事務棟予定地のトレンチでは15世紀後半の井戸、18世紀の溝、18世紀後半以降の南北方向の石垣などが検出された。2004年の調査では、豊光寺敷地内に比定される西側のトレンチで江戸時代の南北方向の布掘り柵列などが検出され、劫外軒敷地内に比定される東側のトレンチでは、江戸時代の石組み溝（禁裏御用水）とそれに伴う土塁、16世紀初頭以降に成立し、天明の大火で焼亡したと考えられる基壇建物、14世紀後半の掘込地業、室町時代と見られる掘立柱建物などが検出されている。また、7世紀半ば～後半の竪穴建物が20棟、8世紀以降に建てられたと見られる掘立柱建物1棟、建物と併存していたと考えられる柵列

2列が検出されている。また、竪穴建物群について出雲寺造営に携わった集団との関連が指摘されている。

今回調査地から北西約 250 m に位置する烏丸中学校校地内では 1981 年（20）、1993 年（25）に発掘調査が実施されている。1981 年の調査では室町時代の石列状遺構が検出されており、基壇化粧と見られている。1993 年の調査では、15 世紀末～16 世紀中頃の堀状遺構が 5 条検出されているほか、室町時代の柱穴、石列、土坑など、平安時代～鎌倉時代の溝などが検出されている。また、烏丸中学校は普廣院跡および勝定院跡に比定される。

2011 年に旧京都市染色試験場跡地において実施された同志社大学烏丸キャンパス建設に伴う調査（33）では、15 世紀末～16 世紀の堀、石室、17 世紀の堀や石組井戸などが検出されている。また、調査区東端では道路跡と見られる南北方向の礫敷遺構が検出されており、調査区西端部では町屋背後の塵穴が検出されている。2009 年～2012 年にかけて実施された同志社大学今出川キャンパス整備に伴う発掘調査（31、32）では、相国寺創建期の庭園に伴うと考えられる南北流路、当該流路の東西を南北方向に走る礫敷道路、礎石建物が検出された。この流路埋土からは「鹿」の墨書銘がある古瀬戸碗が出土し、当該調査地が相国寺創建期から鹿苑院に比定されることが実証された。また、室町時代末期の礎石建物、南北方向の溝、堀等が検出され、桐文軒丸瓦、「雲頂」銘のある天目碗に加え「鹿」銘天目碗、「鹿苑衆寮」銘白磁皿が出土している。調査区北端部では久昌軒あるいは雲泉軒にかかる歴代の住持やその近親者が葬られていたと考えられる近世墓地在検出されている。

表 1 既往調査一覧

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	玄武町 596・岡松町 264（大学図書館地点）	調査	江戸時代後半の井戸・瓦溜り・土坑・礫溜り・火災整地層などを検出。	『同志社大学今出川校地発掘調査概要 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.1』1972 同志社大学校地学術調査委員会
2	相国寺門前町（烏丸線 No.1 地点）	調査	室町時代末期の土坑・柱穴・溝などを検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 I 1974.75 年度』1980 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
3	上立売東町・御所八幡町（烏丸線 No.7 地点）	調査	室町時代末期～江戸時代の溝・柱穴・土坑などを検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 I 1974.75 年度』1980 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
4	玄武町 602-1（女子大図書館地点）	調査	室町時代後半の配石遺構・土坑、江戸時代の溝・土坑・井戸・配石遺構などを検出。	『同志社女子大学校地発掘調査概要 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.3』1975 同志社大学校地学術調査委員会
5	相国寺門前町 629（中学校新彰栄館北地点）	調査	江戸時代の井戸・土坑・石列などを検出。	『同志社中学校々地内発掘調査概要 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.4』1975 同志社大学校地学術調査委員会
6	玄武町 602-1（光塩館地点）	調査	古代整地層、桃山時代の石組池、江戸時代の甕棺墓群・土坑などを検出。	『同志社大学旧有隣館跡地発掘調査概要 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.5』1975 同志社大学校地学術調査委員会
7	柳ノ岡子町・相国寺門前町（烏丸線 No.32 地点）	調査	室町時代末期の落込み・濠・石垣・東西溝・土坑、江戸時代後期の土坑などを検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 I 1974.75 年度』1980 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
8	御所八幡町（烏丸線No.33 地点）	調査	室町時代末期の溝・石群・落込み・土坑などを検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ 1974.75 年度』1980 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
9	相国寺門前町 629・新北小路町 612(コンコース地点)	調査	室町～桃山時代の土坑、江戸時代前期の土坑、江戸時代後期の井戸・土坑などを検出。	『今出川校地電話配線替に伴う発掘調査概要 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.6』1976 同志社大学校地学術調査委員会
10	玄武町 602-1（女子大図書館地点）	調査	室町～桃山時代の井戸・土坑墓群・埋甕・土坑・集石・溝状遺構、江戸時代の土坑・石室・集石・石列・甕棺などを検出。	『同志社女子大学図書館建設予定地発掘調査概要 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.8』1976 同志社大学校地学術調査委員会
11	柳ノ図子町（烏丸線No.45 地点）	調査	室町時代後期の土坑・溝、室町時代後期～桃山時代の土坑・溝状遺構・石群、江戸時代後期の土坑・井戸・瓦溜りなどを検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』1981 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
12	相国寺門前町 629（中学校体育館地点）	調査	桃山時代の石室・石組遺構・井戸・集石・柱穴群・土坑・瓦溜り・溝、江戸時代の井戸・石組遺構・集石などを検出。	『同志社中学校体育館建設予定地発掘調査概要 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.10』1977 同志社大学校地学術調査委員会
13	相国寺門前町（成安女子学園）	調査	奈良時代の柱穴・土坑、室町時代の土坑、桃山～江戸時代の東西溝などを検出。	『相国寺旧寺域内の発掘調査 - 成安女子学園校地内の埋蔵文化財 -』1977 同志社大学校地学術調査委員会
14	相国寺門前町（成安女子学園）	調査	室町時代の東西溝・落込み・土坑、近世の溝・土器溜りなどを検出。	『昭和 52 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2011 埋文研
15	相国寺門前町（烏丸線立 -16 地点）	調査	室町時代後期～桃山時代の溝、時期不明の土坑などを検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』1981 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
16	柳ノ図子町（烏丸線 X-3 地点）	調査	室町時代後期の井戸・石垣・土坑・落込み・ビット・溝などを検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』1981 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
17	相国寺門前町（成安女子学園）	調査	室町時代の井戸・柱穴・土坑、近世の東西溝・柱穴・土坑などを検出。	『昭和 52 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2011 埋文研
18	相国寺門前町（成安女子学園）	調査	中世～江戸時代の柱穴・土坑、江戸時代の溝・土坑などを検出。	『昭和 52 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2011 埋文研
19	御所八幡町・玄武町（地下鉄今出川駅地点）	調査	奈良時代のビット、室町～江戸時代の井戸・土坑・溝・石列・礎敷などを検出。	『同志社構内地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』1981 同志社大学校地学術調査委員会
20	相国寺門前町 647-23（烏丸中学校）	調査	室町時代の石列状遺構・柵・集石・土坑などを検出。	『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』1983 埋文研
21	相国寺門前町（相国寺内道路）	立会	飛鳥時代の土坑、平安～鎌倉時代の土坑・井戸・柱穴、室町時代の南北石列・東西石組溝・土坑・土器溜りなどを検出。	『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要（試掘・立会調査編）』1983 埋文研
22	相国寺門前町 701（承天閣美術館地点）	調査	室町時代の南北土塁・溝、室町時代～近世の遺構を検出。	『大本山相国寺境内の発掘調査 - 承天閣地点の埋蔵文化財 -』1984 同志社大学校地学術調査委員会
23	新北小路町（徳照館地点）	調査	室町時代後期の溝、桃山時代の土坑・溝・井戸・石室、近世の土坑・溝・井戸・建物礎石を検出。	『同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.22』1990 同志社大学校地学術調査委員会
24	相国寺門前町（承天閣美術館事務棟用地地点他）	調査	室町時代の東西溝・井戸・土坑などを検出。	『大本山相国寺境内の発掘調査Ⅱ 同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.21』1988 同志社大学校地学術調査委員会
25	相国寺門前町 647-23（烏丸中学校）	調査	平安～鎌倉時代の土坑・東西溝、室町時代の堀・土坑・柱穴・石列などを検出。	『平成 5 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1996 埋文研
26	室町頭町 261（室町小学校）	調査	平安～鎌倉時代の落込み、室町時代末期～桃山時代の土坑・柱穴・柵・石室・整地層、江戸時代の土坑・柱穴・溝・井戸などを検出。	『平成 9 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1999 埋文研

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
27	今出川町・相国寺門前町他（烏丸通今出川～上立売上ル）	調査	室町時代後期の柱穴・埋甕遺構、江戸時代の土坑・石積遺構・井戸などを検出。	『平成14年度京都市埋蔵文化財調査概要』2004 埋文研
28	相国寺門前町（クラーク記念館地点）	調査	江戸時代初期の南北石列、江戸時代中期の土坑などを検出。	『同志社大学構内遺跡発掘調査報告書（2003・2005年度）同志社大学歴史資料館調査研究報告第7集』2007 同志社大学歴史資料館
29	相国寺門前町701（承天閣美術館増築地点）	調査	飛鳥時代の堅穴住居・掘立柱建物、室町時代の掘立柱建物・柵列、桃山～江戸時代の建物基壇・瓦拵・瓦積暗渠・築地などを検出。	『相国寺旧境内 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-14』2005 埋文研
30	玄武町（図書館西地点）	調査	室町時代末期～江戸時代の土坑・石組・溝・濠などを検出。	『同志社大学構内遺跡発掘調査報告書（2003・2005年度）同志社大学歴史資料館調査研究報告第7集』2007 同志社大学歴史資料館
31	相国寺門前町（今出川キャンパス整備第1次～第3次）	調査	鎌倉時代の溝、室町～江戸時代の礎石建物・井戸・土坑・石敷などを検出。	『相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査第1次～第3次 同志社大学歴史資料館調査研究報告第10集』2010 同志社大学歴史資料館
32	相国寺門前町（今出川キャンパス整備第4次～第5次）	調査	鎌倉時代の井戸・土坑・溝、南北朝～室町時代の礎石建物・濠・溝・井戸・土坑、室町時代末期の建物跡、江戸時代の溝・石室・土坑・溝などを検出。	『相国寺旧境内発掘調査報告書 今出川キャンパス整備に伴う発掘調査第4次～第6次 同志社大学歴史資料館調査研究報告第13集』2015 同志社大学歴史資料館
33	相国寺門前町647-20（烏丸キャンパス）	調査	鎌倉時代の溝・井戸、室町時代の溝・井戸・柱穴・掘立柱建物、戦国～桃山時代の溝・井戸・柱穴・掘立柱建物・石室・石組墓、江戸時代の溝・土坑・落込み・井戸などを検出。	『相国寺旧境内・上京遺跡発掘調査報告書 同志社大学烏丸キャンパス建設に伴う発掘調査 同志社大学歴史資料館調査研究報告第12集』2013 同志社大学歴史資料館・埋文研
a	御所八幡町（烏丸線No.79地点）	調査	室町時代の土坑・落込み・池状遺構、江戸時代の井戸・土坑・ピット・落込みなどを検出。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』1982 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
b	岡松町254-1	調査	室町時代と考えられる池の汀・庭石などを検出。	『京都市内試掘立会調査概報昭和60年度』1986 埋文研
c	御所八幡町110-5	調査	室町時代と考えられる庭園の石組遺構・礫敷遺構・土坑・庭石などを検出。	『京都市内試掘立会調査概報昭和61年度』1987 埋文研
d	岡松町254-2他	調査	室町時代の石組遺構・溝・築山・景石、江戸時代前期の建物跡・石敷遺構・石組遺構・溝・土坑などを検出。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1994 埋文研
e	御所八幡町103（寒梅館地点）	調査	鎌倉時代後半の井戸、鎌倉時代～南北朝時代の東西溝、室町時代の石敷遺構・石組水路・柱穴列・建物基礎、江戸時代の土坑・鋳造遺構などを検出。	『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書-室町殿と近世西立売町の調査- 同志社大学歴史資料館調査研究報告第4集』2005 同志社大学歴史資料館
f	裏築地町（旧大学会館地点第3期）	調査	江戸時代後期の石組・土坑・竈状遺構・瓦組遺構などを検出。	『同志社大学構内遺跡発掘調査報告書（2003・2005年度）同志社大学歴史資料館調査研究報告第7集』2007 同志社大学歴史資料館

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図版1～5）

調査地における現地表面の標高は、調査区北西角部で 59.780 m、北東角部で 59.720 m、南西角部付近に設置した K・3 で 59.568 m、南東角部付近に設置した K・2 で 59.254 m であり、北西から南東に向かって低くなる地形を呈する。現地表面から層厚 0.8 m～1.0 m は近代整地土および現代盛土であるが、南西部では約 0.3 m とやや薄くなる。これらを除去した時点で 10YR3/4 暗褐色砂泥からなる第 1 層が露出するが、これは調査区南半に分布し、北半では確認されなかった。層厚は約 0.1 m～0.5 m で、南東部で厚くなる。16 世紀後半の整地土と考えられる。第 1 層直下に 10YR3/3 暗褐色砂泥からなる第 2 層が堆積しており、層厚は最も薄い北東部で約 8.0 cm、最も厚い南半中央付近で約 0.6 m を測る。当該層は南東部を除いて調査区全体に分布しており、15 世紀後半～16 世紀前葉の整地土と考えられる。この第 2 層を除去すると 10YR3/2 黒褐色砂泥からなる第 3 層上面に達する。第 3 層は第 2 層と同様に調査区南東部以外に分布するが、南西部においては部分的な残存に留まる。層厚は約 0.1 m～0.4 m を測る。第 3 層直下には 10YR4/4 褐色砂泥が堆積し、当該層下には 10YR3/2 黒褐色砂礫層が認められる。第 3 層以下は無遺物層であり、調査地における基盤層と考えられる。

調査は、近代整地土および現代盛土を重機にて除去し、禁裏御用水遺構を検出した面を第 1 面、第 1 層上面を第 2－1 面、第 2 層上面を第 2－2 面、第 3 層上面を第 3 面として実施した。また、調査区南東端部には旧京都産業大学附属中学校・高等学校の校舎基礎（地中梁）が残されており、梁内に遺構面が残存するため、梁内においても各面で調査を実施した。なお、地中梁内については、西から順に A から F までの呼称を付けた。

2 検出遺構

第 1 面では、禁裏御用水遺構と考えられる石組み溝が検出された。第 2－1 面では礎石建物とそれに伴う溝に加え、土坑およびピット数基、地中梁 D 内で南北方向の石組み溝 1 条と柵列 1 列を検出した。第 2－2 面では主な遺構として濠、溝、柵列、井戸、土坑墓、第 3 面では掘立柱建物、柵列、竪穴建物を検出した。

表 2 遺構概要表

検出面	時代	遺構
第 1 面	近代	溝 0001
第 2－1 面	室町時代末期～安土・桃山時代	礎石建物 0508、溝 0041・0124、柵列 0509、瓦溜り 0014・0015・0016・0017・0018・0033・0068・0069・0075・0078、柱穴 0047
第 2－2 面	室町時代中頃～後半	濠 0039、溝 0275、柵列 0510・0511・0512、井戸 0250、土坑墓 0335、土坑 0148
第 3 面	白鳳時代・鎌倉時代	溝 0145、柵列 0513・0514、掘立柱建物 0515・0516、竪穴建物 0164・0217・0218・0219・0363・0364・0389・0421・0468、竪穴建物竈 0164・0219・0389

(1) 第1面 (図版7～15・82－1)

近代の禁裏御用水遺構と考えられる石組み溝を調査区東端部で検出した。当該遺構以外には旧成安女子学園および旧京都産業大学附属中学校・高等学校のグラウンドの排水用暗渠をはじめ、近代以降の攪乱を数基検出した。

〔禁裏御用水〕

溝 0001 (図版 16・17・82－2・83－1・84－1)

調査区東端部で検出した、南北方向に走る石組み溝である。掘方の幅約 3.0 m、石組みの内寸幅は約 1.3 m を測り、長さ 24.5 m 分を検出した。断面形は箱形を呈し、石組み検出面から溝底部までの深さは約 0.4 m である。溝底部の標高値は北部で 58.000 m、南部では 57.800 m であり、北から南へ向かって低くなっている。溝底部には、調査区北端部から約 4.6 m 地点から南に約 5.2 m、約 16.5 m 地点から南に約 5.0 m の範囲に礫敷きが施されていた。また、溝側壁の石組みには溝底から約 0.15 m の高さに、当遺構が禁裏御用水として機能していた時期の水位を示すと考えられる筋状の痕跡が認められる。遺構埋土内には近代以降のガラス瓶、プラスチック製品、金属製品、陶磁器など塵芥が多量に包含されており、掘方埋土にも近代遺物が少量ながら包含されていた。これらのことから、石組み溝は明治期以降に構築されたと考えられる。埋没時期については、昭和二(1927)年に成安女子学園が当地に移転していることに加え、埋土中に包含されていたガラス瓶等に戦後の所産と考えられるものが見られなかったことから、昭和初頭と考えられる。

また、石組み溝の下部で、幅 0.8 m～1.0 m、石組み溝底部からの深さ 0.37 m～0.44 m を測る素掘溝を検出した。南端部は地中梁 B の掘方によって切られるが、地中梁 B 内において南延長を検出した。地中梁 B 内における検出長は約 6.0 m で、検出面から底部までの深さは 0.3 m～0.38 m を測る。遺構底部の標高値は北部で 57.600 m、地中梁 B 内の南部では 57.000 m で、比高差は 0.6 m を測る。埋土には、19 世紀中頃の所産と考えられる土師器皿が包含されていた。この素掘溝は石組み溝直下に位置することから、石組み溝構築以前に敷設されていた禁裏御用水遺構の可能性が考えられる。南に隣接する承天閣美術館増築地点で 2004 年に実施された調査 (図 5・表 1－29) においても、埋土内に近代遺物を包含する石組み溝直下で素掘溝が検出され、その埋土から江戸時代初期の土師器皿が出土したとされる。これらのことから、少なくとも江戸時代末期には素掘溝の水路が敷設されており、明治期に石組み溝へ改修されたものと考えられる。

(2) 第2－1面 (図版 18～26・84－2)

礎石建物 1 棟、それに伴うと考えられる溝 1 条、瓦溜り 10 基、土坑 7 基、柱穴 6 基、ピット 8 基、溝状遺構 1 基、地中梁 D 内で石組み溝 1 条、柵列 1 列を検出した。

〔礎石建物〕

礎石建物 0508 (図版 27～29・85－1)

調査区南東部で検出した。柱穴 0049、0050、0084、0088、0089、0090、0091、0094 からなる。柱穴 0049、0091、0094 に礎石が残存しており、柱穴 0091 の礎石については、礎石直下に据付時

の根石が残存していたことから、原位置を保っているものと判断した。これに対し、柱穴 0049 の礎石は南に、柱穴 0094 の礎石は北へ動かした痕跡が認められた。柱穴 0049 については、礎石北側で底部に根石が残存する柱穴を検出しており、断面観察により当該柱穴から礎石を抜き取ろうとした結果、礎石検出位置に礎石が移動したものと考えられる。また、柱穴 0049 の西に位置する柱穴 0050 においても、礎石は検出されなかったが、根石と考えられる小礫が遺構底部に残存していた。柱穴 0050 の西で検出した柱穴 0094 においても、礎石南側に根石が残存する柱穴を検出しており、柱穴 0049 と同様、礎石を抜き取ろうとした結果として北に礎石が移動したものと考えられる。建物の平面規模については、柱穴 0088、0089、0090、0091 から構成される柱列の北 2.5 m に溝 0041 が並行して走ることから、当該柱列が建物北辺の柱列にあたると考えられ、柱間寸法は 3.9 m を測る。柱穴の平面形状は方形を呈し、規模は柱穴 0088 が南北 1.2 m、東西 0.8 m 以上、検出面からの深さ約 0.3 m、柱穴 0089 は南北 1.1 m、東西 1.0 m 以上、検出面からの深さ約 0.3 m、柱穴 0090 は南北 1.1 m、東西 1.0 m 以上、検出面からの深さ約 0.13 m を測る。柱穴 0091 は、礎石直下に僅かに掘方を確認することができたが、それよりも上部については溝 0041 の南部に広がる瓦溜りによって破壊されており、掘方の平面形および規模は不明である。掘方の残存深さ 0.08 m、礎石上面から掘方底部までの深さは 0.38 m である。柱穴 0084 は柱穴 0091 の南 3.9 m に位置する。南北長 1.2 m、東西幅 0.8 m 分を検出したが、遺構の東半を試掘 3 トレンチに切られているため、全体平面形は不明である。検出面から遺構底部までの深さは約 0.45 m を測る。また、攪乱 0044 について、当初柱穴 0090 の南に位置する柱穴と想定して掘削を行ったが、遺構底部で検出した根石状の礫集積にコンクリートがまかれていたことから、当礎石建物に伴う柱穴ではなく、近代以降の攪乱と判断した。建物北辺柱列から 11.7 m 南に位置する、柱穴 0049、0050、0094 からなる柱列では、柱穴 0049 と柱穴 0050 間は柱間 3.9 m、柱穴 0050 と柱穴 0094 間は柱間 3.0 m を測る。これらによって構成される柱列の南では溝 0041 に対応すると考えられる溝を検出していないことから、建物は調査区外へ抜けて南へ展開することが想定される。また、北辺柱列から柱穴 0049、0050 列までの間は近代以降に攪乱をうけており、当建物の柱穴を検出することができなかった。そのため、柱配置を確認することはできなかったが、柱間が等間の総柱建物と仮定すれば、南北方向には柱間 3.9 m の 4 間以上を想定することができる。また、東西方向は、北辺柱列については柱間 3.9 m の 3 間が想定されるが、その 3 間南にあたる柱穴 0049、0050、0094 から構成される柱列では柱穴 0049 より東では柱穴が検出されなかった。これは、柱穴 0049、0050 の残存深度が 0.15 m 前後と浅く、遺構面の標高も柱穴 0049、0050 地点に比して 0.3 m 程度低いことから、後世の削平を受けたためと考えられる。また、柱穴 0050 と柱穴 0094 間は 3.0 m と柱間がやや狭く、さらにこの 1 間分は柱穴 0088 と柱穴 0050 で構成される南北柱列の西に位置し、柱穴 0094 の北および西では柱列を構成し得る柱穴が検出されなかったことから、建物北辺柱列から南へ 3 間分は柱間 3.9 m の東西 3 間、以南は西へ柱間 3.0 m の 1 間分が取り付いて東西 4 間になるものと考えられる。東辺については、地中梁によって攪乱をうけているため、西辺と同様に柱間 3.0 m の 1 間分が取り付くか否か不明である。これらのことから、今回検出した礎石建物は、南北棟で、桁行きが

柱間 3.9 m の 4 間以上、梁間は北 3 間が柱間 3.9 m の 3 間、4 間目から西 1 間が柱間 3.0 m、その東 3 間が柱間 3.9 m となる 4 間の平面規模を有すると考えられる。但し、東辺にも西辺同様の柱間 3.0 m の 1 間分が取り付く可能性も考えられる。

建物の成立時期については、柱穴の遺構ベース層を形成する第 1 層に 16 世紀の所産と考えられる遺物が包含されることから、それ以前に遡るとは考え難い。また、当建物に葺き上げられていた瓦を投棄したと考えられる瓦溜り群の埋土中に、極少量ながら 16 世紀後半の所産と考えられる遺物が認められる一方、17 世紀に比定される遺物が見受けられないことから、16 世紀末には廃絶したと考えられる。

〔溝〕

溝 0041 (図版 27・28・85－1)

調査区南東部で検出した。当初、最小幅 2.2 m、最大幅 3.8 m、東西長 22.2 m の瓦溜りとして検出したが、掘削した結果、東西両端で南に折れてコの字形の平面形状を呈する東西方向の溝であることが判明した。溝の規模は、東西方向部分が全長 18.0 m、幅 1.0 m～1.2 m、検出面から遺構底部までの深さ 0.2 m～0.4 m を測る。南北方向部分の全長は東西両辺とも約 4.5 m で、東辺が幅 1.2 m、検出面からの深さ 0.26 m～0.3 m、西辺が幅 1.3 m～1.5 m、検出面からの深さ 0.16 m～0.2 m である。西辺の南北方向部東肩には、溝屈曲部から南へ 1.5 m にわたり、幅 0.16 m 前後、長 0.11 m～0.31 m の石を並べた石組み 1 段分が検出された。この平面コの字形を呈する溝上部に、広範囲にわたって 0.2 m～0.3 m 程度の厚さで瓦が堆積していたことにより、大規模な瓦溜りとして検出されたものと考えられる。ただし、溝内埋土に包含される瓦と、溝上部に堆積していた瓦に時期的相違が認められず、遺構の断面観察においても上部の堆積層と溝 0041 埋土が一連のものと考えられることから、溝 0041 内に瓦を投棄した際、溝内に収まりきらず、溝周辺の広範囲に投棄が及んだことが想定される。また、当遺構の東西方向部の中軸線から南へ 2.5 m に礎石建物 0508 の北辺柱列が並行して位置し、東辺の南北方向部の中軸線は柱穴 0091 から東に 2.5 m、西辺の南北方向部の中軸線は柱穴 0088 から西に 2.5 m の位置に当たり、柱穴 0091 と当溝の北東角部、柱穴 0088 と当溝の北西角部を結ぶ直線と当溝東西部中軸線との内角は 45° を呈する。これらのことから、当遺構は礎石建物 0508 の北辺雨落溝の可能性が考えられる。遺構埋土には多量の丸平瓦に加え、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、塀が包含される一方、土器類は僅少である。軒瓦の瓦当文様、製作技法等から、当遺構に投棄された瓦塀類は 15 世紀後半の所産と考えられる。また、当遺構を礎石建物 0508 に付随するものとすれば、16 世紀中に開削され、16 世紀末には瓦が投棄され埋め立てられたものと考えられる。

溝 0124 (図版 30・85－2)

調査区南東部に位置する地中梁 D 内南東部において検出した石組み溝である。地中梁 D 内の北半部には試掘坑があったため、当遺構は南半部での検出に留まった。検出長は 2.5 m で、最大幅は

0.9 m、石組み内寸で 0.4 m、検出面からの深さ 0.4 m を測る。検出した石組みは一段分で、長さ 0.15 m ～ 0.5 m の自然石を溝の両肩に配し、溝内面側は面を揃えられている。溝埋土には焼土、炭を多く含み、溝埋土中からは瓦に加え、16 世紀後半の所産と考えられる土師器皿の破片が出土している。当遺構が検出された場所は第 1 面で検出した禁裏御用水よりも東に位置しており、天明大火後の境内図によれば、禁裏御用水を敷地境界として劫外軒に東接する玉龍庵の敷地内に含まれると考えられ、当遺構は玉龍庵に関わるものである可能性がある。

〔柵列〕

柵列 0509 (図版 30)

地中梁 D 内で検出した。柱穴 0134、0135 からなる柵列である。溝 0124 と同様、南半部のみで検出された。溝 0124 の中軸線から約 1.2 m 西に位置し、柱間寸法は 1.8 m である。柱穴 0134 は楕円形平面を呈し、短径 0.55 m、長径 0.63 m、検出面から遺構底部までの深さ 0.15 m、柱穴 0135 は南西部が調査区外になるため、全体平面形は不明であるが、南北 0.5 m 以上、東西 0.58 m 以上を測り、検出面から遺構底部までの深さは 0.17 m である。溝 0124 に伴う柵列の可能性が考えられる。

〔瓦溜り〕

埋土内に瓦を多量に包含する土坑状遺構を瓦溜りとして 10 基検出した。これらの遺構は主に調査区南西部に分布するが、瓦溜り 0033 は調査区北部で検出した。何れの遺構も溝 0041 よりも西あるいは北に位置する。また、埋土に包含される瓦は溝 0041 に包含されるものとの相違は認められず、これら瓦溜りへの瓦投棄と溝 0041 への瓦投棄は同時期に行われたものと考えられる。出土遺物は瓦埴類が主で、土器類は極僅かであるが、瓦溜り 0014 から 16 世紀後半、瓦溜り 0016、0018 から 16 世紀中頃の所産と考えられる土師器片が出土している。これらのことから、瓦溜り群への瓦投棄は 16 世紀後半に行われたものと考えられる。

瓦溜り 0014 (図版 18・19)

調査区西端中央部で検出した。平面形は長辺 1.5 m、短辺 1.0 m で南北方向の長方形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.39 m を測る。16 世紀後半の所産と考えられる土師器が出土している。

瓦溜り 0015 (図版 18・19)

調査区西端中央部で検出した。瓦溜り 0014 の北西に位置する。平面形は長辺 0.7 m ～ 0.9 m、短辺 1.8 m で東西方向の長方形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.37 m である。

瓦溜り 0016 (図版 18・19)

調査区西端中央部で検出した。瓦溜り 0014 の西、瓦溜り 0015 の南に位置する。平面形は長辺

1.3 m、短辺 1.2 m の方形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.53 m である。16 世紀中頃の所産と考えられる土師器片が出土している。

瓦溜り 0017 (図版 18・19)

調査区西端中央部で検出した。瓦溜り 0014 の南東に位置する。平面形は長辺 1.7 m、短辺 0.7 m の長方形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.28 m である。

瓦溜り 0018 (図版 18・19)

調査区西端中央部で検出した。瓦溜り 0016 に東接する。長さ 3.0 m、幅 1.2 m で南北方向の溝状平面形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.13 m である。16 世紀中頃の所産と考えられる土師器片が出土している。

瓦溜り 0033 (図版 18・20・21)

調査区北部中央東寄りで検出した。長さ 4.5 m、幅 1.1 m で東西方向の溝状平面形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.36 m～0.43 m である。

瓦溜り 0068 (図版 18・23)

調査区南西端部で検出した。平面形は短辺 0.9 m、長辺 1.1 m の方形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.38 m である。

瓦溜り 0069 (図版 18・23)

調査区南西端部で検出した。瓦溜り 0069 の南に位置する。南北長 1.0 m、東西幅 0.6 m～1.0 m の不定形な平面形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.29 m である。

瓦溜り 0075 (図版 18・23)

調査区南西端部で検出した。瓦溜り 0068、0069 の西に位置する。南北長 3.8 m、最小東西幅 0.3 m、最大東西幅 1.2 m 以上で、南北方向の溝状平面形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.1 m～0.43 m である。北東端部を攪乱によって切られるため、最大東西幅は不明である。16 世紀中頃から後半の所産と考えられる備前産播鉢片が出土している。

瓦溜り 0078 (図版 18・23)

調査区南西端部で検出した。瓦溜り 0075 の南東に位置する。平面形は長径 0.8 m、短径 0.7 m の楕円形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.21 m である。

〔柱穴〕

柱穴 0047 (図版 30)

調査区南東部、柱穴 0049 の南西約 4.0 m に位置する。短径 0.94 m、長径 1.07 m、検出面から遺構底部までの深さ 0.2 m を測る。遺構埋土中から水晶製品が出土しているが、遺構上半部が近代攪乱 0132 に切られていることから、近代以降の遺物の可能性がある。

(3) 第 2 - 2 面 (図版 31 ~ 39・86 - 1)

主な遺構として、濠 1 条、溝 1 条、柵列 3 列、井戸 1 基、土坑墓 1 基を検出した。これらに加えて、土坑および柱穴、ピットを多数検出したが、柱穴は建物としてまとまるものは検出されなかった。

〔濠〕

濠 0039 (図版 40・86 - 2)

調査区中央北寄りで検出した濠である。溝 0001 西肩から西へ延び、調査区西端部で南に折れて調査区外へ抜け、L 字形の平面形を呈する。南北部分については、調査区西端部にあった近代攪乱によって遺構上部が切られていたため、底部から約 0.5 m 程度が残存する状況であった。正方位から西へ 1.3° 振る。東西部分の幅は最小で 1.8 m、最大で 2.2 m を測り、東西長 41.3 m で、南北長 19.0 m 分を検出した。南北部分については東肩のみ検出したため、幅は不明である。逆台形の断面形を呈し、底部幅は 1.25 m ~ 1.75 m、検出面から遺構底部までの深さは 0.9 m ~ 1.2 m、底部の標高値は 57.500 m ~ 57.600 m である。調査区南北のほぼ中央を東西に走り、西端部で南に折れることから、調査区の南部を内側として区画していたと考えられる。埋土は礫を多く含み、締まりが悪い砂泥で黒褐色を呈する。水流の痕跡は認められず、空堀であったと考えられる。埋土中には 15 世紀後半から 16 世紀前葉の所産と考えられる土師器片のほか、陶磁器、瓦質土器、瓦等が包含されていたが、遺物量は少ない。当遺構のベース層である第 2 層に 15 世紀後半以前に比定される遺物が認められないことから、当遺構は早くとも 15 世紀後半に開削され、16 世紀前葉には埋没したと考えられる。

〔溝〕

溝 0275 (図版 41)

調査区西半部で検出した、L 字形の平面形を呈する溝である。南北部分を濠 0039 に切られることから、当遺構が濠 0039 に先行すると考えられる。最小幅 0.7 m、最大幅 2.0 m で、南北部分は 24.0 m 分を検出したが、調査区外へ抜けさらに南へ延びると考えられる。北延長は濠 0039 と交差して更に北へ約 3.0 m の地点で屈曲して西へ延びるが、調査区北西部の近代攪乱に切られるため、東西部分は 9.6 m 分の検出に留まった。また、屈曲部から西へ 3.0 m は南北両肩を検出したが、それより西は土坑 0172 に北肩を切られる。検出面から遺構底部までの深さは 0.15 m ~ 0.35 m で、底部の標高値は南北部分で 58.000 m、東西部分で 58.200 m ~ 58.300 m である。調査区南西端部を

区画する溝と考えられ、当該区画内で井戸 0250、土坑墓 0335 を検出したが、建物は検出されなかった。16 世紀前葉の所産と考えられる遺物が出土している。

〔柵列〕

柵列 0510（図版 42・87－1）

調査区北東部で検出した。濠 0039 に並行し、その北肩から 5.5 m 北に位置する。柱穴 0096、0097、0098、0099 からなる東西方向の柵列で、検出長は 8.4 m である。柱穴 0096－0097 間、柱穴 0098－0099 間の柱間寸法は 2.1 m、柱穴 0097－0098 間は 4.2 m を測る。柱間寸法 2.1 m の 4 間分を検出したと考えられるが、柱穴 0097 と柱穴 0098 間に試掘 3 トレンチが位置するため、この間の柱穴を検出することができなかったものと考えられる。柱穴の平面形は一辺 0.5 m～0.7 m の方形で、検出面から遺構底部までの深さは 0.16 m～0.26 m である。正方位から西へ 2.0° 振る。柱穴からの出土遺物が僅少なため、存続時期を明確に判断することは難しいが、濠 0039 と並行することから、当該遺構に伴う柵列の可能性が考えられる。

柵列 0511（図版 42・87－1）

調査区北部中央で検出した東西方向の柵列で、上記柵列 0510 の西に位置する。また、柵列 0510 と同じく、濠 0039 に並行し、その北肩から 5.5 m 北に位置する。柱穴 0102、0103、0104、0105、0106 からなり、検出長は 8.4 m で、柱間寸法は 2.1 m、4 間分を検出した。柱穴の平面形は一辺 0.5 m～0.8 m の方形で、検出面から遺構底部までの深さは 0.18 m～0.2 m である。正方位から西へ 3.4° 振る。柵列 0510 同様、存続時期を明確に判断することは難しいが、濠 0039 と並行することから、当該遺構に伴う柵列の可能性が考えられる。

柵列 0512（図版 43・87－2）

調査区中央部で検出した L 字形の柵列である。東西部分が、柵列 0511 から約 11.0 m 南、濠 0039 南肩から 3.9 m 南に位置する。柱穴 0313、0312、0311、0310、0200、0199、0198、0197、0196、0423、0195、0308、0194、0339 からなる。検出長は東西部分が 12.0 m、南北部分が 3.6 m で、柱間寸法は 1.2 m、東西部分が 10 間分、南北部分が 3 間分を検出した。柱穴の平面形は概ね直径 0.26 m～0.48 m の円形ないし楕円形であるが、柱穴 0197 は短径 0.42 m、長径 0.48 m、柱穴 0200 は短径 0.56 m、長径 0.6 m を測る楕円形を呈する。検出面から遺構底部までの深さは 0.1 m～0.34 m である。正方位から西へ 2.0° 振る。濠 0039 によって形成される区画の内側に位置するが、当遺構に伴うと考えられる建物等は検出されなかった。

〔井戸〕

井戸 0250（図版 44）

調査区南西部で検出した。一辺 2.4 m の方形掘り方を有し、検出面から 0.6 m あまり掘り下げた

ところ、石組みの円形井戸枿を検出した。枿の内寸は約 0.9 m である。遺構検出面から約 2.1 m（枿検出面から約 1.5 m）まで掘り下げたが、遺構底に達せず、安全を考慮して完掘を断念した。15 世紀後半から 16 世紀前葉の所産と考えられる土師器片が出土している。

〔土坑墓〕

土坑墓 0335（図版 45・88－1）

井戸 0250 の北側 2.0 m 地点で検出した。平面形は長径 1.2 m、短径 0.9 m の楕円形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.46 m である。埋土には人骨とともに六文銭と考えられる銭が 6 枚包含されていた。銭 6 枚のうち、4 枚は重なって固着した状態で出土した。残る 2 枚のうち、1 枚は「元祐通宝」で、1 枚は判読不能である。

〔土坑〕

土坑 0148（図版 45・88－2）

調査区北東部で検出した。平面形は南北 1.8 m、東西 1.2 m の長方形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは約 0.45 m である。底部に人頭大の礫が多量に入れられていたが、平坦な床面を構築していた形跡はなく、用途不明の土坑である。

（4）第 3 面（図版 46～54・89－1）

主な遺構として溝 1 条、柵列 2 列、掘立柱建物 2 棟、竪穴建物 9 棟がある。これらに加え、土坑、柱穴、ピットを多数検出した。

〔溝〕

溝 0145（図版 55）

調査区西半で検出した L 字形平面を呈する溝で、検出長は東西 18.0 m、南北 24.0 m を測る。正方位から西へ 8° 振っており、東端部は竪穴建物 0363 を切って調査区外へ延長する。最小幅 0.5 m、最大幅 1.2 m で、検出面から遺構底部までの深さは 0.25 m～0.4 m を測る。埋土内に 13 世紀前葉に属する土師器皿のほか、13 世紀の所産と考えられる軒瓦が包含されており、当該期の区画溝と考えられる。一方で、明確に 13 世紀代と考えられる遺構は他に確認されず、当時の調査地における土地利用の詳細は判然としない。また、13 世紀に属する遺物が出土していることから、本来の遺構成立面は第 3 面よりも上層に相当する可能性が考えられる。一方で、第 2－2 面では当遺構が検出されなかったことから、第 2－2 面のベース層である第 2 層が形成される以前、あるいは形成される際に当遺構成立面のベース層が削平されたことが想定される。

〔柵列〕

柵列 0513、0514 の 2 列を検出した。柵列 0513 はほぼ正方位にのっており、柵列 0514 は正方位から西へ 10.0° 振る。これらを構成する柱穴からの出土遺物は細片のうえ極少量であった。また、

柵列 0513 は竪穴建物 0217 の壁溝を切っていることから、当該遺構との前後関係を想定することができる。柵列 0514 は竪穴建物との切り合いが認められないが、竪穴建物 0218 を除く竪穴建物群と同様に西へ振っていることから、両者が併存していた可能性が考えられる。

柵列 0513 (図版 56)

調査区南東部に位置する。柱穴 0207、0169、0206、0170、0086 からなる。柱穴 0086 は地中梁 A 内で検出した。柱間寸法は柱穴 0207 - 0169 間、柱穴 0206 - 0170 間は 1.8 m、柱穴 0169 - 0206 間は 1.5 m を測る。柱穴 0170 - 0086 間は約 3.0 m を測り、間に柱穴 1 基が想定されるが、地中梁 A による攪乱のため、検出することができなかった。柱穴は一辺 0.7 m ～ 0.9 m の隅丸方形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.15 m ～ 0.2 m である。遺物は細片化しており、出土量も極少数であったが、ほぼ正方位にのっており、柱穴 0086 が竪穴建物 0217 の壁溝を切るため、当遺構と竪穴建物 0217 との前後関係が認められる。

柵列 0514 (図版 57)

調査区南西部で検出した。柱穴 0401、0402、0403、0404、0405 からなり、L 字形の平面形を呈する。柱穴 0405 から東延長は他遺構に切られているために全体規模は不明である。また、柱穴 0401 以北に対応する柱穴が検出されなかったことから北へ延長することは考え難く、同柱穴の東において柱穴 0405 に対応する柱穴が検出されなかったことから、掘立柱建物ではなく、柵列と想定した。南北 3 間、東西 1 間で、柱間寸法は 1.8 m、検出長は南北 5.4 m、東西 1.8 m を測る。柱穴の平面形は短辺 0.5 m ～ 0.7 m、長辺 0.6 m ～ 0.7 m の長方形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.12 m ～ 0.2 m である。正方位から西へ 10.0° 振っており、掘立柱建物 0515、0516、竪穴建物 0218 を除く竪穴建物群と同方向に振れる。柱穴埋土に包含されていた遺物は僅少かつ極細片であったため、存続時期を明確に判断し難いが、7 世紀末から 8 世紀と考えられる。掘立柱建物や竪穴建物群との切り合いは認められず、それらの遺構と同方向に振ることから、当遺構と併存していた可能性が考えられる。

〔掘立柱建物〕

掘立柱建物 0515、0516 の 2 棟を検出した。柵列と同様、これらを構成する柱穴から出土した遺物も細片化しており、出土量も極少量であった。両遺構とも、柵列 0514、竪穴建物 0218 を除く竪穴建物群と同様に正方位から西方向に振れる。

掘立柱建物 0515 (図版 58)

調査区南東部で検出した。柱穴 0235、0236、0439、0410、0409、0255、0297、0496 からなる、柱間寸法 1.5 m、東西 3 間、南北 2 間以上の建物である。柱穴の平面形は一辺 0.8 m ～ 0.9 m の隅丸方形で、検出面から遺構底部までの深さは 0.24 m ～ 0.54 m を測る。柵列 0514、掘立柱建物 0516、竪穴建物 0218 を除く竪穴建物群と同様に正方位から西へ振っており、その振れ角は 5.0° である。柱穴からは、7 世紀後半から 8 世紀の所産と考えられる遺物が極少量出土したが、竪穴

建物との前後関係は判然とせず、併存していた可能性が考えられる。

掘立柱建物 0516 (図版 59)

調査区北西部で検出した。柱穴 0345、0354、0356、0357、0358 からなる、柱間寸法 2.1 m、東西 3 間、南北 1 間以上の建物で、正方位から西へ 9.0° 振る。また、13 世紀の遺物を包含する溝 0145 に切られる。柱穴 0345 の平面形は東西 0.7 m、南北 0.4 m の長方形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.12 m である。柱穴 0354 は東西 0.76 m、南北 0.4 m 以上、検出面から遺構底部までの深さ 0.3 m、柱穴 0356 は東西 0.67 m、南北 0.14 m 以上、検出面から遺構底部までの深さ 0.2 m、柱穴 0357 は東西 0.67 m、南北 0.28 m 以上、検出面から遺構底部の深さ 0.16 m、柱穴 0358 は東西 0.56 m、南北 0.31 m 以上、検出面から遺構底部までの深さ 0.28 m を測る。柱穴 0345 以外は何れも北半を溝 0145 に切られ、柱穴からの出土遺物に平安時代の遺物が認められなかったため、8 世紀以前の建物と考えられるが、竪穴建物との前後関係は判然としない。

〔竪穴建物〕

竪穴建物は 9 棟を検出した。これらの竪穴建物群は、竪穴建物 0218 を除き正方位から西へ振っており、その振れ角は 12.0° ～ 55.0° である。竪穴建物 0218 は東へ 20.0° 振る。竪穴建物 0364 の振れ角は 30.0°、竪穴建物 0468 の振れ角は 55.0°、これらを切る竪穴建物 0363 の振れ角は 15.0° であることから、前後関係によって振れ角の大小がある可能性が考えられる。遺構の残存状況は全体的に良好とはいえず、遺物の出土量も少ない。

竪穴建物 0164 (図版 60・89 - 2)

調査区北東部で検出した。南半部を濠 0039 に切られるため、全体規模は不明であるが、東西 4.9 m、南北 3.4 m 以上の隅丸方形平面を呈する。正方位から西へ 15.0° 振る。検出面から床面までの深さは 0.15 m で、壁溝の幅は 0.2 m ～ 0.33 m、床面から壁溝底までの深さは 0.05 m 前後である。7 世紀後半の所産と考えられる須恵器杯蓋が出土している。床面では北東角部で柱穴 0470、北西角部で柱穴 0472 を検出した。これらは長径 0.5 m、短径 0.4 m の楕円形平面を呈するが、検出面から遺構底部までの深さは約 0.03 m と極浅く、遺物は出土しなかった。また、建物北東角から約 3.0 m 南で竈を検出した。東辺に取り付くと考えられるが、残存状態は良くなく、煙出し部は検出されなかった。竈からは、焚口部の天井架構材として転用されたと考えられる土師器長胴甕、棒状石材が検出された。また、竈焚口部付近では鉄滓が床面直上で検出され、当建物が鍛冶工房として機能していた可能性が考えられる。

竪穴建物 0217 (図版 61)

地中梁 A 内において、建物南辺の壁溝と考えられる溝を 2.5 m 分検出した。柵列 0513 を構成する柱穴 0086 に切られる。検出面から床面までの深さは 0.11 m、溝の幅は 0.2 m ～ 0.3 m で、床面から壁溝底までの深さは 0.07 m である。正方位から西へ 45.0° 振る。南辺の壁溝と考えられる溝

の一部を検出したのみで、角部は検出されなかった。また、遺物も出土していない。

竪穴建物 0218 (図版 62・90－1)

調査区南東部において北西角部を検出した。東を試掘3トレンチ、南を攪乱0132に切られており、全体規模は不明であるが、東西3.9 m以上、南北3.9 m以上の隅丸方形の平面形状を呈すると考えられる。検出面から床面までの高さは0.23 m、壁溝の幅は0.2 m、床面から壁溝底までの深さは0.1 mである。正方位から東へ20.0°振る。7世紀後半から末の所産と考えられる須恵器杯が出土している。また、床面で柱穴0490、0491を検出した。これらは長径0.5 m、短径0.4 mの楕円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.08 mと浅い。今調査で検出された竪穴建物群のうち、当遺構のみが正方位から東へ振っており、西へ振る他の竪穴建物と異なる方向を向く。一方で、出土遺物に明確な時期差は認められず、時期差を反映したものとは考え難い。

竪穴建物 0219 (図版 61・90－2)

調査区北東部で検出した。竪穴建物0164の西に位置する。北東角および北西角を検出しており、東西5.4 m、南北1.6 m以上の隅丸方形の平面形状を呈すると考えられるが、南部を濠0039に切られるため、全体の規模は不明である。検出面から床面までの深さは0.08 m、壁溝の幅は0.14 m～0.26 m、床面から壁溝底までの深さは0.04 mを測る。床面では北東角部で柱穴0474を検出した。当遺構は長径0.5 m、短径0.4 mの楕円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.03 mである。正方位から西へ12.0°振る。7世紀後半から末の所産と考えられる須恵器杯が出土している。また、北辺の中央からやや西に竈が取り付く。竈の残存状態は悪く、焚口部の天井架構材と考えられる支柱石が検出されたに留まる。

竪穴建物 0363 (図版 63・91－1)

調査区北東部の北壁際で、建物の南西部を東西5.2 m分、南北1.4 m分検出したが、遺構の大半が調査区外になるため、平面形状および全体規模は不明である。検出面から床面までの深さは0.17 mで、壁溝の幅は0.24 m～0.38 m、床面から壁溝底までの深さは0.15 m～0.18 mである。床面では南東角部で柱穴0478、南西角部で柱穴0479を検出している。これらは直径約0.2 mの円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.01 m～0.02 mである。正方位から西へ15.0°振る。7世紀後半の所産と考えられる遺物が出土している。また、竪穴建物0364、0468を切る。竪穴建物0364、0468ともに正方位から西へ振り、竪穴建物0364の振れ角は30.0°、0468の振れ角は55.0°である。当遺構や竪穴建物0164、0219、0389、0421に比して振れ角が大きいことは、当遺構が竪穴建物0364、0468を切ることから、時期差を反映したものである可能性が考えられる。

竪穴建物 0364 (図版 63・91－1)

調査区北東部で検出した。遺構北半を竪穴建物0363に、東部を竪穴建物0468に切られる。検

出規模は東西 3.6 m、南北 2.0 m で、検出面から床面までの深さは 0.11 m ～ 0.13 m、壁溝の幅は 0.22 m ～ 0.35 m、床面から壁溝底までの深さは 0.07 m ～ 0.09 m である。床面では南西角部で柱穴 0477 を検出した。直径 0.3 m の円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.02 m である。正方位から西へ 30.0° 振る。遺構北部を切る堅穴建物 0363 が正方位から西へ 15.0° 振ることから、振れ角の差が時期差を反映している可能性が考えられる。

堅穴建物 0389（図版 64・65・83－2・91－2・92－1）

調査区南西部で検出した。平面形は東西 4.6 m、南北 5.0 m の隅丸長方形を呈する。検出面から床面までの深さは 0.23 m、壁溝幅は 0.2 m ～ 0.37 m で、床面から壁溝底までの深さは 0.1 m である。西辺のほぼ中央部に竈が取り付く。また、床面を除去したところ、北辺壁溝から南に約 0.7 m で東西方向の溝が検出された。このことから、当堅穴建物が北へ拡張されたと考えられる。拡張前の規模は、東西 4.6 m、南北 4.4 m で、北辺壁溝の幅 0.2 m ～ 0.22 m、深さ 0.1 m である。床面では、北東部で柱穴 0488、南東部で柱穴 0484、南西部で柱穴 0483、北西部で柱穴 0482 を検出した。柱穴 0488 は短辺 0.2 m、長辺 0.3 m の方形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.2 m、柱穴 0484 は長径 0.4 m、短径 0.3 m の楕円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.08 m、柱穴 0483 は直径 0.4 m の円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.08 m、柱穴 0482 は直径 0.4 m の円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.2 m を測る。正方位から西へ 12.0° 振る。7 世紀後半の所産と考えられる須恵器杯蓋、杯が出土している。

堅穴建物 0421（図版 66・91－2）

調査区南西部で検出した。遺構西半を攪乱および第 2－2 面で検出した濠 0039 に、遺構北東角部を堅穴建物 0389 に切られる。検出規模は東西 3.0 m、南北 4.2 m、検出面から床面までの深さは 0.13 m ～ 0.24 m、壁溝幅は 0.1 m ～ 0.22 m、床面から壁溝底までの深さは 0.46 m ～ 0.11 m である。床面では南東部で柱穴 0486、南西部で柱穴 0493 を検出した。柱穴 0486 は直径 0.3 m の円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.03 m、柱穴 0493 は長径 0.35 m、短径 0.2 m の楕円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.03 m である。正方位から西へ 10.0° 振る。堅穴建物 0389 との切り合い関係から、堅穴建物 0389 に先行すると考えられる。

堅穴建物 0468（図版 63・91－1）

調査区北東部で南西角部を検出した。堅穴建物 0364 の東部を切り、堅穴建物 0363 に遺構北部を切られる。検出規模は東西 1.7 m、南北 1.26 m で、検出面から床面までの深さは 0.18 m、壁溝の幅は 0.15 m ～ 0.21 m、床面から壁溝底までの深さは 0.08 m である。床面では柱穴 0476 を検出した。長径 0.3 m、短径 0.2 m の円形平面を呈するが、検出面から遺構底部までの深さは 0.02 m と極浅い。正方位から西へ 55.0° 振る。遺構北部を切る堅穴建物 0363 が正方位から西へ 15.0° 振る

ことから、振れ角の違いが時期差を反映している可能性がある。

竪穴建物 0164 竈（図版 67・68・92－2・93）

東辺壁際の建物北東角から約 3.0 m の地点で検出した。検出規模は最大幅 1.88 m、最大長 1.53 m の不定形な平面形を呈し、床面から竈底部の深さは 0.13 m である。焚口部の基底部のみが残存しており、煙出し部は検出されなかった。焚口の両袖部に棒状石材が立った状態で検出された。北側の石材は床面から約 0.06 m 埋められており、全長は 0.34 m である。南側の石材は 2 段になっており、一段目の石材は全長 0.24 m で、床から約 0.1 m 埋められていた。2 段目の石材は全長 0.15 m で、若干内傾して 1 段目石材直上に乗せられていた。また、これらの石材の間に 2 個体の土師器甕が横倒しになった状態で出土しており、竈焚口部の天井架構材としてこれらの甕が棒状石材とともに用いられていた可能性がある。また、上記土師器甕を検出した地点から南西に 0.54 m 地点に長辺 0.22 m、短辺 0.18 m の鉄滓が検出されたことから、竪穴建物 0164 は鍛冶工房として使用されていた可能性が考えられる。

竪穴建物 0219 竈（図版 69・94－1）

北辺壁溝の中央部に取り付く。上部構造は完全に失われており、焚口部の天井架構材と考えられる支柱石が 1 点、据えられた状態で出土した。規模は最大幅 0.65 m、全長 1.1 m を測る。支柱石は竪穴建物床面から約 0.1 m 埋められており、検出位置から、南に向かって開く焚口部の東側に据えられていたものと考えられる。

竪穴建物 0389 竈（図版 69・83－2・94－2）

西辺壁溝の中央部に取り付く。上部構造は失われており、基底部のみ残存していた。平面規模は南北幅 0.63 m、東西長 1.5 m を測り、床面から竈底部までの深さは 0.2 m を測る。焚口裾部の支柱石は検出されなかった。

3 出土遺物

遺物はコンテナで 213 箱分が出土した。瓦が主で、他に陶磁器、土師器、須恵器、瓦器、錢貨がある。第 1 面で検出した禁裏御用水遺構の埋土には近代のガラス瓶など、塵芥が多量に包含されていた。第 2 - 1 面で検出した遺構からは 16 世紀後半、第 2 - 2 面の遺構からは 15 世紀後半から 16 世紀前半の遺物が、第 3 面の遺構からは 7 世紀後半に属すると考えられる遺物が主に出土している。

表 3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク点数	C ランク箱数
近代	磁器、印判磁器、染付、色絵付け磁器、施釉陶器、無釉陶器、ガラス製品、獣骨製品		磁器 1 点、印判磁器 2 点、染付 3 点、色絵付け磁器 1 点、施釉陶器 4 点、無釉陶器 1 点、ガラス製品 1 点、獣骨製品 1 点	ガラス製品 60 点	
室町時代末期 ～安土・桃山 時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦質土器、灰釉陶器、瓦、石製品		土師器 7 点、焼締陶器 2 点、施釉陶器 1 点、瓦質土器 2 点、灰釉陶器 1 点、瓦 36 点、石製品 2 点		
室町時代中頃	土師器、瓦質土器、白磁、青磁、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶器、瓦、錢貨、人骨		土師器 16 点、瓦質土器 5 点、白磁 2 点、青磁 1 点、施釉陶器 6 点、焼締陶器 1 点、輸入陶器 1 点、瓦 5 点、錢貨 3 点	土師器 2 点、瓦質土器 1 点、人骨 1 点	
鎌倉時代	土師器、瓦質土器、瓦		土師器 6 点、瓦質土器 1 点、瓦 2 点		
奈良・白鳳時代	土師器、須恵器		土師器 18 点、須恵器 13 点		
合計		225 箱	145 点 (14 箱)	64 点 (4 箱)	209 箱

* コンテナ箱数は、整理段階で 12 箱増加した。

(1) 第 1 面遺構出土遺物

先に述べたように、第 1 面で検出した遺構は禁裏御用水遺構である溝 0001 で、遺構内からは近代の所産と考えられる遺物が出土している。

溝 0001 (図版 70・95 - 1)

溝 0001 からは陶磁器、焼締陶器、ガラス瓶等が出土している。ガラス瓶については、昭和十年代以前のものが主体をなし、戦後のものは包含されていなかった。これらについての詳細は別項にて述べることとする。石組み溝内および掘方からは明治期以降の所産と考えられる陶磁器が主体となって出土しており、直下の素掘溝からは江戸時代末期から明治時代に属すると考えられる土師器が極少量出土している。

1 は磁器の蓋で、口径 11.0 cm、底径 5.0 cm、器高 3.6 cm で、つまみ端面に釉剥ぎが認められる。天井部は平坦で、体部は外方へ直線的に拡がり、口縁端部は丸く収められる。口縁部内面に三条、口縁部外面に一条、天井部外面に三条、つまみ部外面に一条の圈線が、体部外面にはスタンプによると思われる梅が描かれる。2、3 は印判磁器である。2 は皿で、口径 11.0 cm、底径 6.4 cm、器高 2.4 cm、高台端面に釉剥ぎが認められる。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや平坦である。内面に銅版転写によると考えられる絵付けがなされるが、版のずれが認められる。3 は湯呑みで、口径 6.8 cm、底径 3.0 cm、器高 4.9 cm で、高台端面に釉剥ぎが認められる。平坦な底部から、体部が直線的に立ち上がり、端部は丸く収められる。体部外面に梅が描かれる。

4 ～ 6 は染付である。4 は湯呑みで、口径 8.3 cm、底径 3.0 cm、器高 4.7 cm で、高台端面に釉剥

ぎが認められる。体部は直線的に立ち上がり、端部は丸く収められる。体部外面に絵付けがなされるが、絵柄に版ずれによると思われるずれが認められることから、印判によるものと考えられる。5は輪花鉢と考えられる。口径10.6 cm、底径4.2 cm、器高5.4 cmで、高台端部に釉剥ぎが認められる。体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がり、口縁部は屈曲して直線的に上方へ延び、端部は丸く収められる。6は鉢で、口径10.1 cm、底径4.4 cm、器高4.3 cm、高台端部に釉剥ぎが認められる。体部は内湾気味に外方へ向かって立ち上がり、口縁部で段差が付けられる。口縁端部は丸く収められる。口縁部内面に二条の圈線、底部内面に一条の圈線と「福」字が描かれる。

7は色絵付けの磁器花瓶である。口径1.5 cm、体部最大径5.1 cm、底径3.4 cm、器高13.6 cmである。体部下端部から高台端面にかけて釉剥ぎが認められる。

8～10は施釉陶器である。8は湯呑みで、口径7.5 cm、底径3.8 cm、器高5.6 cmで、高台端部に釉剥ぎが認められる。体部は直線的にやや外方へ立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸く収められる。9は花瓶で、口径5.5 cm、底径4.0 cm、器高7.7 cmで、体部下端部から高台部にかけて釉剥ぎが認められる。体部は直線的にやや外方へ立ち上がり、口縁部は外反し、端部は平坦に仕上げられる。10は水差しである。長さ8.1 cm、幅4.4 cm、高さ4.4 cmの牛型を呈し、緑釉がかけられている。

11は無釉陶器の仏具と考えられる。口径2.8 cm、底径5.4 cm、器高8.2 cm、口縁部から体部上半がロクロナデ、体部下半が回転ケズリで成形される。

12はガラス製のビー玉で、直径2.8 cmである。

13は和裁用のヘラで、獣骨製である。長さ13.8 cm、幅2.4 cm、厚さ0.7 cmを測る。

14は石組み溝掘方から出土した施釉陶器で、口径6.1 cm、底径5.4 cm、器高5.7 cm。体部下端部から高台にかけては無釉で、回転ケズリによって成形される。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられ、口縁部内面に蓋を受けると考えられる突起が作り出される。体部外面のイッチン描きから、「からし漬」の容器と判る。石組み溝埋土に包含されていたこれらの遺物は、明治期以降の所産と考えられる。

15～17は石組み溝直下の素掘溝から出土した。15は土師器皿Nrで、口径4.9 cm、器高0.9 cmである。19世紀中頃の所産と考えられる。16は焼締陶器の播鉢である。底部に6条1単位の播り目、体部内面に11条1単位の播り目を密に施す。17は施釉陶器で、仏具と考えられる。口径3.4 cm、底径4.2 cm、器高3.7 cmである。

(2) 第2－1面遺構出土遺物

第2－1面の遺構から出土した遺物は溝0041および瓦溜りの瓦が主体であり、土器類の出土点数は少ないことに加え、細片が大半であったため、図化できたものは僅かである。土器類は10C期に属し、16世紀後半～末の所産と考えられるものが主体をなす。

礎石建物 0508 (図版 73 - 18)

礎石建物 0508 を構成する柱穴内からは、細片が極少量出土したのみで、図化できた遺物は 1 点のみである。

18 は柱穴 0089 から出土した瓦質土器の鍋で、口縁部が残存している。口径 24.2 cm、残存器高 7.1 cm で、体部が外方へ向かって直線的に立ち上がり、口縁部で強く屈曲して端部は平坦に仕上げられる。16 世紀の所産と考えられる。

〔溝〕

溝 0041 (図版 71 ~ 75・96 ~ 99)

遺構内から出土した遺物はほぼ瓦塼類が占め、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦に加え、鬼瓦、塼が出土している。これらのうち、軒丸瓦、軒平瓦について、瓦当文様による分類をおこなった。瓦当文様の型式名は軒丸瓦については NM と数字、軒平瓦は NH と数字の組合せとし、範傷の進行が確認できるものについては、数字の後ろに小文字アルファベットを付した。軒瓦の瓦当文様には 15 世紀の要素を有するが、範傷が多数認められることにくわえ、軒平瓦が 15 世紀後半から認められる懸かりを有することから、当遺構から出土した瓦は 15 世紀後半以降の所産と考えられる。

〔瓦塼類〕

軒丸瓦

出土点数は 83 点で、全 8 型式に分類される。各型式の点数は、NM 1 型式が最多で 57 点、次いで NM 2 の 16 点、NM 3 から NM 8 は 1 点から 4 点である。

NM 1

左巻きの三つ巴文軒丸瓦である。三つ巴文の周囲に圈線を巡らせて内外区を区画する。外区には珠文帯が配され、周縁は素文である。巴文の頭部は肥厚し、尾部は比較的長く伸びる。a ~ c の三種に分類され、a 種が 20 点、b 種が 13 点、c 種が 2 点、瓦当の摩滅、残存部位によって種別の判別が不可能であったものが 22 点ある。

19 は a 種に属する。出土した NM 1 型式中で最も範の傷みが進行していない種であるが、珠文帯に比較的多数の範傷が観察される。完形品で、瓦当直径 15.2 cm、周縁幅 1.8 cm ~ 2.0 cm、瓦当厚 2.3 cm、全長 33.7 cm を測る。密な胎土で、焼成は良好である。丸瓦部は玉縁式で、玉縁端部から 10.5 cm の位置に軒平瓦の懸かりに対応する段差が設けられる。瓦当端面はケズリおよびナデ調整、裏面下半は横方向のナデ、上半は接合用粘土の補填後にナデ調整によって仕上げられ、丸瓦部凸面側は縦方向のナデ調整が施される。

20 は b 種に属する。a 種から珠文帯の範傷が増加し、内区の巴文にも範傷によると思われる潰れが観察される。完形品で、瓦当直径 15.3 cm、周縁幅 1.8 cm ~ 2.0 cm、瓦当厚 2.5 cm、全長 32.7 cm を測る。密な胎土で、焼成は良好である。丸瓦部は玉縁式で、玉縁端部から 10.5 cm の位置に軒平瓦の懸かりに対応する段差が設けられる。各部の調整は 19 と同様であるが、丸瓦部凸面の一部に

縄叩きの痕跡が残る。

21 は c 種に属する。b 種からさらに範の損耗が進み、文様の明瞭さを欠く。瓦当上半部および丸瓦部の一部が残存しており、残存径 7.8 cm、周縁幅 1.8 cm、残存長 12.1 cm を測る。密な胎土で、焼成は良好である。瓦当端面、裏面、丸瓦部凸面側の調整は a、b 種と同様に丁寧なナデが施される。

NM2

右巻きの三つ巴文軒丸瓦である。巴文の頭部は肥厚し、頭部同士が比較的近接する。尾部は長く伸び、隣接する巴文の尾部と接続して圏線状を呈する。三つ巴文の外周に圏線を巡らせて内外区を区画する。外区には珠文帯を配し、周縁は素文である。16 点出土している。

22 は瓦当直径 15.2 cm、周縁幅 1.7 cm～1.9 cm、瓦当厚 2.7 cm、残存長 10.9 cm である。瓦当端面、裏面ともナデ調整によって仕上げられ、丸瓦凸面側は縦方向のナデが施される。瓦当端面の上部に「回」の刻印が押されている。

NM3

左巻きの巴文軒丸瓦と考えられる。23 が 1 点出土しているが、瓦当上半部を欠損しているため、巴文頭部については不明、尾部同士が接続して圏線状を呈する。巴文の周囲に圏線を巡らせて内外区を区画する。外区には珠文帯を配し、周縁は素文である。瓦当直径 16.0 cm、周縁幅は 2.0 cm、瓦当厚は 1.7 cm、瓦当端面はケズリとナデ、裏面は横方向のナデで仕上げられる。胎土は密で、焼成は良好である。

NM4

左巻きの三つ巴文軒丸瓦である。巴文の頭部は比較的近接し、大ぶりで肥厚する。尾部は比較的短く、互いに接続して内外区を区画する圏線を兼ねると考えられる。外区には大ぶりの珠文を配する。24 が 1 点出土している。周縁部を欠損しており、瓦当直径は不明。胎土は密で、焼成は良好である。

NM5

左巻きの三つ巴文軒丸瓦である。巴文の頭部は肥厚し、尾部は互いに接続して、内外区を区画する圏線を兼ねる。外区に珠文帯を配する。巴文、珠文ともに比較的大ぶりで、周縁は素文である。2 点出土している。25 は瓦当上半部が残存しており、瓦当直径 16.0 cm、周縁幅 1.7 cm、瓦当厚 2.2 cm を測る。瓦当端面はケズリとナデで仕上げられ、裏面は丁寧なナデ調整が施される。胎土は密で、焼成は良好である。

NM6

左巻きの三つ巴文軒丸瓦である。頭部は比較的大きく、やや肥厚する。26 が 1 点出土している。

胎土は密で、焼成は良好であるが還元されていない。

NM7

右巻きの三つ巴文軒丸瓦である。巴文の外周に圈線を配して内外区を区画する。外区に珠文帯を配し、周縁は素文である。巴文の頭部は肥厚し、短い尾部は圈線に接続する。4点出土している。27は瓦当直径16.0 cm、周縁幅2.1 cm、瓦当厚2.2 cmを測る。瓦当端面はケズリとナデによって調整され、裏面は接合用粘土の補填後にナデが施されるが粗く、粗雑なつくりである。胎土は密で、焼成は良好であるが還元されていない。

NM8

文様構成は不明である。圈線はなく、外周に珠文帯を配し、周縁は素文である。28が1点出土している。瓦当端面、裏面とも丁寧なナデ調整が施される。胎土は密で、焼成は良好である。

軒平瓦

出土点数は94点で、全5型式に分類される。各型式の点数はNH1が最多で79点、NH2からNH5は1点から7点である。

NH1

中心飾りに凸線で表現される半裁菊花文を配し、その左右に唐草文が三回反転する。a～cの三種に分類され、a種が21点、b種が12点、c種が19点、瓦当の摩滅、残存部位によって種別の判別が不可能であったものが27点ある。

29はa種に属する。瓦当幅24.0 cm、瓦当厚4.6 cm、顎幅2.5 cm、最大残存長20.8 cm、瓦当貼付け式である。瓦当の上縁および下縁にヘラケズリによって面取りを施す。平瓦部凹面には横方向のナデを施すが部分的に布目圧痕が残り、両側面に懸かり部を接合後に縦方向のナデで調整を行う。凸面は縦方向のナデによって叩き痕を消し、瓦当接合後に顎部から1.8 cmの範囲を横方向のナデで調整する。胎土は密で、焼成は良好である。

30はb種に属する。左第三主葉にa種では見られなかった範傷が現れる。残存瓦当幅22.8 cm、瓦当厚4.8 cm、顎幅2.4 cm、最大残存長13.1 cm。瓦当接合技法、各部の調整はa種と同様である。胎土は密で、焼成は良好である。

31はc種に属する。b種段階で左第三主葉に確認された範傷がさらに進行し、右第三主葉にも範傷が現れる。瓦当幅24.7 cm、瓦当厚4.6 cm、顎幅2.3 cm、最大残存長22.6 cm。瓦当接合技法、各部の調整はa種と同様であるが、顎後縁にも面取りを施す。胎土は密で焼成は良好である。

NH2

中心飾りに凸線で表現される半裁菊花文を配し、左右に唐草文が反転する。唐草は左右とも五葉であるが、右は五回反転するのに対し、左は第五主葉が第四主葉と同一方向に巻き四回反転と

なる。1点出土している。32は瓦当貼付け式の切隅軒平瓦で、瓦当幅23.4cm、瓦当厚3.9cm、顎幅1.9cm、最大残存長12.4cmを測る。瓦当上縁、下縁および顎後縁にヘラケズリによって面取りを施す。平瓦部凹面は縦方向のナデが施されるが、部分的に布目圧痕が残る。顎接合部は横方向のナデ、平瓦部凸面は縦方向のナデで叩き痕を消す。胎土は密で、焼成は良好である。

NH3

陽刻で表現される半裁菊花文を中心飾りに配し、左右に唐草文が三回反転する。7点出土している。33は瓦当貼付け式で、瓦当幅23.3cm、瓦当厚4.9cm、顎幅2.1cm、最大残存長9.3cm。瓦当上縁、下縁および顎後縁にヘラケズリによって面取りを施す。凹凸両面ともナデによって布目圧痕、叩き痕を消す。胎土は密で、焼成は良好である。34は残存瓦当幅16.8cm、瓦当厚4.9cm、顎幅2.0cm、最大残存長11.8cm。胎土は密で、焼成は良好である。

NH4

中心飾りは陽刻の半裁菊花文で、左右に唐草文が反転する。5点出土している。35は残存瓦当幅13.4cm、瓦当厚4.8cm、顎幅2.8cm、最大残存長5.9cm。瓦当貼付け式で、瓦当上縁および下縁をヘラケズリによって面取りする。胎土は密で、焼成は良好である。

NH5

唐草文であるが、中心飾りを欠損しているため文様全体の構成は不明である。圏線によって内区と上外区および脇区を区画する。2点出土している。36は瓦当貼付け式で、残存瓦当幅5.8cm、瓦当厚5.0cm、最大残存長4.3cm、瓦当下縁をヘラケズリによって面取りする。胎土は密で、焼成は良好である。

丸平瓦

37、38は平瓦である。37は全長28.0cm、狭端幅21.3cm、広端幅23.3cm、厚さ1.7cmを測る。38は全長27.4cm、狭端幅19.0cm、広端幅22.5cm、厚さ1.7cmを測る。両者とも凹面側は横方向のナデによって糸切り痕跡および布目圧痕を消すが、広端側に一部残存する。凸面側にはケズリおよびナデ調整が施される。側面は縦方向のケズリとナデによって仕上げられる。また、狭端凹面側を面取りする。

39は丸瓦で、全長31.0cm、幅13.8cm、厚さ2.3cmを測る。玉縁式で、凸面は縦方向の丁寧なナデにより叩き痕跡を消す。凹面は無調整で糸切り痕跡および布目圧痕を残す。側面および端面の凹面側をヘラケズリによって面取りし、端面凹面側はナデ調整が施される。

道具瓦

40～43は鬼瓦である。40は右脚部が残存しており、残存高10.2cm、残存幅8.0cm、厚さ6.7cm

である。周縁幅は2.2 cm、珠文は基底部で直径2.7 cmを測る。裏面および側面はケズリとナデが施される。41は左脚部が残存している。残存高23.2 cm、幅13.5 cm、厚さ6.2 cmを測る。外周に珠文帯を配し、その内側に菊花文を押印する。周縁幅は狭く、1.2 cm前後である。側面および裏面にはケズリとナデが施される。42は残存高11.4 cm、残存幅9.2 cm、厚さ5.2 cmを測る。側面にはケズリおよびナデ調整が施され、裏面に糸切りの痕跡が残る。43は眼部分のみが残存している。残存長10.3 cm、残存幅10.4 cm、残存厚8.9 cmを測る。

44は谷丸瓦と考えられる。残存長20.2 cm、幅14.9 cm、厚さ2.6 cmを測る。瓦先端部が斜めに切られ、素文の瓦当状の蓋が接合される。蓋部の表裏面、丸瓦部凸面にナデ調整が施され、蓋端部および丸瓦端部はケズリで調整される。

45は切隅瓦である。残存長17.3 cm、残存幅8.7 cm、厚さ2.3 cmで、凹凸両面ともナデで仕上げられ、端面はケズリとナデが施される。切断された側面から2.0 cm～2.5 cmの箇所直径1.1 cmの穿孔が施されている。

46は螭羽瓦と考えられる。残存長14.7 cm、残存幅8.1 cm、厚さ1.9 cmである。

47、48は用途不明の道具瓦である。47は残存長22.7 cm、幅9.7 cm、厚さ4.6 cmを測る。表面の中央に長辺方向と並行の沈線が二条入れられている。側面はケズリで調整され、裏面には糸切り痕跡が残るが、端部がケズリによって面取りされる。48は残存長19.0 cm、残存幅14.7 cm、厚さ2.4 cmを測る。凸面側は縦方向のケズリが施されるが、僅かに糸切り痕跡が残る。凹面側には糸切り痕跡および布目圧痕が残り、側端面はケズリで調整される。頂部凹面側を、端部から8.4 cmまで面取りする。

塼

塼は厚さが5.0 cm前後のものと、4.5 cm前後のものの2種が出土している。49は残存長16.2 cm、残存幅17.0 cm、厚さ5.1 cmを測る。表裏両面とも摩滅により調整は不明で、側面はケズリが施される。50は残存長15.2 cm、残存幅13.2 cm、厚さ4.5 cmを測る。表面は摩滅のため調整は不明であるが、裏面および側面はケズリとナデが施される。

〔瓦塼類以外の遺物〕

51は灰釉陶器の碗で、底部のみ残存しており、底径7.0 cm、残存器高2.4 cmである。高台は貼り付けで、体部はロクロナデにより成形される。底部外面に墨書が認められ、「田」と読める。

溝 0124 (図版 76 - 52 ~ 53)

52は土師器皿Sで、口径11.5 cm、器高2.1 cm、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。10C 期に属し、16 世紀後半の所産と考えられる。

53は瓦当貼付け式の軒平瓦である。残存長12.8 cm、瓦当残存幅14.2 cm、瓦当厚4.2 cmを測る。凹面に横方向のナデが施され、瓦当端部を面取りする。凸面は縦方向のナデが施されるが、瓦当

接合後に平瓦部から顎部にかけて横方向のナデが施される。溝 0041 出土の NH 1 c と同範である。

〔瓦溜り〕（図版 76 - 54 ~ 60・95 - 2）

瓦溜り群の出土遺物は、溝 0041 と同様に瓦埴類が大半を占める。これらは溝 0041 出土の瓦埴類との時期差は認められず、15 世紀後半以降の所産と考えられる。それらに加えて極少量の土器類があり、16 世紀中頃～末の所産と考えられる。

54 は土師器皿 S で、瓦溜り 0018 から出土した。体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部で外反する。10B 期に属し、16 世紀中頃の所産と考えられる。55、56 は土師器皿 Sb である。55 は瓦溜り 0016 から出土した。口径 8.6 cm、器高 1.6 cm で、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部でやや肥厚して口縁端部は尖り気味に丸く収められる。10B 期に属し、16 世紀中頃の所産と考えられる。56 は瓦溜り 0014 から出土した。口径 9.0 cm、器高 1.5 cm で、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部でやや肥厚して口縁端部は尖り気味に丸く収められる。10C 期に属し、16 世紀後半の所産と考えられる。

57 は瓦溜り 0075 から出土した備前産焼締陶器の播鉢で口縁部のみ残存している。口径 26.0 cm、残存器高 6.9 cm である。7 条 1 単位の播り目が施される。16 世紀中頃から後半の所産と考えられる。

58 は瓦溜り 0075 から出土した平瓦で、残存長 11.5 cm、残存幅 11.3 cm、厚さ 2.5 cm である。凹面はナデが施され、凸面はケズリによって叩きの痕跡を残さない。凸面に刻印が認められる。59 は瓦溜り 0014 から出土した。用途不明の道具瓦で、残存長 22.2 cm、最大残存幅 14.5 cm、最小残存幅 7.3 cm、厚さ 6.7 cm を測る。側面には成形時のケズリ痕跡が残り、表裏両面には縦方向のケズリで成形後、縦方向のナデが施される。

60 は瓦溜り 0018 から出土した埴で、一辺 31.4 cm ~ 31.8 cm、厚さ 5.2 cm を測る。表裏面ともにナデ調整が施されるが、裏面には糸切りの痕跡が残り、側面はケズリによって仕上げられる。

〔柱穴〕

柱穴 0047（図版 76 - 61・98 - 5）

61 は水晶製品である。残存長 2.3 cm、幅 1.4 cm を測る。上部が六角形にカットされており、六角錐状を呈する。何らかの飾りに用いられたものと考えられる。当遺構の埋土中に包含されていたが、遺構上部が近代攪乱 0132 に切られており、近代以降の製品である可能性がある。

〔その他の遺構〕（図版 76 - 62 ~ 63）

62、63 は柱穴 0092 から出土した。62 は土師器皿 S で、口径 12.0 cm、残存器高 2.3 cm である。10B 期から 10C 期に属し、16 世紀後半の所産と考えられる。63 は瓦質土器の鍋で、口縁部が残存している。口径 22.7 cm、残存器高 3.4 cm で、口縁部は強く屈曲して端部は平坦に仕上げられる。16 世紀の所産と考えられる。

(3) 第1層出土遺物 (図版 77 - 64 ~ 65)

64 は土師器皿 Sb と考えられる。口径 9.8 cm、器高 1.8 cm、体部が直線的に外方へ立ち上がり、口縁部はやや肥厚して端部は丸く収められる。10C 期に属し、16 世紀中頃の所産と考えられる。

65 は石帯である。長さ 3.8 cm、最大残存幅 3.6 cm、厚さ 0.8 cm。

(4) 第2 - 2面遺構出土遺物

第2 - 2面の遺構から出土した遺物は主に濠 0039 埋土に包含されていたもので、溝 0275、井戸 0250、土坑墓 0335 等からも出土している。また、柱穴、柵列等からは出土点数が僅少であることに加え、細片化していた。これらの遺物は9C 期から 10A 期に属し、15 世紀後半から 16 世紀前葉の所産と考えられるものが主体をなす。

〔濠〕

濠 0039 (図版 77 - 66 ~ 77・100 - 1)

66 は土師器皿 N である。口径 11.0 cm、器高 2.0 cm で、体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く収められる。見込みに圏線が認められる。67 は土師器皿 Sh である。口径 7.0 cm、器高 1.5 cm で、底部が 7.0 mm 程度上方に突出する。体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部で屈曲して外反し、口縁端部は丸く収められる。68 ~ 70 は土師器皿 S である。68 は口径 10.9 cm、器高 2.2 cm で、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部でやや外反し、口縁端部は丸く収められる。69 は口径 15.0 cm で、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。70 は口径 15.8 cm、器高 3.1 cm で、体部は外方へ向かって直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反して口縁端部は丸く収められる。これらは9C 期から 10A 期に属し、15 世紀後半から 16 世紀前葉の所産と考えられる。

71、72 は古瀬戸碗である。71 は平碗で、口径 15.0 cm、器高 7.0 cm、体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に丸く収められる。体部の上 2/3 から内面にかけて施釉され、貫入が見られる。高台は貼り付けで、端面は平坦である。14 世紀末から 15 世紀初頭の所産と考えられる。72 は口径 16.8 cm、器高 6.2 cm、体部は外方へ向かって直線的に立ち上がり、口縁部は強く屈曲して上方へ延び、口縁端部は丸く収められる。15 世紀中葉の所産と考えられる。

73 ~ 75 は瓦質土器で、73、74 は火鉢、75 は羽釜である。73 は平面円形で、口径 19.8 cm、底径 16.0 cm、器高 11.0 cm を測る。脚は貼り付けで、体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は平坦に仕上げられる。体部外面は縦方向のミガキが密に施され、口縁端部はヨコナデで調整される。口縁部内面はヨコナデの後、横方向のミガキが施される。74 は平面円形で、口径 36.0 cm、底径 29.0 cm、器高 13.1 cm を測る。貼り付けの脚を有し、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部は平坦に仕上げられる。体部および底部の内面にはナデ調整がなされるが、体部外面は摩滅のため不明瞭である。75 は口径 26.4 cm、残存器高 8.7 cm で、体部はやや外方へ向かって直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦に仕上げられる。口縁端部から約 2.5 cm の位置に鐳が貼り付けられる。体

部の鏝以下にオサエの痕跡が残り、口縁部外面から端部にかけてヨコナデ、内面にはハケ調整が施される。これらは15世紀後半から16世紀前葉の所産と考えられる。

76は小菊文軒丸瓦である。菊文の外周に珠文帯を配し、その外周に圈線が巡り、周縁は素文である。瓦当直径10.0 cm、周縁幅0.9 cm、瓦当厚2.3 cmを測る。

77は塼である。長辺26.5 cm、短辺20.4 cm、厚さ3.9 cmで、表裏面ともナデ調整が施されるが、僅かに糸切り痕跡が残り、側面はケズリによって仕上げられる。胎土は密で焼成は良好である。

〔溝〕

溝 0275 (図版 77 - 78 ~ 80)

78、79は土師器皿Sと考えられる。78は口径11.4 cm、器高1.9 cm、79は口縁部が残存しており、口径13.2 cm、残存器高2.2 cmである。これらは10A期に属し、16世紀前葉の所産と考えられる。

80は輸入青磁碗で、口径15.0 cm、底径5.0 cm、器高6.3 cmを測る。

〔井戸〕

井戸 0250 (図版 77 - 81 ~ 82)

81、82は土師器皿Sである。両者とも口縁部が残存しており、81は口径11.2 cm、残存器高2.2 cm、82は口径13.2 cm、器高2.2 cmである。これらは9C期から10A期に属し、15世紀後半から16世紀前葉の所産と考えられる。

〔土坑墓〕

土坑墓 0335 (図版 78 - 83 ~ 85)

83は4枚重なって出土したもので、固着しており剥離が困難であったため、最上面にあったものの拓本を掲載している。直径2.5 cm、厚さ0.14 cm。銭種は判読不能。84は直径2.5 cm、厚さ0.19 cm。「元祐通宝」である。85は直径2.5 cm、厚さ0.14 cm。右辺の一文字を欠損しており、銭種は判別不能。

〔その他の遺構〕 (図版 78 - 86 ~ 90・100 - 2)

86は柱穴0325から出土した白磁碗である。口径8.0 cm、底径3.0 cm、器高3.2 cmを測る。高台は削り出しの輪高台で、体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、口縁部が外反して端部は平坦に仕上げられ、体部内外面に施釉される。

87はピット0338から出土した瓦質土器壺である。口径5.9 cm、残存器高5.2 cmを測る。内湾気味に立ち上がる体部が肩部で内方に屈曲して伸び、口縁部は垂直に立ち上がり、端部は平坦に仕上げられる。体部外面にオサエの痕跡が残り、肩部外面から口縁部内面にかけて横方向のナデ、肩部内面はナデ、体部内面はハケで調整される。肩部外面にはミガキが施され、花卉状の暗文が描かれる。16世紀の所産と考えられる。

88、89 は梁D内で検出した土坑 0128 から出土した。88 は桐文軒丸瓦である。桐文の外周に珠文帯を配するが、内外区を画する圈線はなく、周縁は素文である。瓦当径 18.0 cm、瓦当厚 2.0 cm、瓦当裏面下半には横方向のナデ、上半部は丸瓦接合用粘土を補填後にナデ調整が施される。89 は均整唐草文軒平瓦である。主葉は四枚で、四回反転するが、左第三主葉は反転せずに第二主葉と同一方向に巻く。唐草文上部に圈線を配して内区と上外区を区画するが、内区両側および下部には圈線はなく、したがって下外区および両脇区は表現されない。上外区は素文である。瓦当幅 26.1 cm、瓦当厚 4.2 cm、顎幅 2.8 cm、最大残存長 27.1 cmを測る。瓦当面上縁をヘラケズリによって面取りし、顎部凸面側には横方向のナデを施す。平瓦部凹面側には布目圧痕が残るが、両側端部を幅 4.0 cmにわたって浅く面取りし、凸面側はナデによって叩き痕跡を消す。側面にはナデが施される。これらは 15 世紀の所産と考えられる。

90 は梁D内で検出した土坑 0321 から出土した。鬼瓦と考えられる。最大残存長 20.6 cm、最大残存幅 14.4 cm、厚さ 5.4 cmを測る。表面は素文で、裏面に下底幅 5.5 cm、上底幅 3.6 cmの断面台形を呈する凸帯を作り出し、側面は裏面側をヘラケズリによって面取りする。

(5) 第2層出土遺物 (図版 78 - 91 ~ 105・101 - 1)

第2層からは9C期から10A期に属し、15世紀後半から16世紀前葉に比定される遺物が主体的に出土している。

91 は土師器皿 Sb である。口径 8.8 cm、器高 2.2 cm、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に丸く収められる。92 ~ 96 は土師器皿 S である。92 は口径 10.7 cm、器高 2.8 cm、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部が丸く収められる。93 は口径 12.8 cm、器高 2.8 cm、体部は内湾気味に外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。94 は口径 9.8 cm、器高 2.0 cm、体部は直線的に立ち上がり、口縁部でやや肥厚する。口縁端部は丸く収められる。95 は口径 10.8 cm、器高 2.2 cm、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。96 は口径 11.7 cm、器高 2.7 cm、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部はやや開いて端部を丸く仕上げる。97 は土師器鍋で、口縁部のみ残存している。口径 27.8 cm、残存器高 1.8 cmを測る。

98 は瓦質土器の羽釜で、口縁部が残存している。口径 21.4 cm、残存器高 4.6 cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁部で内湾する。口縁端部は丸く収められる。口縁端部から約 1.0 cm下方に鐙が貼り付けられ、鐙の幅は 1.2 cmである。

99 は鉄釉陶器の天目碗である。口径 9.8 cm、残存器高 4.5 cm、体部はやや内湾気味に外方へ立ち上がり、口縁部で内方に屈曲して上方へ伸び、口縁端部は外反する。

100 ~ 102 は瀬戸美濃陶器である。100 は天目碗で、口径 15.8 cm、残存器高 4.9 cm、体部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部で内方に屈曲して上方へ伸びる。101 は香炉で、口縁部のみ残存している。口径 7.4 cm、残存器高 3.3 cm、体部に菊花文が施文される。外面は施釉され、内面は露胎である。102 は水滴で、口縁部が残存している。口径 6.4 cm、残存器高 3.3 cm、直線的に立ち上がる体部が肩部で内方に屈曲して伸び、口縁部で強く屈曲して直立して立ち上がり、口縁端部は丸

く収められる。肩部に注口が貼り付けられ、付け根部分に刻み目が施される。

103 は輸入陶器の盤で、底部のみ残存している。底径 20.2 cm、残存器高 2.8 cm、底部には約 0.2 cm の低い高台が作り出され、体部が内湾気味に外方へ立ち上がる。外面は無釉で、内面に施釉される。

104 は産地不明の陶器鉢で、口縁部が残存している。口径 38.8 cm、残存器高 8.6 cm、外反しなから立ち上がる体部が口縁部で屈曲して上方へ立ち上がり、口縁端部は平坦な断面形状を呈する。口縁端部直下に凸帯を作り出し、その上面に縄目状の文様を二条施す。内外面ともにナデ調整によって平滑に仕上げられるが、内面に叩き当て具の痕跡が観察される。

105 は白磁の皿である。口径 10.1 cm、器高 2.0 cm、平坦な底部から体部が直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く収められる。内外面に施釉され、口縁部外面から端部にかけて釉剥ぎが施される。

(6) 第3面遺構出土遺物

第3面で検出した遺構から出土する遺物は細片化しており、絶対量も少ないため、図化に耐えるものは多くない。溝 0145 からは 6A 期から 6B 期に属し、13 世紀の所産と考えられる遺物が出土している。また、柵列 0513、0514、掘立柱建物 0515、0516 を構成する柱穴からは土器細片が極少量出土したのみで、建物としてまとまらない柱穴についても遺物の出土量は少ない。竪穴建物の遺物は竪穴建物 0218、0219 から比較的多く出土している。これらの遺構から出土した遺物は 7 世紀後半の所産と考えられる。

〔溝〕

溝 0145 (図版 79 - 106 ~ 114・101 - 2)

106、107 は土師器皿 Ac で、106 は口径 8.4 cm、器高 1.1 cm、107 は口径 8.9 cm、器高 1.0 cm を測る。108 は土師器皿 N で、口径 8.2 cm、器高 1.6 cm を測る。底部外面から体部外面にかけてオサエおよびナデが施され、口縁端部は丸く収められる。109、110 は土師器皿 S である。109 は口径 7.2 cm、器高 1.8 cm、体部がやや内湾しながら外方へ向かって立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く収められる。110 は口径 12.1 cm、器高 2.3 cm、体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く収められる。111 は土師器羽釜である。口縁部が残存しており、口径 18.5 cm、鏝部の外径 21.9 cm、残存器高 5.6 cm を測る。口縁部にはナデが施され、端部は平坦に仕上げられる。体部は内外面ともにオサエの痕跡が残る。これらの遺物は 6A 期から 6B 期に属し、12 世紀後半から 13 世紀前葉の所産と考えられる。

112 は瓦質土器の鍋である。口縁部から体部上半部が残存している。口縁部は強く屈曲して直線的に外方へ伸び、やや内方に屈曲して立ち上がる。口縁端部は平坦に仕上げられる。

113 は右巻きの三つ巴文軒平瓦である。巴文頭部は比較的小振りで肥厚する。尾部は比較的長く、隣接する尾部とは接合せず独立している。圏線、珠文帯はなく、周縁は素文である。瓦当直径は 11.0 cm 前後と考えられ、周縁幅は 1.4 cm を測る。114 は剣頭文軒平瓦である。残存幅 8.4 cm、

瓦当厚 3.5 cm、折り曲げ式の段頸で、頸部端面にケズリ、裏面に横方向のナデが施される。平瓦部凹面側はナデによって布目圧痕を消す。これらは 13 世紀の所産と考えられる。

〔竪穴建物〕

竪穴建物 0164 (図版 79 - 115 ~ 116)

115 は須恵器杯 G 蓋で、口径 9.3 cm、残存器高 1.7 cm である。

116 は土師器甕で、口径 22.5 cm、残存器高 8.2 cm を測る。体部は内湾しながら立ち上がり、頸部で外方へ屈曲して口縁が直立気味に伸び、端部は尖り気味に丸く収められる。口縁端部は横方向のナデ、口縁部外面はハケのちナデ、口縁部内面および体部内外面はハケで調整される。これらは 7 世紀後半の所産と考えられる。

竪穴建物 0164 竈 (図版 79 - 117 ~ 118・102 - 1)

117、118 は土師器長胴甕である。117 は竈焚口部に横倒しにされた状態で出土した。口径 23.2 cm、体部最大径 26.2 cm、器高 38.2 cm を測る。底部は丸みを帯び、体部は直線的に立ち上がるが頸部でやや内湾し、屈曲して口縁部は外方へ直線的に立ち上がり、口縁端部は平坦に仕上げられる。体部外面には縦方向のハケ、口縁部外面にはヨコナデ、口縁部および体部内面には横方向のハケ、底部内面には縦方向のハケが施される。118 は、117 とともに竈焚口部に横倒しにされた状態で出土した。口径 22.6 cm、体部最大径 24.0 cm、器高 38.0 cm を測る。丸みを帯びた底部から直線的に体部が立ち上がり、頸部でやや内湾して外方へ屈曲し、口縁部が直線的に伸びて端部は尖り気味に収められる。体部外面はハケのちケズリ、口縁部内外面はハケ、口縁端部は横方向のナデ、体部内面はハケで調整される。これらは 7 世紀後半の所産と考えられる。

竪穴建物 0218 (図版 80 - 119 ~ 123・102 - 2)

119、120 は土師器壺である。119 は口径 13.9 cm、体部最大径 14.7 cm、残存器高 9.4 cm、体部は内湾しながら立ち上がり、頸部で外方へ屈曲して口縁部は直線的に伸び、端部は尖り気味に丸く収められる。体部はハケ、口縁部外面から端部にかけて横方向のナデ、口縁部内面はハケ、体部内面はオサエのち板ナデで調整される。120 は口径 9.8 cm、最大体部径 10.2 cm、器高 10.3 cm、体部は内湾しながら立ち上がり、頸部で外方へ屈曲して口縁部は直線的に伸び、端部は丸く収められる。体部下半は板ナデ、体部上半はハケ、口縁部外面から端部にかけて横方向のナデ、体部内面上半はナデ、体部内面下半はハケで調整される。121 は土師器甕で、壁溝から出土した。口径 22.3 cm、残存器高 11.2 cm、体部外面から口縁部外面下半にかけてハケ、口縁部上半から端部にかけて横方向のナデ、内面にハケによる調整が施される。122 は土師器長胴甕で、口径 26.4 cm、残存器高 26.6 cm を測る。体部は直線的に立ち上がり、頸部でやや内湾して外方へ屈曲し、口縁部は外反して端部を平坦に仕上げる。体部外面はオサエのちハケ、口縁部外面から端部にかけて横方向のナデ、口縁部内面はハケ、体部内面はオサエのち板ナデで調整される。

123は須恵器杯と考えられる。口径10.2 cm、器高4.1 cmを測るが、全体的に歪みが大きい。平坦な底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部内方に屈曲して直立気味に伸び、端部は丸く収められる。体部外面から口縁端部、内面にロクロナデが施される。これらは、7世紀後半から末の所産と考えられる。

竪穴建物 0219（図版 80－124～130・103－1）

124は土師器鉢で、口径26.8 cm、器高10.5 cmである。平坦な底部から内湾しながら体部が立ち上がり、口縁端部は内傾する平坦面に仕上げられる。底部外面から体部下半はケズリのちナデ、体部外面上半はオサエにより成形され、口縁部は横方向のナデで調整される。内面にはハケ調整が施される。125は土師器壺で、口径9.8 cm、器高10.6 cmである。丸底から内湾しながら体部が立ち上がり、口縁部で外方へ屈曲して端部は尖り気味に丸く収められる。体部外面の摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、一部にハケ目が認められる。口縁部は横方向のナデによって調整される。126は土師器把手付甕で、口径30.6 cm、体部最大径30.0 cm、残存器高17.2 cmである。体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、把手貼付け部で体部径が最大となる。把手部より上部は体部が内湾しながら内方へ向けて立ち上がり、頸部で外方へ屈曲して口縁部が外反しながら外方へ伸び、端部は平坦に仕上げられる。体部外面の把手より下部は板ナデ、把手より上部は把手貼付け時にナデ、口縁部内外面は横方向のナデで調整される。体部内面は摩滅により調整は不明瞭である。127は土師器長胴甕で、口径21.8 cm、残存器高17.4 cmである。体部はやや内湾しながら立ち上がり、頸部で外方へ屈曲して口縁部が伸び、端部は平坦に仕上げられる。体部外面はハケ、口縁部外面から端部にかけて横方向のナデ、口縁部内面から体部内面にかけてハケ調整が施される。

128～130は須恵器杯Aである。128は口径10.8 cm、器高3.7 cm、丸みを帯びた底部からやや内湾気味に外方へ体部が立ち上がり、口縁部で外反して端部は丸く収められる。129は口径11.0 cm、器高3.9 cm、丸みを帯びた底部からやや内湾気味に外方へ体部が立ち上がり、口縁部端部は丸く収められる。130は口径10.8 cm、器高4.0 cm、丸みを帯びた底部から外方へ体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。これらの遺物は7世紀後半から末の所産と考えられる。

竪穴建物 0363（図版 81－131～132・103－2）

131は土師器杯Cで、口径10.2 cm、器高3.4 cmである。丸みを帯びた底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部は外反して端部は丸く収められる。体部下半は板ナデ、体部上半はナデとミガキ、口縁部外面から体部内面上半にかけて横方向のナデ、体部内面はナデで調整される。132は土師器鍋で、口径18.8 cm、残存器高11.9 cmである。体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、頸部で外方へ屈曲して口縁部が直線的に伸び、端部は尖り気味に丸く収められる。体部内外面はハケ、口縁部内外面は横方向のナデで調整される。これらの遺物は7世紀後半の所産と考えられる。

竪穴建物 0389 (図版 81 - 133 ~ 135・103 - 2)

133、134 は須恵器杯G 蓋である。133 は口径 7.9 cm、器高 2.8 cm、天井部は丸みを帯び、宝珠つまみを有する。134 は口径 10.1 cm、器高 2.5 cm、天井部は平坦で、つまみは残存していない。135 は須恵器杯G で、口径 9.1 cm、器高 3.4 cm である。丸みを帯びる底部から体部が外方へ直線的に伸び、口縁端部は尖り気味に丸く収められる。これらは 7 世紀後半の所産と考えられる。

〔その他の遺構〕 (図版 81 - 136 ~ 145)

136、137 は柱穴 0225 から出土した。136 は須恵器杯A で、口径 11.8 cm、器高 3.7 cm を測る。体部は直線的に外方へ向かって立ち上がり、口縁部でやや外反して口縁端部は丸く収められる。底部外面にナデ、体部外面から底部内面にかけてロクロナデが施される。137 は須恵器高杯で、残存器高 4.9 cm である。これらは 8 世紀の所産と考えられる。

138 は柱穴 0351 から出土した土師器皿である。口径 16.8 cm、器高 2.8 cm で、底部はやや丸みを帯び、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。

139 は柱穴 0373 から出土した土師器把手付甕である。口縁端部が残存しないため口径は不明であるが、体部の最大径は 33.1 cm、残存器高は 20.2 cm を測る。体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、把手が貼り付けられる部分で体部径が最大となる。把手部分から体部は内湾しながら内方へ向けて立ち上がり、口縁部で屈曲して外方へ向けて立ち上がる。体部内外面にはハケ調整、口縁部外面にはヨコナデが施され、口縁部内面にはハケ目が残る。7 世紀末から 8 世紀の所産と考えられる。140 は柱穴 0383 から出土した須恵器杯A で、口径 12.2 cm、器高 3.3 cm を測る。平坦な底部から外方へ直線的に体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。7 世紀後半から末の所産と考えられる。141 は柱穴 0439 から出土した須恵器杯A である。底部のみ残存しており、底径 4.2 cm、残存器高 1.8 cm を測る。底部外面にヘラ切り痕跡が残る、体部外面および内面にロクロナデが施される。7 世紀後半から末の所産と考えられる。

142 ~ 144 は土坑 0414 から出土した。142 は土師器鉢で、口径 29.9 cm、残存器高 11.1 cm、底部は丸みを帯び、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内傾する平坦面をつくる。内部内外面ともハケ、口縁端部は横方向のナデで調整される。143 は土師器甕で、口縁部が残存している。口径 26.6 cm、残存器高 8.1 cm、体部は内湾しながら立ち上がり、頸部で外方へ屈曲して口縁部が直線的に伸びる。口縁端部は平坦に仕上げられる。体部外面はハケ、口縁部外面から端部にかけて横方向のナデ、口縁部内面はハケ、体部内面はナデで調整される。144 は須恵器杯A である。口径 10.0 cm、器高 3.7 cm、丸みを帯びる底部から外方へ直線的に体部が立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。これらは 7 世紀後半から末の所産と考えられる。

145 は柱穴 0466 から出土した土師器甕で、口径 23.6 cm、残存器高 9.8 cm を測る。体部は内湾しながら立ち上がり、頸部で外方へ屈曲して口縁が直線的に伸び、端部は尖り気味に丸く収められる。口縁端部は横方向のナデ、口縁部内外面および体部内外面はハケで調整される。7 世紀後半の所産と考えられる。

第Ⅳ章 まとめ

1 遺構の変遷

今回の調査では、7世紀後半の竪穴建物群をはじめ、室町時代の堀状遺構や礎石建物、近代の禁裏御用水遺構を主要な遺構として検出した。それらについて、検出面毎にまとめる。

第3面で検出された竪穴建物群から出土した遺物は、7世紀後半に属すると考えられるものが主体をなす。これらの竪穴建物群は、出土遺物から、南接する承天閣美術館増築地点において2004年に実施された調査で検出された竪穴建物群と同時期に機能していたものと考えられる。また、2004年の調査では竪穴建物群から多量の鉄滓、鍛造剥片に加えて轆の羽口や炉壁が出土していることから、竪穴建物の工房としての利用、鑄造施設が存在が指摘されているが、今調査で検出された竪穴建物0164から鉄滓が出土したことは、上記の想定を補強するものであろう。一方、これらと同一面で検出された柵列、掘立柱建物を構成する柱穴からは細片化した土器類が極少量出土したのみであった。また、竪穴建物0217の南辺壁溝が柵列0513の柱穴0086に切られていた以外に、竪穴建物と柵列あるいは掘立柱建物との切り合い関係が認められなかった。これらのことから、今回検出した竪穴建物群と柵列、掘立柱建物の間に明確な時期差を確認できたとはいえず、両者が併存していた可能性を否定することはできない。一方で、建物としてまとまらない柱穴の中に、8世紀初頭の遺物を埋土中に包含するものがあることから、竪穴建物群との時期差を想定することができるが、これらの柱穴以外に明確な8世紀の遺構を確認することはできなかった。また、溝0145は埋土内に鎌倉時代の所産と考えられる土器類、瓦が包含されており、当該期における調査地の土地利用が行われていたことを示唆するが、詳細は不明である。当遺構は第3面で検出されたが、他に鎌倉時代の遺構は検出されなかった。また、第3面直上に堆積する第2層は15世紀後半から16世紀前葉の遺物を包含する包含層であることから、溝0145の本来の切り込み面である鎌倉時代の遺構面は第2層堆積以前、あるいは堆積時に削平されたと考えられる。

第2-2面では堀状遺構である濠0039をはじめ、15世紀後半から16世紀前葉の遺物を埋土に包含する遺構が検出された。濠0039は、幅1.8m～2.2m、検出面からの深さ0.9m～1.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は礫を多量に含み、水流の痕跡は確認できず、瓦塼類、土師器、瓦質土器、陶磁器などが包含されていた。堀状遺構は、今回調査区から西に約25m地点で1977年に実施された調査（図5・表1-14）、今回調査地から北西約250mに位置する烏丸中学校校地内で1993年に実施された調査（図5・表1-25）、南西約240mに位置する旧京都市染色試験場において2011年に実施された調査（図5・表1-33）でも検出されている。1977年の調査では、幅約3.5m、深さ2.0m～3.0mを測る東西方向の溝（SD7）が検出され、時期は室町時代末とされる。烏丸中学校の調査では5条の堀状遺構が検出されており、報告書によれば、それらの規模は幅1.8m～3.5m、深さ1.2m～2.0mを測る。それらのうち、調査区南端部で検出された東西方向の溝140は断面形が逆台形で、ほぼ平坦な底部形状を呈する。また、これらの埋土は礫を多く含み締まりが悪く、15世紀末～16世紀半ばの遺物を包含していたとされる。旧京都市染色試験

場での調査では、斜め方向の溝 3、溝 2000、南北方向の溝 650 などが検出されている。溝 3 は幅約 4.0 m、深さ 1.5 m、底部幅約 2.0 m、溝 2000 は幅 1.7 m 以上、深さ 1.0 m、溝 650 は幅約 3.5 m、深さ 1.2 m～2.2 m を測る。いずれも逆台形の断面形を呈し、水流の痕跡はなく、室町時代末に埋められたとされる。これらの溝には、今回検出された濠 0039 に比して大規模なものも含まれるが、断面形が逆台形を呈し、水流の痕跡が認められず、埋土中に 15 世紀末～16 世紀代の遺物が包含されるなどの類似点が認められる。上京地域においては、応仁の乱以降、防御施設として「構」が構築されるが、天文法華の乱の際にも堀が造られる。相国寺においても、『鹿苑日録』天文五（1536）年六月十六日条に「十六日。早天送實人夫八員而持之。一員来云々。三員自当院遣之。東門前堀構調之云々。」と見えることから、東門に「堀」が造られたことが判る。このことから、今回検出した濠 0039 や周辺の調査で検出されている溝は、相国寺の境内や周辺に構築された防御用の堀である可能性が考えられる。

第 2－1 面では礎石建物 0508 と溝 0041、複数の瓦溜りを検出した。溝 0041 および瓦溜りからは、軒瓦、道具瓦を含む多量の瓦と塼を主体として、少量ながら 16 世紀後半～末に属すると考えられる土器類が出土した。溝 0041 は礎石建物 0508 の北に位置し、建物の北辺柱列との位置関係から、建物に伴う遺構である可能性が高い。また、当該建物の柱穴および溝 0041 は、濠 0039 の南肩を切って堆積する第 1 層上から切り込まれている。このことから、礎石建物 0508 および溝 0041 の成立時期は、濠 0039 埋没後の 16 世紀前葉以降と考えられる。くわえて、溝 0041 や瓦溜り群から出土した瓦塼類について、礎石建物 0508 の屋根に葺き上げられていたものが建物廃絶時に投棄されたものと想定すれば、瓦塼類とともに出土した土器類から、当該建物は 16 世紀末には廃絶したと考えられる。以上のことから、礎石建物 0508 の存続期間は 16 世紀前葉以降から 16 世紀末と想定される。また、調査地が天正年間（1573～1592）の開基とされる劫外軒の敷地内に相当することから、礎石建物 0508 は劫外軒に関わる建物である可能性がある。ただし、瓦塼類について、NM 1 と NH 1 が創建期の組み合わせと考えられるが、軒丸瓦の瓦当文様および製作技法に 15 世紀の要素を備え、軒平瓦は掛け瓦が主体で 15 世紀後半の要素が認められることから、瓦の再利用あるいは既存建物の移築等の可能性が考えられる。

第 1 層では近代以降に構築された禁裏御用水遺構（溝 0001）を検出し、その直下で検出した素掘溝からは幕末の所産と考えられる土師器片が少量出土した。

以上のように調査地では、平安京造営以前の 7 世紀後半には堅穴建物群が存在し、南接する承天閣美術館増築地点で検出された堅穴建物群とともに集落を形成していたと考えられる。集落は、一部の柱穴から 8 世紀初頭に属する遺物が出土していることから、8 世紀代においても存続していたことが推測される。また、今回の調査では平安時代の遺構、遺物が確認されなかったが、承天閣美術館増築地点での調査では 9 世紀後半代の緑釉陶器が出土していることから、その時期には調査地周辺に土地開発が及んでいたことが想定される。鎌倉時代の遺構としては溝 0145 を確認したのみで、調査地における土地利用を想起させるが、詳細については判然としない。その後、14 世紀末に相国寺が創建され、調査地はその境内に取り込まれるが、当該時期に比定される遺構

や遺物は検出されなかった。15 世紀後半に至って調査地における土地利用が活発になり、防御用の堀と考えられる濠 0039 が開削され、16 世紀前葉には埋められる。濠 0039 が埋められた後には礎石建物 0508 が造営されるが、16 世紀末には廃絶する。16 世紀後半に劫外軒が開基され、調査地が敷地内に取り込まれることから、礎石建物 0508 は劫外軒に属するものであった可能性が考えられる。江戸時代の遺構が検出されなかったため、調査地における当該期の状況は不明といわざるを得ない。その後、明治六（1873）年に劫外軒が廃絶し、昭和初期に成安女子学園が当地に移転、数度の校舎改築や建て替えを経て現在に至っていると考えられる。禁裏御用水については、石組み溝直下の素掘溝埋土から江戸時代末期から明治初期の所産と考えられる遺物が極少量ながら出土していることから、江戸時代末には開削されていた可能性が考えられる。石組み溝については、埋土内の遺物から明治期に構築され、昭和十年代に埋没したのと考えられる。

2 禁裏御用水について

禁裏御用水は、賀茂川を水源として愛宕郡小山郷から相国寺境内を経て禁裏へと至る流れを指す。この水路の成立時期に関しては判然としないが、『鹿苑日録』明応八（1499）年三月二十二日条に、「内裡庭池之水近日減少。究之則相国寺南門前石橋下通其水。而石橋之下地高而水不通也。先是水注般若林北。乱中溝壑而一折。通於南之伊勢宅之北。而出于今出川。以入於内裡也。」とあり、「禁裏御用水」という呼称であったかは定かではないものの、相国寺南門前の石橋の下を通過して禁裏の池に注ぐ水路が存在していたことが判る。また、天明三（1783）年に出版された『天明改正 細見京繪圖』には、小山郷で賀茂川から取水され相国寺境内を経て禁裏へ至る水路が描かれ、「御用水」の書き込みが認められることから、少なくとも天明年間には上記のルートを通る水路が敷設されており、「御用水」と呼ばれていたと考えられる。今回の調査において、石組み溝直下から素掘溝を検出し、その埋土中に極少量とはいえ 19 世紀中頃の所産と考えられる土師器皿が包含されていたことは、江戸時代末において素掘りの禁裏御用水が敷設されており、明治期にそれを改修する形で石組み溝が構築されたことを示唆する。その後、明治二十三（1890）年に琵琶湖疏水分線が開通後には疏水分線からも水が流入するようになったが、上流での田畑への灌漑利用や水路からの漏水が激しく、十分な給水が確保できなかったため、琵琶湖疏水を直接御所へ給水する御所水道が計画され、明治四十五（1912）年に完成した。その結果、疏水分線からの給水は廃止されたが、相国寺境内の御用水は昭和十（1935）年頃まで流れていたとされる。また、調査地においては明治六（1873）年の劫外軒廃絶後、大正十五（1926）年に成安女子学園が相国寺から土地を賃借して昭和二（1927）年に当地へ移転しているが、『京都成安女子学園六〇年史』所収の大正十五（1926）年の「相国寺境内地賃貸地図」に禁裏御用水が描かれていることから、明治四十五年に御所水道が完成し、禁裏御用水が廃止された後も水路自体は開口した状態で残されていたのと考えられる。しかし、同史料に収録されている昭和十三（1938）年頃の校舎新築後の学園配置図には禁裏御用水の記載はなく、当該地には校舎の付属屋が建てられている。これらのことから、昭和二年の成安女子学園相国寺学舎内においては禁裏御用水が遺存していたが、昭

和十三年頃の校舎新築に伴って埋め立てられたと考えられる。今回の調査で検出した石組み溝内から昭和十年代以前の遺物が多量に出土したことに対し、戦後の遺物が含まれていなかったことは、上記の想定を裏付けるものであろう。また、昭和五十（1975）年の調査地周辺の航空写真では今調査に先立って解体された体育館は未だ建設されていないが、昭和五十七（1982）年の調査地周辺の航空写真では、上記の体育館が建ち、調査区を設定した場所はグラウンドになっていることを確認することができる。体育館が建設され、グラウンドが整備された際に石組み溝の上半が破壊されるとともに、完全に埋没したものと考えられる。すなわち、昭和十三年頃から昭和五十年代前半までの期間は、今回検出した石組み溝は埋め立てられてはいたものの、その名残を地表面上で確認することができたものと考えられる。

参考文献

- 松下倫子ほか「水みちの通水システムからみる園池形態 - 禁裏御用水を対象として -」『景観・デザイン研究講演集 No.3』 2007
- 林倫子ほか「禁裏御用水の構成と周辺園池との関係」『土木学会論文集 D vol.65 No.2』 2009
- 小野芳郎「水環境と都市 - 千年の都・京都 -」『ベース設計資料 No.179 建築編（後）』 2018
- 京都成安女子学園六〇年史編集委員会『京都成安女子学園六〇年史』 京都成安女子学園 1987

表 4 遺物観察表

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	備考
1	磁器	蓋	1	P9	溝 0001	11.0	5.0	3.6	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰白色	
2	印判磁器	皿	1	P9	溝 0001	11.0	6.4	2.4	(釉) 緑色 (胎) N8/0 灰白色	
3	印判磁器	湯呑	1	P9	溝 0001	6.8	3.0	4.9	(釉) 黒・金色 (胎) N8/0 灰白色	
4	染付	湯呑	1	P-7・8	溝 0001	8.3	3.0	4.7	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰白色	
5	染付	鉢	1	P9	溝 0001	10.6	4.2	5.4	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰白色	
6	染付	鉢	1	P-7・8	溝 0001	10.1	4.4	4.3	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰白色	
7	色絵付け磁器	花瓶	1	P-7・8	溝 0001	1.5	3.4	13.6	(釉) N9/0 白色～10R4/6 赤色 ～5PB5/1 青灰色 (胎) N9/0 白色	
8	施釉陶器	湯呑	1	P9	溝 0001	7.5	3.8	5.6	(釉) N9/0 白色～5YR4/4 にぶ い赤褐色 (胎) 10YR7/2 にぶい黄橙色	
9	施釉陶器	花瓶	1	P9	溝 0001	5.5	4.0	7.7	(釉) 10YR6/8 明黄褐色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	
10	施釉陶器	水差し	1	P-10・11	溝 0001	長 8.1	幅 4.4	高 4.4	(釉) 緑灰色 (胎) N8/0 灰白色	
11	無釉陶器	仏具	1	P-6・7	溝 0001	2.8	5.4	8.2	2.5Y7/2 灰黄色	
12	ガラス製品	ビー玉	1	P9	溝 0001	径 2.8	-	-		
13	獣骨製品	ヘラ	1	P9	溝 0001	長 13.8	幅 2.4	厚 0.7		重さ 17.6g。
14	施釉陶器	壺	1	P-7・8	溝 0001 掘方	6.1	5.4	5.7	(釉) 5YR3/2 暗赤褐色 (胎) 2.5Y6/3 にぶい黄色	
15	土師器	皿	1	P7	溝 0001 素掘溝	4.9	-	0.9	7.5YR7/4 にぶい橙色	
16	焼締陶器	擂鉢	1	P7	溝 0001 素掘溝	-	13.0	8.6	5YR5/4 にぶい赤褐色	
17	施釉陶器	仏具	1	P10	溝 0001 素掘溝	3.4	4.2	3.7	(釉) 10YR6/3 にぶい黄橙色 (胎) 10YR8/4 浅黄橙色	
18	瓦質土器	鍋	1	K8	柱穴 0089	24.2	-	(7.1)	2.5Y5/1 黄灰色	礎石建物 0508 柱穴。
19	瓦	軒丸瓦	1	K7	溝 0041	瓦当径 15.2	長 33.7	-	N4/0 灰色	NM1a
20	瓦	軒丸瓦	1	M-7・8	溝 0041	瓦当径 15.3	長 32.7	-	N4/0 灰色	NM1b
21	瓦	軒丸瓦	1	I-7・8	溝 0041	瓦当径 (7.8)	長 (12.1)	-	N4/0 灰色	NM1c
22	瓦	軒丸瓦	1	L-7・8	溝 0041	瓦当径 15.2	長 (10.9)	-	N4/0 灰色	NM2 瓦当端面上部に 「回」の刻印有。
23	瓦	軒丸瓦	1	O-8・9	溝 0041	瓦当 16.0	長 3.0	-	5Y6/1 灰色	NM3
24	瓦	軒丸瓦	1	O-7・8	溝 0041	-	長 (3.7)	-	2.5Y5/2 暗灰黄色	NM4
25	瓦	軒丸瓦	1	M-7・8	溝 0041	瓦当 16.0	長 (7.4)	-	N5/0 灰色	NM5
26	瓦	軒丸瓦	1	O-7・8	溝 0041	-	長 (4.1)	-	7.5YR5/4 にぶい褐色	NM6
27	瓦	軒丸瓦	1	N-7・8	溝 0041	瓦当 16.0	長 (4.4)	-	10YR6/1 褐灰色	NM7
28	瓦	軒丸瓦	1	N-7・8	溝 0041	瓦当 17.0	長 (3.5)	-	N4/0 灰色	NM8
29	瓦	軒平瓦	1	K7	溝 0041	瓦当幅 24.0	長 (20.8)	瓦当厚 4.6	N3/0 暗灰色	NH1a
30	瓦	軒平瓦	1	J・K-7・8	溝 0041	瓦当幅 (22.8)	長 (13.1)	瓦当厚 4.8	2.5Y6/1 黄灰色	NH1b
31	瓦	軒平瓦	1	L-7・8	溝 0041	瓦当幅 (22.6)	長 24.7	瓦当厚 (4.6)	N4/0 灰色	NH1c
32	瓦	軒平瓦	1	N-7・8	溝 0041	瓦当幅 23.4	長 (12.4)	瓦当厚 3.9	N5/0 灰色	NH2
33	瓦	軒平瓦	1	L-7・8	溝 0041	瓦当幅 23.3	長 (9.3)	瓦当厚 4.9	N4/0 灰色	NH3
34	瓦	軒平瓦	1	J・K-7・8	溝 0041	瓦当幅 (16.8)	長 (11.8)	瓦当厚 4.9	N4/0 灰色	NH3
35	瓦	軒平瓦	1	O-8・9	溝 0041	瓦当幅 (13.4)	長 (5.9)	瓦当厚 4.8	5Y7/1 灰白色	NH4
36	瓦	軒平瓦	1	N-7・8	溝 0041	瓦当幅 (5.8)	長 (4.3)	瓦当厚 5.0	2.5Y6/1 黄灰色	NH5
37	瓦	平瓦	1	M7	溝 0041	幅 23.3～ 21.3	長 28.0	厚 1.7	N5/0 灰色	

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	備考
38	瓦	平瓦	1	M7	溝 0041	幅 19.0 ～ 22.5	長 (27.4)	厚 1.7	N4/0 灰色	
39	瓦	丸瓦	1	J・K-7・ 8	溝 0041	幅 13.8	長 31.0	厚 2.3	N3/0 暗灰色	
40	瓦	鬼瓦	1	M・N-7・ 8	溝 0041	幅 (8.0)	長 (10.2)	厚 (6.7)	N3/0 暗灰色	
41	瓦	鬼瓦	1	M-7・8	溝 0041	幅 (13.5)	長 (23.2)	厚 (6.2)	2.5Y6/2 灰黄色	
42	瓦	鬼瓦	1	M・N-7・ 8	溝 0041	幅 (9.2)	長 (11.4)	厚 (5.2)	N4/0 灰色	
43	瓦	鬼瓦	1	I-6・7	溝 0041	幅 (10.4)	長 (10.3)	厚 (8.9)	N5/0 灰色	
44	瓦	谷丸瓦	1	I-7・8	溝 0041	幅 14.9	長 (20.2)	厚 2.6	N4/0 灰色	
45	瓦	切隅瓦	1	M・N-7・ 8	溝 0041	幅 (8.7)	長 (17.3)	厚 2.3	N7/0 灰色	
46	瓦	螭羽瓦	1	H・I-7・ 8	溝 0041	幅 (8.1)	長 (14.7)	厚 1.9	N4/0 灰色	
47	瓦	道具瓦	1	N-7・8	溝 0041	幅 9.7	長 (22.7)	厚 4.6	N3/0 暗灰色	
48	瓦	道具瓦	1	N-7・8	溝 0041	幅 (14.7)	長 (19.0)	厚 2.4	N4/0 灰色	
49	瓦	埴	1	O-8・9	溝 0041	幅 (17.0)	長 (16.2)	厚 5.1	N4/0 灰色	
50	瓦	埴	1	O-8・9	溝 0041	幅 (13.2)	長 (15.2)	厚 4.5	2.5Y6/2 灰黄色	
51	灰釉陶器	碗	1	M7	溝 0041	-	7.0	(2.4)	2.5Y7/2 灰黄色	底面墨書有。
52	土師器	皿	1	S-13・14	溝 0124	11.5	-	2.1	7.5YR8/4 浅黄橙色	
53	瓦	軒平瓦	1	S-13・14	溝 0124	瓦当幅 (14.2)	長 (12.8)	瓦当厚 4.2	N6/0 灰白色	
54	土師器	皿	1	D-6・7	瓦溜り 0018	-	-	(3.0)	7.5Y8/4 浅黄橙色	
55	土師器	皿	1	C・D-7	瓦溜り 0016	8.6	-	1.6	10YR8/3 浅黄橙色	
56	土師器	皿	1	C7	瓦溜り 0014	9.0	-	1.5	10YR8/3 浅黄橙色	
57	焼締陶器	播鉢	1	C-11・12	瓦溜り 0075	26.0	-	(6.9)	5YR4/3 にぶい赤褐色～ 10YR5/3 にぶい黄橙色	
58	瓦	平瓦	1	C-11・12	瓦溜り 0075	幅 (11.3)	長 (11.5)	厚 2.5	2.5Y6/2 灰黄色	刻印有。
59	瓦	道具瓦	1	C7	瓦溜り 0014	幅 (14.5)	長 (22.0)	厚 6.7	N4/0 灰色	
60	瓦	埴	1	D-6・7	瓦溜り 0018	幅 31.8	長 31.4	厚 5.2	2.5Y6/2 灰黄色	
61	石製品		1	L12	柱穴 0047	長軸 (2.3)	短軸 1.4	厚 1.2		重さ 4.5g。 水晶製。
62	土師器	皿	1	H10	柱穴 0092	12.0	-	(2.3)	7.5Y8/3 浅黄橙色	
63	瓦質土器	鍋	1	H10	柱穴 0092	22.8	-	(3.4)	2.5Y8/1 灰白色～2.5Y2/1 黒色	
64	土師器	皿	1	N10	第 1 層	9.8	-	1.8	7.5YR7/6 橙色	
65	石製品	石帯	1	F～H-2 ～5	第 1 層	長軸 3.8	短軸 (3.6)	厚 0.8		重さ 20.6g。
66	土師器	皿	1	K6	濠 0039	11.0	-	2.0	10YR8/3 浅黄橙色	
67	土師器	皿	1	K6	濠 0039	7.0	-	1.5	10YR8/2 灰白色	
68	土師器	皿	1	O6	濠 0039	10.9	-	2.2	7.5YR8/4 浅黄橙色	
69	土師器	皿	1	M6	濠 0039	15.0	-	(3.2)	10YR8/3 浅黄橙色	
70	土師器	皿	1	M6	濠 0039	15.8	-	3.1	7.5YR8/3 浅黄橙色	
71	古瀬戸	平碗	1	M6	濠 0039	15.0	-	7.0	(釉)7.5Y7/2 灰白色 (胎)10YR7/3 にぶい黄橙色	
72	古瀬戸	碗	1	M6	濠 0039	16.8	-	(6.2)	(釉)5Y6/4 オリーブ黄色 (胎)2.5Y8/3 淡黄色	
73	瓦質土器	火鉢	1	O・P-6	濠 0039	19.8	16.0	11.0	N5/0 灰色	
74	瓦質土器	火鉢	1	M6	濠 0039	36.0	29.0	13.1	N3/0 暗灰色	
75	瓦質土器	羽釜	1	N6	濠 0039	26.4	-	(8.7)	10YR6/3 にぶい黄橙色	
76	瓦	軒丸瓦	1	M6	濠 0039	瓦当径 10.0	長 (2.3)	-	2.5Y7/1 灰白色	

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	備考
77	瓦	埴	1	I・J-6	濠 0039	厚 3.9	長 26.4	幅 20.4	N4/0 灰色	
78	土師器	皿	1	H5	溝 0275	11.4	-	1.9	10YR7/3 にぶい黄橙色	
79	土師器	皿	1	H4・5	溝 0275	-	-	(2.3)	10YR8/4 浅黄橙色	
80	青磁	碗	1	H4・5	溝 0275	15.0	5.0	6.3	(釉) 2.5GY6/1 オリーブ灰色 (胎) 2.5Y8/1 灰白色	輸入品。
81	土師器	皿	1	F・G-10	井戸 0250	11.2	-	(2.2)	7.5YR8/3 浅黄橙色	
82	土師器	皿	1	F・G-9・ 10	井戸 0250 枠内	13.2	-	2.2	10YR8/3 浅黄橙色	
83	銭貨		1	G9	土坑墓 0335	径 2.5	厚 0.14	-		四枚固着して出土。重さ 10.9g。 銭種は判読不能。
84	銭貨	元祐通寶	1	G9	土坑墓 0335	径 2.5	厚 0.19	-		重さ 4.1g。
85	銭貨		1	G9	土坑墓 0335	径 (2.5)	厚 0.14	-		重さ 2.7g。 銭種は判読不能。
86	白磁	碗	1	O9	柱穴 0325	8.0	3.0	3.2	(釉) うすい明青灰色 (胎) N8/0 灰白色	
87	瓦質土器	壺	1	D10	ピット 0338	5.9	-	(5.2)	N4/0 灰色	
88	瓦	軒丸瓦	1	R・S-13・ 14	土坑 0128	瓦当径 18.0	-	-	10Y5/1 灰色	
89	瓦	軒平瓦	1	R・S-13・ 14	土坑 0128	瓦当幅 26.1	長 (27.1)	瓦当厚 4.2	10Y5/1 灰色	
90	瓦	鬼瓦	1	R・S-13・ 14	土坑 0321	幅 (14.1)	長 (20.6)	厚 5.4	N4/0 灰色	
91	土師器	皿	1	H10	第2層	8.8	-	2.2	7.5YR7/6 橙色	
92	土師器	皿	1	H5	第2層	10.7	-	(2.8)	7.5YR8/4 浅黄橙色	
93	土師器	皿	1	E・F-12・ 13	第2層	12.8	-	(2.8)	10YR8/2 灰白色	
94	土師器	皿	1	H8	第2層	9.8	-	2.0	5YR7/6 橙色	
95	土師器	皿	1	G12	第2層	10.8	-	2.2	7.5YR7/6 橙色	
96	土師器	皿	1	H5	第2層	11.7	-	2.7	7.5YR8/4 浅黄橙色	
97	土師器	鍋	1	M3	第2層	27.8	-	(1.8)	10YR8/2 灰白色	
98	瓦質土器	羽釜	1	F11	第2層	21.4	-	(4.6)	N4/0 灰色	
99	鉄釉陶器	天目碗	1	O5	第2層	9.8	-	(4.5)	(釉) 5YR4/3 にぶい赤褐色～ 5YR1.7/1 黒色 (胎) 10YR7/3 にぶい黄橙色	
100	瀬戸美濃	天目碗	1	G11	第2層	15.8	-	(4.9)	(釉) 2.5Y6/4 にぶい黄色 (胎) 10YR7/3 にぶい黄橙色	
101	瀬戸美濃	香炉	1	F・G-8・ E12	第2層	7.4	-	(3.3)	(釉) 5Y5/3 灰オリーブ色 (胎) N5/0 ～ N4/0 灰色	
102	瀬戸美濃	水滴	1	-	第2層	6.4	-	(3.3)	2.5Y7/1 灰白色	
103	輸入陶器	盤	1	H5	第2層	20.2	-	(2.8)	(釉) 10YR6/3 にぶい黄橙色 (胎) 10YR6/3 にぶい黄橙色	産地不明。
104	焼締陶器	鉢	1	G12	第2層	38.8	-	(8.6)	2.5Y6/1 黄灰色	産地不明。
105	白磁	皿	1	G12	第2層	10.1	5.8	2.0	(釉) 5Y8/2 灰白色 (胎) 2.5Y8/3 淡黄色	
106	土師器	皿	1	G12	溝 0145	8.4	-	1.1	7.5YR7/4 にぶい橙色	
107	土師器	皿	1	G12	溝 0145	8.9	-	1.0	7.5YR8/4 浅黄橙色	
108	土師器	皿	1	G12	溝 0145	8.2	-	1.6	7.5YR8/4 浅黄橙色	
109	土師器	皿	1	G-6 ～ 8	溝 0145	7.2	-	1.8	2.5Y8/1 灰白色	
110	土師器	皿	1	G-6 ～ 8	溝 0145	12.1	-	2.3	2.5Y8/1 灰白色	
111	土師器	羽釜	1	G12	溝 0145	18.5	-	5.6	7.5YR8/3 浅黄橙色	
112	瓦質土器	鍋	1	G9	溝 0145	22.0	-	5.5	(内) 5Y6/1 灰色 (外) 5Y2/1 黒色	
113	瓦	軒丸瓦	1	J-2・3	溝 0145	瓦当径 11.0	長 (5.2)	-	2.5Y6/2 灰黄色	
114	瓦	軒平瓦	1	G-6 ～ 8	溝 0145	瓦当幅 (8.4)	-	瓦当厚 3.5	N4/0 灰色	

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	備考
115	須恵器	蓋	1	O5	竪穴建物 0164	9.3	-	(1.7)	N7/0 灰白色	
116	土師器	甕	1	O6	竪穴建物 0164 床直	22.5	-	(8.2)	7.5YR7/4 に近い橙色	
117	土師器	長胴甕	1	O・P-5	竪穴建物 0164 竈部分	23.2	-	38.2	5YR6/6 橙色	
118	土師器	長胴甕	1	O・P-5	竪穴建物 0164 竈部分	22.6	-	口縁部 (3.4) 胴部 (34.6)	7.5YR6/6 橙色	
119	土師器	壺	1	L9	竪穴建物 0218 床直	13.9	-	(9.4)	7.5YR6/6 橙色	
120	土師器	壺	1	L-8・9	竪穴建物 0218	9.8	-	10.3	7.5YR6/4 に近い橙色	
121	土師器	甕	1	L9	竪穴建物 0218 周溝	22.3	-	(11.2)	10YR7/4 に近い黄橙色	
122	土師器	長胴甕	1	L9	竪穴建物 0218 床直	26.4	-	(26.6)	7.5YR6/6 橙色	
123	須恵器	杯	1	L・M-8・ 9	竪穴建物 0218 床直	10.2	4.7	4.1	2.5Y7/2 灰黄色	
124	土師器	鉢	1	L5	竪穴建物 0219	26.8	-	10.5	10YR7/4 に近い黄橙色	
125	土師器	壺	1	M5	竪穴建物 0219	9.8	-	10.6	10YR7/4 に近い黄橙色	
126	土師器	把手付甕	1	L5	竪穴建物 0219	30.6	-	(17.2)	5YR6/8 橙色	
127	土師器	甕	1	M5	竪穴建物 0219 床直	21.8	-	(17.4)	7.5YR7/6 橙色	
128	須恵器	杯	1	M5	竪穴建物 0219	10.8	-	3.7	2.5Y7/1 灰白色	
129	須恵器	杯	1	M5	竪穴建物 0219	11.0	-	3.9	2.5Y7/1 灰白色	
130	須恵器	杯	1	M5	竪穴建物 0219	10.8	-	4.0	2.5Y7/1 灰白色	
131	土師器	杯	1	K3	竪穴建物 0363	10.2	-	3.4	5YR6/6 橙色	
132	土師器	鍋	1	K3	竪穴建物 0363	18.8	-	(11.9)	7.5YR7/6 橙色	
133	須恵器	蓋	1	C・D-7・ 8	竪穴建物 0389 床直	7.9	-	2.8	N6/0 灰色	
134	須恵器	蓋	1	D8	竪穴建物 0389	10.1	-	2.5	2.5Y7/1 灰白色	
135	須恵器	杯	1	C8	竪穴建物 0389	9.1	-	3.4	N5/0 灰色	
136	須恵器	杯	1	J12	柱穴 0225	11.8	-	3.7	5Y6/1 灰色	
137	須恵器	高杯	1	J12	柱穴 0225	-	-	(4.9)	7.5Y8/1 灰白色	
138	土師器	皿	1	I3	柱穴 0351	16.8	-	2.8	7.5YR8/4 浅黄橙色	
139	土師器	把手付甕	1	L5	柱穴 0373	-	-	(20.2)	10YR8/3 浅黄橙色	
140	須恵器	杯	1	Q3	柱穴 0383	12.2	-	3.3	N7/0 灰白色	
141	須恵器	杯	1	L・M-13	柱穴 0439	-	4.2	(1.8)	10GY5/1 緑灰色	掘立柱建物 0515 柱穴。
142	土師器	鉢	1	K・L-9	土坑 0414	29.9	-	(11.1)	7.5YR7/6 橙色	
143	土師器	甕	1	K・L-9	土坑 0414	26.6	-	(8.1)	7.5YR7/6 橙色	
144	須恵器	杯	1	L8	土坑 0414	10.0	-	3.7	N6/0 灰色	
145	土師器	甕	1	O5	柱穴 0466	23.6	-	(9.8)	7.5YR7/4 に近い橙色	

附章

1. 禁裏御用水出土のガラス瓶について

田邊 貴教（株式会社文化財サービス）

今回の調査で確認された禁裏御用水（石組み溝0001）内からは多数のガラス瓶が出土した。ガラス瓶は種類に富み当時の生活の様子を伺うことができる。

まず、禁裏御用水の存続時期については、「京都成安女子学園六〇年史」によれば、大正15年の相国寺境内地賃貸地図に禁裏御用水が図面に描かれている。また、「京都成安女子学園 学園誌」の昭和4年の写真にも禁裏御用水と思われる水路が写っている。

しかし、「京都成安女子学園六〇年史」収録の昭和13年頃の校舎新築後の学園配置図には禁裏御用水の記載はなく、禁裏御用水の位置に付属屋が建てられている。同資料の昭和29年学園施設配置図、同年の航空写真にも禁裏御用水らしきものが確認できないことから、昭和13年の校舎新築時に学園敷地内の禁裏御用水は不燃物ゴミとともに埋め立てられたと思われる。

出土ガラス製品は、禁裏御用水の存続時期や、戦後の特徴である計量法に基づく内容量表記・「正」銘マーク・底面ナーリング加工・ACL印刷瓶などをもつ製品が見られないことから、昭和13年以前のものと考えられる。

禁裏御用水の埋土から出土したガラス瓶は総数60点で、種類別内訳は飲料用8（図3-1）・文房具8（図4-1）・化粧品31（図5-1）・医薬品11（図7-1）・食料品1（図8）・不明1（図9-1）で、化粧品が全体の半数を占める。（図1）

用途別内訳としては飲料用が清酒瓶2・牛乳瓶2・サイダー瓶1・ニッキ水瓶3。文房具が糊瓶4・インク瓶4。化粧品が化粧水瓶7・化粧クリーム瓶18・染料瓶2・整髪料瓶1・椿油瓶3。医薬品がアンプル1・目薬瓶2・小型薬瓶8。食料品が瓶詰瓶1。その他のものとして不明1となっている。（図2）

清酒瓶は4合瓶（No.1）と1合瓶（No.2）がある。色調はいずれも青色系透明で、底部はキック・アップ（上げ底）である。4合瓶は機械栓である。1合瓶はコルク栓だったと思われる。

牛乳瓶は森田牧場（No.3）と学生労働会（No.4）がある。色調はいずれも無色透明。森田牧場の牛乳瓶には表面に「蒸湯消毒全乳」「森田牧場」のエンボス（図3-2-1）が、側面に森田牧場の電話番号と直配達部の電話番号のエンボスがある。（図3-2-2）また「非賣器」のエンボスもあり、本来は販売元へ返却するリターナブル瓶だが、口が破損しているため返却できずに破棄されたものと思われる。学生労働会の牛乳瓶は瓶表面に「全乳」「學生労働會」のエンボスがある（図3-3）。首が欠損している。

清涼飲料水の瓶はサイダー瓶とニッキ水がある。サイダー瓶（No.5）は、別府鉾泉株式会社が製造販売した金色ポートで、側面に「金色」（図3-4-1）「別府鉾泉株式会社」（図3-4-2）の

エンボスがある。色調は濃緑色系透明である。底部のみの破片でメーカー不明ではあるが、同じサイダー瓶と思われるものも1点出土している。ニッキ水瓶は瓢箪（No.6）と瓶型（No.7・8）がある。色調はいずれも無色透明。No.7の瓶には「二九水」のエンボスがある。（図3-5）駄菓子屋で販売されていた使い捨ての小型のものであり、小規模な町工場で生産されたためか全体的に製品の質が悪い。

糊瓶は楕円形の円筒型（No.9）と円筒型（No.10・11・12）があり、楕円形の糊瓶の底面には不易糊工業を表す「フエキ」のエンボスがある。（図4-2）円筒型の糊瓶はスクリュウ蓋である。色調はいずれも青色系透明である。

インク瓶はプラトンインキ（No.13）、ABCインキ（No.14）、WAILNMAN INK（No.15）、サンエスインキ（No.16）がある。プラトンインキは側面にラベルが残っており、「PLATON INK」の文字が確認できる。（図4-3-1）底面には商標マークの六芒星にPBのエンボスがある。（図4-3-2）ABCインキは肩部に「ABC・INK」のエンボスがある。（図4-4）WAILNMAN INKは底面に「WAILNMAN INK」肩部に「4 OZ.」の容量表記（オンス）のエンボスがある。（図4-5）サンエスインキは底面に商標マークの「SSS」のエンボスがある。（図4-6）サイズには大きな差があり、底部径で最小がプラトンインキの3cm、最大がWAILNMAN INKの6.7cmである。色調はサンエスインキが青色系透明で、それ以外は無色透明である。

化粧水瓶は角型（No.17・23）、花卉状の陽刻のある扁平型（No.18）、楕円扁平型（No.19）、鈴虫香油（No.20）、ホーカー液（No.21）、小型瓶（No.22）がある。鈴虫香油（島村商店）（図5-2）とホーカー液（堀越商会）（図5-3-1・2）は同名のエンボスが側面にあり、小型瓶には「Letran」のエンボスがある。（図5-4）色調はいずれも無色透明である。

化粧クリーム瓶はテルミー化粧品（No.24・25）、ウテナクリーム（No.26・27・28）、カガシクリーム（No.29・30・31）、丸善（No.41）、その他不明（No.32～40）がある。テルミー化粧品は底部側面に「TELL ME」（図5-5-1）、底面に「意匠登録」のエンボスがある（図5-5-2）。ウテナクリームはいずれも底部にウテナクリームの商標マークのエンボスがある。（図6-1）カガシクリームは底面に「カガシ」のエンボスがあるもの（図6-2）と、商標マークと「カガシ」のエンボスがあるもの（図6-3）の2種類がある。カガシクリームは丸善化粧品部の商品である。同じ丸善化粧品部の商品として、No.41のクリーム瓶は、底面に「丸善」のエンボスがある。（図6-4）

不明の化粧クリーム瓶のうち、No.32の瓶には底面に「REG DESIGN No.41651」のエンボスがあるが、商標番号を示したものである。No.33の瓶は底面にアルファベットのエンボスがあるが、「LE」以外は摩滅がひどく判読不可である。No.34から40の瓶はエンボス等はなくメーカー名等は不明である。出土した化粧クリーム瓶の色調には差があり、乳白色不透明系（No.24～31・33・35・41）、乳白色半透明系（No.32・34・36・37）、黄白色不透明系（No.38）、青色系透明系（No.39・40）に分類される。青色系透明瓶のNo.39と40の瓶は大きさ、形状とも糊瓶とよく似ているが、口部の形状が糊瓶とは異なっていることが分かる。化粧クリーム瓶は、他のガラス製品よりも出土数がとびぬけて多く、女学校としての需要が多かった特徴がよく表れている。

毛染めの染料瓶として、ナイス（No.42）と千草染（No.43）がある。ナイスは側面に「志らが赤毛染 ナイス」のエンボスがあり、（図6－5）千草染は底面に「千草染」のエンボスがある。（図6－6）色調はナイスが青色系透明で、千草染は無色透明である。

整髪料の瓶はメーカー不明のものが1点（No.44）ある。緑色系透明の色調で、セルロイドと思われる蓋が残されている。

椿油瓶は、ミサオ香油（No.45）と、メーカー不明の2点（No.46・47）がある。ミサオ香油の瓶には側面に「最上精製 ミサオ香油」、（図6－7－1）底面に「ミサオ商會徳製」のエンボスがある。（図6－7－2）残り2点は底面にそれぞれ「Y」「一」のエンボスがあるのみで詳細は不明である。ミサオ香油が角瓶で他は丸瓶であり、いずれも色調は無色透明である。

医療用の瓶としては、アンプル（No.48）が1点、目薬瓶（No.49・50）、その他（No.51～58）が8点ある。

アンプルは厚さ1mm程度の薄さで使用済みなのか上部が欠損している。目薬瓶は、ロート目薬（No.49）とスポイト型（No.50）がある。ロート目薬は、表面に「本舗 山田安民」、（図7－2－1）裏面に「ロート目薬」のエンボスがあり、（図7－2－2）付属のスポイトを収めていた凹みがある。スポイト型の目薬はエンボスが無いため詳細は不明だが、小瓶型の目薬瓶より後の昭和6年以降のものである。色調は、ロート目薬は紺色系透明瓶で、スポイト型の目薬は茶色系透明瓶である。

その他の薬瓶は全て10cm以下の小瓶である。形状は丸瓶（No.51・52・57・58）角瓶（No.53・54・56）があり、色調は無色透明（No.53・54・57）青色系透明（No.52・58）緑色系透明（No.56）紺色系透明（No.51）がある。いずれもエンボスは無く、具体的な薬品名等は不明である。それぞれの瓶は製品の質にばらつきがあり、製造元の差だけでなく製造時期にも差がある可能性がある。

食料品の瓶としては瓶詰瓶（No.59）が1点出土している。（図8）広口の瓶で蓋が密閉できるように口縁部に段がついている。色調は青色系透明で、エンボスはないが佃煮瓶だったと思われる。

その他、用途不明の瓶（No.60）が1点出土している。（図9－1）底面に商標マークと「TRADE MARK」のエンボスがある。（図9－2）口の形状から当初は化粧クリーム瓶の可能性も考えたが、化粧クリーム瓶に無色透明の色調を使うことは品質保存の観点からあまり考えにくく、現時点では不明としておきたい。

禁裏御用水出土のガラス瓶の種類別内訳をみると（図1）、化粧品類が全体の52%といった半数を占め、その中でも化粧クリーム瓶が化粧品類の中で半数以上を占める。これら化粧品関係の瓶の割合の多さは、調査地に存在した成安女子学園の女学校という特徴をよく表している。

今回の禁裏御用水の調査で出土したガラス瓶は、当地に存在した成安女子学園の日常を垣間見ることができる成果となった。

参考文献

京都成安女子学園編「学園誌」京都成安女子学園 1959

京都成安女子学園六〇年史編集委員会「京都成安女子学園六〇年史」京都成安女子学園 1987

桜井準也「ガラス瓶の考古学」六一書房 2006

MIHO MUSIUM「和ガラスの心-勾玉からびいどろ・ぎやまんまで-」MIHO MUSIUM 2006

飲料用	8
文房具	8
化粧品	31
医薬品	11
食料品	1
不明	1
計	60

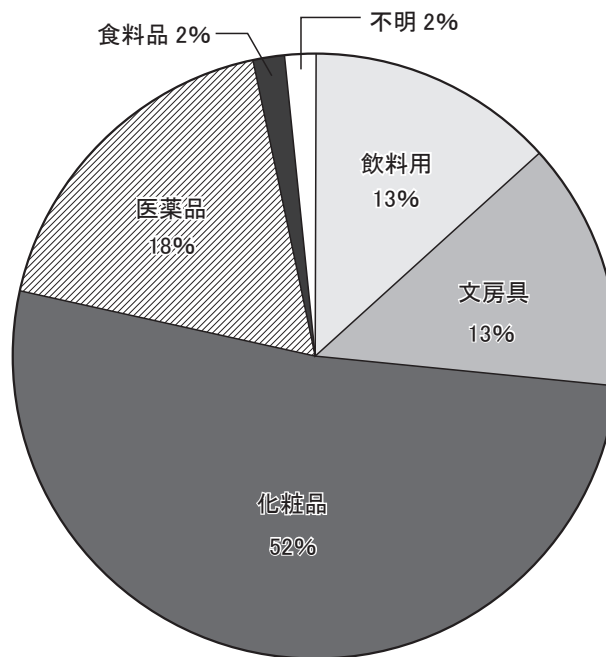


図1 禁裏御用水出土ガラス瓶種類別内訳

清酒瓶	2
牛乳瓶	2
サイダー瓶	1
ニッキ水瓶	3
糊瓶	4
インク瓶	4
化粧水瓶	7
化粧クリーム瓶	18
染料瓶	2
整髪料瓶	1
椿油瓶	3
目薬瓶	2
薬瓶	8
アンプル	1
瓶詰瓶	1
不明	1
計	60

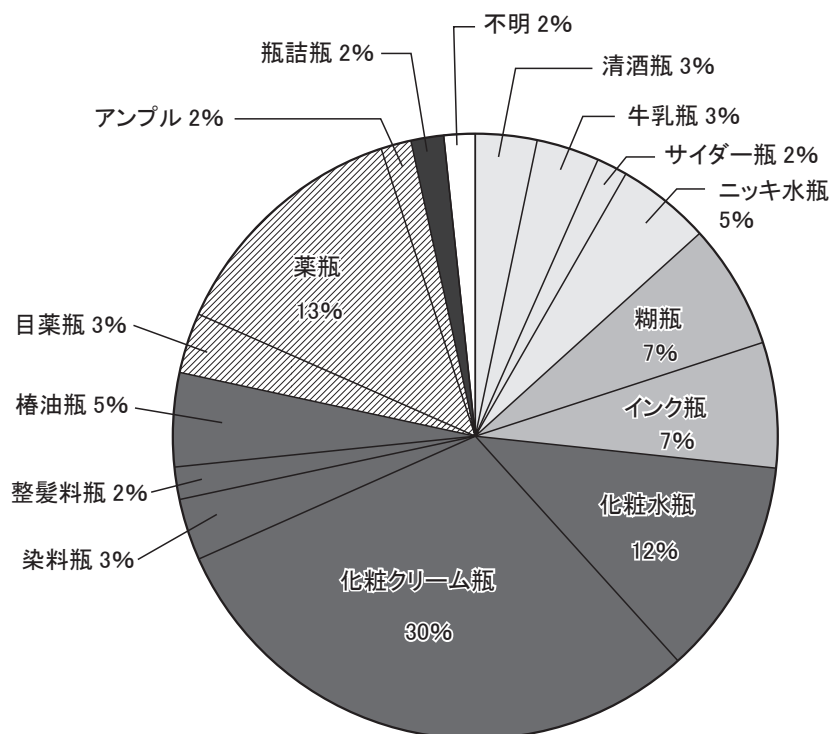


図2 禁裏御用水出土ガラス瓶用途別内訳



図3-1 禁裏御用水出土 飲料用瓶



図3-2-1 No.3エンボス表面

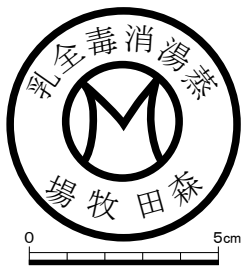


図3-2-2 No.3エンボス側面



図3-4-1 No.5エンボス
「金色」

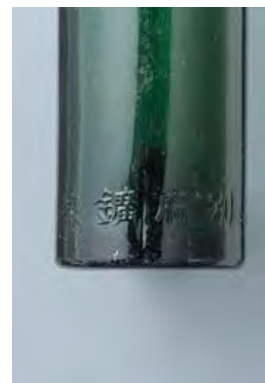


図3-4-2 No.5エンボス
「別府鑛泉株式會社」

別府鑛泉株式會社



図3-3 No.4エンボス
「學生勞働會」



図3-5 No.7エンボス
「二九水」



図4-1 禁裏御用水出土 文房具瓶



図4-3-2 No.13エンボス底面
「PB」



図4-2 No.9エンボス底面
「フエキ」



図4-6 No.16エンボス底面
「SSS」

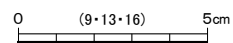


図4-3-1 No.13ラベル
「PLATON INK」



図4-4 No.14エンボス側面
「ABC・INK」



図4-5 No.15エンボス底面
「WAILNMAN INK」



図5-1 禁裏御用水出土 化粧品用瓶



図5-2 No.20エンボス側面
「鈴虫香油」



図5-3-1 No.21エンボス側面
「ホーカー液」



図5-5-1 No.24エンボス側面
「TELL ME」



図5-4 No.22エンボス側面
「Letran」



図5-3-2 No.21エンボス側面
「堀越」



図5-5-2 No.24エンボス底面
「意匠登録」



図6-1 No.26エンボス底面
ウテナ商標マーク



図6-2 No.29エンボス底面
「カガシ」



図6-3 No.31エンボス底面
カガシ商標マーク



図6-4 No.41エンボス底面
「丸善」



0 (26・29・31・41) 5cm



図6-5 No.42エンボス側面
「志らが赤毛染ナイス」



図6-7-1 No.45エンボス側面
「最上精製 ミサオ香油」



図6-6 No.43エンボス底面
「千草染」



図6-7-2 No.45エンボス底面
「ミサオ商會徳製」



図 7 - 1 禁裏御用水出土 薬品瓶



図 7 - 2 - 1 No.49エンボス表面
「本舗 山田安民」



図 8 禁裏御用水出土 佃煮瓶
No.59



図 9 - 2 No.60エンボス底面
「TRADE MARK」



図 7 - 2 - 2 No.49エンボス裏面
「ロート目薬」

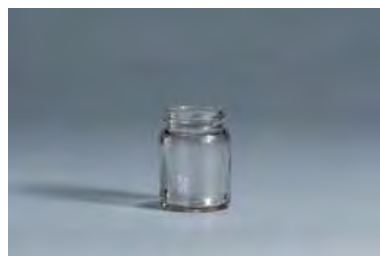


図 9 - 1 禁裏御用水出土 不明瓶
No.60



表 1 禁裏御用水出土ガラス瓶観察表

※無いものには「-」

掲載 No	調査区	地区名	層位	出土 年月日	種別	色調	器高 (cm)	底径 (cm)	エンボス	備考
1	1	P9	-	2019.12.16	清酒瓶	青色系透明	31.8	8.2	-	機械栓 4合瓶 底部キック・アップ
2	1	P-12・13	掘方	2020.01.24	清酒瓶	青色系透明	16.7	5.5	-	1合瓶 底部キック・アップ
3	1	P-7・8	掘方	2020.01.22	牛乳瓶	無色透明	18.5	5.0	蒸湯消毒全乳 森田牧場 (側面) 改 (底面)	販売元の電話番号等の エンボス有
4	1	P-7・8	-	2019.12.16	牛乳瓶	無色透明	(13.5)	5.0	全乳学生労働會 (側面)	首欠け
5	1	P5	-	2019.12.16	サイダー瓶	濃緑色透明	(23.6)	5.8	金色 別府鉱泉株式会社 (側面)	金色ポート 首欠け
6	1	P6	-	2019.12.16	ニッキ水瓶	無色透明	4.3	1.2	-	瓢箪型
7	1	P-7・8	-	2019.12.16	ニッキ水瓶	無色透明	9.2	2.5	二九水 (側面)	ボトル型
8	1	P9	-	2019.12.16	ニッキ水瓶か	無色透明	9.3	2.5	-	ボトル型
9	1	P9	-	2019.12.16	糊瓶	青色系透明	3.5	5.3	フエキ (底面)	楕円形 不易糊工業
10	1	P9	-	2019.12.16	糊瓶	青色系透明	4.3	5.0	-	円筒形
11	1	P-7・8	-	2019.12.16	糊瓶	青色系透明	4.3	5.0	-	円筒形
12	1	P9	-	2019.12.16	糊瓶	青色系透明	4.3	5.0	-	円筒形
13	1	P9	-	2019.12.16	インク瓶	無色透明	3.2	3.4	六芒星に PB (底面)	ラベル「PLATON INK」 残存 プラトンインキ プラトン文具
14	1	P9	-	2019.12.16	インク瓶	無色透明	5.5	4.5	ABC・INK (側面)	ABC インキ 不易糊工業
15	1	P9	-	2019.12.16	インク瓶	無色透明	7.2	6.8	4 OZ (側面) WAILNMAN INK (底面)	
16	1	P9	-	2019.12.16	インク瓶	青色系透明	5.5	5.0	SSS (底面)	サンエスインキ サンエス株式会社
17	1	P-3・4	掘方	2020.01.21	化粧水瓶	無色透明	12.5	5.3	-	角瓶
18	1	P6	-	2019.12.16	化粧水瓶	無色透明	7.5	3.0	-	扁平型 花卉状の陽刻
19	1	P-10・11	-	2019.12.16	化粧水瓶	無色透明	10.5	3.3	-	楕円扁平型
20	1	P9	-	2019.12.16	化粧水瓶	無色透明	11.5	3.8	鈴虫香油・鈴虫の絵 (側面)	島村商店
21	1	P5	-	2020.01.21	化粧水瓶	無色透明	9.3	2.8	ホーカー液 堀越 (側面)	角瓶 堀越商会
22	1	P9	-	2019.12.16	化粧水瓶	無色透明	6	3.3	Letran (側面)	角瓶
23	1	P-7・8	-	2020.12.16	化粧水瓶	無色透明	(8.5)	-	-	角瓶 底部欠損
24	1	P-10・11	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	6.4	3.9	TELL ME (側面) 意匠登録 (底面)	スクリュー栓 テルミー化粧品
25	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	6.3	3.9	TELL ME (側面) 意匠登録 (底面)	スクリュー栓 テルミー化粧品
26	1	P-10・11	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	5.5	3.8	ウテナ商標マーク (底面)	スクリュー栓 ウテナクリーム 久保政吉商店
27	1	P-7・8	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	5.3	3.8	ウテナ商標マーク (底面)	スクリュー栓 ウテナクリーム 久保政吉商店
28	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	5.3	3.8	ウテナ商標マーク (底面)	スクリュー栓 ウテナクリーム 久保政吉商店
29	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	5.0	3.5	カガシ (底面)	スクリュー栓 カガシクリーム 丸善化粧品部
30	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	4.0	2.8	カガシ (底面)	スクリュー栓 カガシクリーム 丸善化粧品部
31	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	5.5	4.8	(カガシ化粧品の商標マーク) (底面)	スクリュー栓 カガシクリーム 丸善化粧品部
32	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色半透明	6.5	4.0	REG DESIGN No.41651 (底面)	スクリュー栓
33	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	6.0	4.5	LE ■ ON (底面)	スクリュー栓
34	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色半透明	5.3	4.0	-	スクリュー栓
35	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	5.5	3.8	-	

掲載 No	調査区	地区名	層位	出土 年月日	種別	色調	器高 (cm)	底径 (cm)	エンボス	備考
36	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色半透明	5.5	3.5	-	スクリュー栓
37	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色半透明	5.3	3.5	-	スクリュー栓
38	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	黄白色不透明	5.0	3.8	-	スクリュー栓
39	1	P9	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	青色系透明	4.5	4.0	-	スクリュー栓
40	1	P7	-	2020.01.20	化粧クリーム瓶	青色系透明	4.3	4.5	-	スクリュー栓
41	1	P-7・8	-	2019.12.16	化粧クリーム瓶	乳白色不透明	4.5	3.3	丸善 (底面)	スクリュー栓 丸善化粧品部
42	1	P-3・4	掘方	2020.01.21	染料瓶	青色系透明	6.7	2.4	志らが赤毛染 ナイス (側面)	角瓶 丹平商会
43	1	P9	-	2019.12.16	染料瓶	無色透明	6.4	3.3	千草染 (底面)	
44	1	P9	-	2019.12.16	整髪料瓶	緑色系透明	11.0	5.5	-	フタ付き
45	1	P-9・10	-	2020.01.20	椿油瓶	無色透明	8.8	3.5	最上精製 ミサオ香油 (側面) ミサオ商會徳製 (底部)	
46	1	P7	-	2020.01.20	椿油瓶	無色透明	10.2	3.5	Y (底面)	
47	1	P4	-	2019.12.17	椿油瓶	無色透明	11.7	4.2	一 (底面)	
48	1	P-7・8	-	2019.12.16	アンプル	無色透明	(5.7)	1.3	-	首部欠損
49	1	P9	-	2019.12.16	目薬瓶	紺色系透明	6.2	2.5	ロー目薬 (裏面) 本舗 山田安民 (表面)	
50	1	P-7・8	-	2019.12.16	目薬瓶	茶色系透明	7.0	-	-	スポイト型
51	1	P9	-	2019.12.16	薬瓶	紺色系透明	8.5	3.7	-	
52	1	P9	-	2019.12.16	薬瓶	青色系透明	7.5	2.7	-	
53	1	P-10・11	-	2019.12.16	薬瓶か	無色透明	7.0	3.0	-	角瓶
54	1	P9	-	2019.12.16	薬瓶か	無色透明	7.0	3.0	-	角瓶
55	1	P-7・8	掘方	2020.01.22	薬瓶か	無色透明	5.5	2.3	-	
56	1	P-10・11	-	2019.12.16	薬瓶か	緑色系透明	6.7	2.6	-	角瓶
57	1	P9	-	2019.12.16	薬瓶か	無色透明	7.0	3.2	-	
58	1	P9	-	2019.12.16	薬瓶か	青色系透明	8.6	3.5	-	
59	1	P3	-	2019.12.16	佃煮瓶	青色系透明	7.5	5.2	-	
60	1	P9	-	2019.12.16	不明瓶	無色透明	5.5	3.7	TRADE MARK (底面) (商標マーク)(底面)	スクリュー栓 口端部に付着物

附章

2. 京都市内出土資料の分析調査

北野 信彦（龍谷大学）

1. はじめに

（株）文化財サービスによる相国寺旧境内・上御霊遺跡の発掘調査により出土した1資料の分析調査を行ったので、結果を報告する。

2. 調査対象試料

調査対象資料は、相国寺境内遺跡の攪乱層から出土した水晶と考えられる資料1点である。

3. 調査方法

本調査では、滓物質に関する色相や表面状態の観察、非破壊の分析を実施した。以下、調査方法を記す。

3. 1 色相や表面状態の観察

調査対象資料の色相や表面状態は、目視観察したのち、（株）ハイロックス社製のVH-7000S型デジタルマイクロスコープを使用して、500倍から1,000倍の高倍率観察を行った。

3. 2 無機元素の定性分析

調査対象資料の無機元素の定性分析は、本学の文化財科学研究室設置の据付型蛍光X線分析装置の試料室内で分析することが可能なサイズであるため、（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は、分析時間は600秒、試料室内は真空、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240 μ Aおよび20 μ A、検出強度は200.0～250.0cpsである。

4. 調査結果

各種の観察および分析調査を行なった結果、以下のような基礎的データの蓄積を得た。

4. 1 相国寺境内出土の水晶と考えられる資料

① 調査対象資料は、相国寺境内遺跡の攪乱層から出土しているが、桃山期～江戸期頃の資料とも想定されている。資料の上端部は滑らかな丸みを有するとともに、側面は丁寧な八角形にカット調整されており、透明感も良好な資料である。そして、下端部はやや粗い円錐形に削り出し調整が為されているため未製品である可能性もある。

② 拡大観察した結果、上端部や側面部のカット調整された表面は滑らかであり、筋状の加工痕跡は見出されなかった（写真1-1、1-2）。そしてこの資料の表面・内部には原材料由来の当初からのクラックや濁り、気泡などは観察されない極めて透明感が良好な結晶体であった。その一方

で、円錐形に削り調整が為された下端部は、黒曜石や水晶特有の貝殻状の凹剥離ヘツ開面が観察された（写真1－3、1－4）。

③ 本資料の各ポイント箇所を蛍光X線分析した結果、いずれの箇所においても強いシリカ（Si）のピークが検出されたが、それ以外では各元素のピークに特定されない特有二次電子線とは異なるピークが検出された（図1－1～1－4）。通常、結晶度が良好な鉱物物質の場合、照射した電子線の反射二次電子線が共鳴してゴーストピークが発生することがある。このことから、本資料は結晶度が良好な物質であると理解した。

④ 以上の点から、本資料は透明度が高い極めて良質な水晶を丁寧に加工調整した軸端部などの未成品資料であると理解した。



写真1－1：滴物質の付着状態 ⑦（試料29）



写真1－2：滴物質の付着状態 ⑧（試料32）

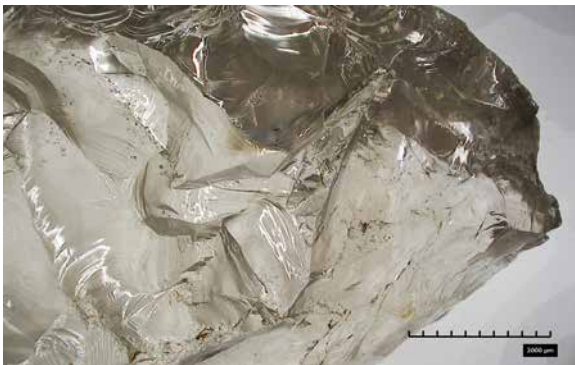


写真1－3：滴物質の付着状態 ⑤（試料24）

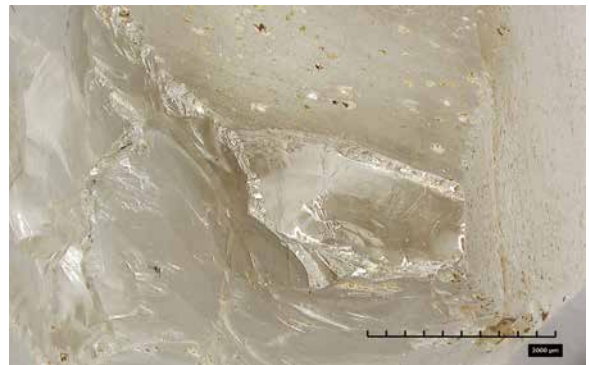


写真1－4：滴物質の付着状態 ⑥（試料26）

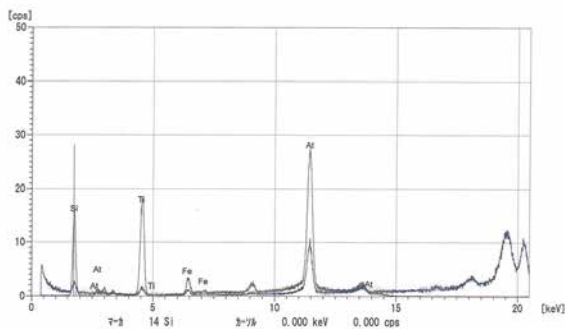


図1－1：結晶面の蛍光X線分析結果①

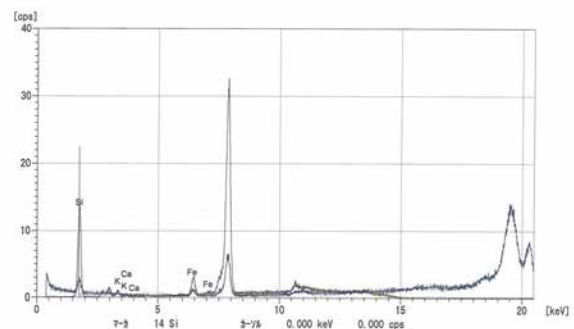


図1－2：結晶面の蛍光X線分析結果②

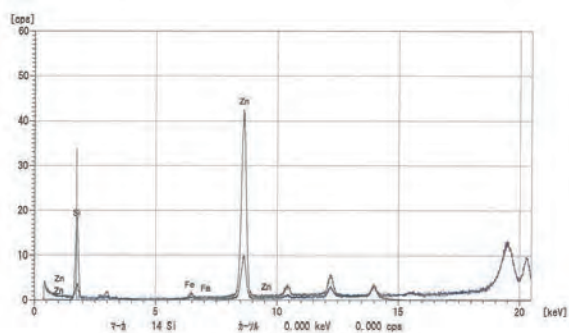


図 1 - 3 : 結晶面の蛍光 X 線分析結果③

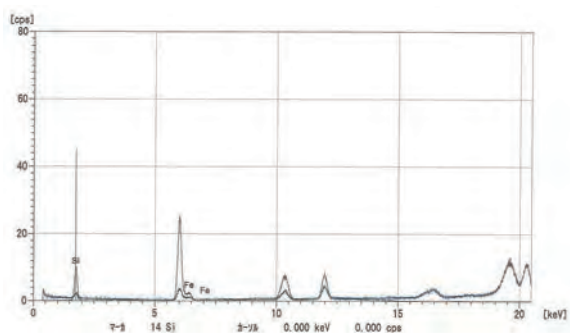
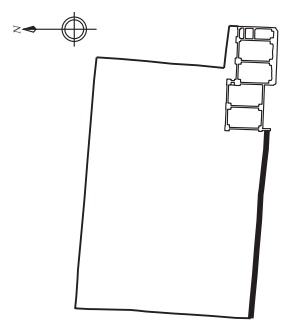
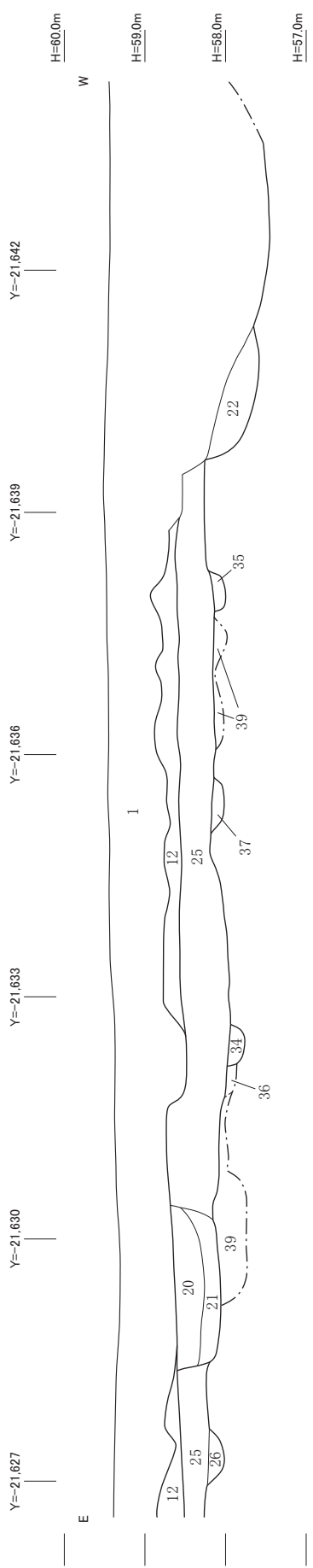
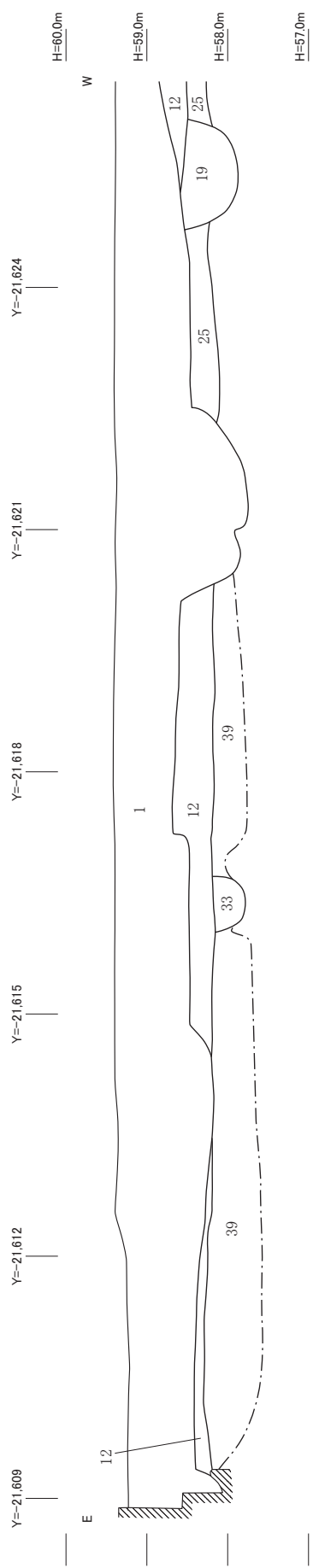


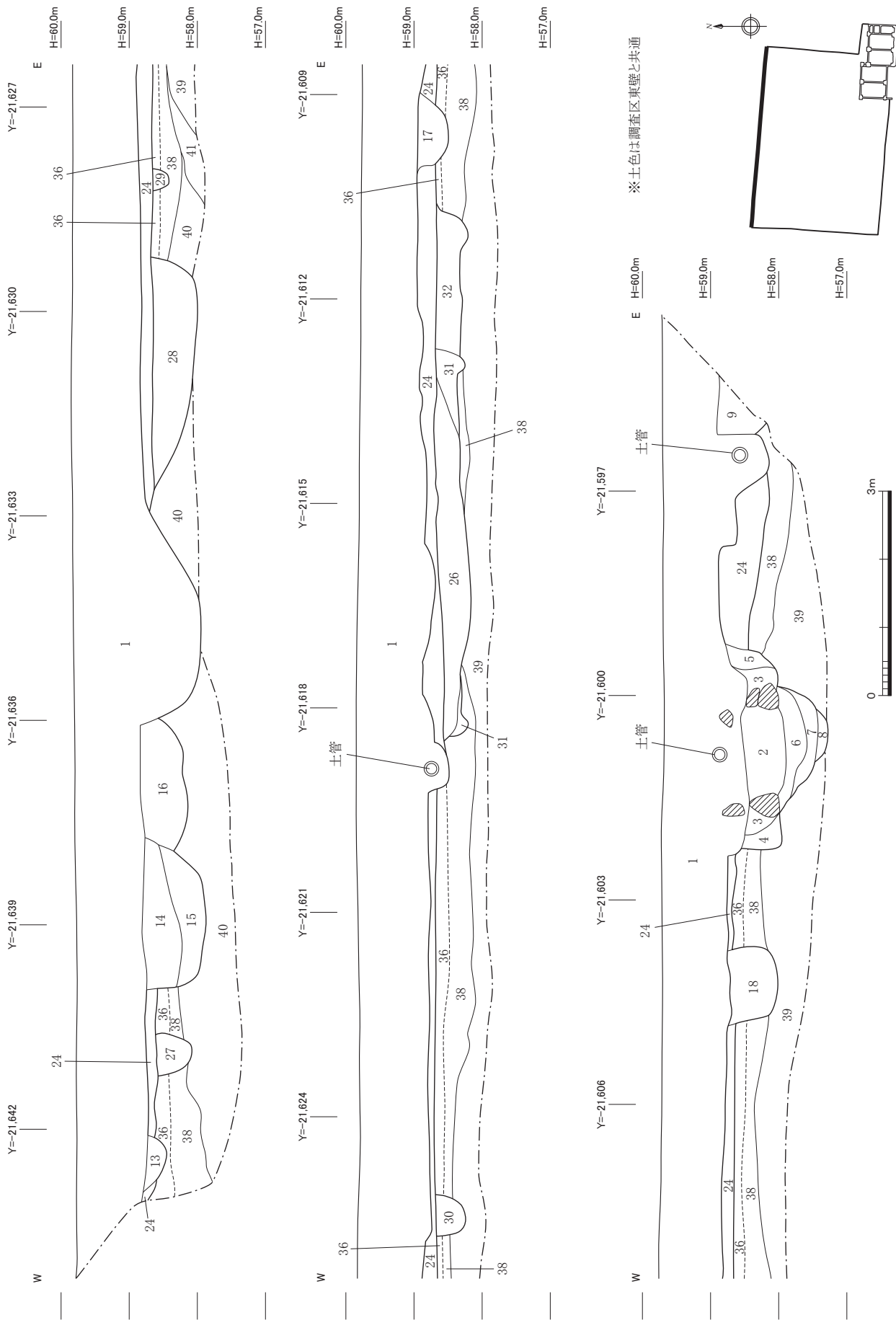
図 1 - 4 : 結晶面の蛍光 X 線分析結果④

図 版



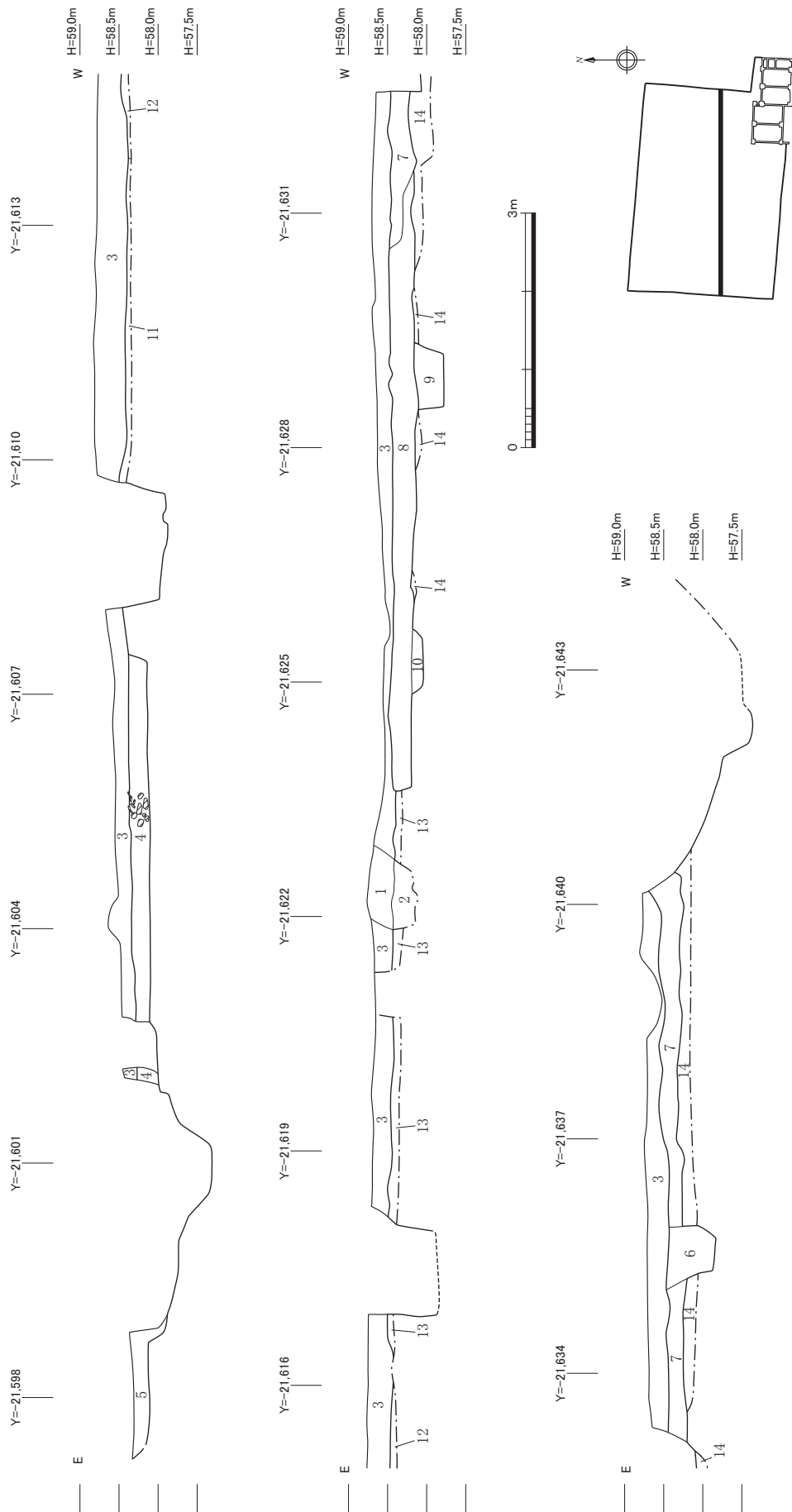
※土色は調査区東壁と共通

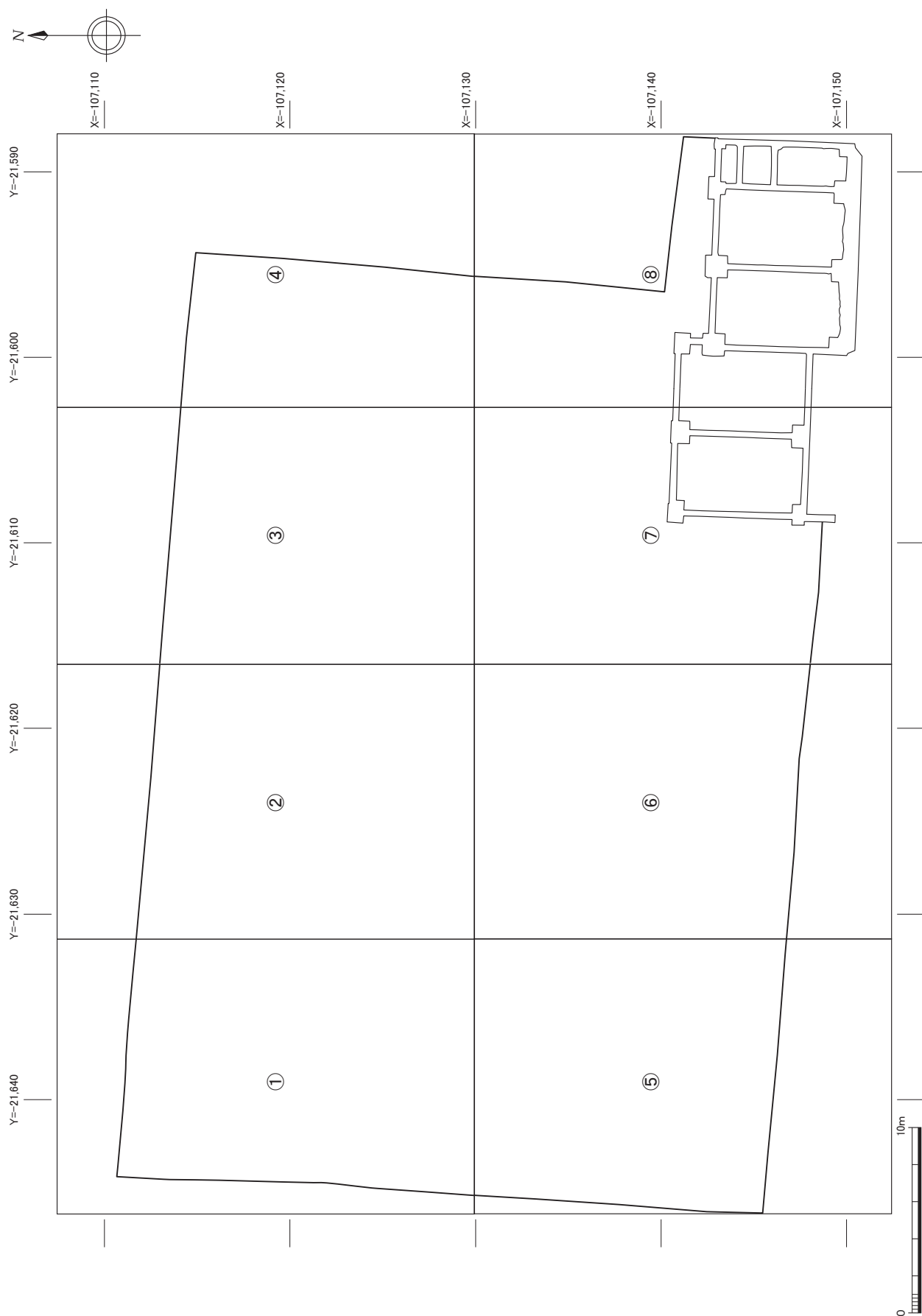
調査区南壁断面図 (1 : 80)



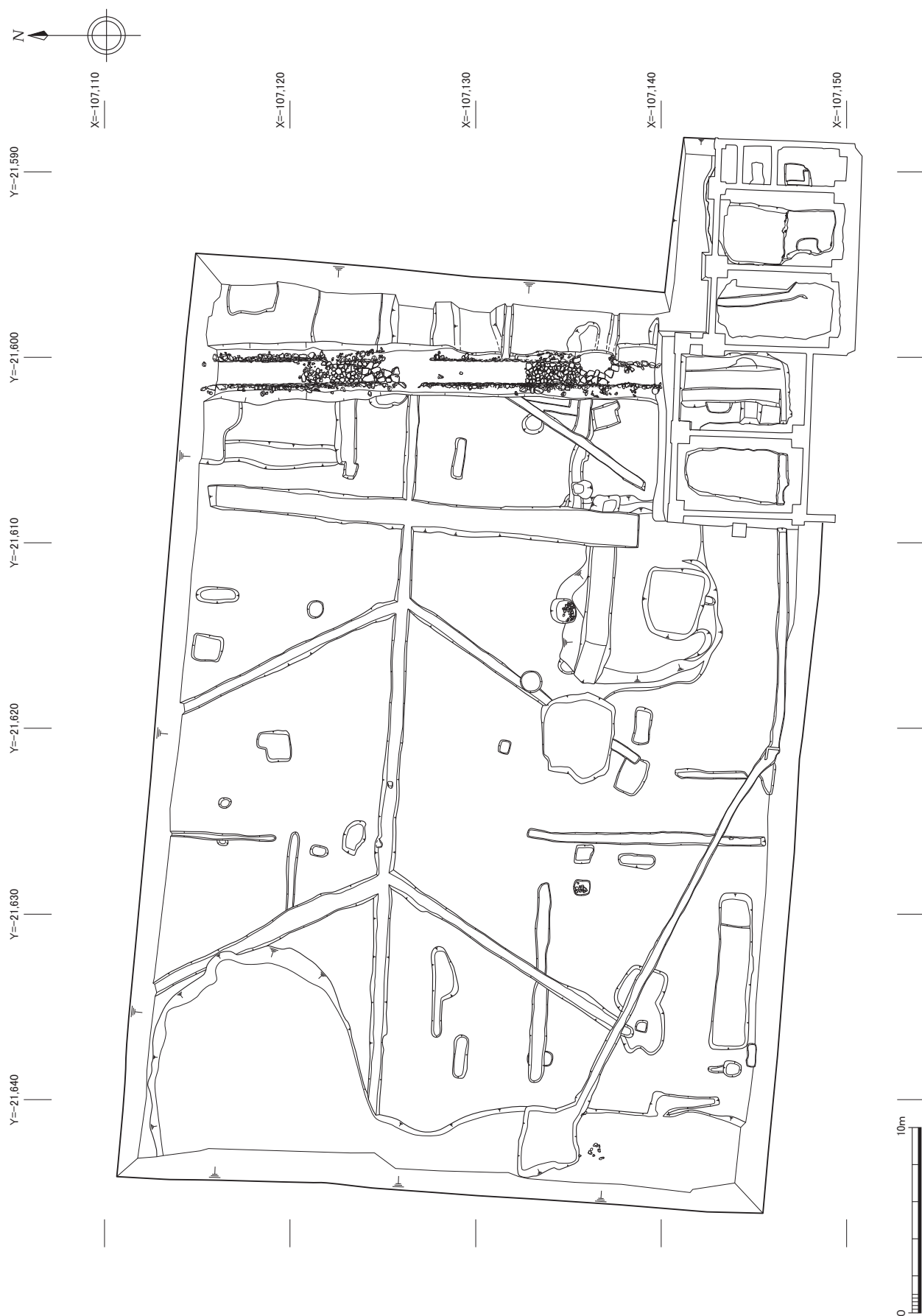
調査区北壁断面図 (1 : 80)

調査区東西セクション断面図（1：80）





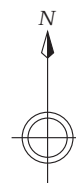
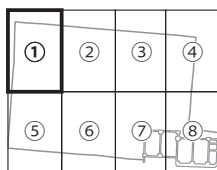
調査区全体平面紙割り図 (1 : 300)



第1面 調査区全体平面図（1：300）

Y=-21,646

Y=-21,636



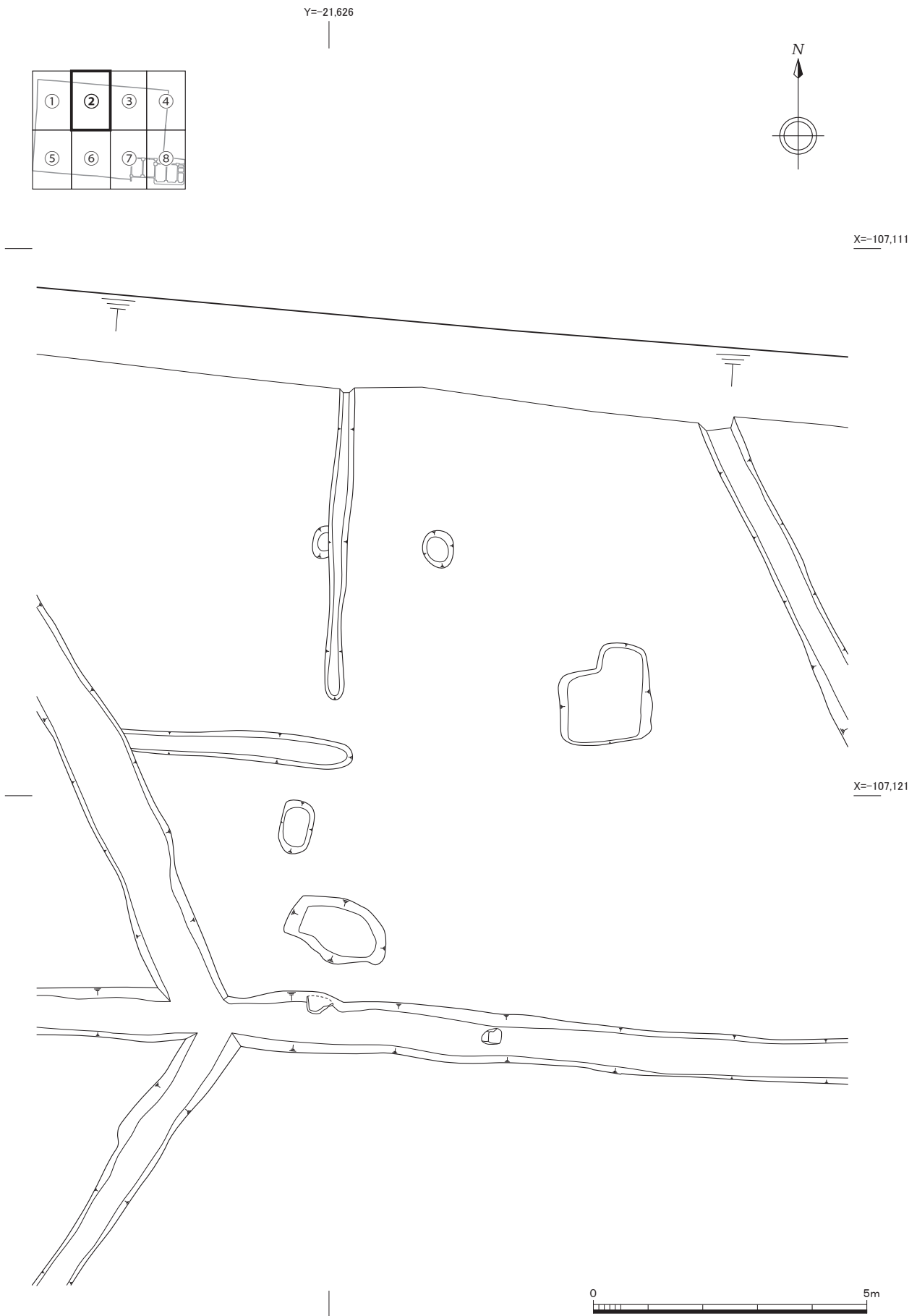
X=-107,111

X=-107,121

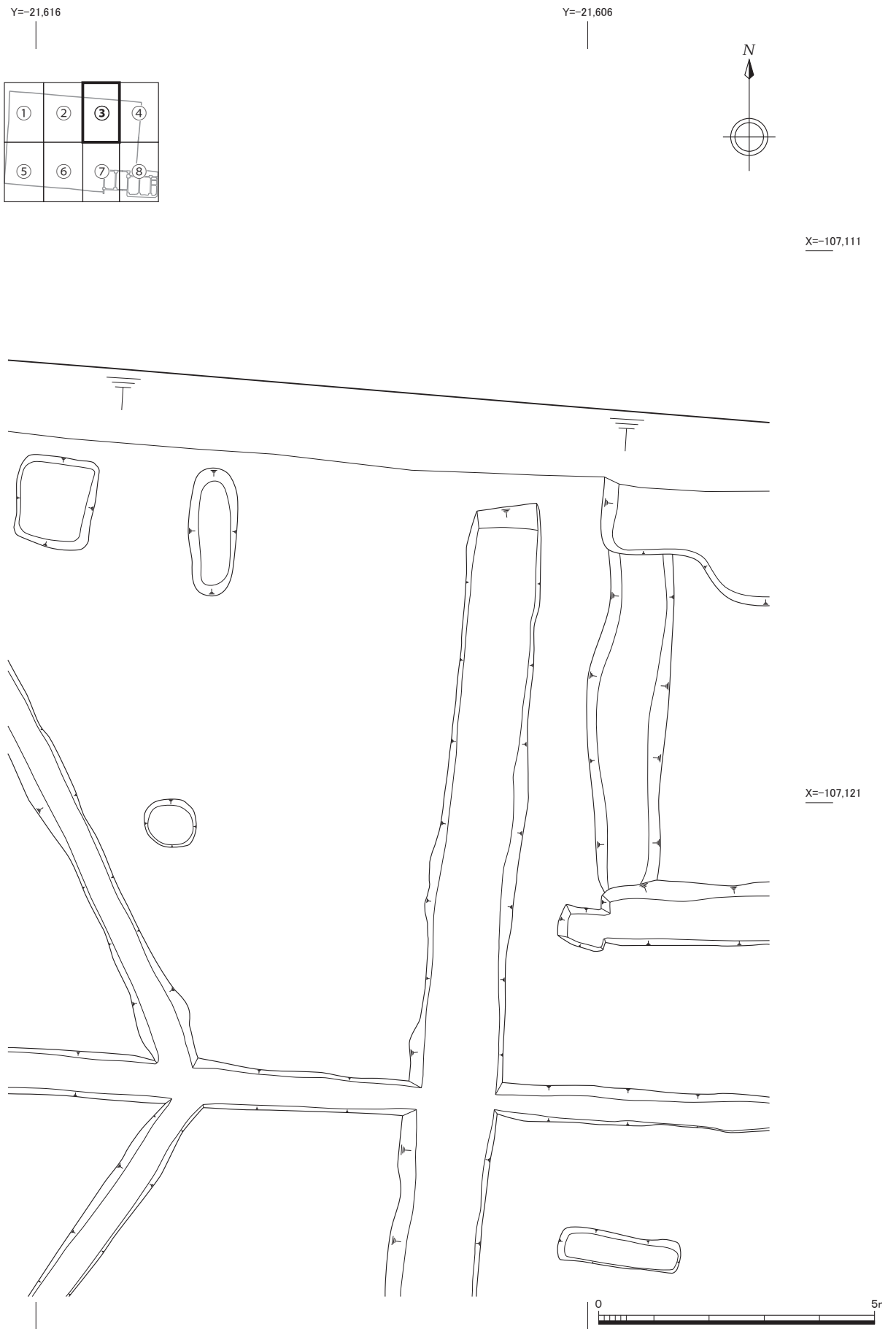


0 5m

第1面 調査区平面図1 (1 : 100)



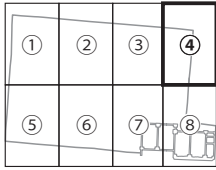
第1面 調査区平面図2 (1 : 100)



第1面 調査区平面図3 (1 : 100)

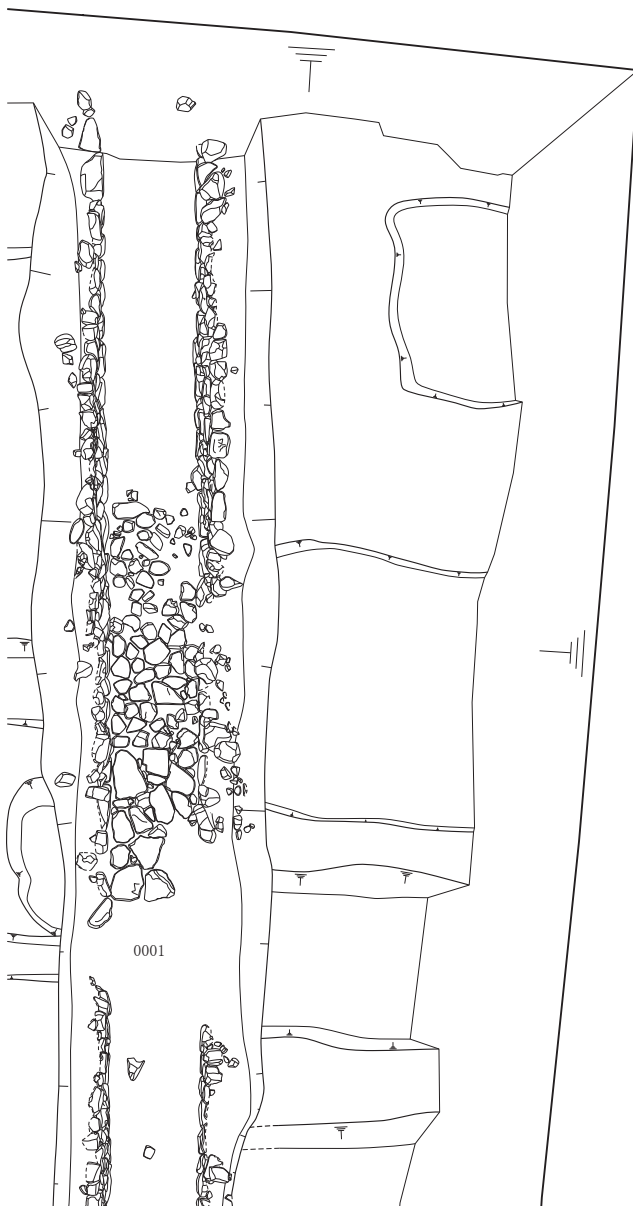


Y=-21,596



X=-107,111

X=-107,121



第1面 調査区平面図4 (1 : 100)

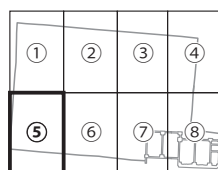
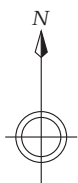
Y=-21,646

Y=-21,636

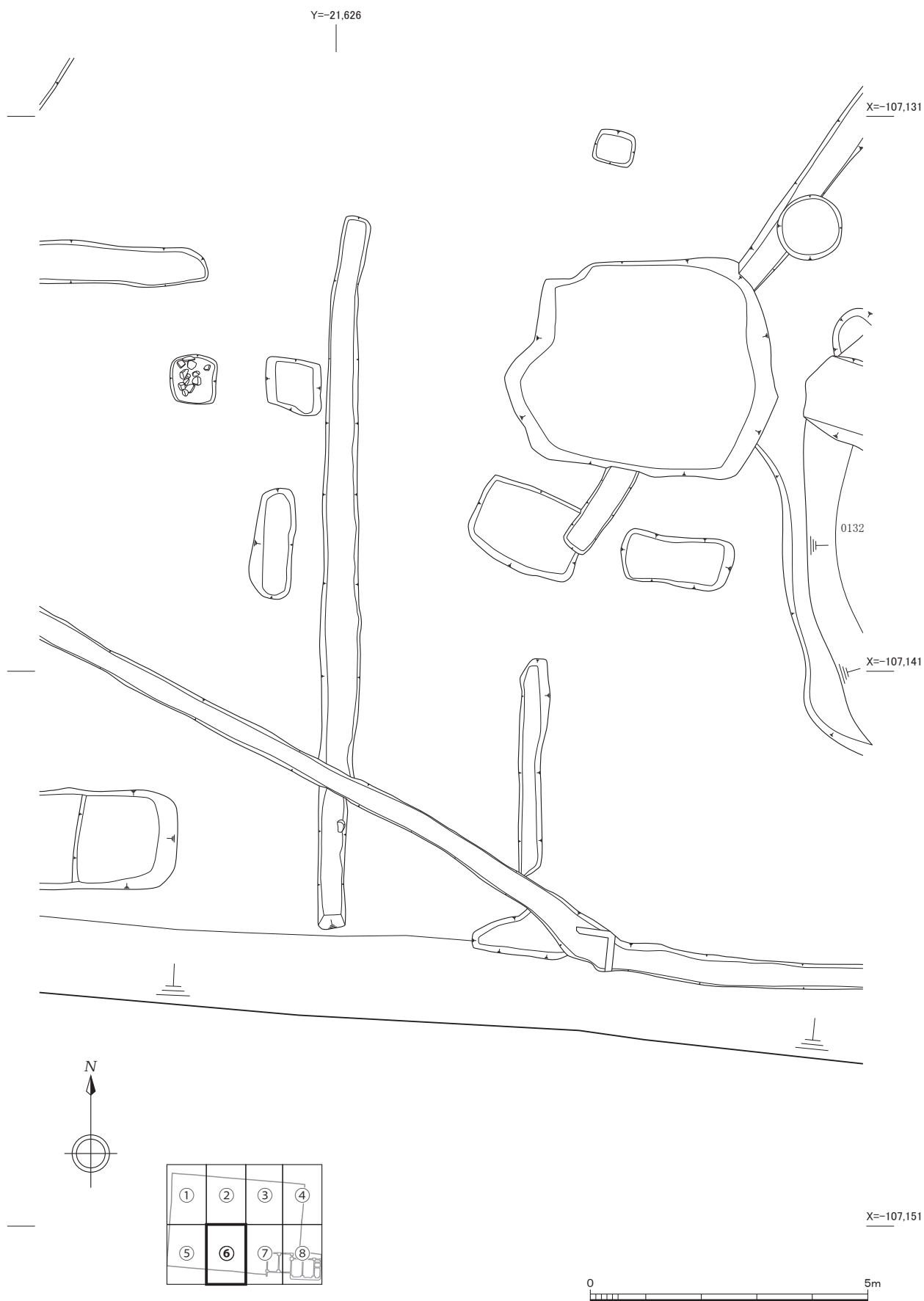
X=-107,131

X=-107,141

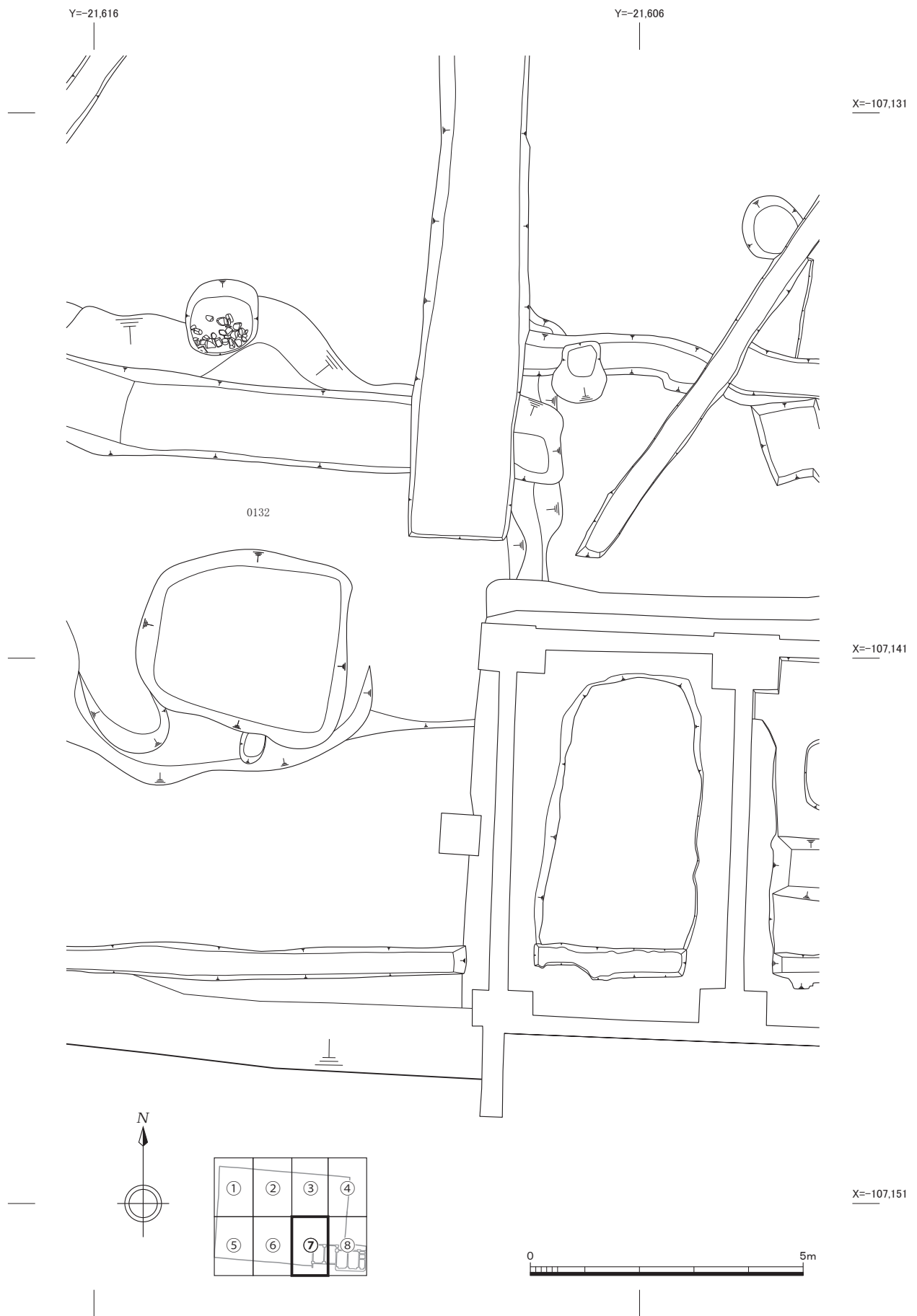
X=-107,151



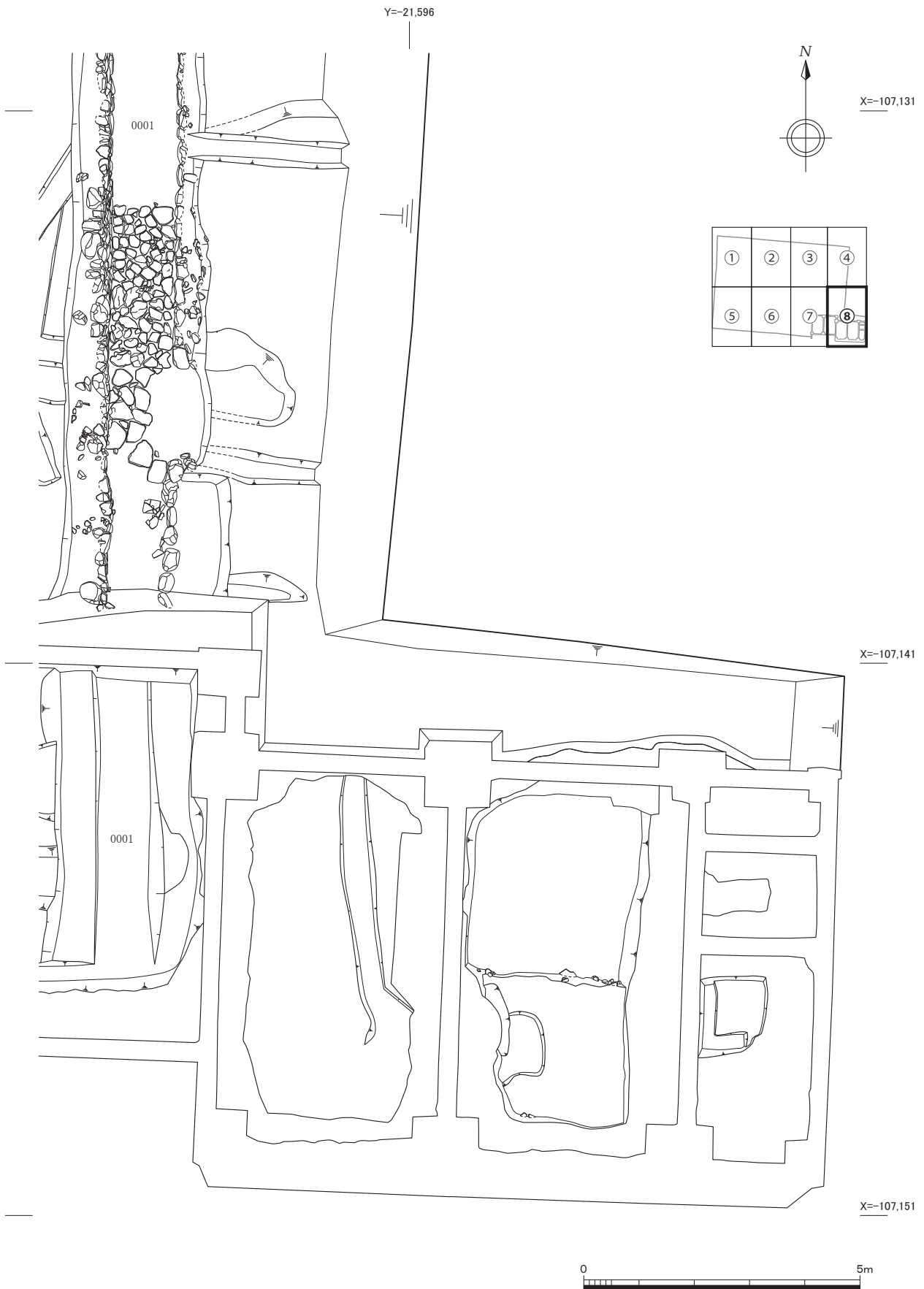
第1面 調査区平面図5 (1 : 100)



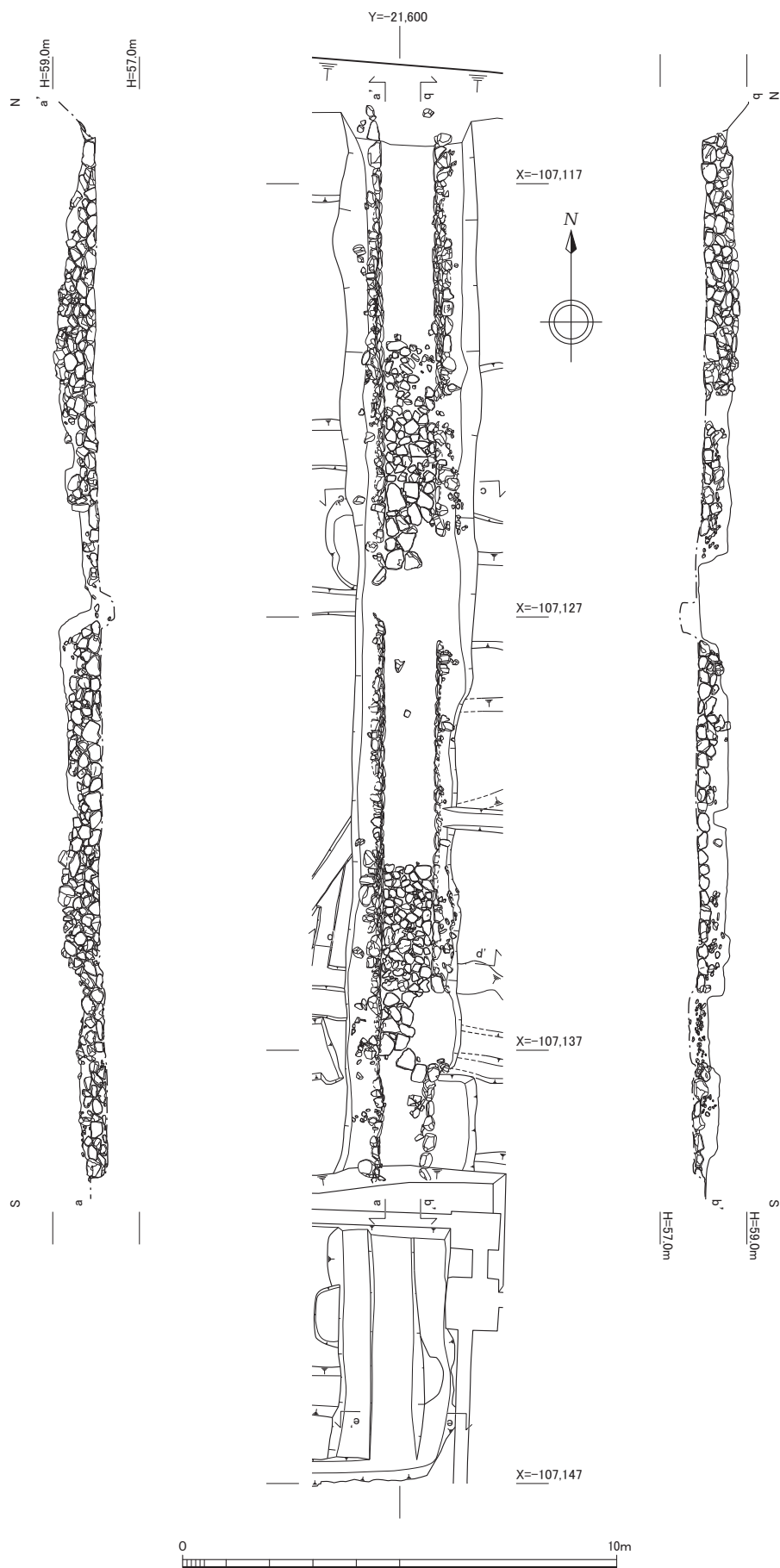
第1面 調査区平面図6 (1 : 100)



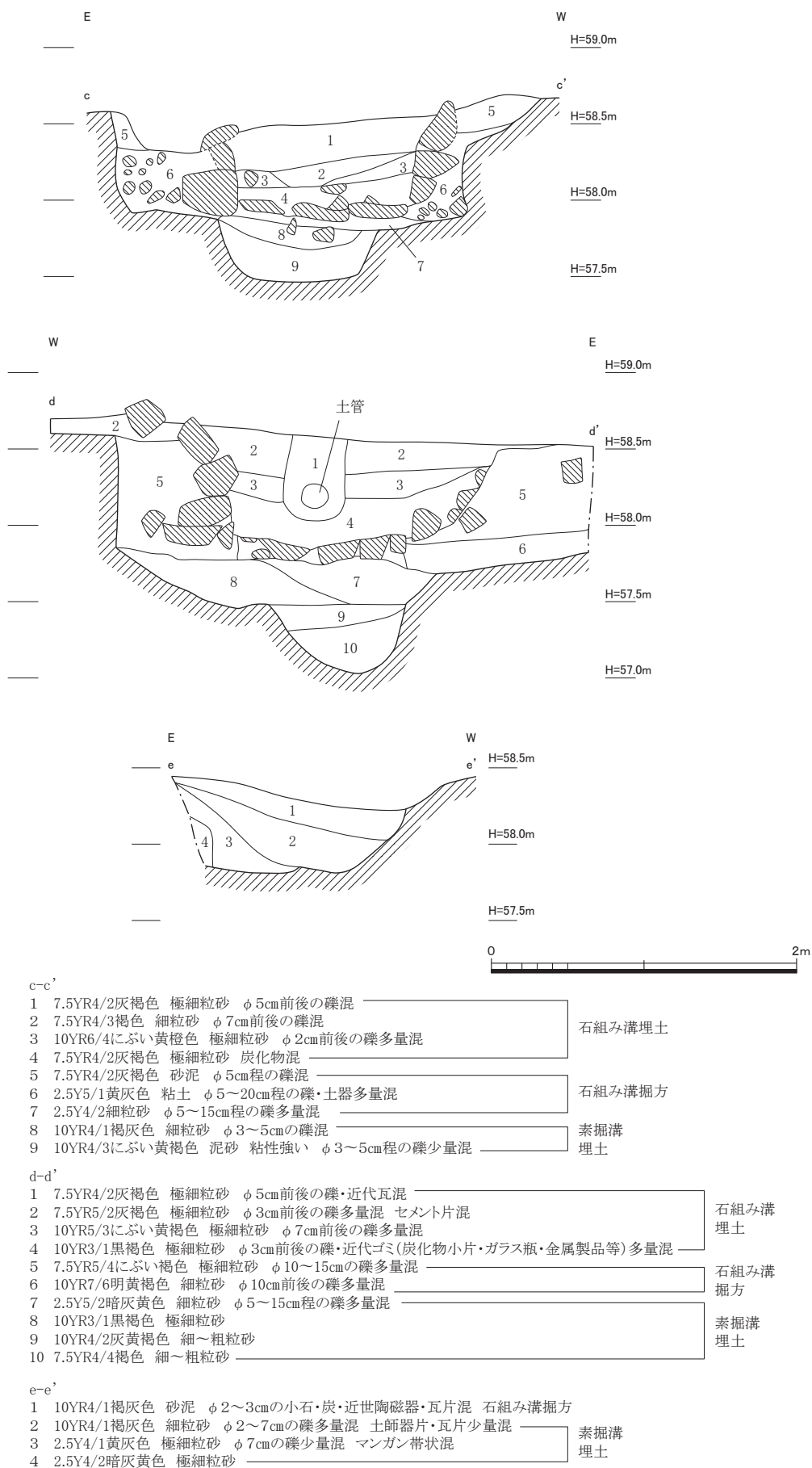
第1面 調査区平面図7 (1:100)

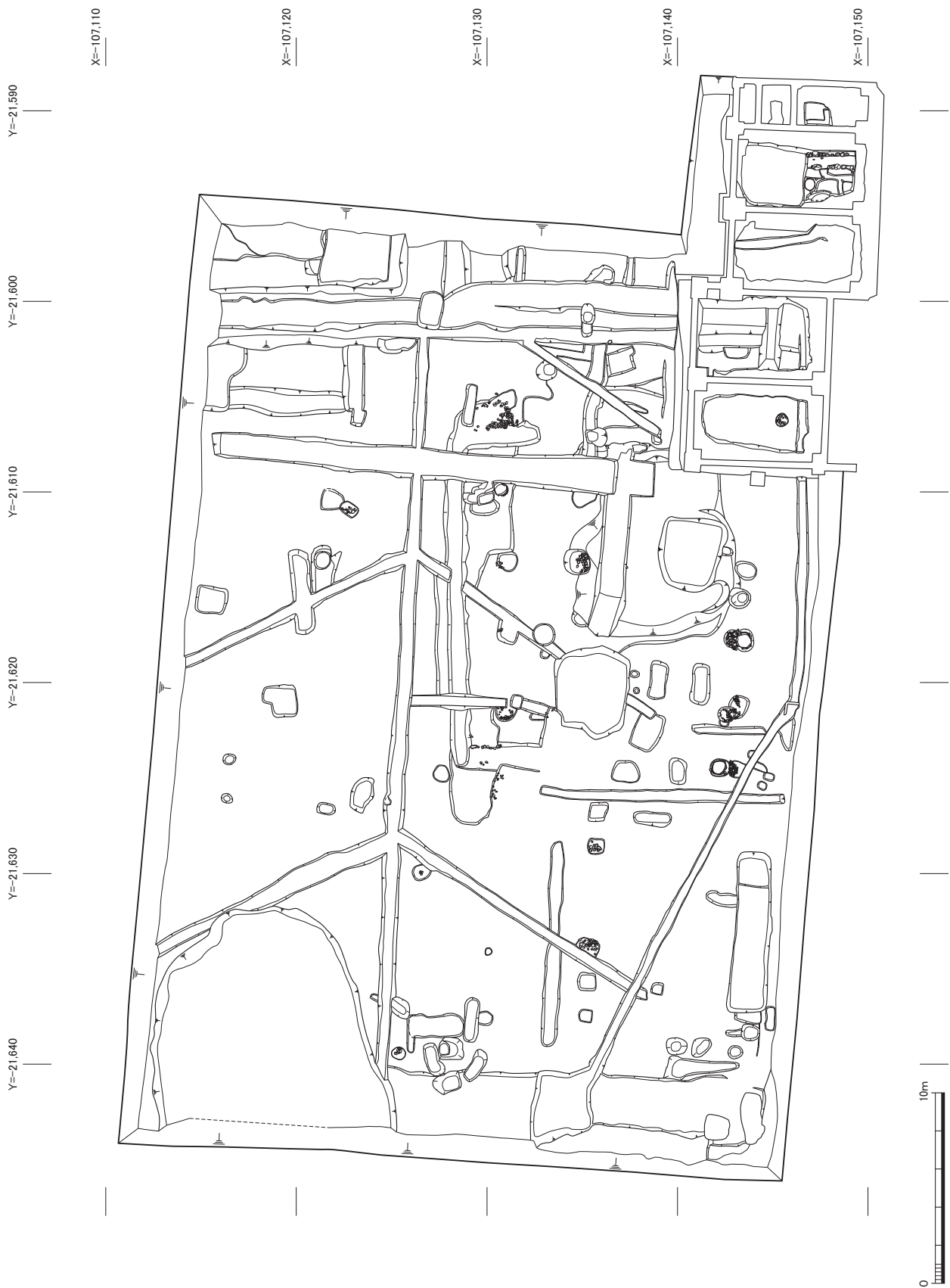


第1面 調査区平面図8 (1 : 100)

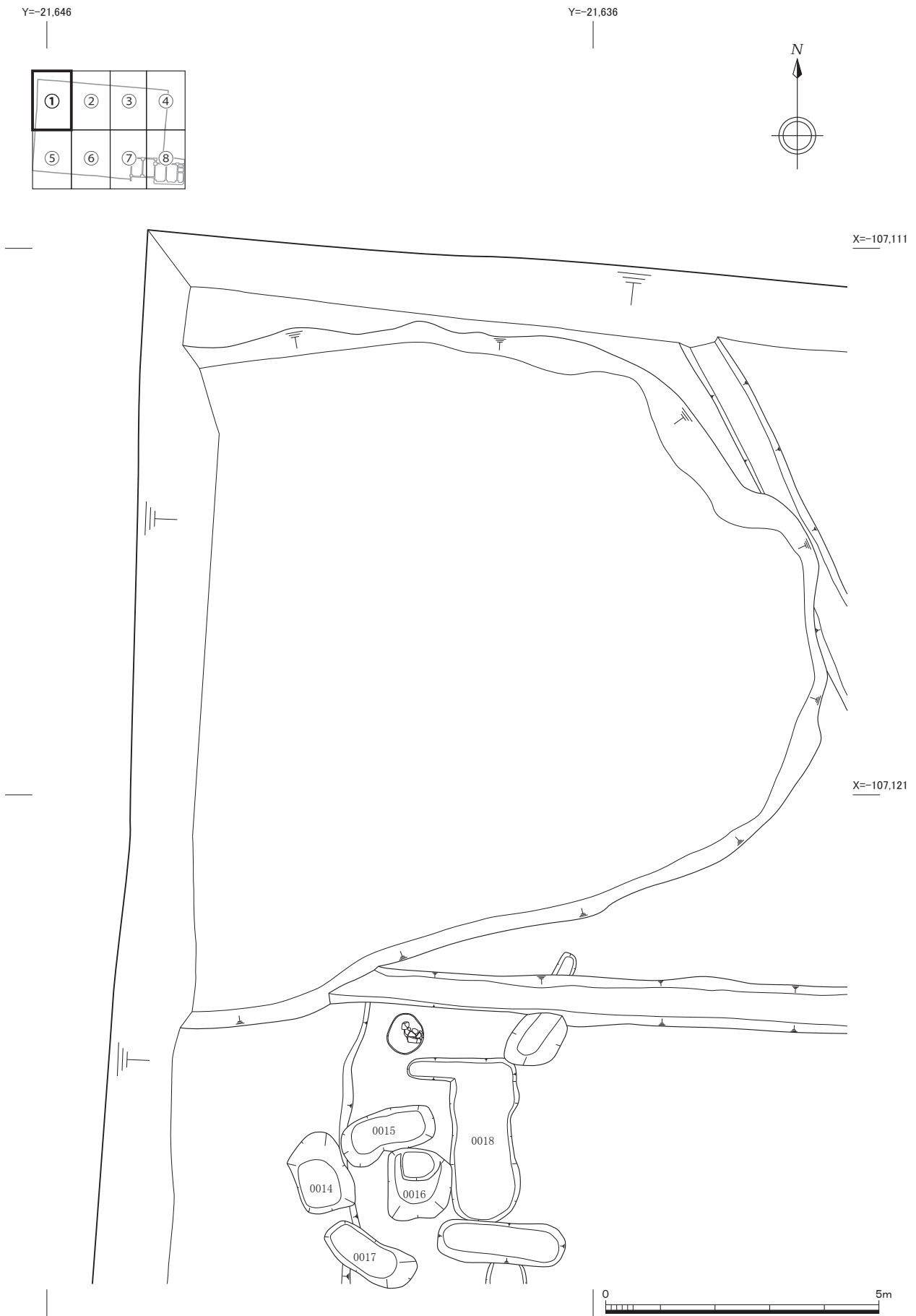


溝0001 平面図 (1 : 150)

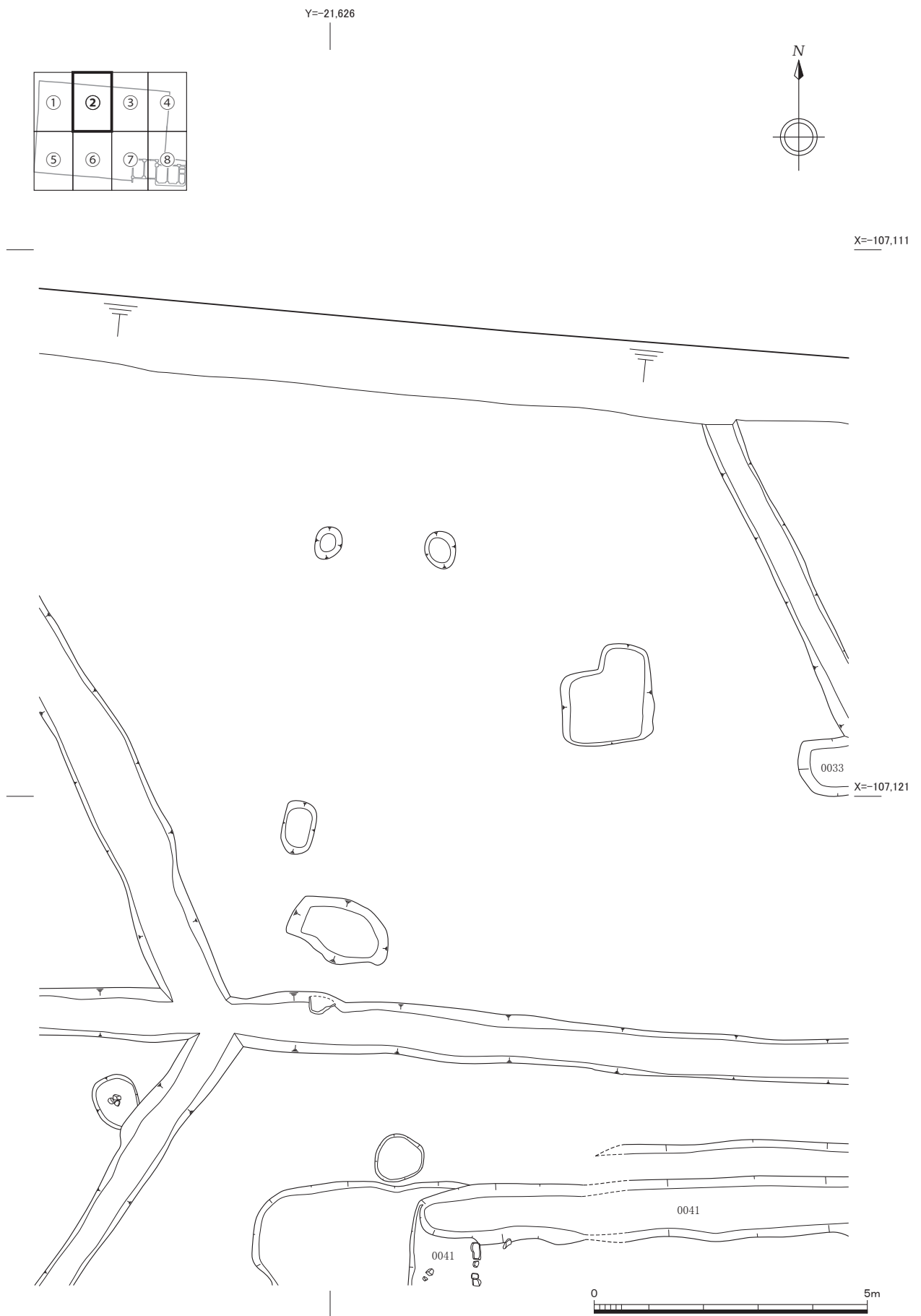




第2-1面 調査区全体平面図 (1 : 300)



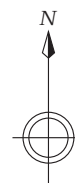
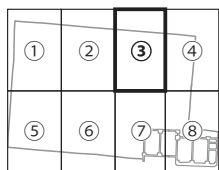
第2-1面 調査区平面図1 (1 : 100)



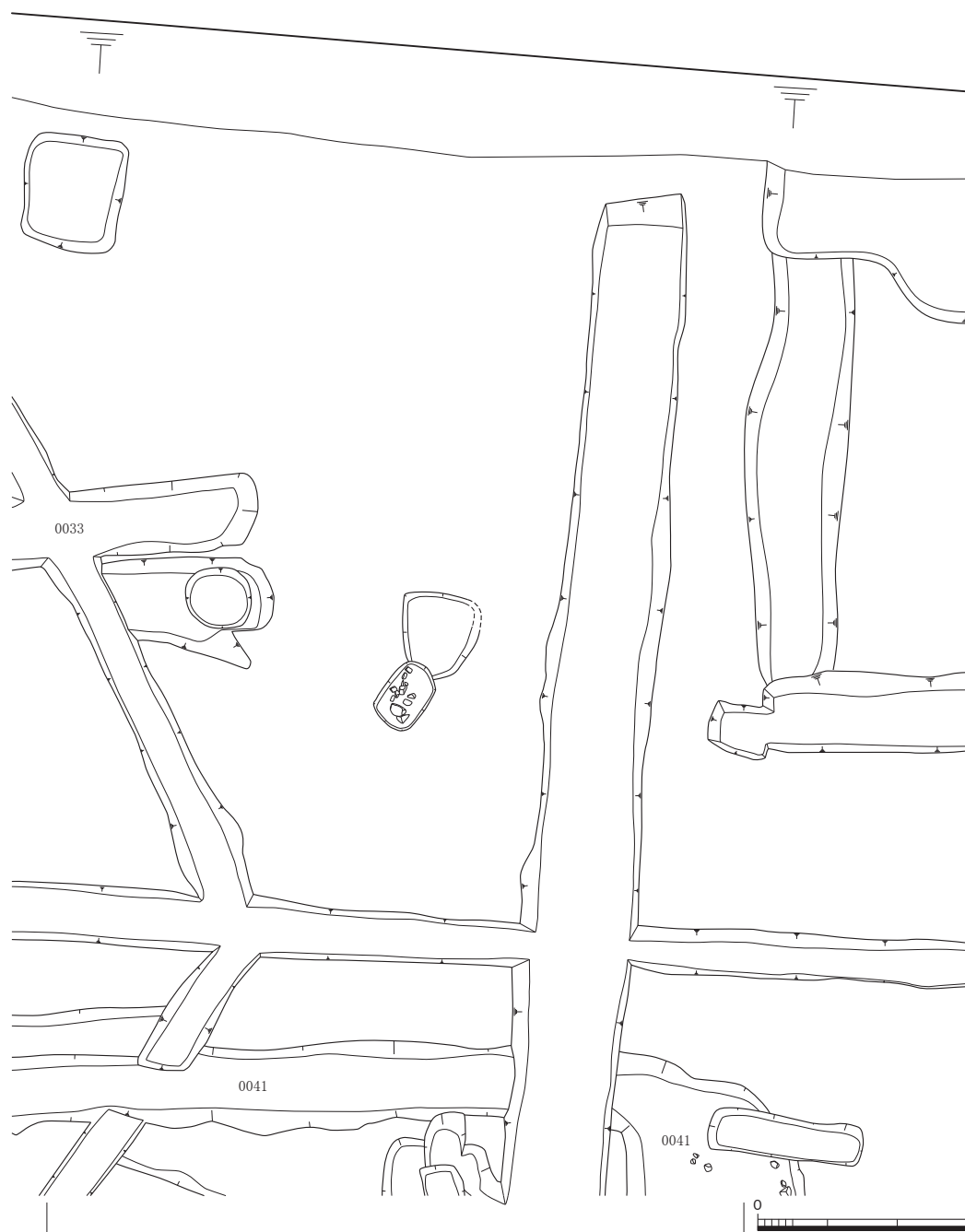
第2-1面 調査区平面図2 (1 : 100)

Y=-21,616

Y=-21,606



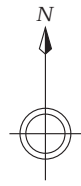
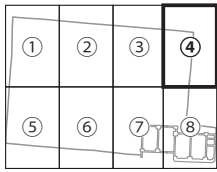
X=-107,111



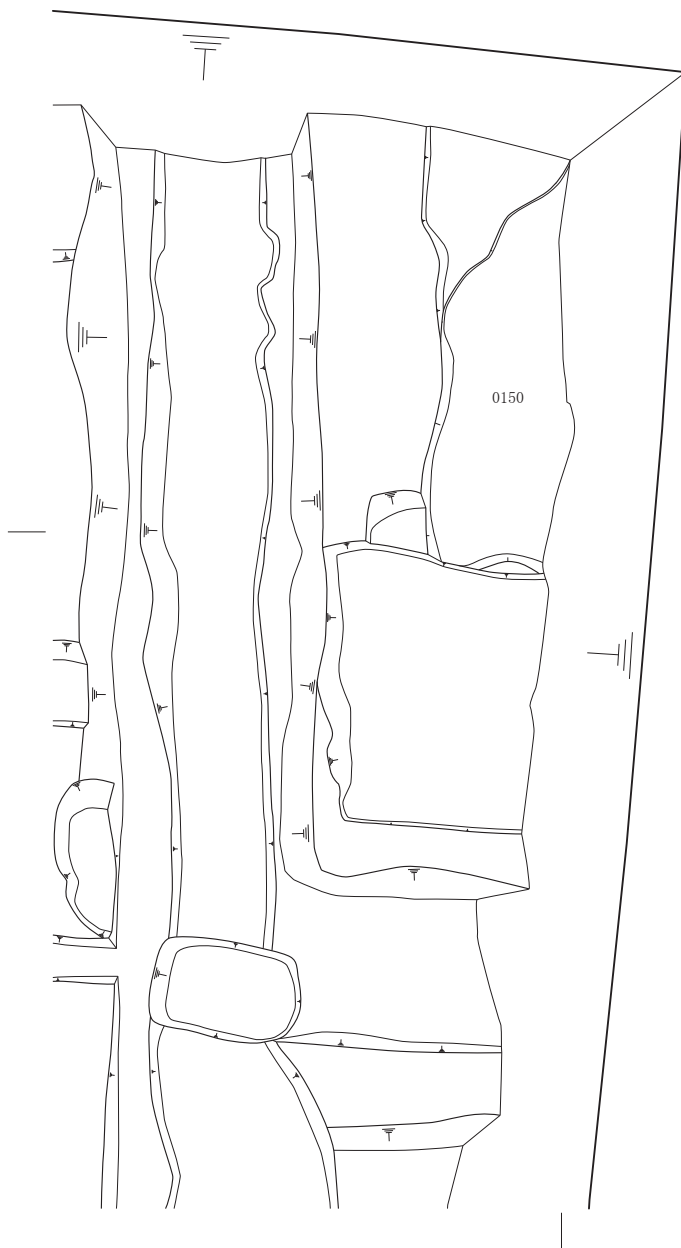
X=-107,121

第2-1面 調査区平面図3 (1:100)

Y=-21,596



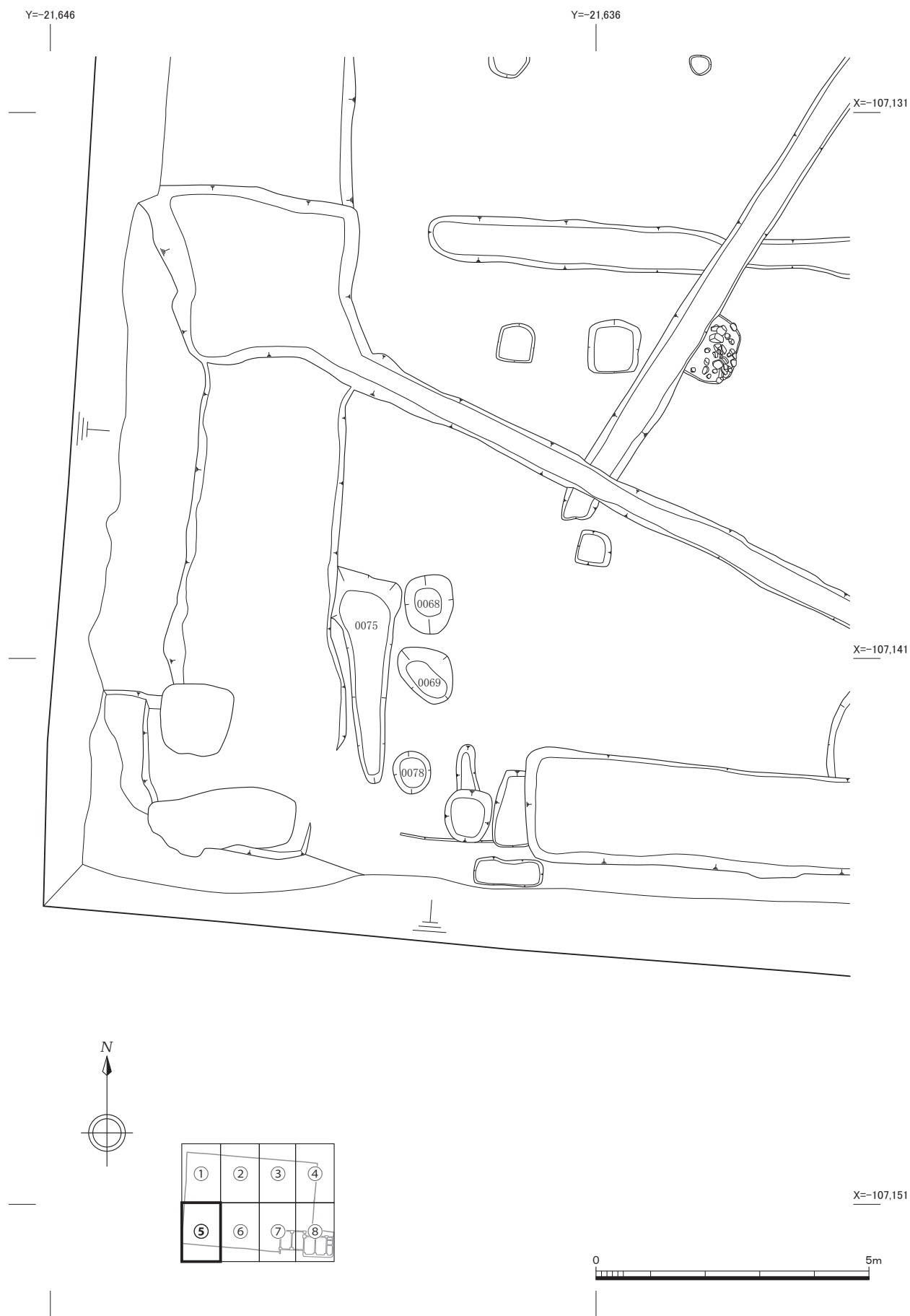
X=-107,111



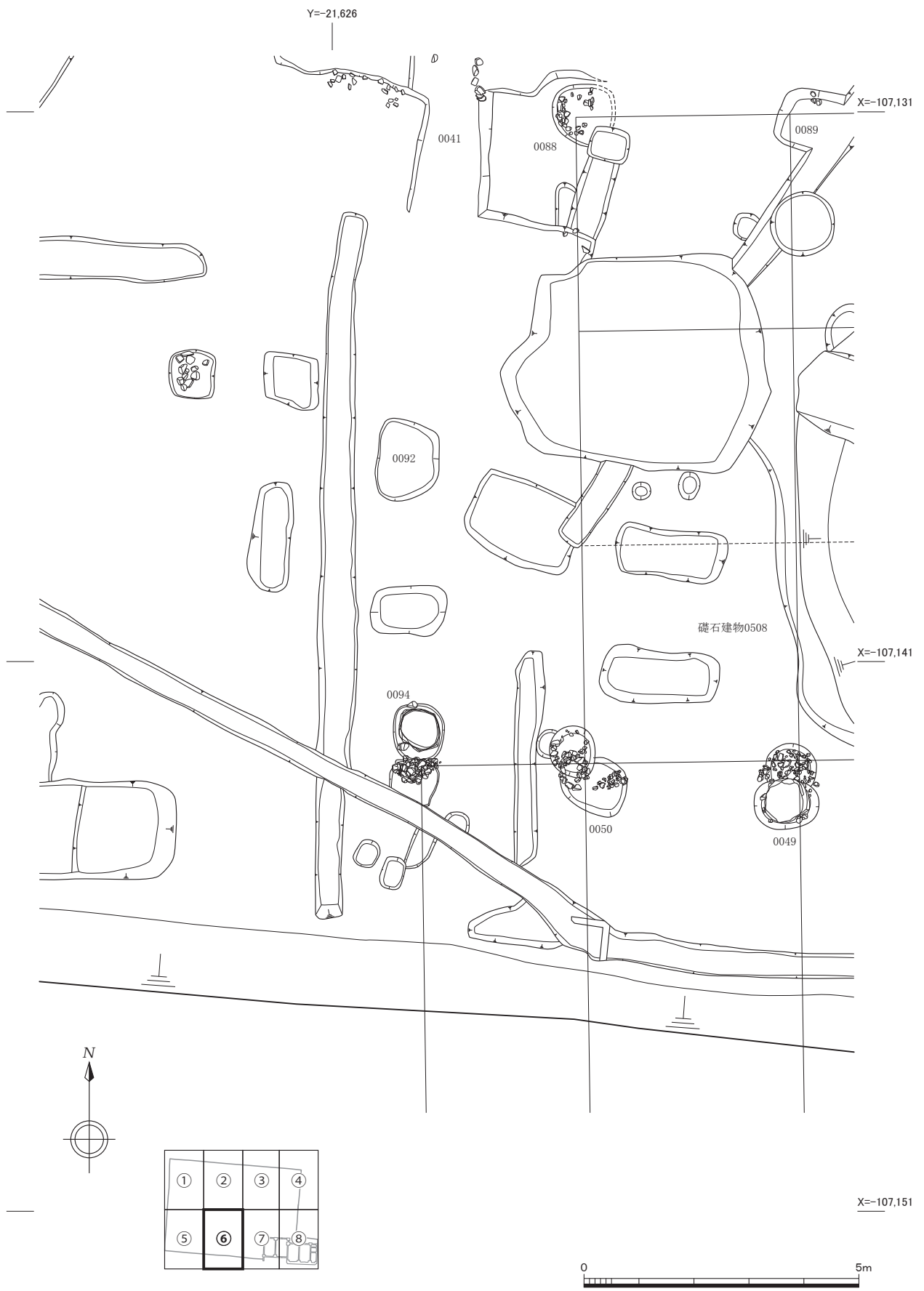
X=-107,121



第2-1面 調査区平面図4 (1 : 100)



第2-1面 調査区平面図5 (1 : 100)



第2-1面 調査区平面図6 (1 : 100)

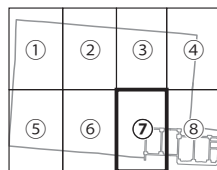
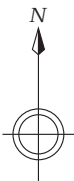
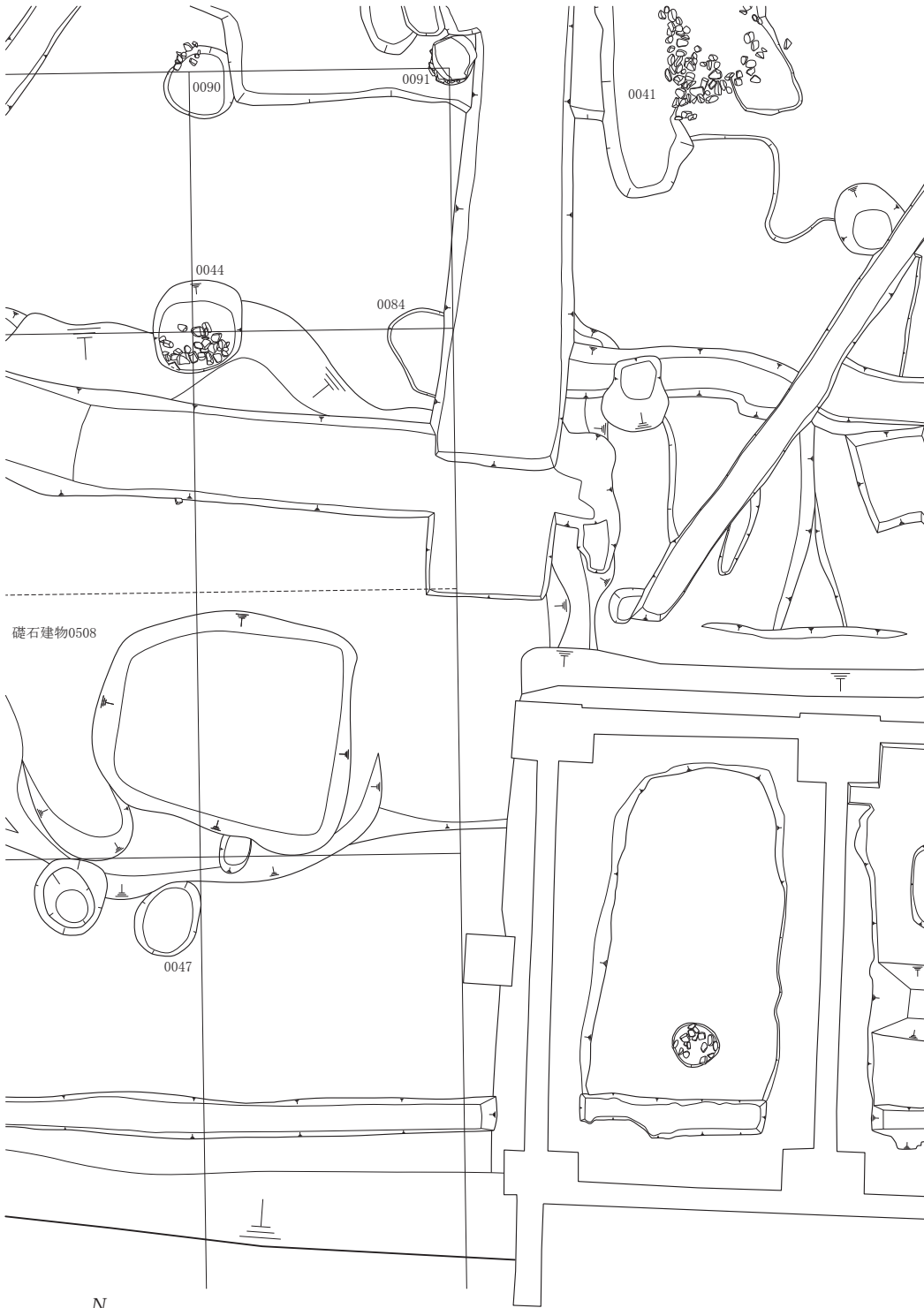
X=-107,131

X=-107,141

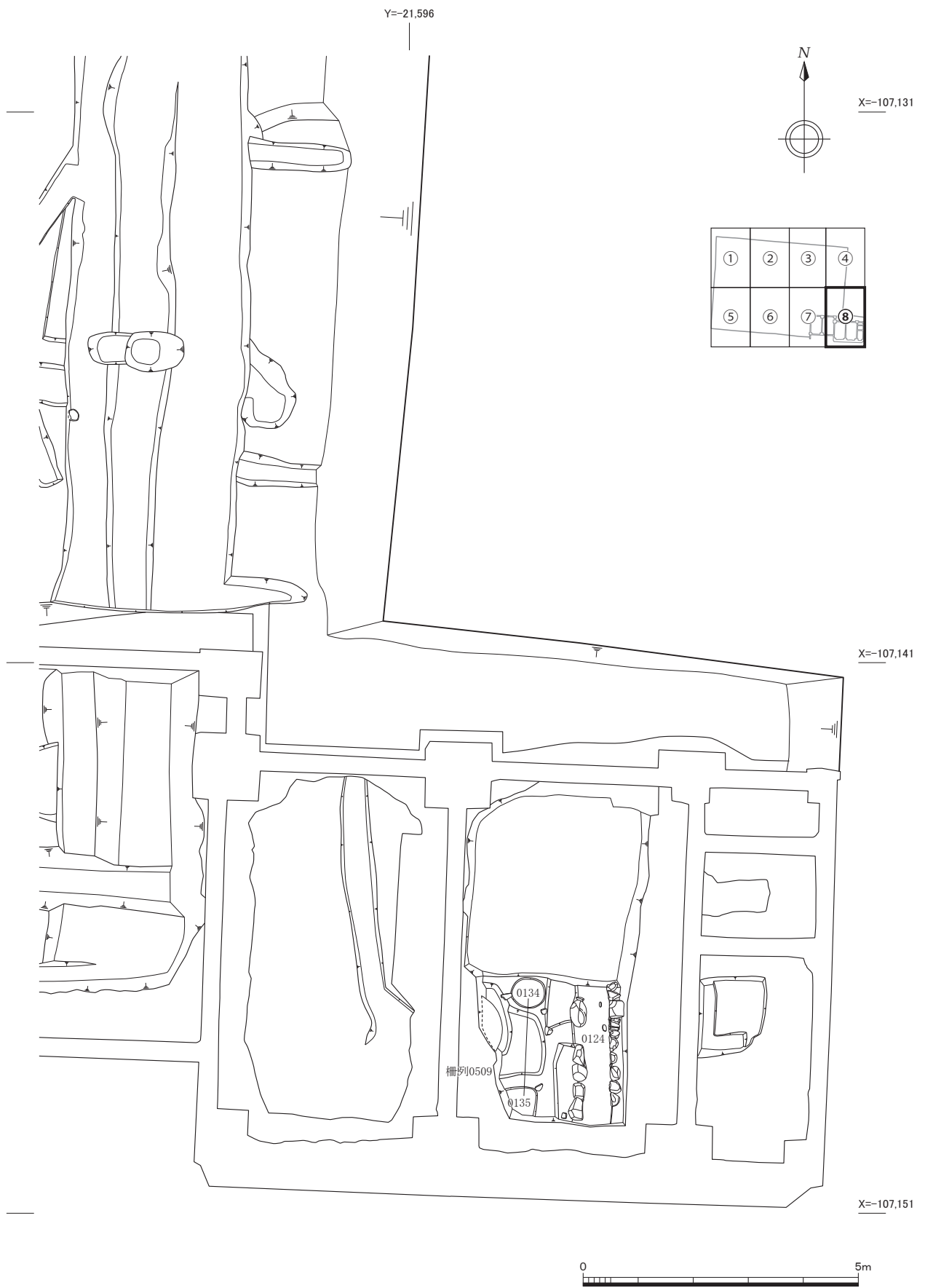
X=-107,151

Y=-21,616

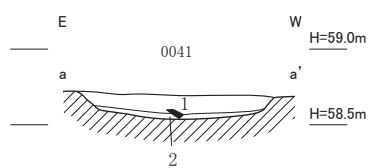
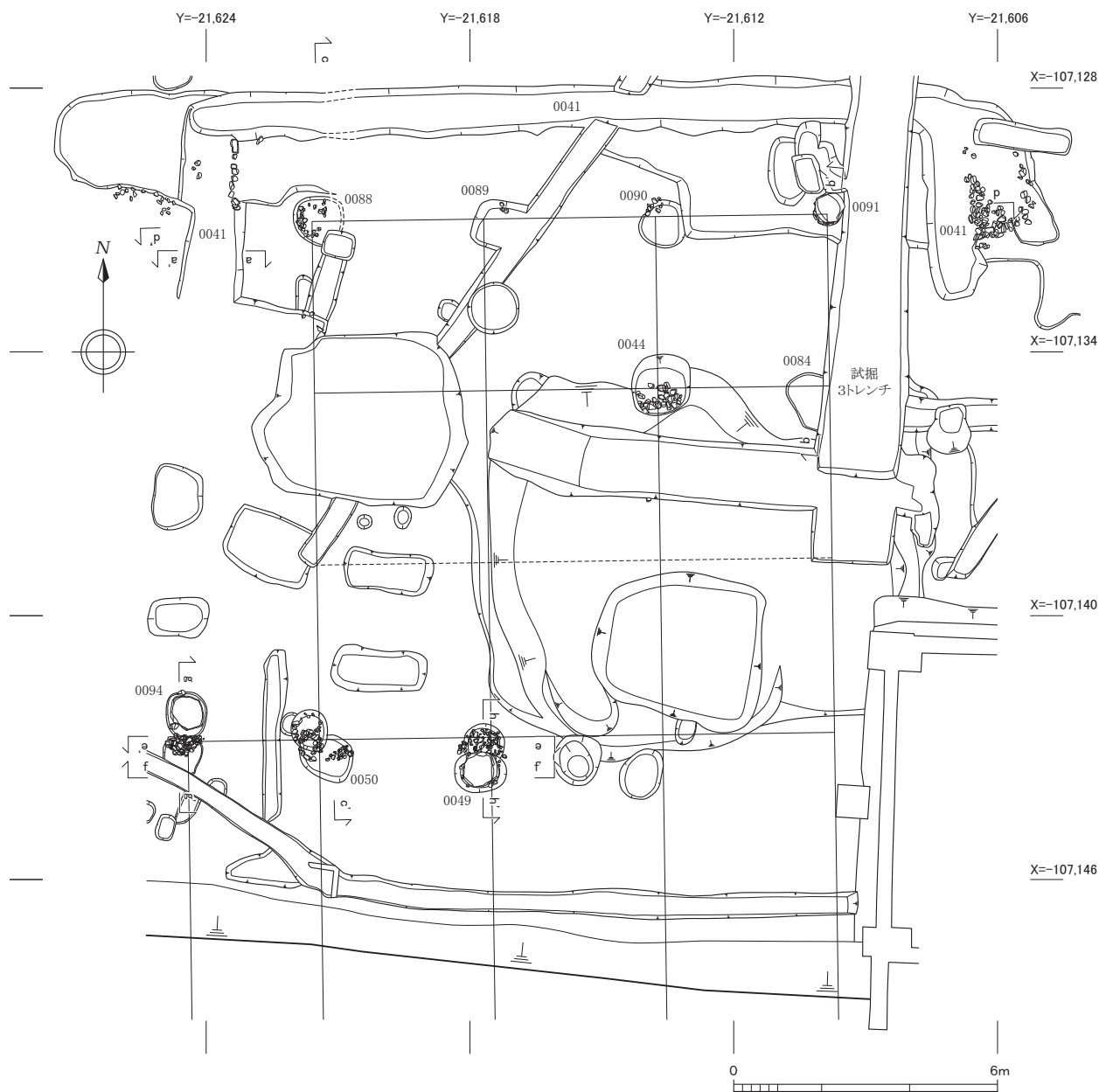
Y=-21,606



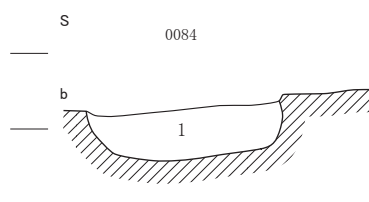
第2-1面 調査区平面図7 (1:100)



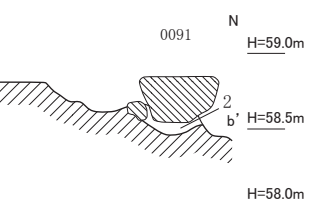
第2-1面 調査区平面図8 (1 : 100)



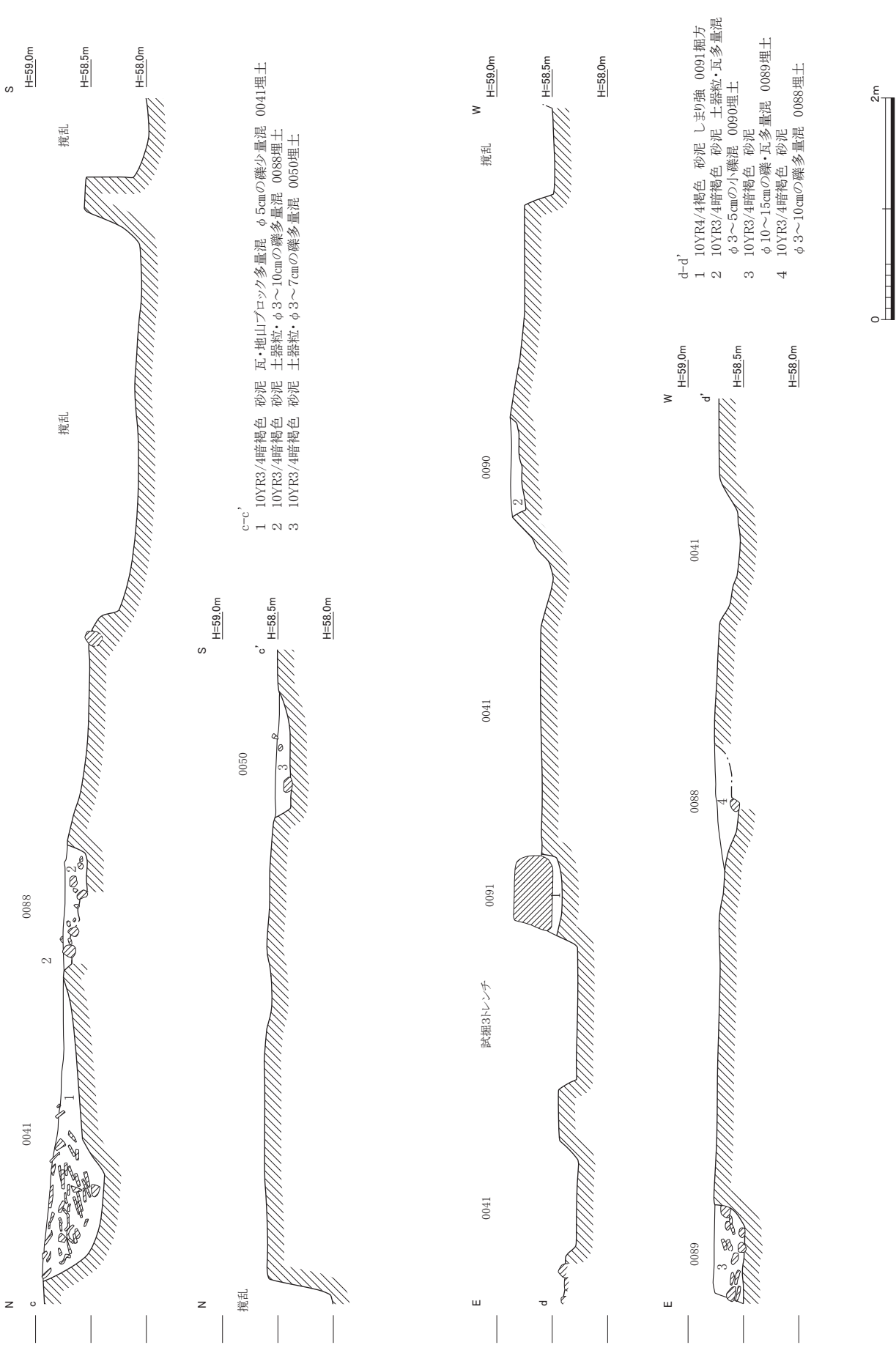
- a-a'
- 1 10YR3/4暗褐色 砂泥 土器粒少量混
 - 2 10YR3/4暗褐色 砂泥 土器粒少量混
10YR5/6黄褐色砂泥小ブロック多量混



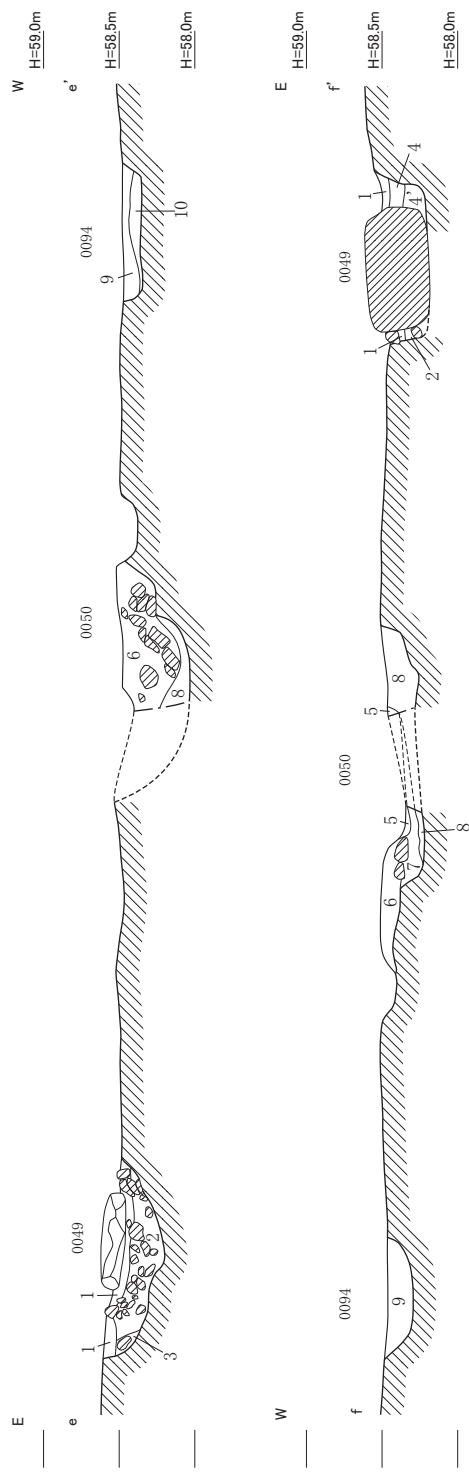
- b-b'
- 1 10YR3/3暗褐色 砂泥 φ3~5cmの小礫・地山ブロック混 0084埋土
 - 2 10YR4/4褐色 砂泥 しまり強 0091掘方



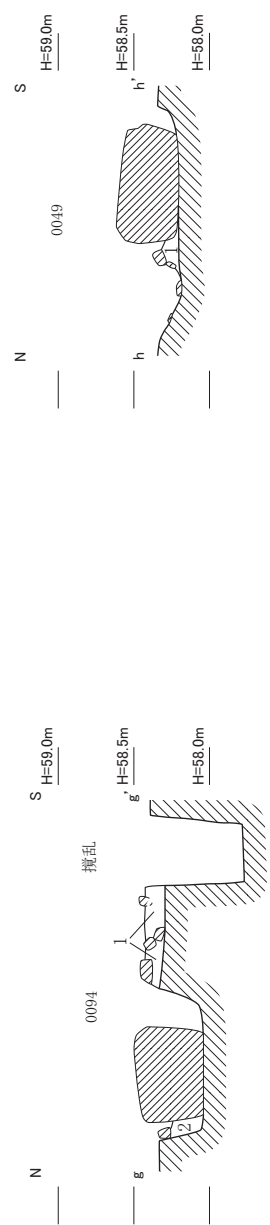
礎石建物0508、溝0041平面図（1：150）、溝0041断面図、礎石建物0508断面図1（1：50）



礎石建物 0508 断面図 2 (1 : 50)



- c-c'・d-d'
- | | | | | |
|----|----------------|----|--------------------|-----|
| 1 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | 地山ブロック | 混 |
| 2 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | 地山ブロック・φ3～10cm程の根石 | 多量混 |
| 3 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | 地山ブロック・φ10cm程の礫混 | |
| 4 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | 土器粒少量混 | |
| 4' | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | φ3～10cmの根石混 | |
| 5 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | 土器粒・φ3～10cmの根石 | 多量混 |
| 6 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | 土器粒・φ3～10cmの根石 | 多量混 |
| 7 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | 土器粒少量混 | |
| 8 | 10YR4/3にぶい、黄褐色 | 砂泥 | φ3～7cmの根石 | 多量混 |
| 9 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | 土器粒・φ5～10cmの根石 | 多量混 |
| 10 | 10YR4/3にぶい、黄褐色 | 砂泥 | 土器粒・φ3～7cmの根石 | 混 |

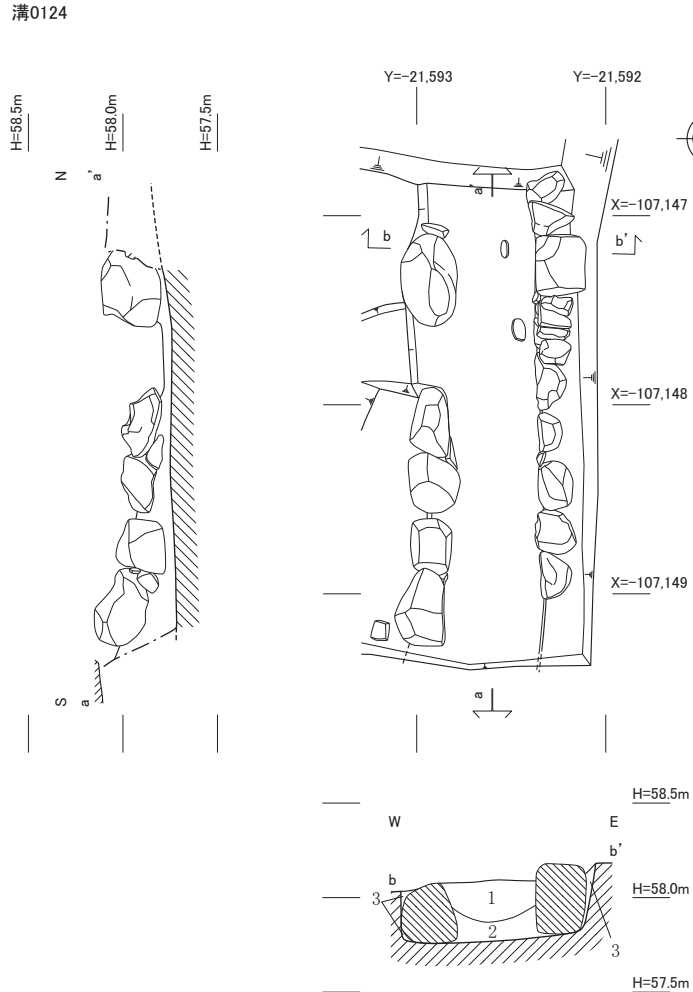


- g-g'
- | | | | | | |
|---|----------------|----|---------------|-----|--------|
| 1 | 10YR4/4褐色 | 砂泥 | φ3～10cmの大礫 | 多量混 | 土器粒少量混 |
| 2 | 10YR4/3にぶい、黄褐色 | 砂泥 | 土器粒・φ3～7cmの根石 | 混 | |
- h-h'
- | | | | | |
|---|------------|----|--------------------|-----|
| 1 | 10YR3/4暗褐色 | 砂泥 | 地山ブロック・φ3～10cm程の根石 | 多量混 |
|---|------------|----|--------------------|-----|



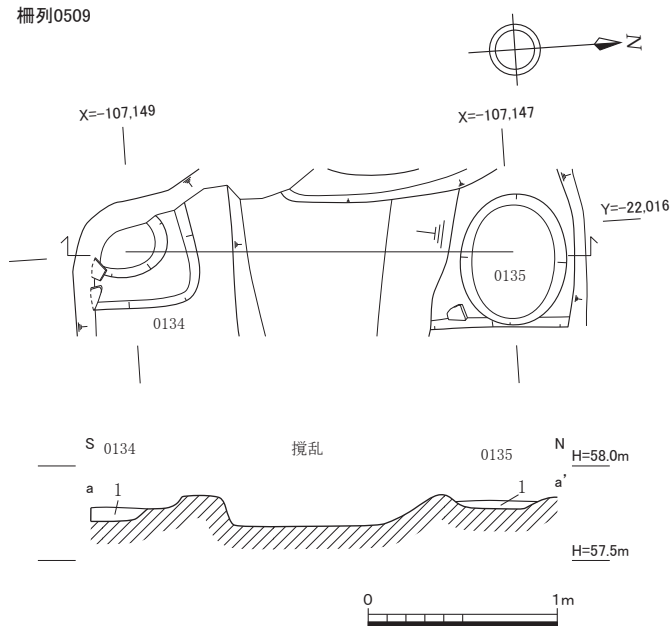
礎石建物0508断面図3 (1:50)

溝0124



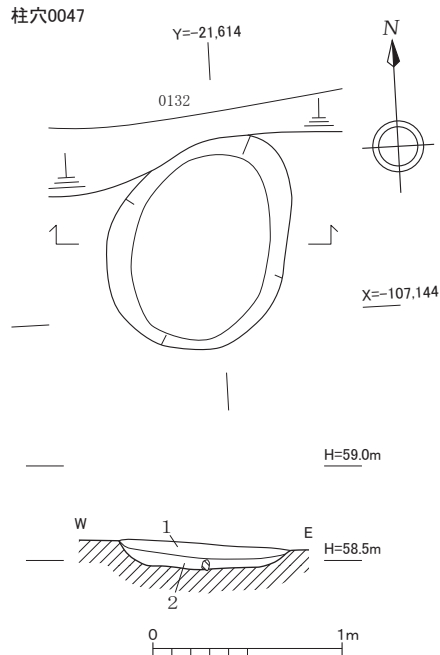
- 1 10YR3/4暗褐色 細粒砂 ϕ 2cm程の小石・瓦片多量混
- 2 10YR3/4暗褐色 細粒砂 ϕ 2cm程の小石・瓦片多量混
 ϕ 0.5~2cm程の炭多量混
- 3 10YR3/3暗褐色 砂泥 ϕ 5cm程の石多量混

柵列0509



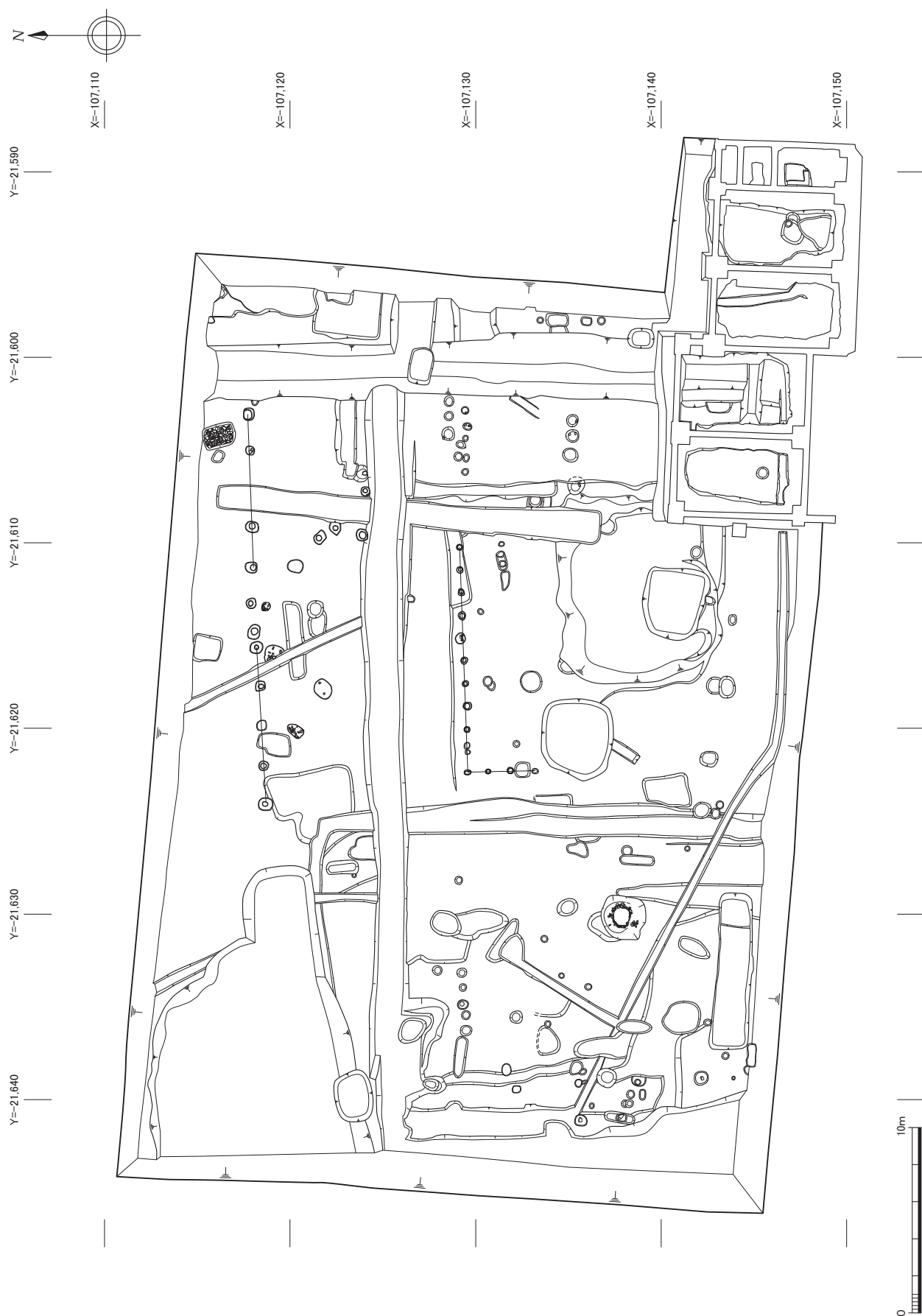
- 1 10YR3/4暗褐色 細粒砂
 ϕ 2~5cmの小石・瓦片多量混

柱穴0047



- 1 10YR3/4暗褐色 砂泥 瓦・土器粒多量混
- 2 10YR4/4褐色 砂泥 ϕ 1.5~3cmの小石混

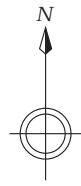
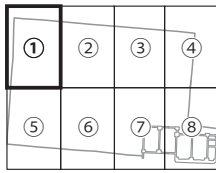
溝0124、柵列0509、柱穴0047平断面図 (1 : 40)



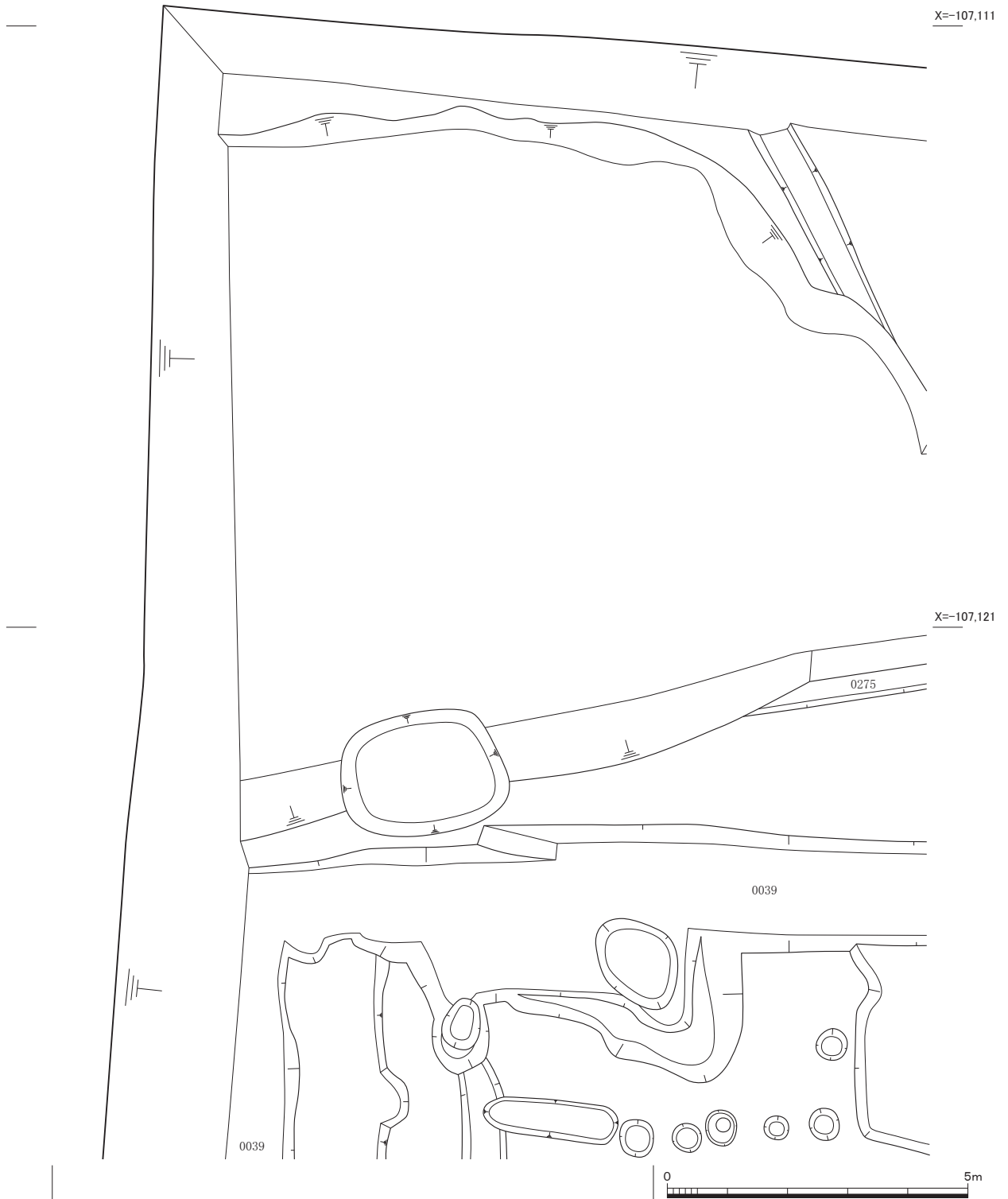
第2-2面 調査区全体平面図 (1 : 300)

Y=-21,646

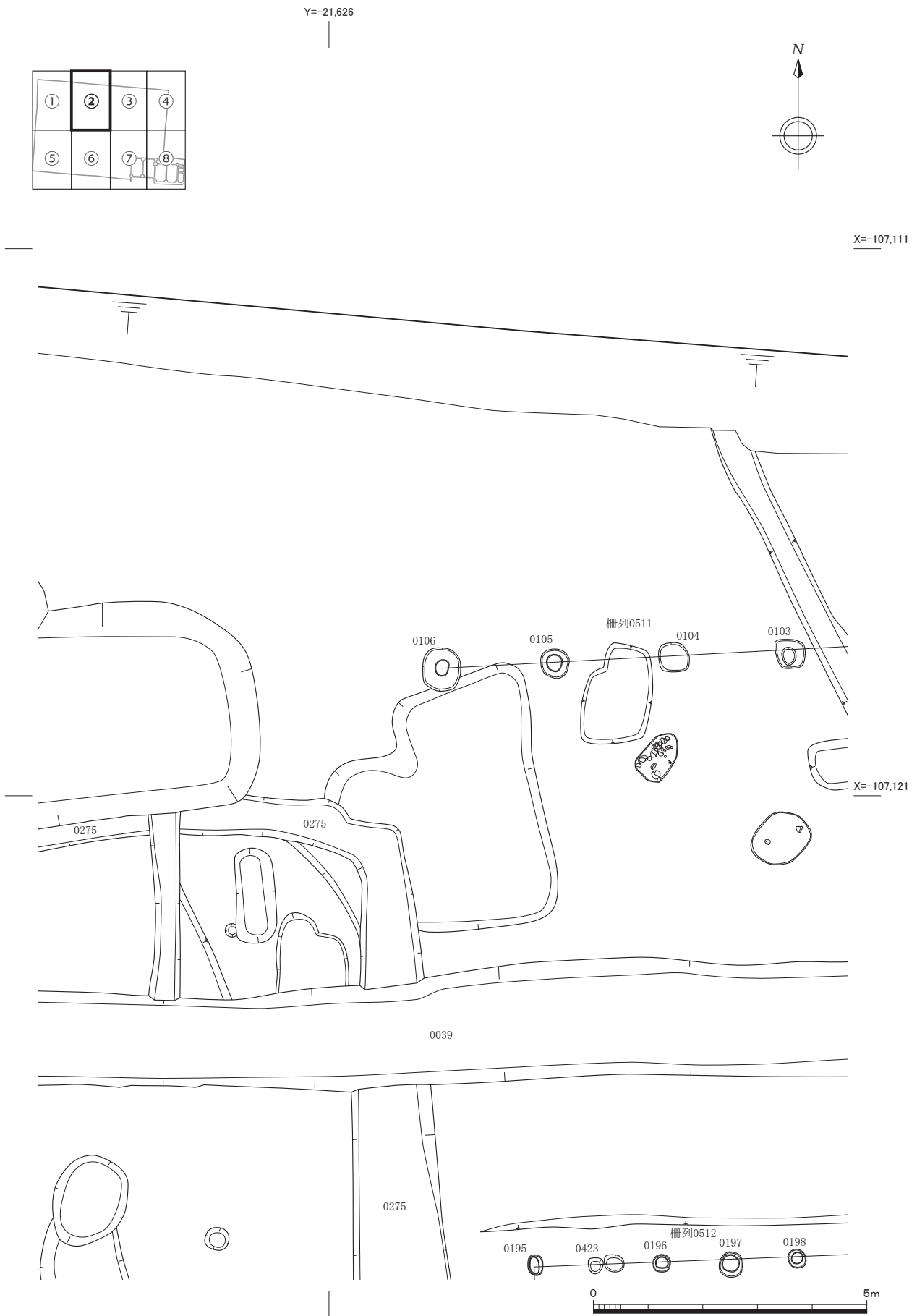
Y=-21,636



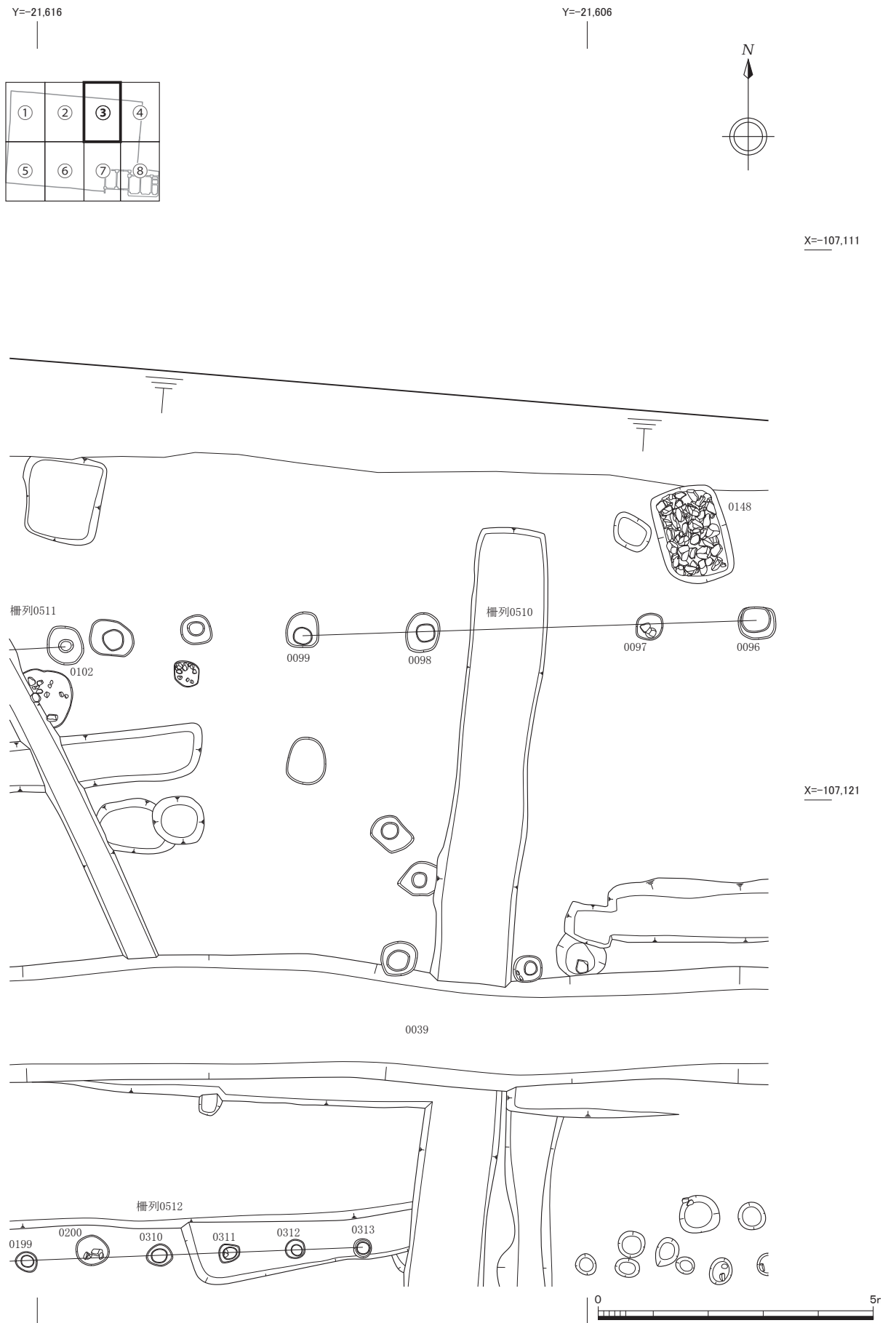
X=-107,111



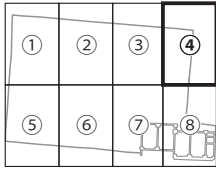
第2-2面 調査区平面図1 (1:100)



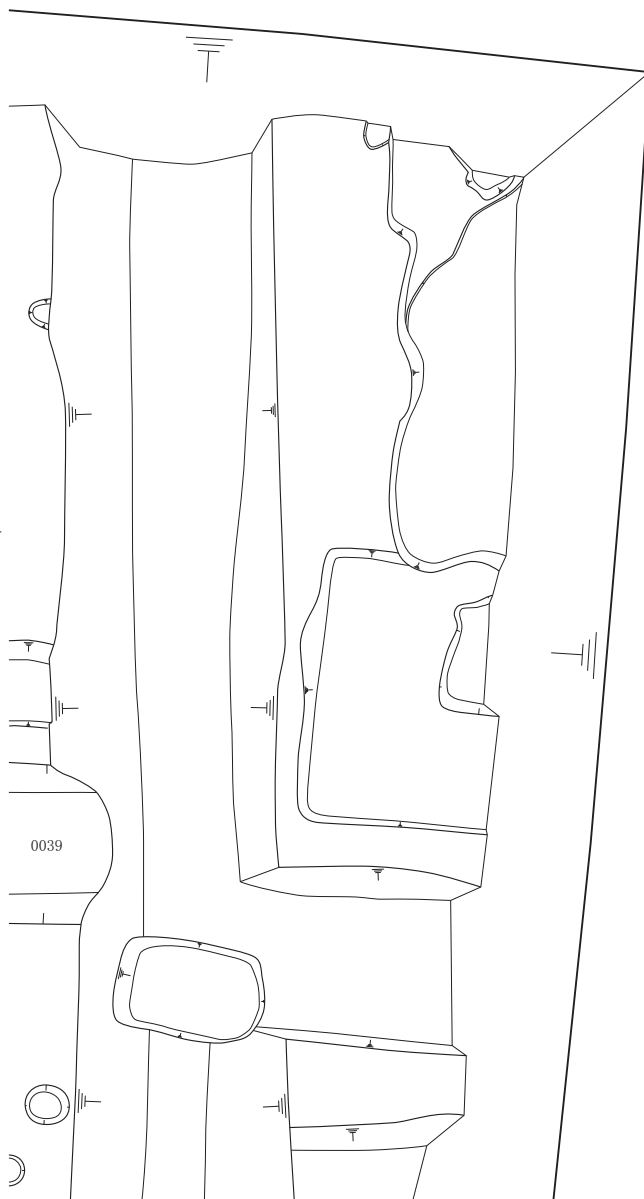
第2-2面 調査区平面図2 (1 : 100)



Y=-21,596



X=-107,111



X=-107,121



第2-2面 調査区平面図4 (1 : 100)

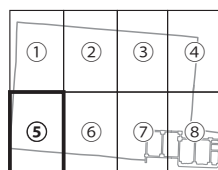
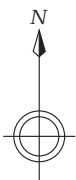
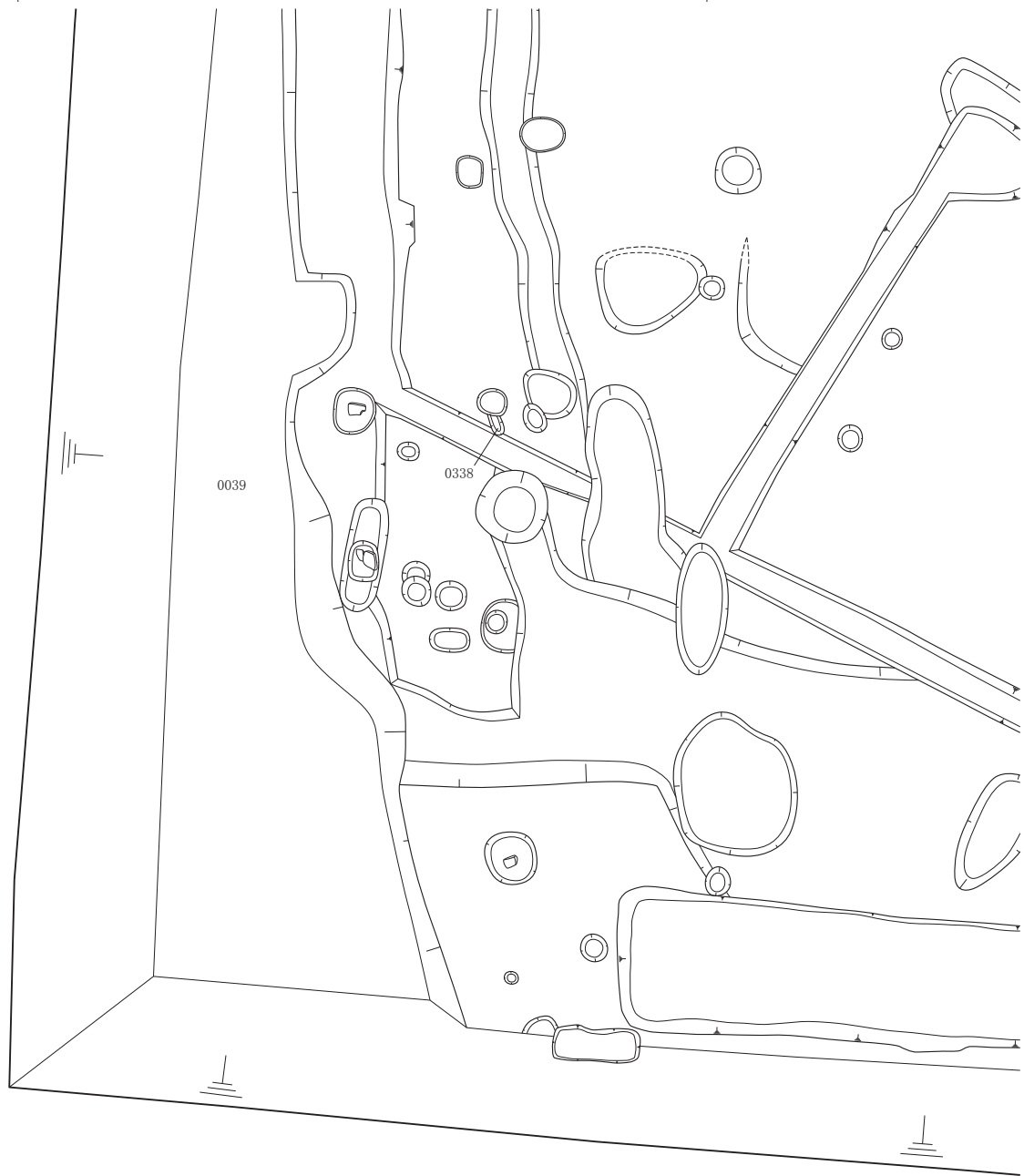
Y=-21,646

Y=-21,636

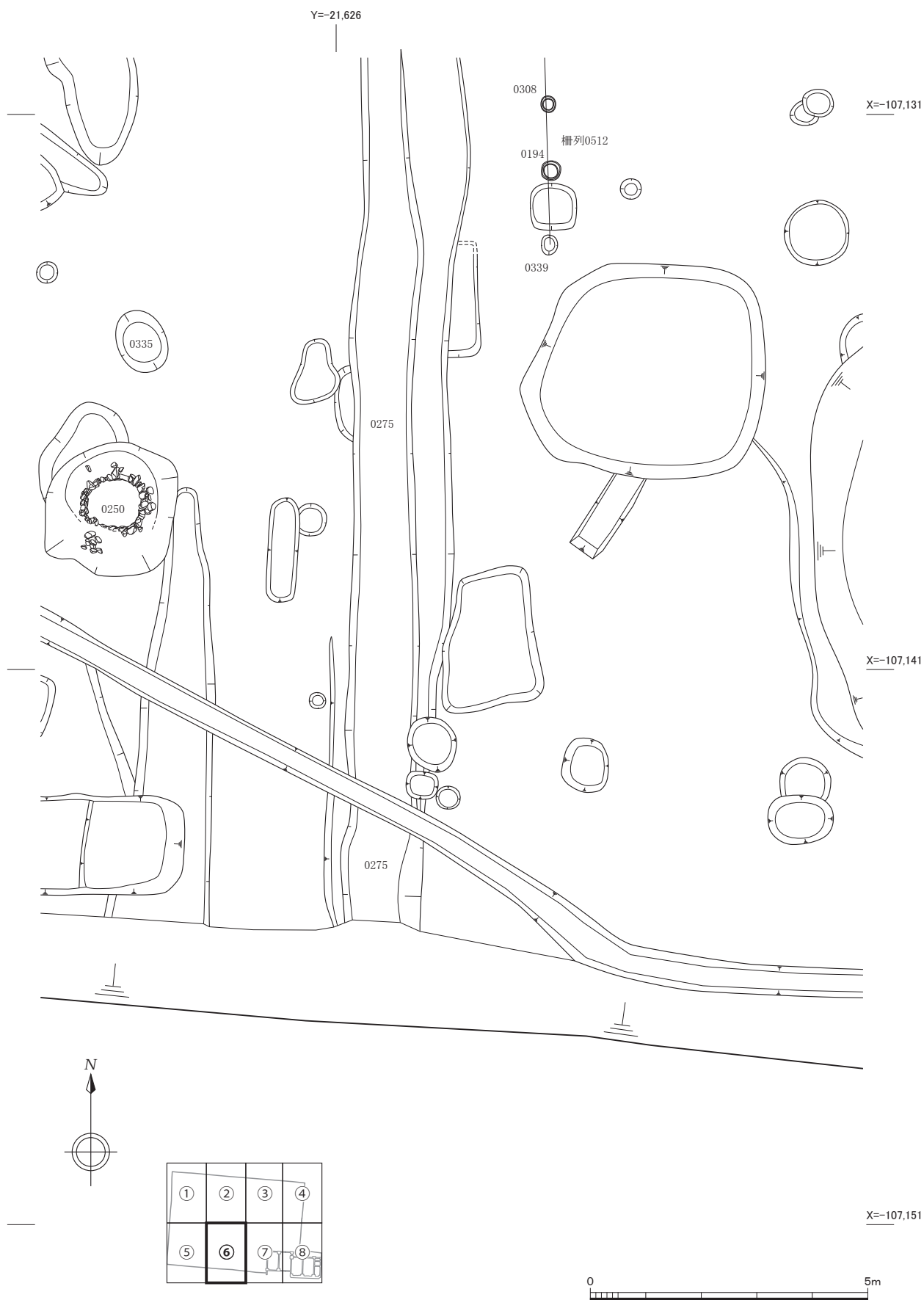
X=-107,131

X=-107,141

X=-107,151



第2-2面 調査区平面図5 (1 : 100)



第2-2面 調査区平面図6 (1 : 100)

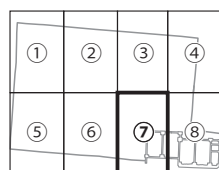
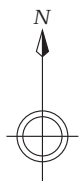
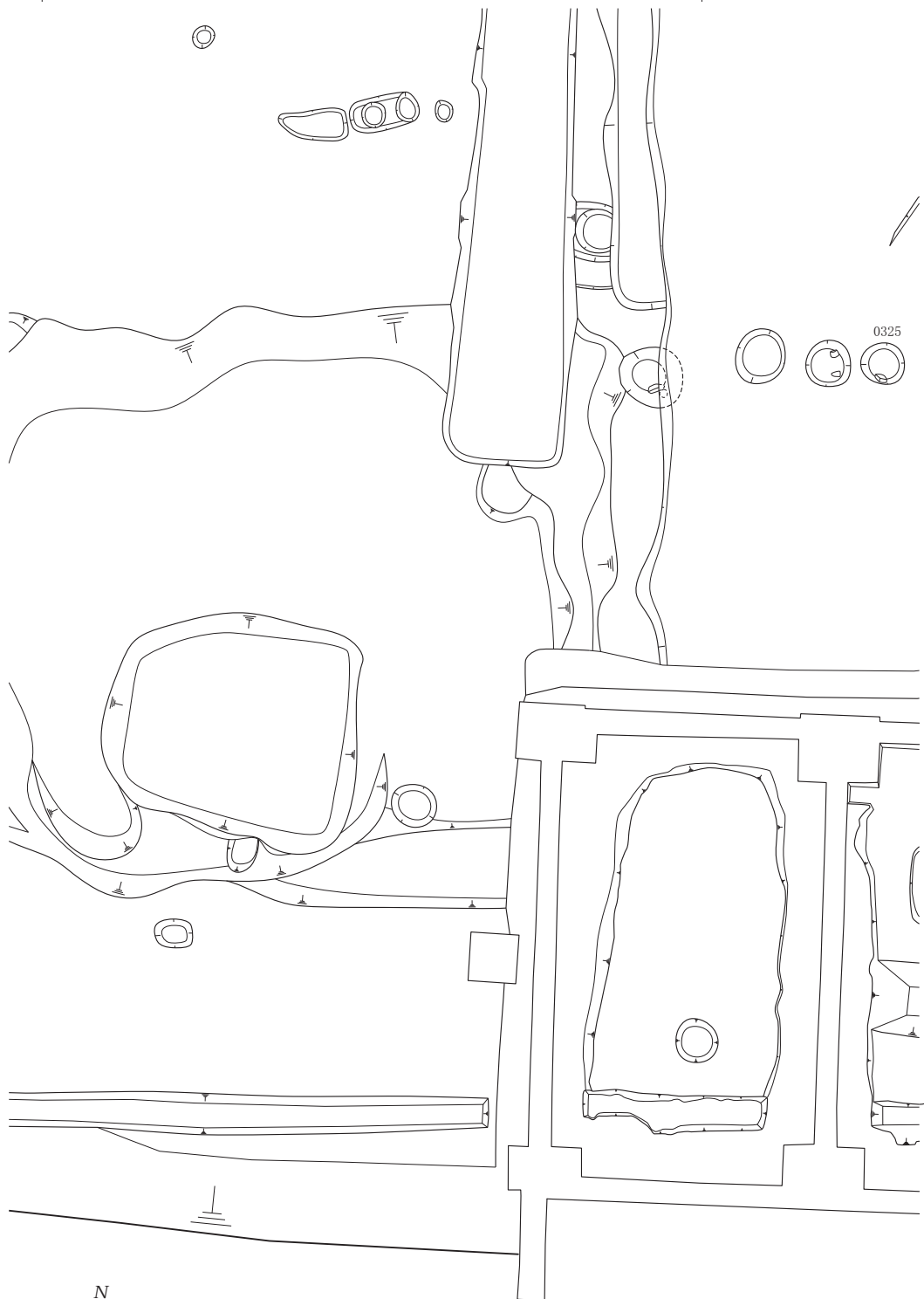
Y=-21,616

Y=-21,606

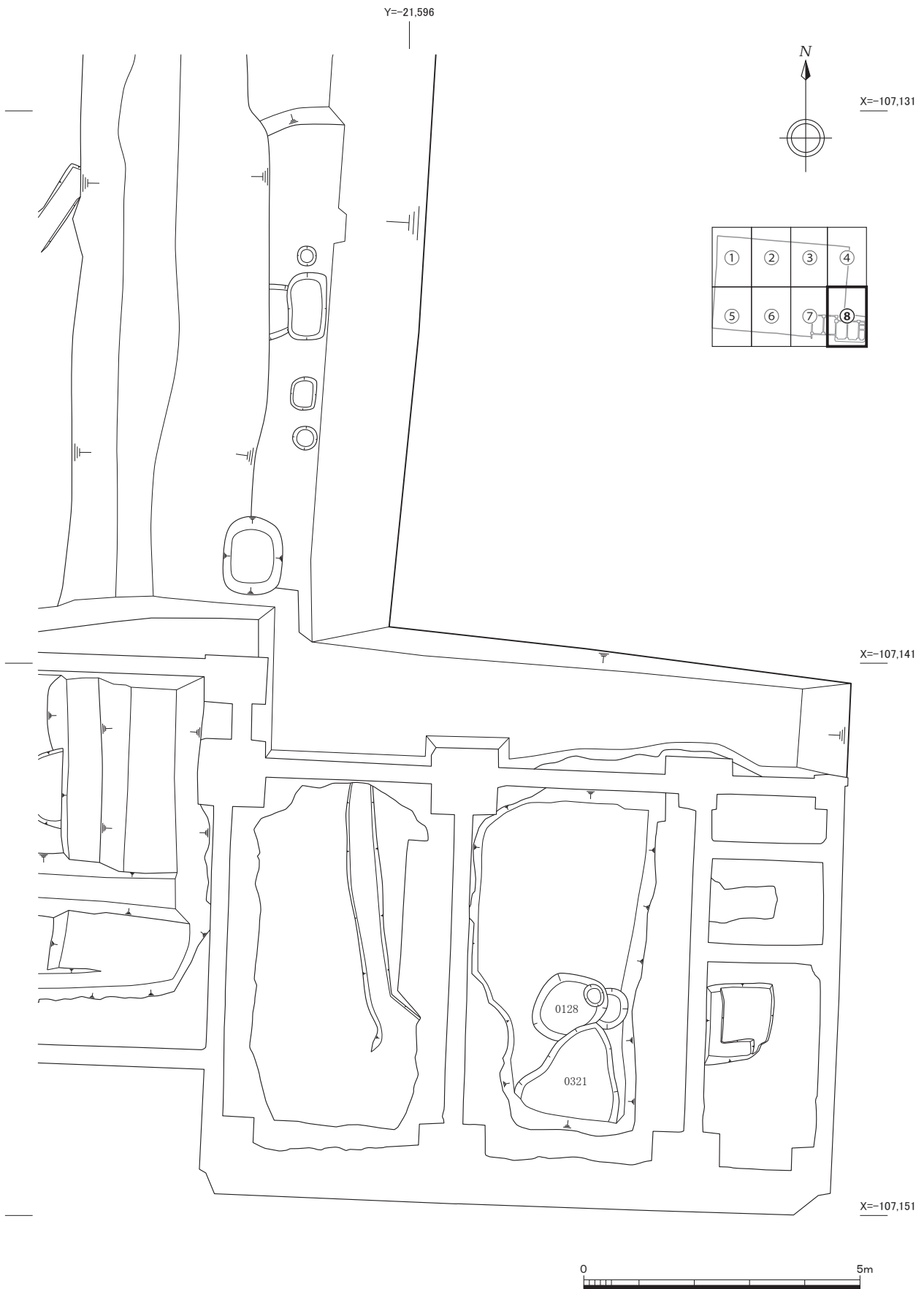
X=-107,131

X=-107,141

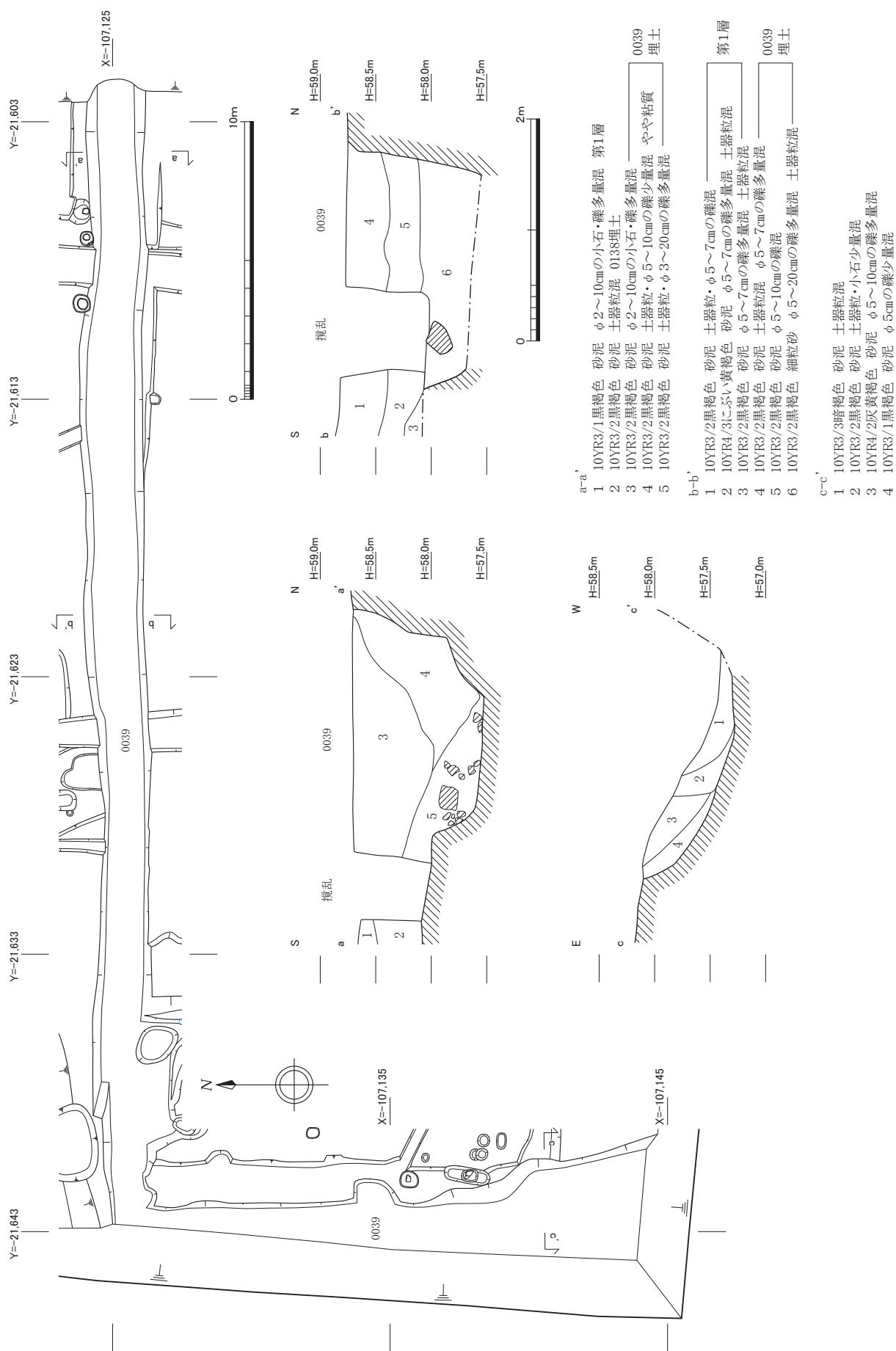
X=-107,151

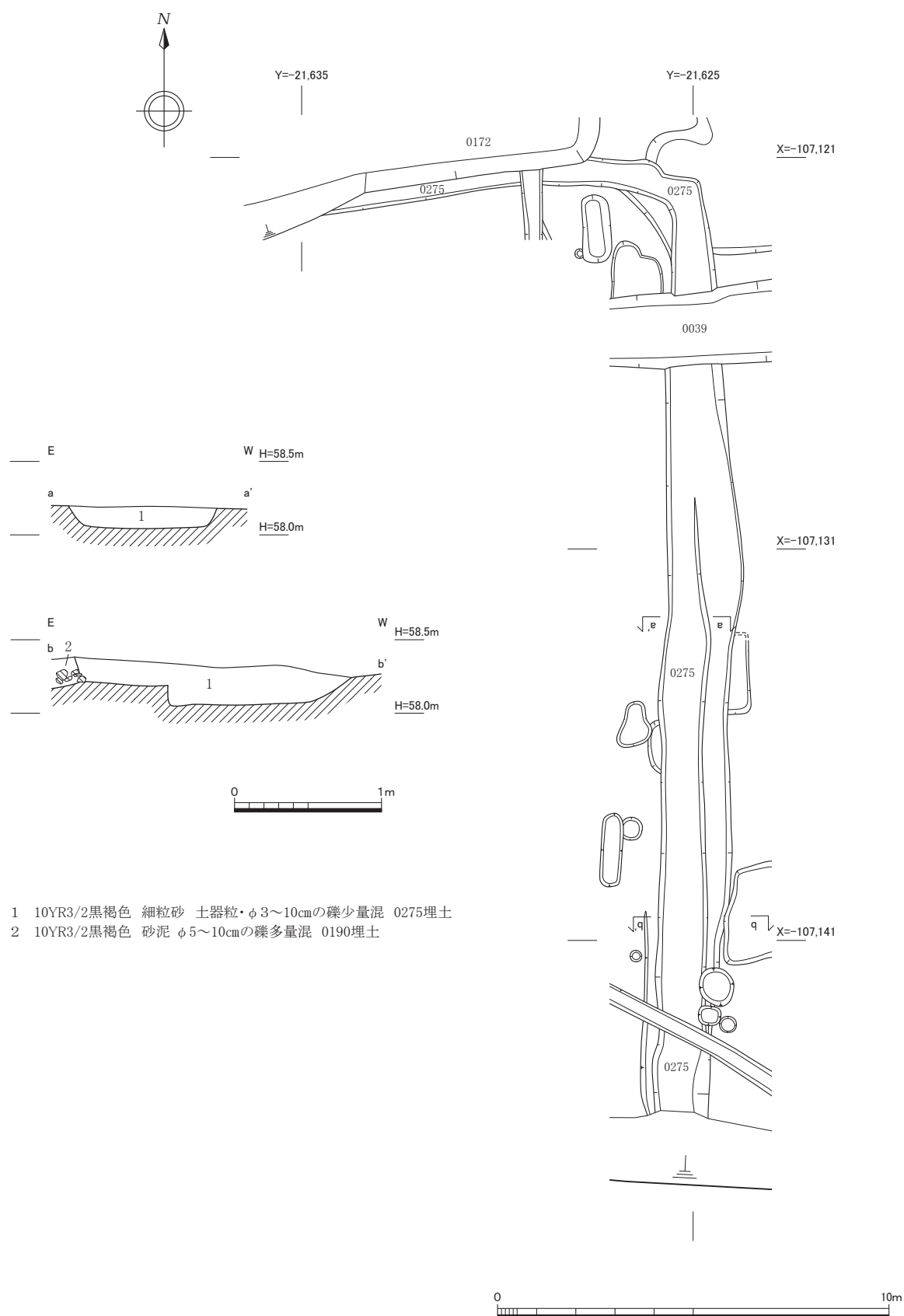


第2-2面 調査区平面図7 (1:100)

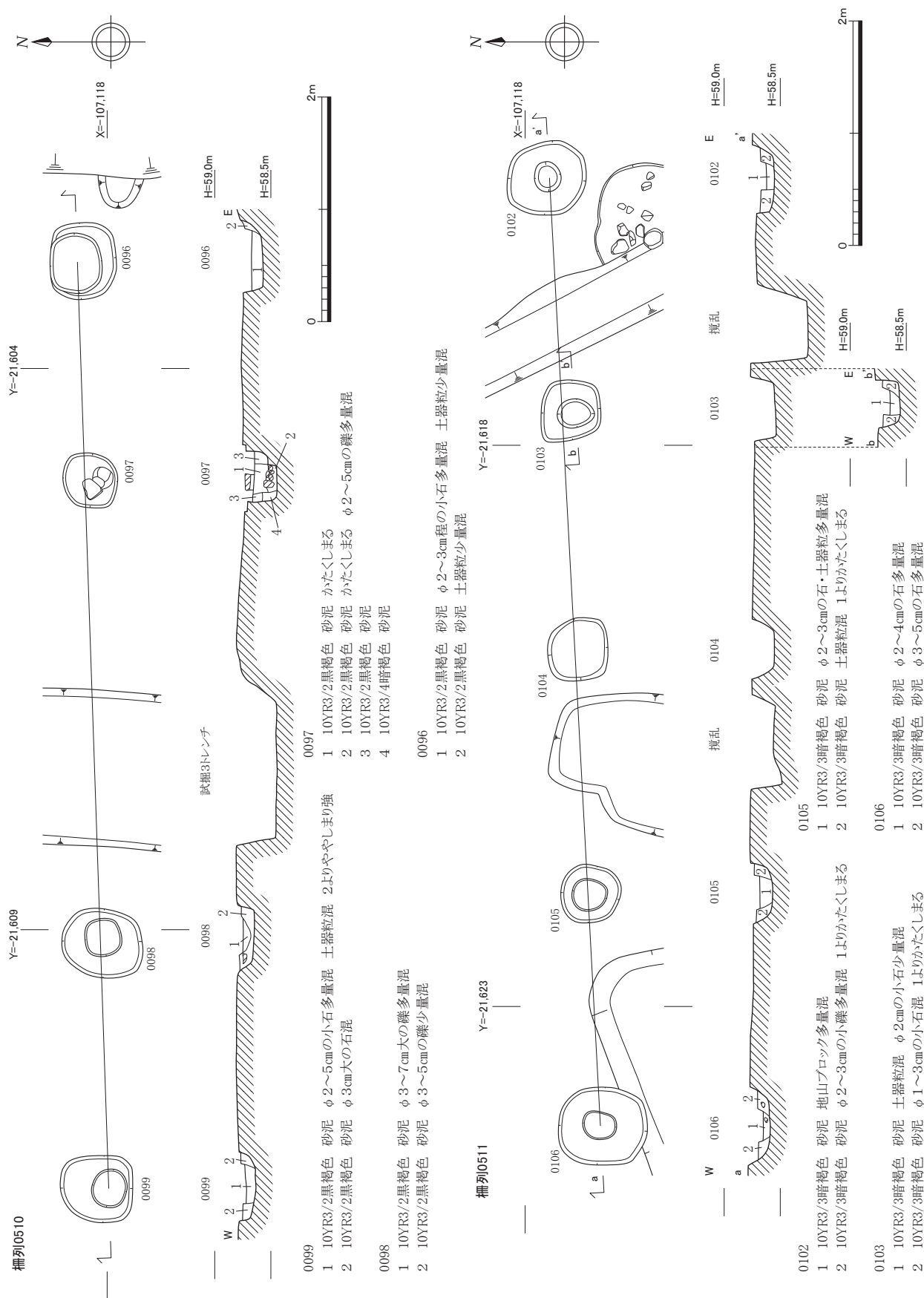


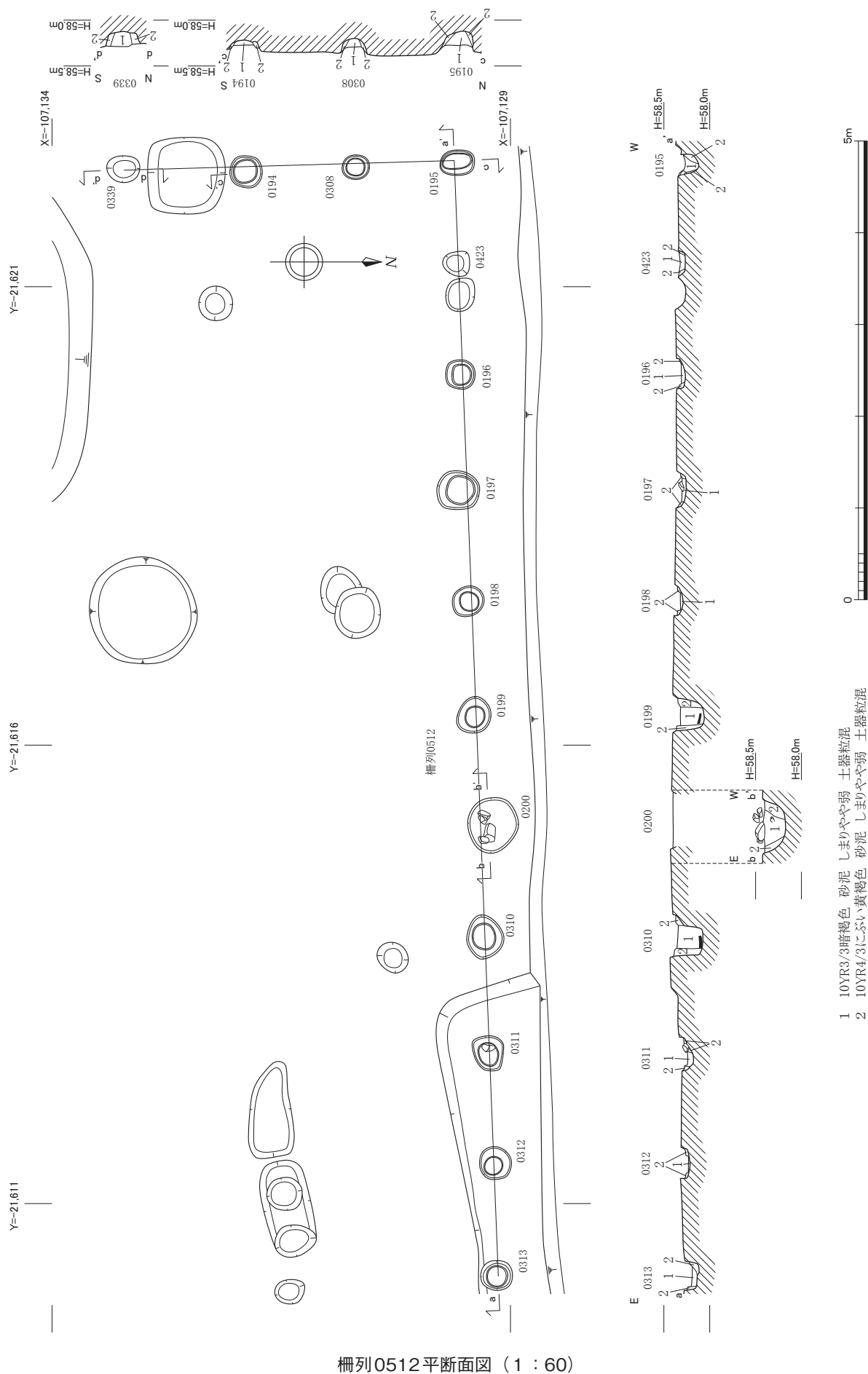
第2-2面 調査区平面図8 (1 : 100)

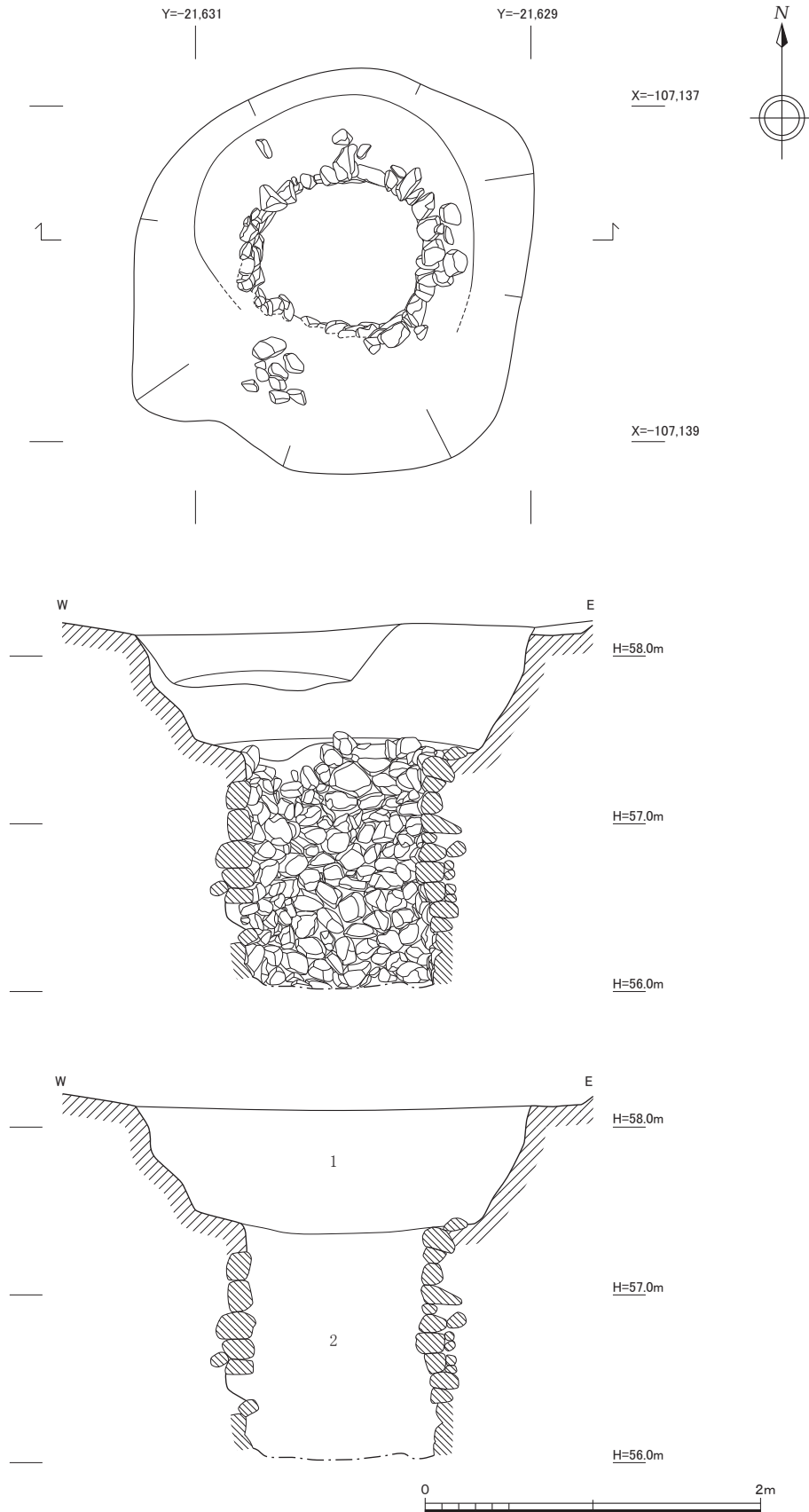




溝0275平面図（1 : 150）、断面図（1 : 40）

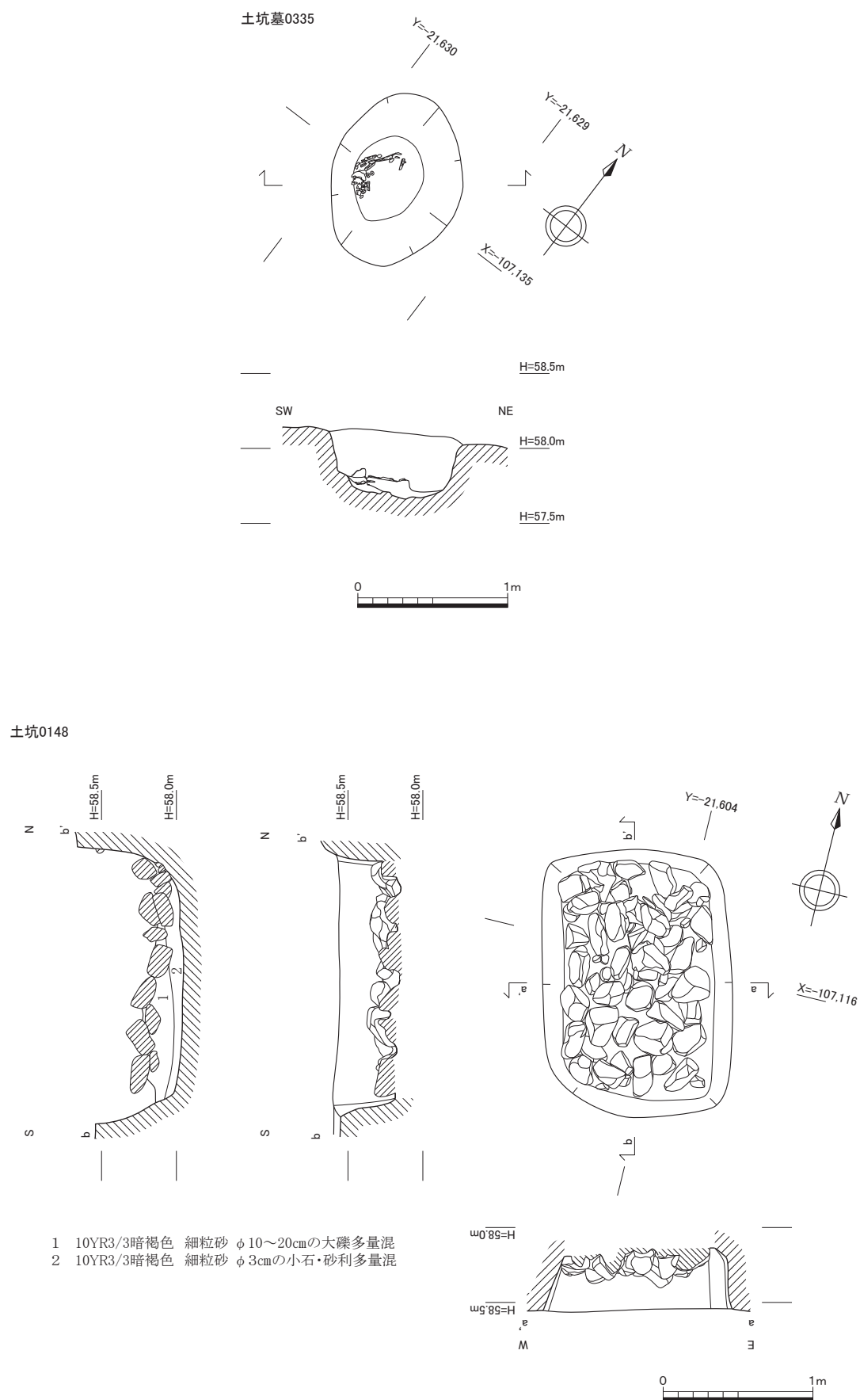






- 1 10YR3/2黒褐色 細粒砂 ϕ 5~10cmの石・礫多量混 土器片多量混
 2 10YR3/2黒褐色 砂泥 ϕ 5~10cmの石・礫混 しまり弱

井戸O250平立断面図（1：40）



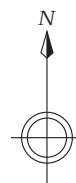
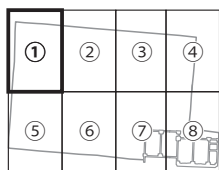
土坑墓0335平断面図（1：40）、土坑0148平立断面図（1：40）



第3面 調査区全体平面図 (1 : 300)

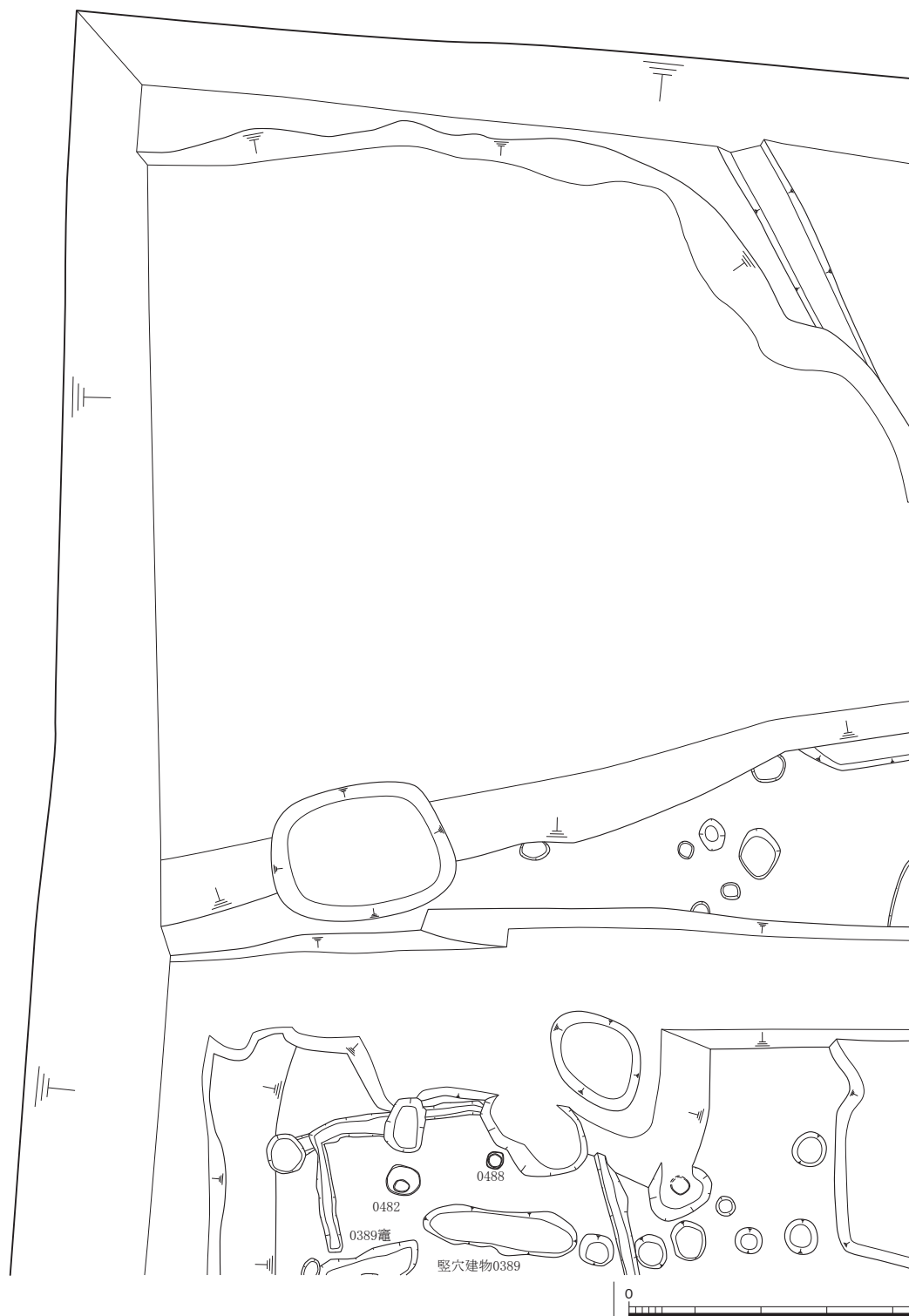
Y=-21,646

Y=-21,636

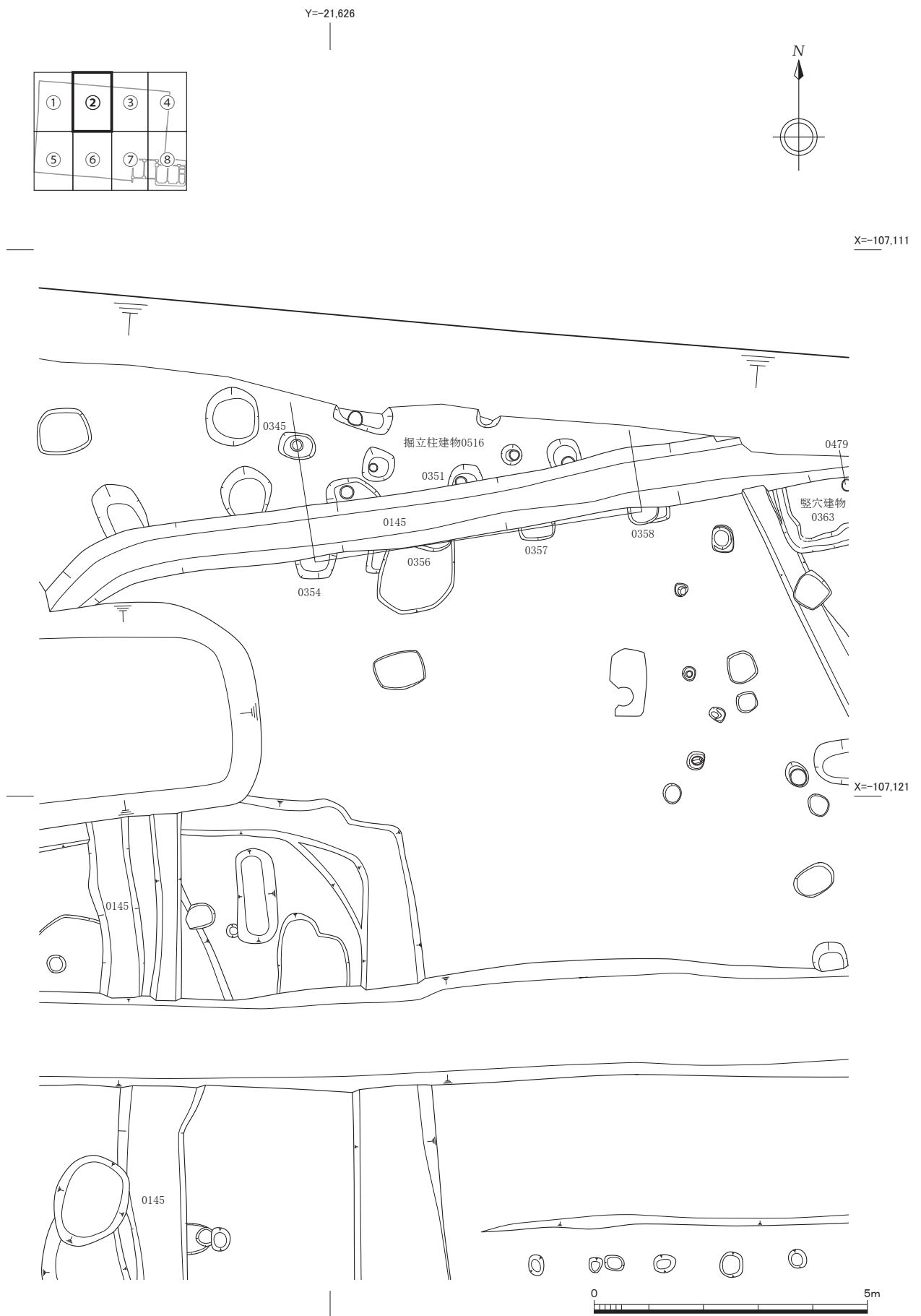


X=-107,111

X=-107,121



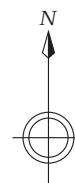
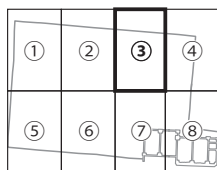
第3面 調査区平面図1 (1 : 100)



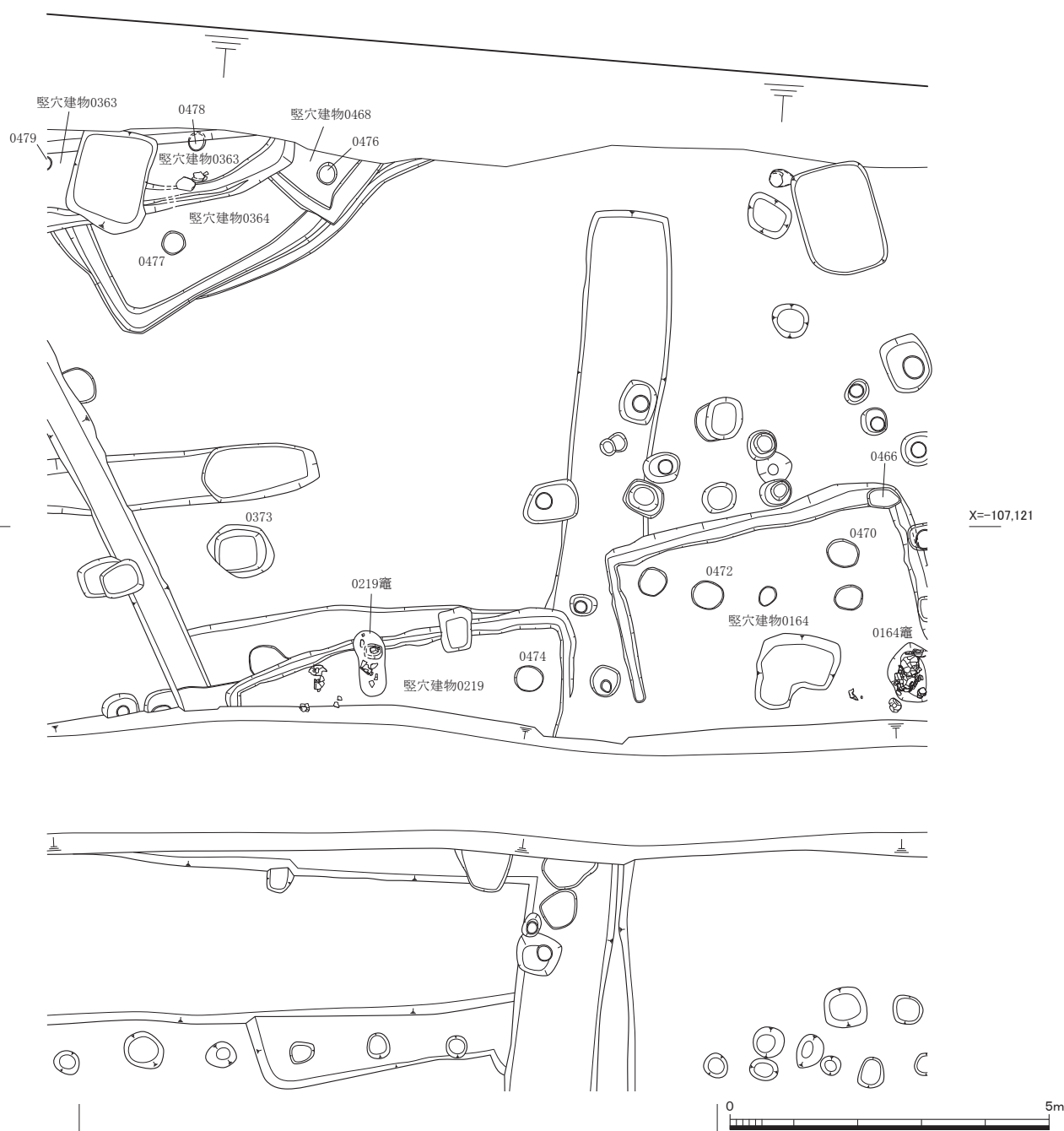
第3面 調査区平面図2 (1 : 100)

Y=-21,616

Y=-21,606

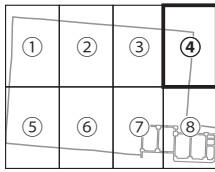
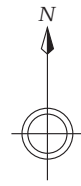


X=-107,111

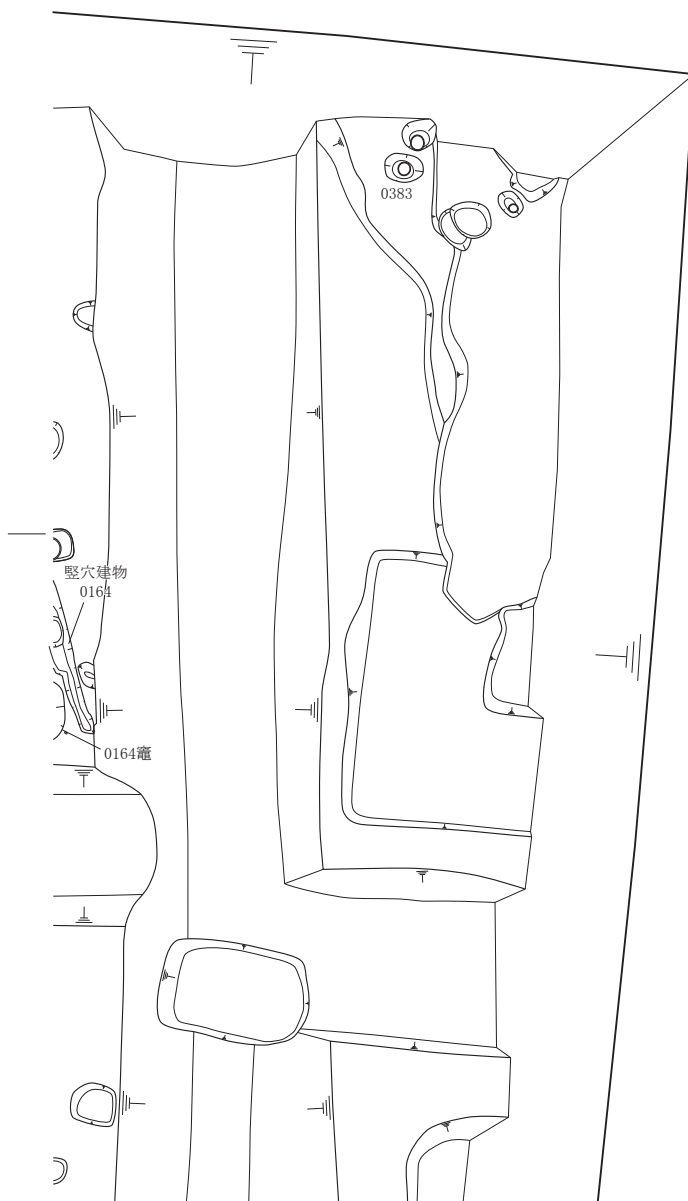


第3面 調査区平面図3 (1 : 100)

Y=-21,596



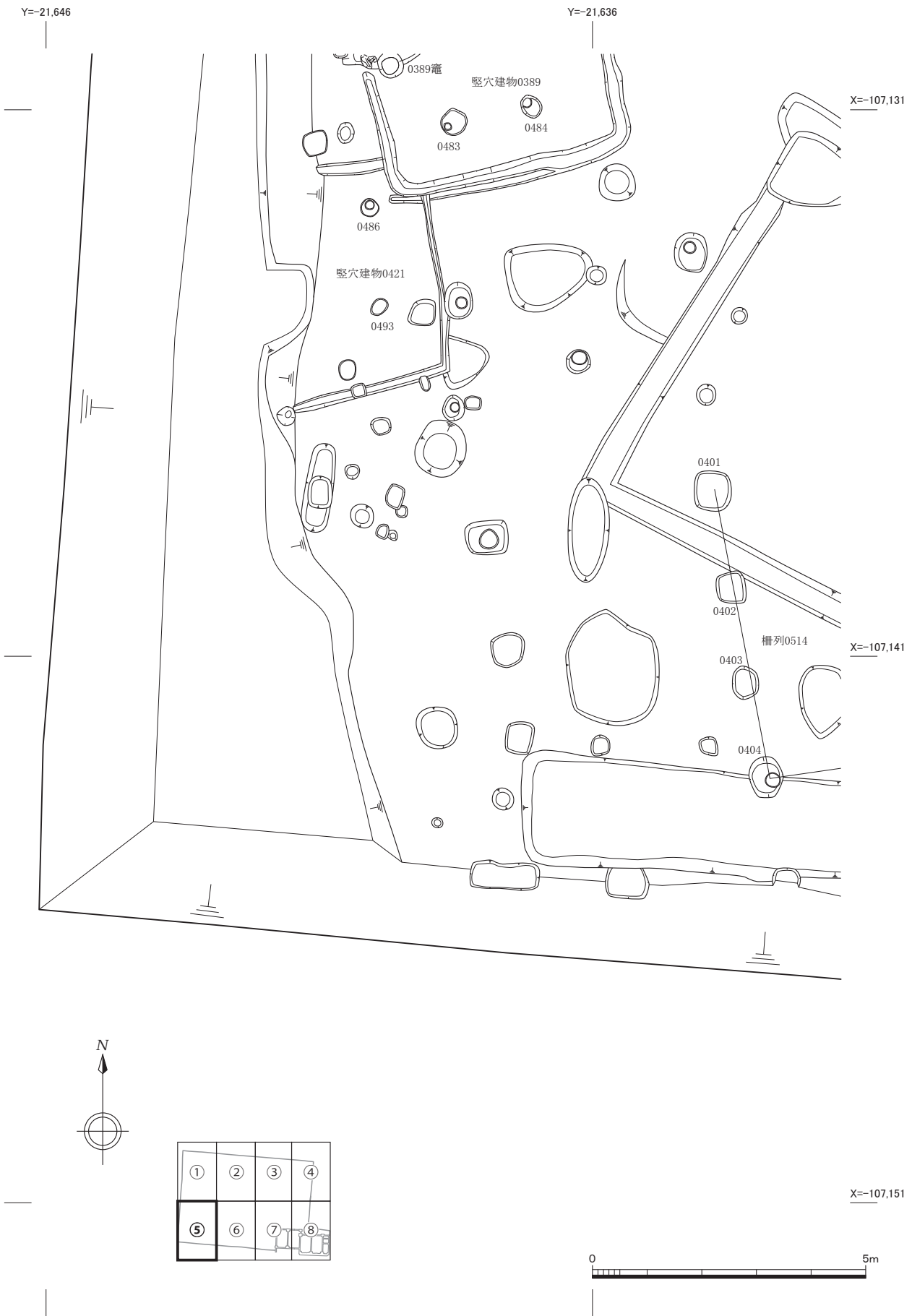
X=-107,111



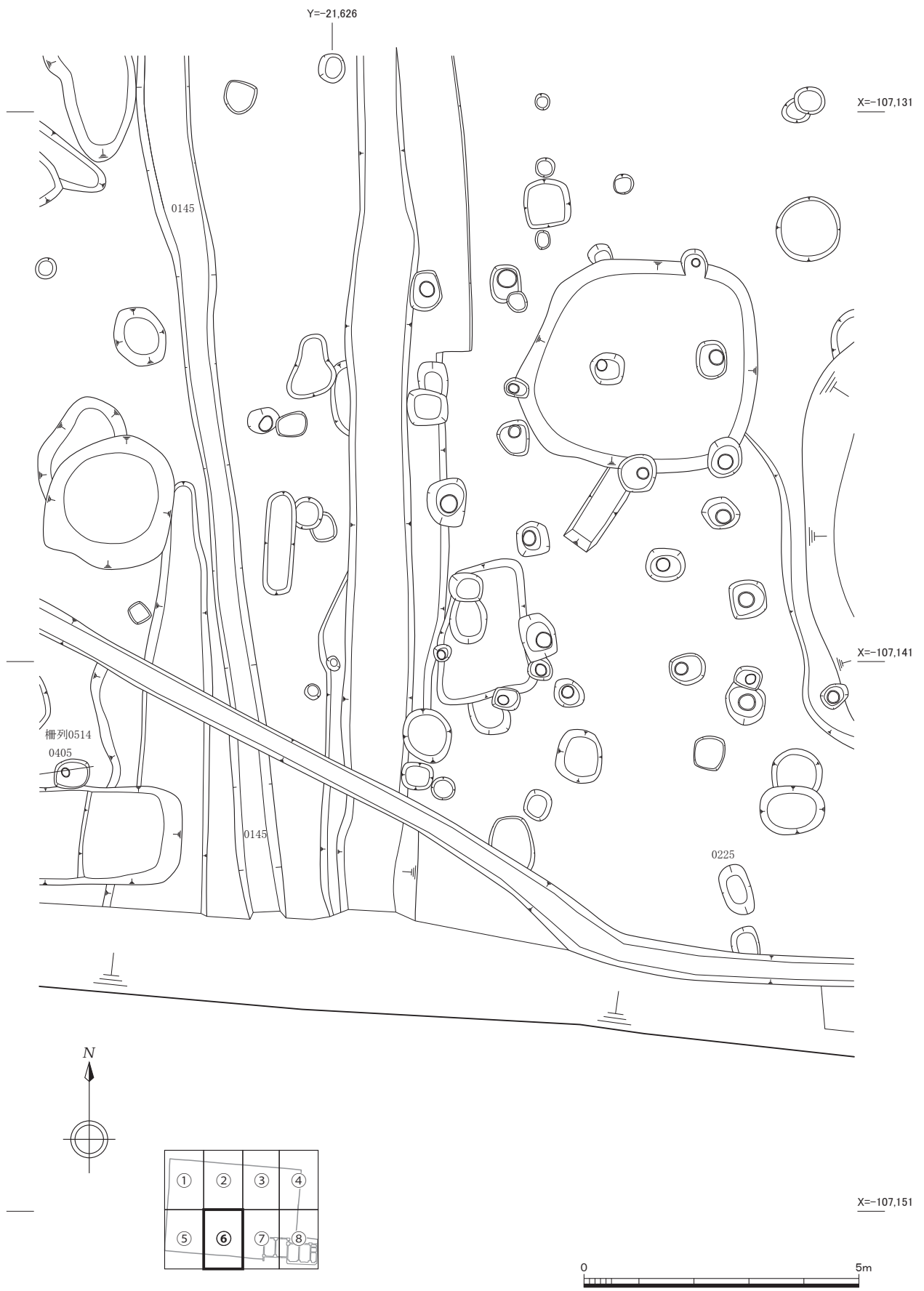
X=-107,121



第3面 調査区平面図4 (1 : 100)



第3面 調査区平面図5 (1 : 100)

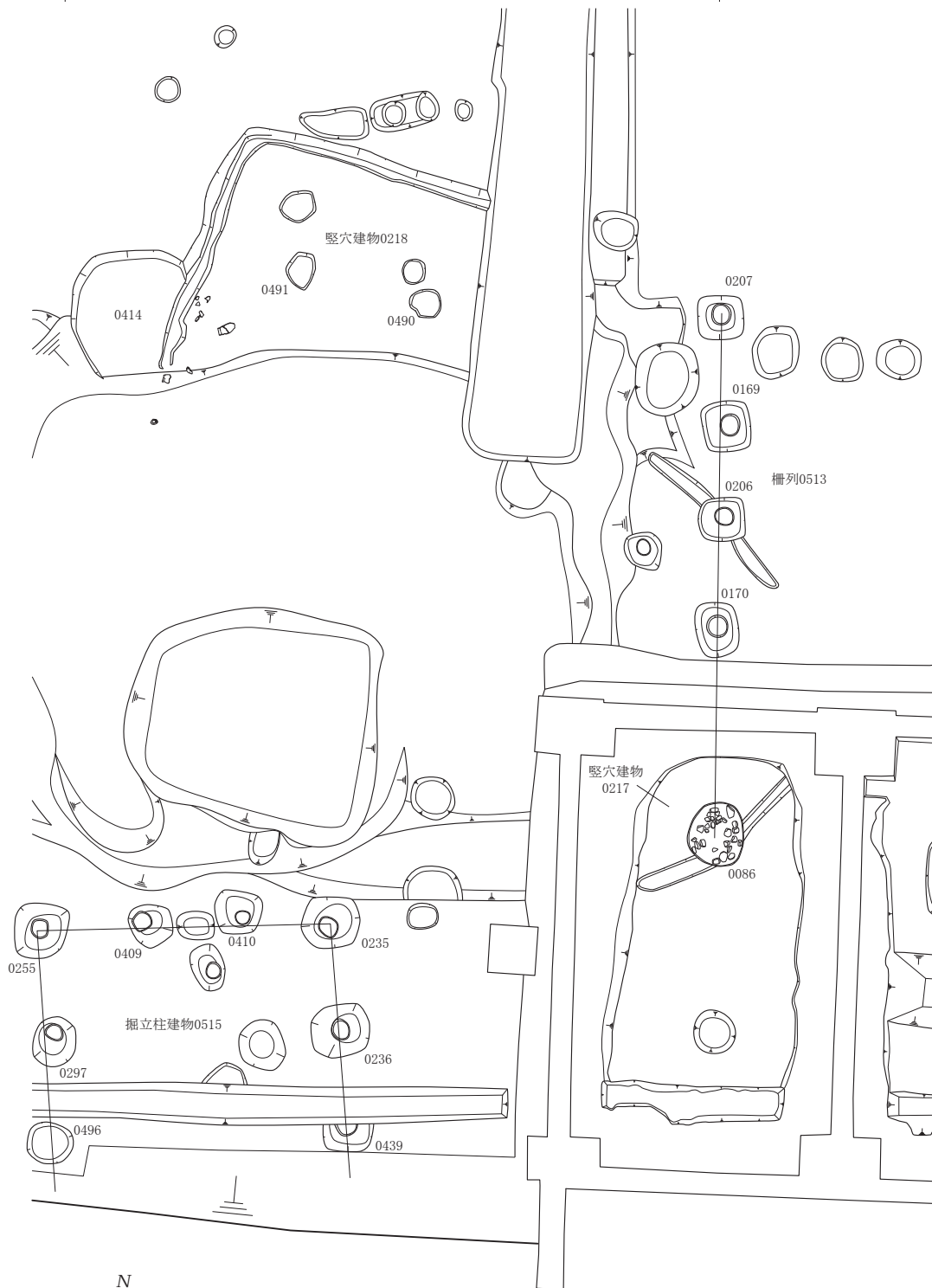


第3面 調査区平面図6 (1 : 100)

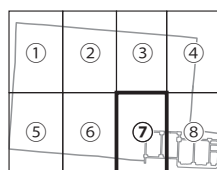
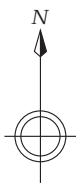
Y=-21,616

Y=-21,606

X=-107,131



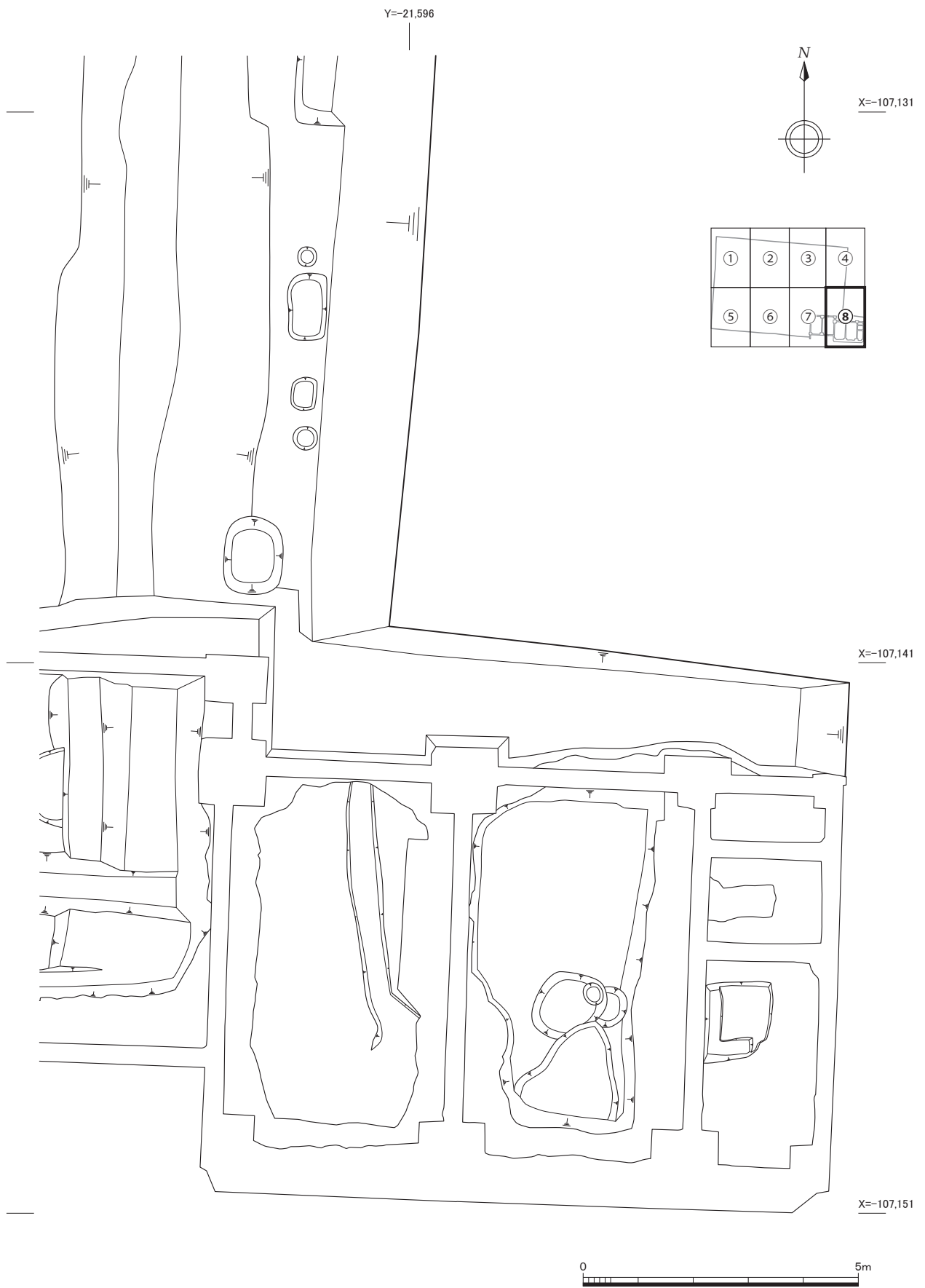
X=-107,141



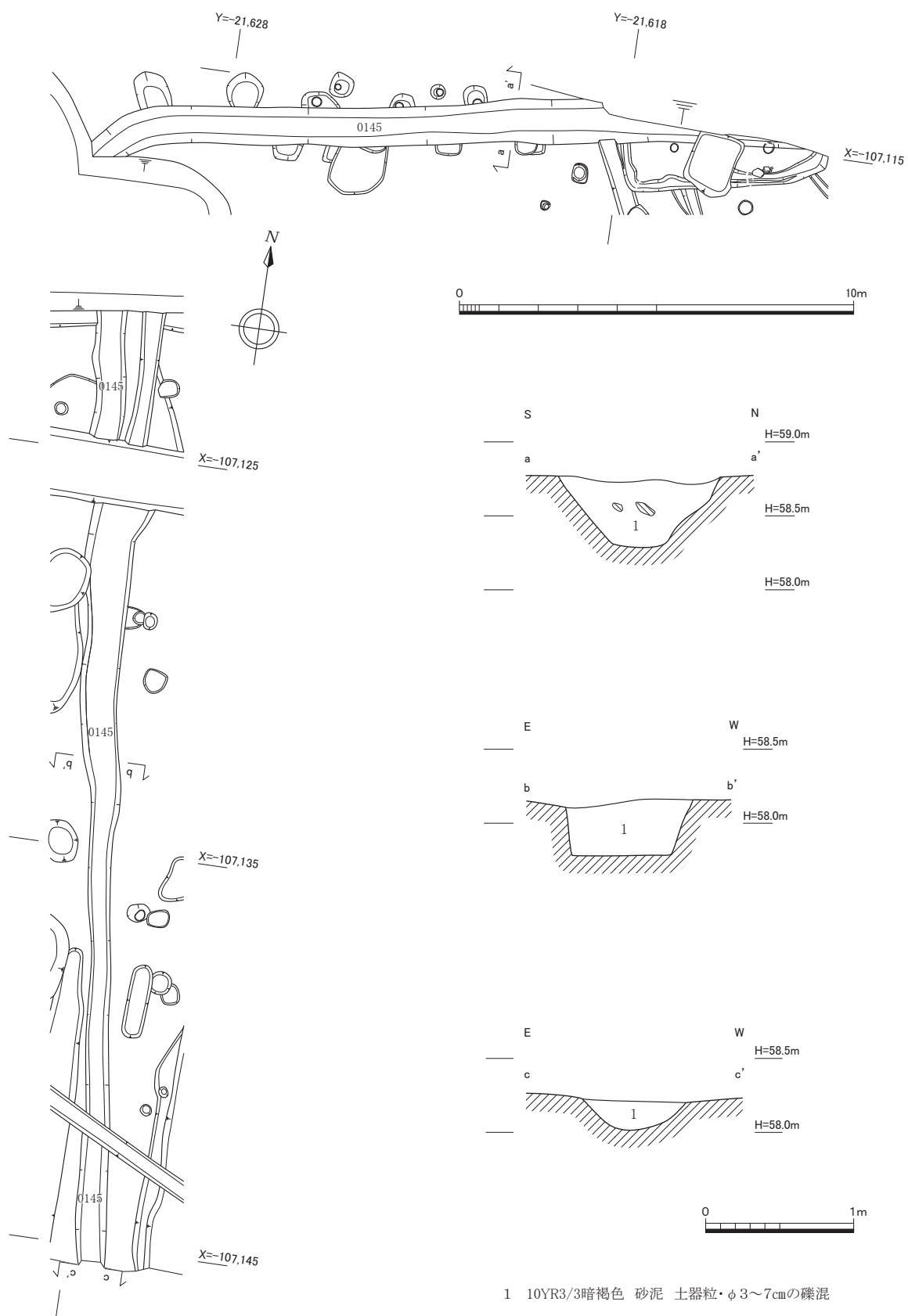
X=-107,151



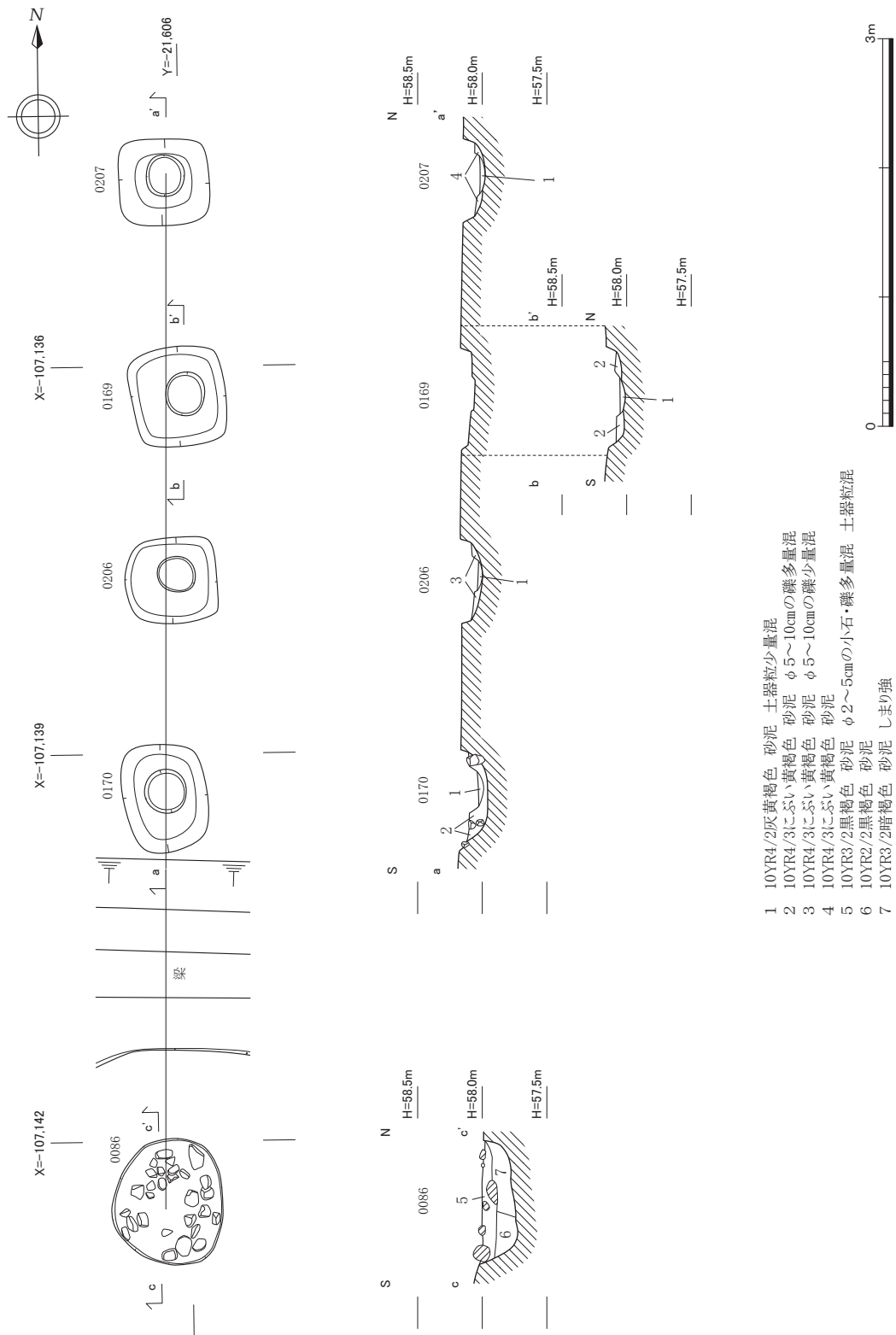
第3面 調査区平面図7 (1 : 100)



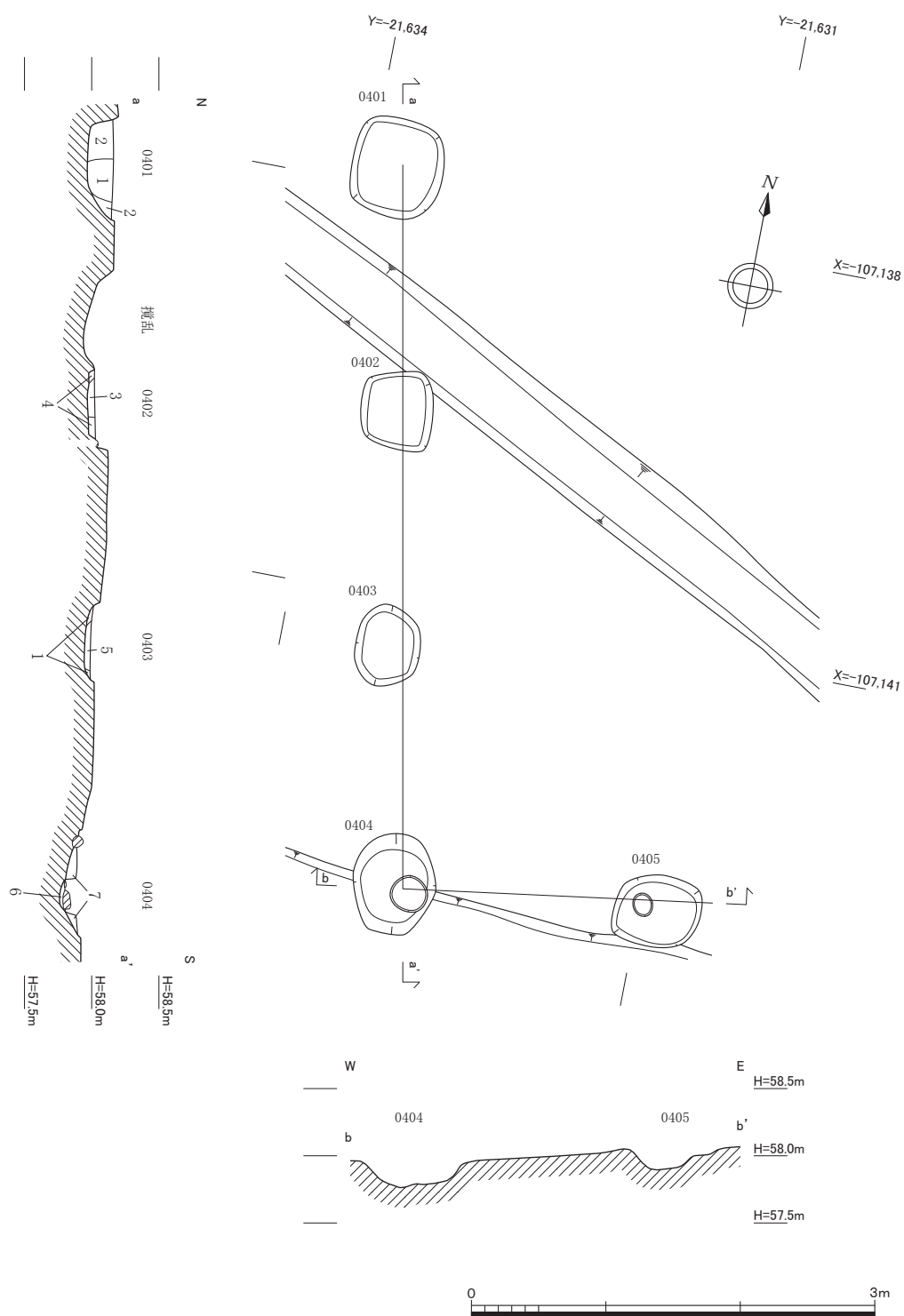
第3面 調査区平面図8 (1 : 100)



溝0145平面図（1：150）、断面図（1：40）

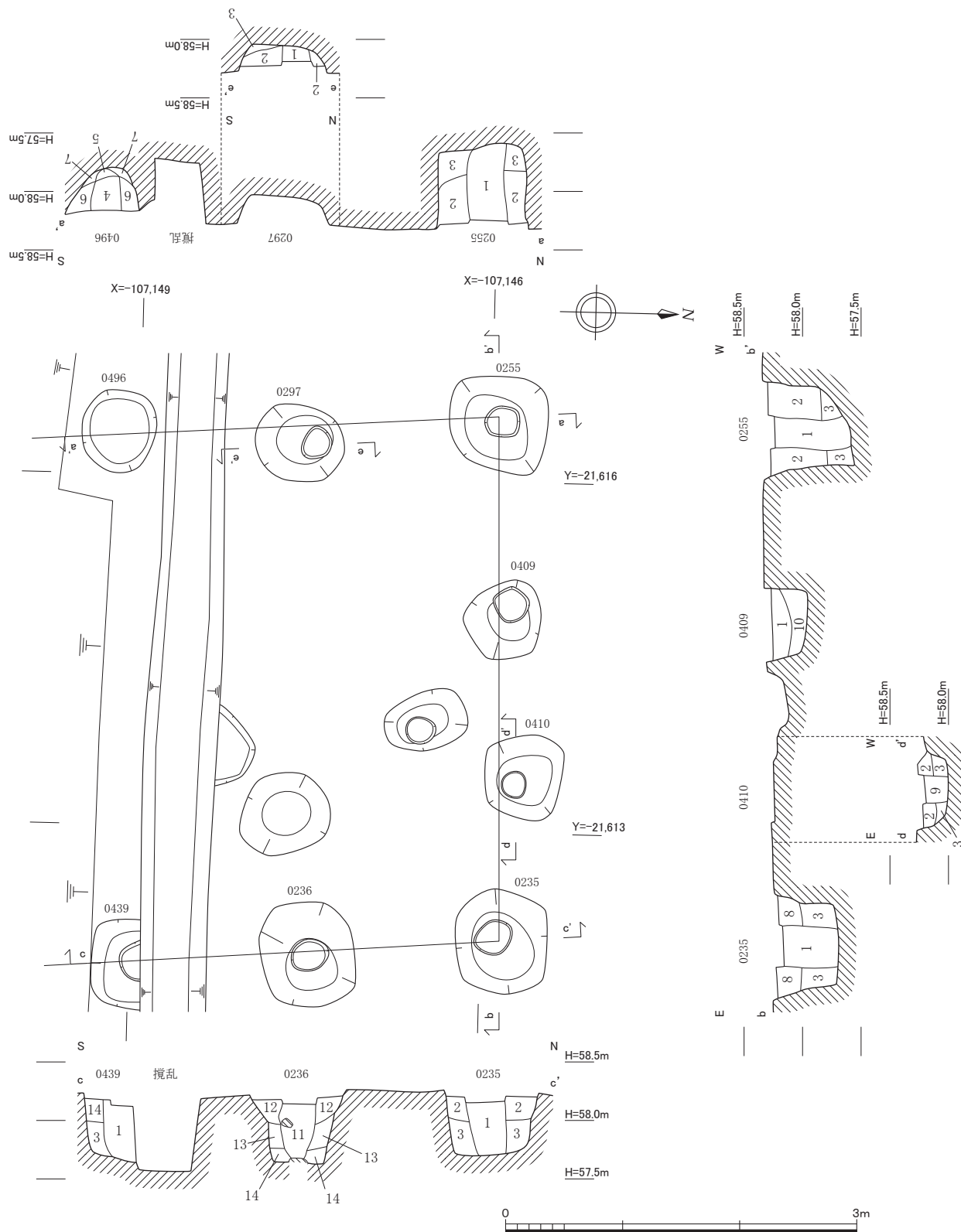


柵列0513平断面図 (1 : 50)



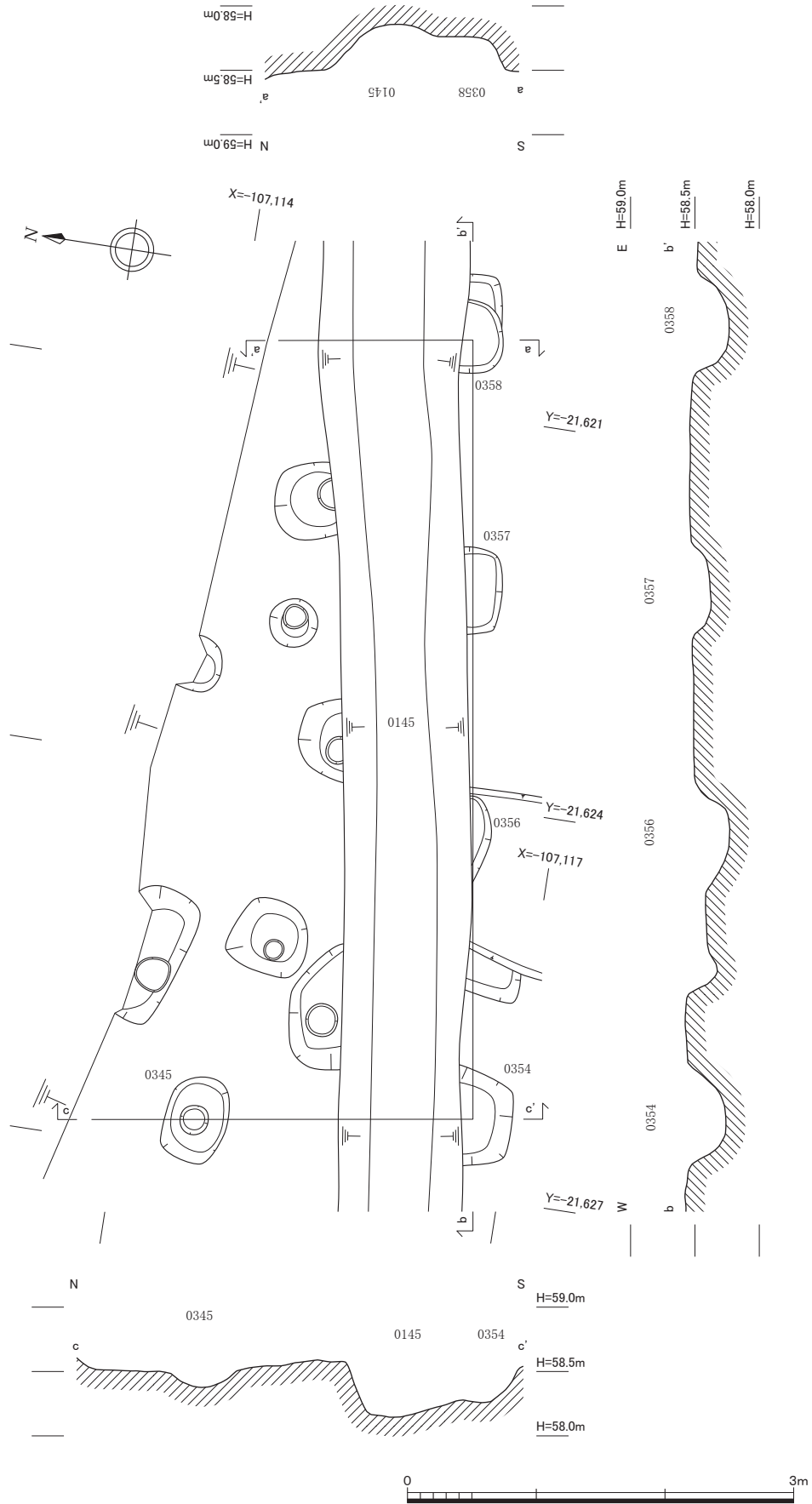
- 1 10YR3/2黒褐色 砂泥 土器粒・φ5～15cmの礫多量混
- 2 10YR3/2黒褐色 砂泥 土器粒・φ5cmの小石混
- 3 10YR2/2黒褐色 砂泥 土器粒・φ5cmの小石多量混
- 4 10YR2/2黒褐色 砂泥 土器粒混
- 5 10YR3/2黒褐色 砂泥 φ15～20cmの礫多量混
- 6 10YR3/2黒褐色 砂泥 土器粒混
- 7 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 φ15～20cmの礫多量混 地山ブロック混

柵列0514平断面図（1：50）

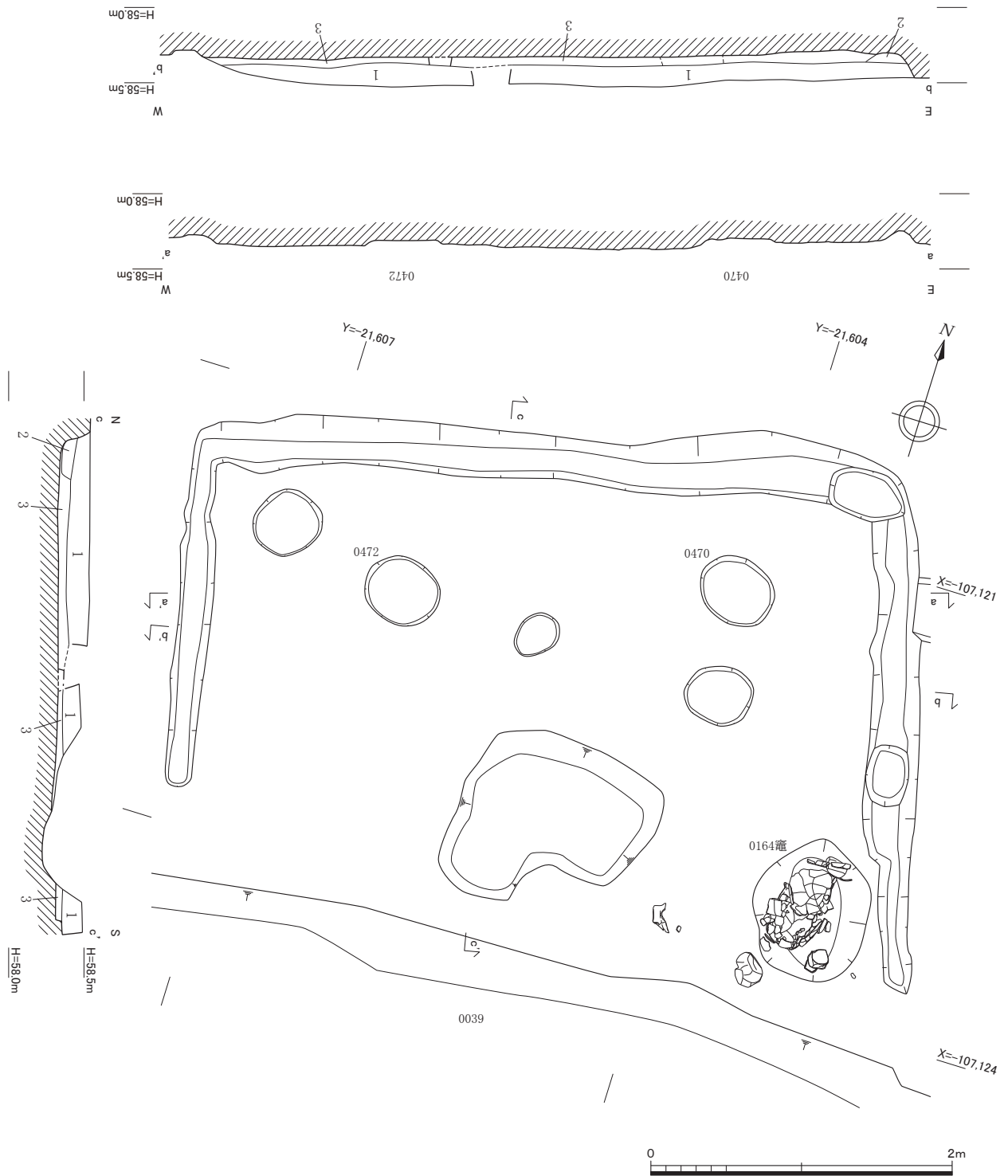


- | | |
|--------------------------------|---------------------------------------|
| 1 10YR2/2黒褐色 砂泥 炭粒・土器粒混 | 8 10YR3/2黒褐色 砂泥 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥ブロック混 |
| 2 10YR3/2黒褐色 砂泥 φ3~20cmの礫多量混 | 9 10YR2/2黒褐色 砂泥 φ3~7cmの礫多量混 |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色 砂泥 | 10 10YR3/1黒褐色 細粒砂 φ5~10cmの礫多量混 |
| 4 10YR3/2黒褐色 砂泥 土器粒・炭粒・φ5cmの礫混 | 11 10YR3/2黒褐色 砂泥 φ3cmの小石・炭粒混 しまり強 |
| 5 10YR3/2黒褐色 粗砂 ややしまる | 12 10YR3/2黒褐色 砂泥 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥ブロック混 |
| 6 10YR3/3暗褐色 砂泥 土器粒・炭粒混 | 13 10YR3/2黒褐色 砂泥 土器粒・炭粒・φ3cmの小石混 |
| 7 10YR3/2黒褐色 粗砂 φ5~7cmの礫多量混 | 14 10YR3/2黒褐色 砂泥 |

掘立柱建物0515平断面図（1：50）



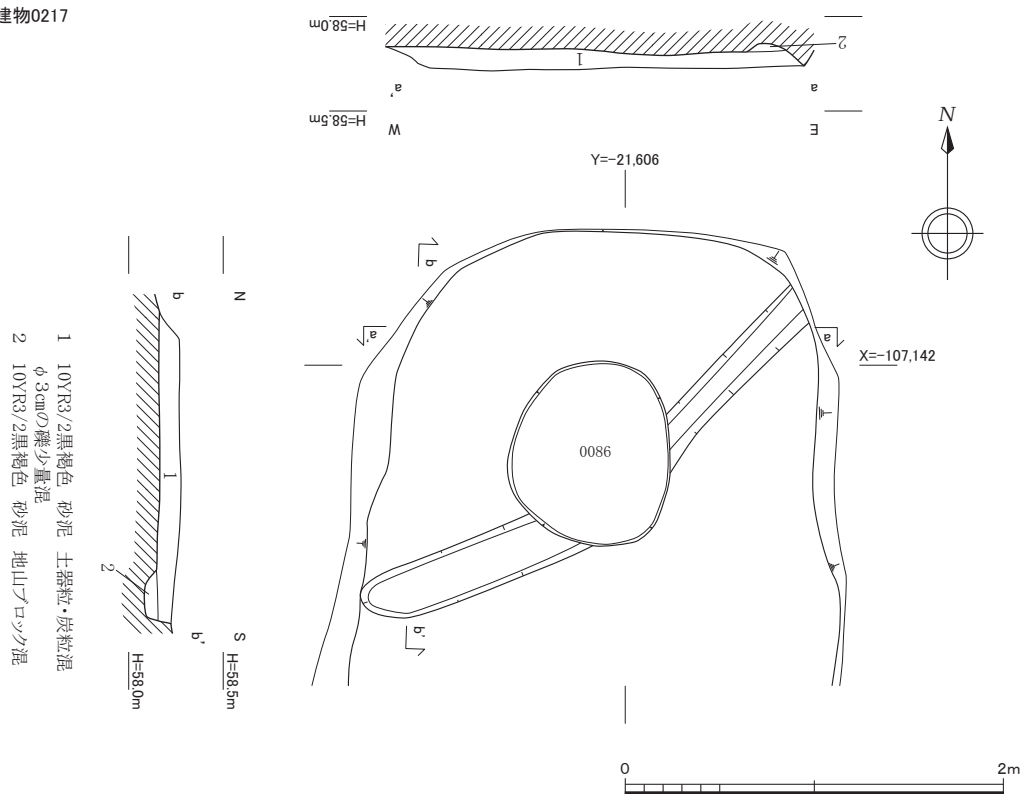
掘立柱建物0516平断面图 (1 : 50)



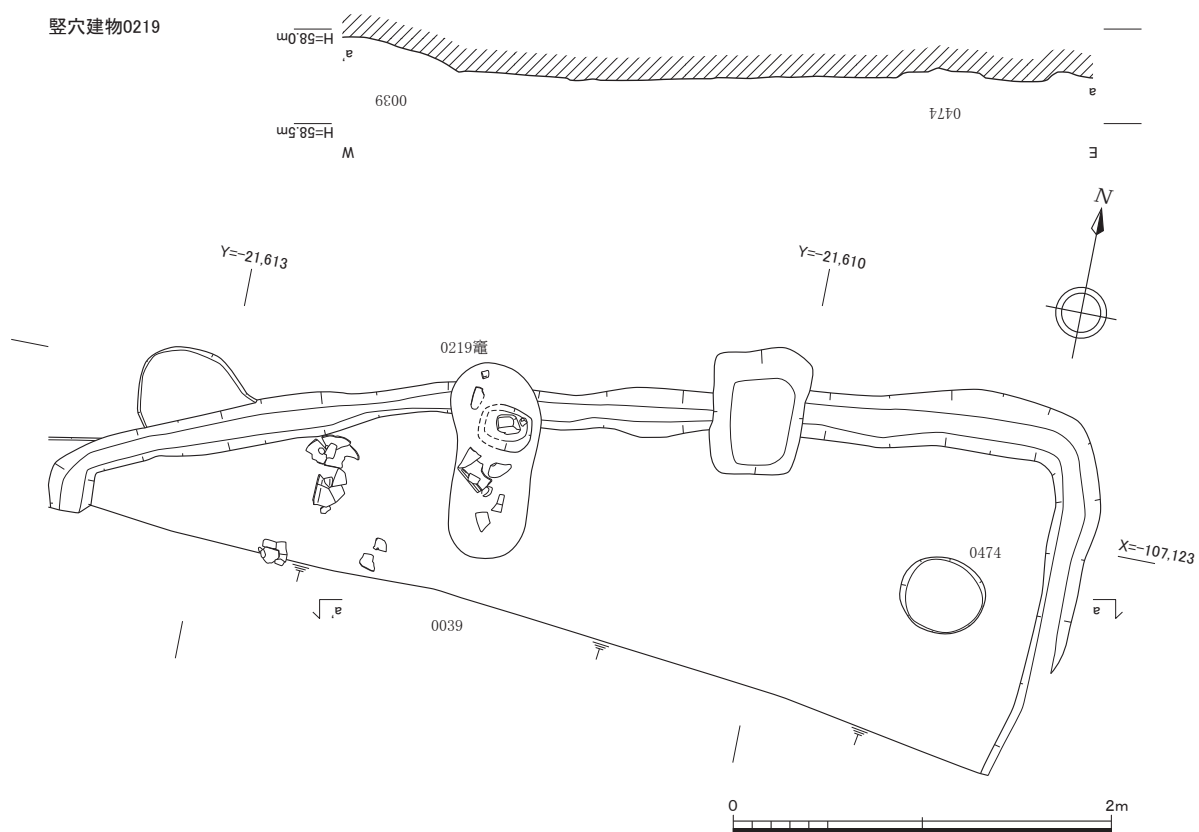
- 1 10YR3/2黒褐色 砂泥 炭粒・φ3～5cmの礫・地山ブロック多量混
- 2 10YR2/2黒褐色 砂泥 地山ブロック多量混
- 3 10YR4/4褐色 砂泥 10YR3/2黒褐色砂泥のブロック多量混 土器粒・炭粒混 しまりあり 床面

竪穴建物0164平断面図（1：40）

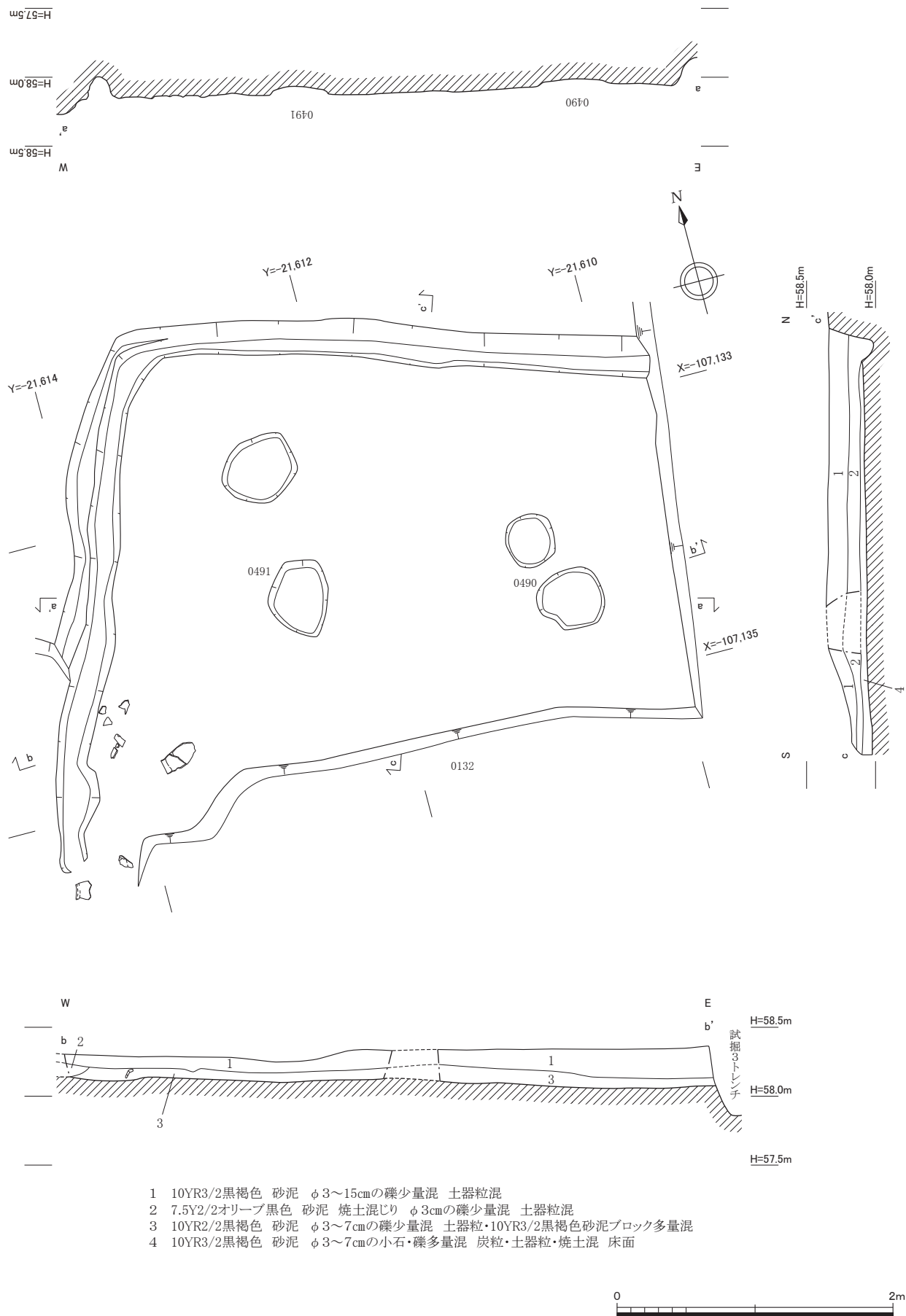
竪穴建物0217



竪穴建物0219

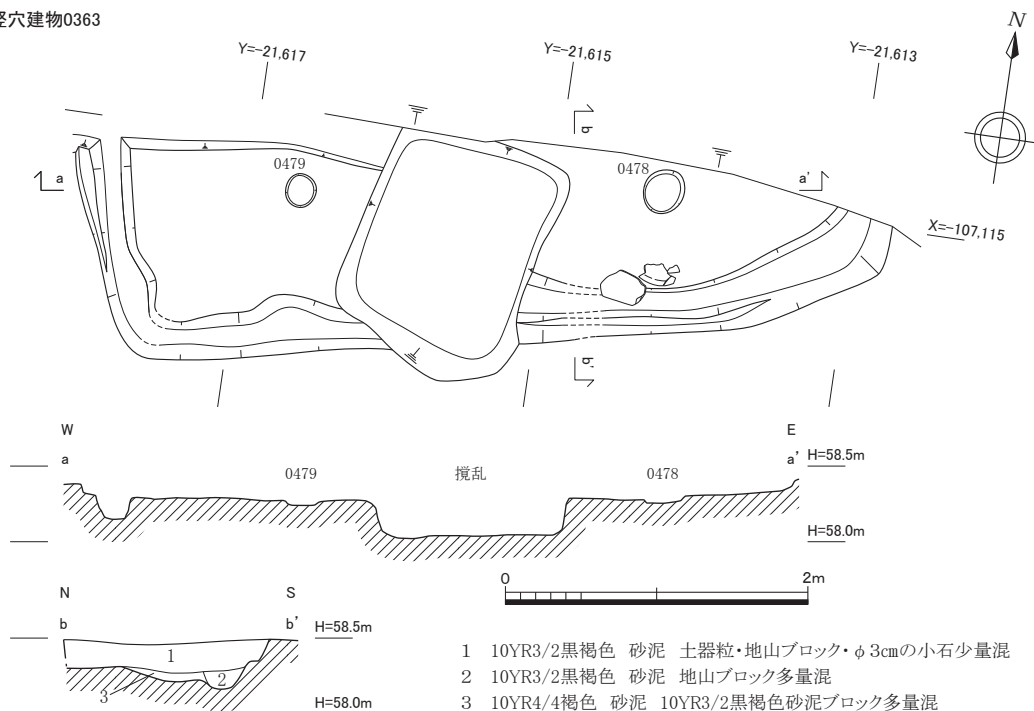


竪穴建物0217、竪穴建物0219平断面図（1：40）

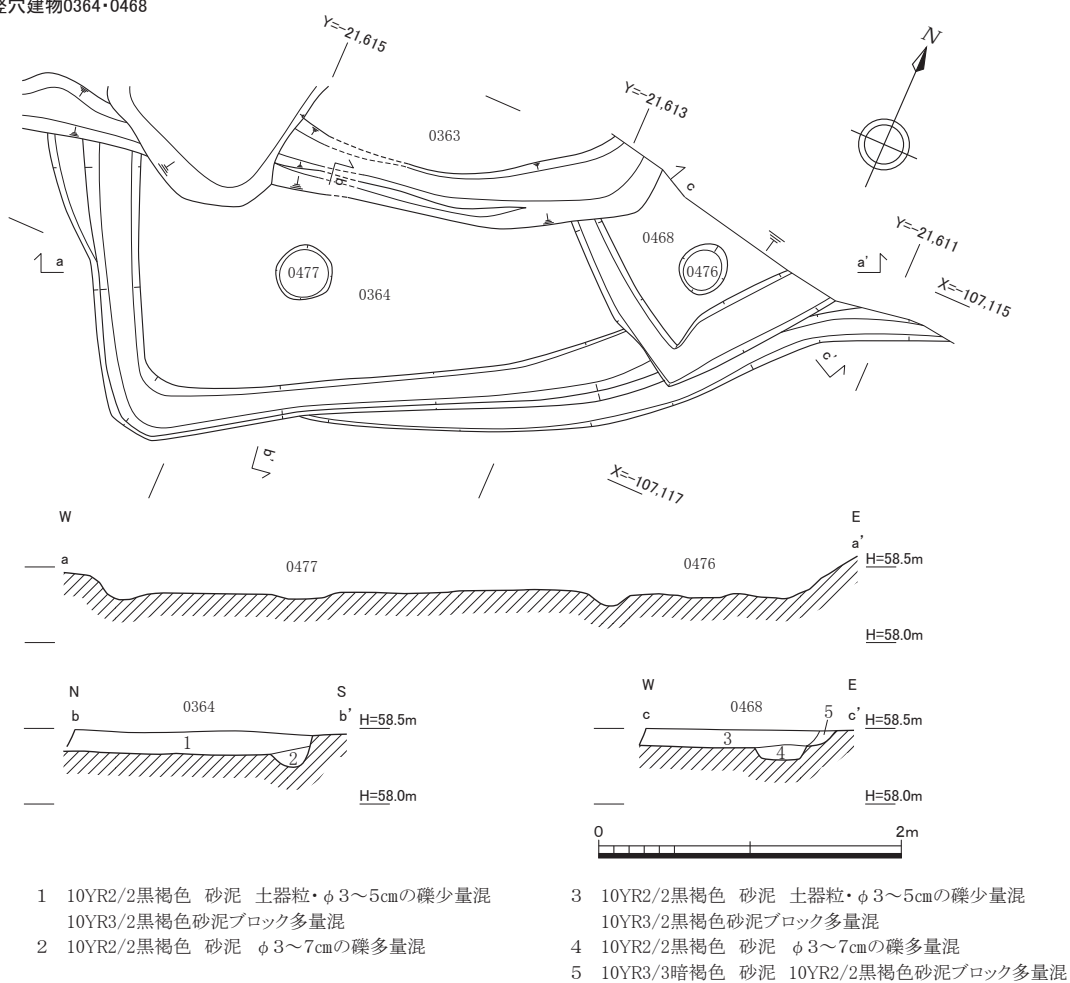


竪穴建物0218平断面図（1：40）

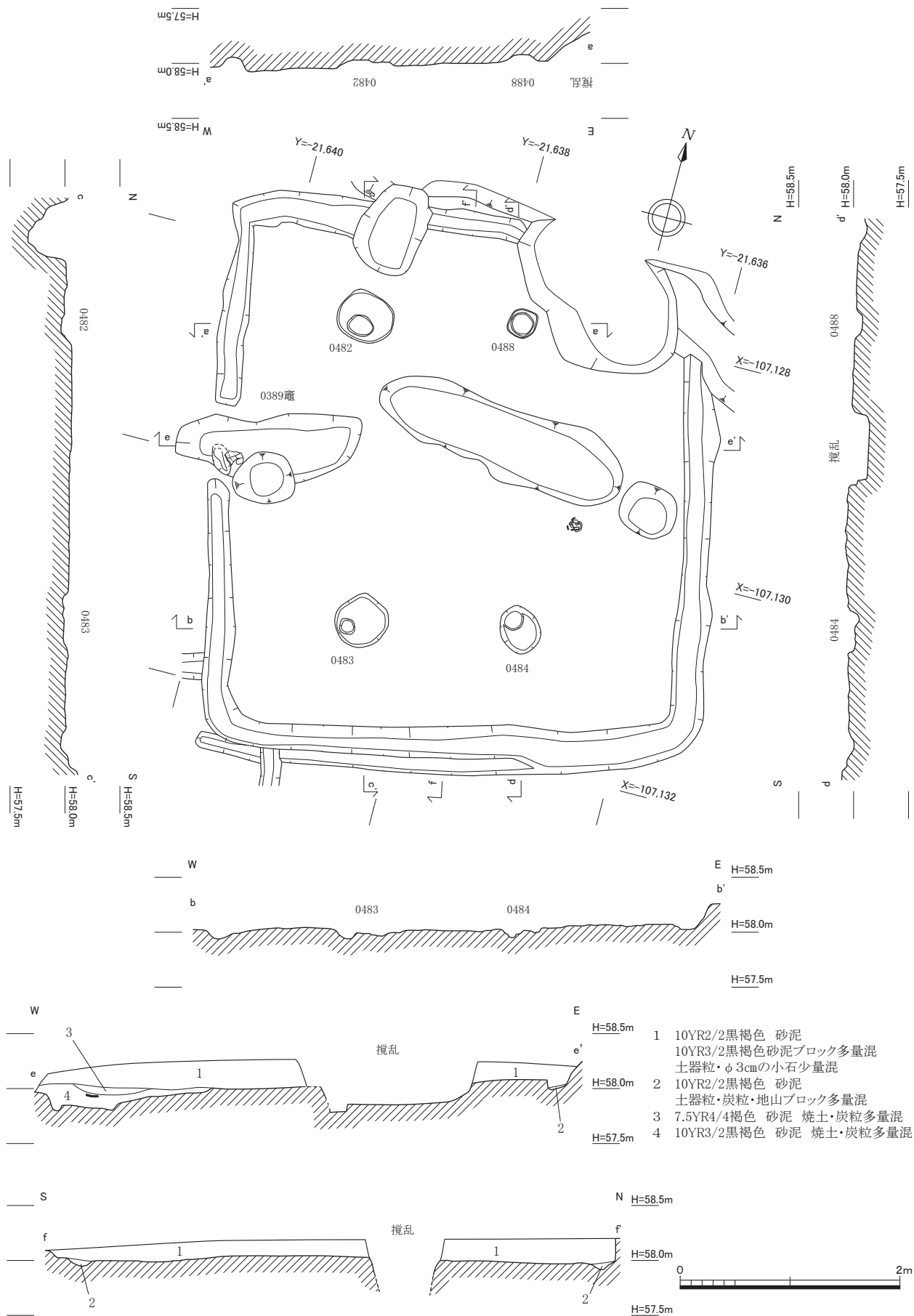
竪穴建物0363



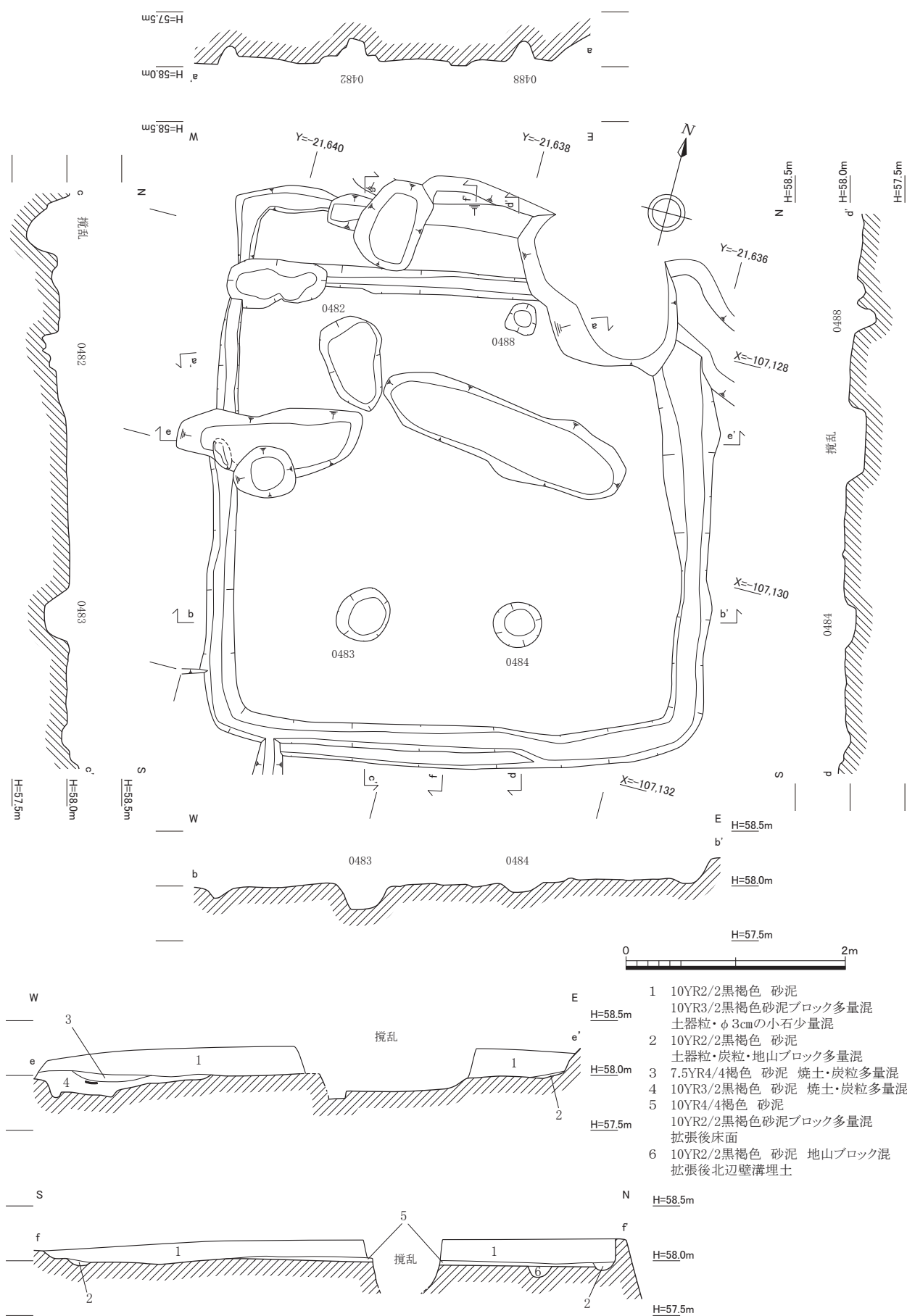
竪穴建物0364・0468



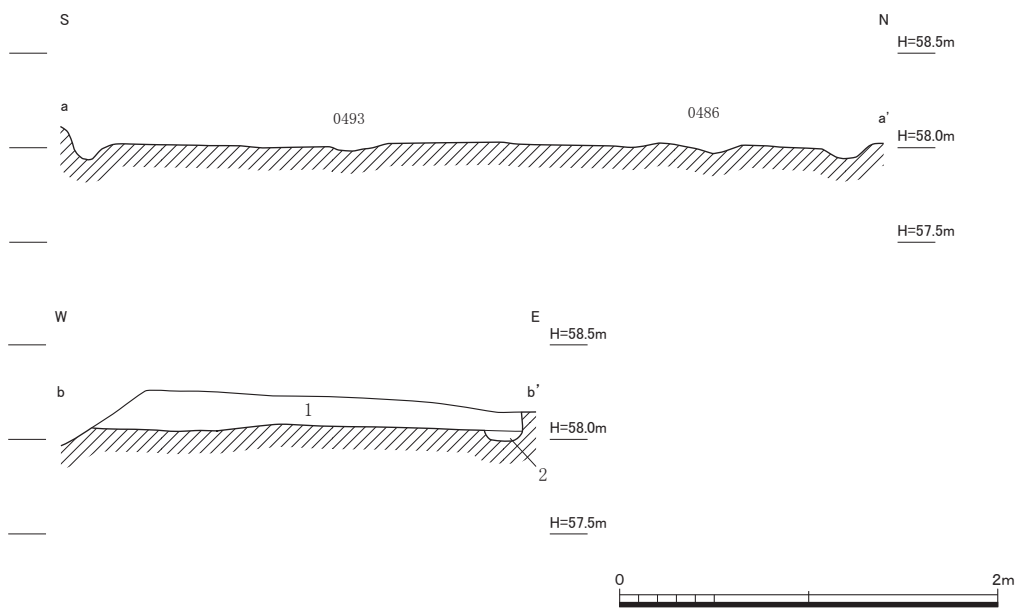
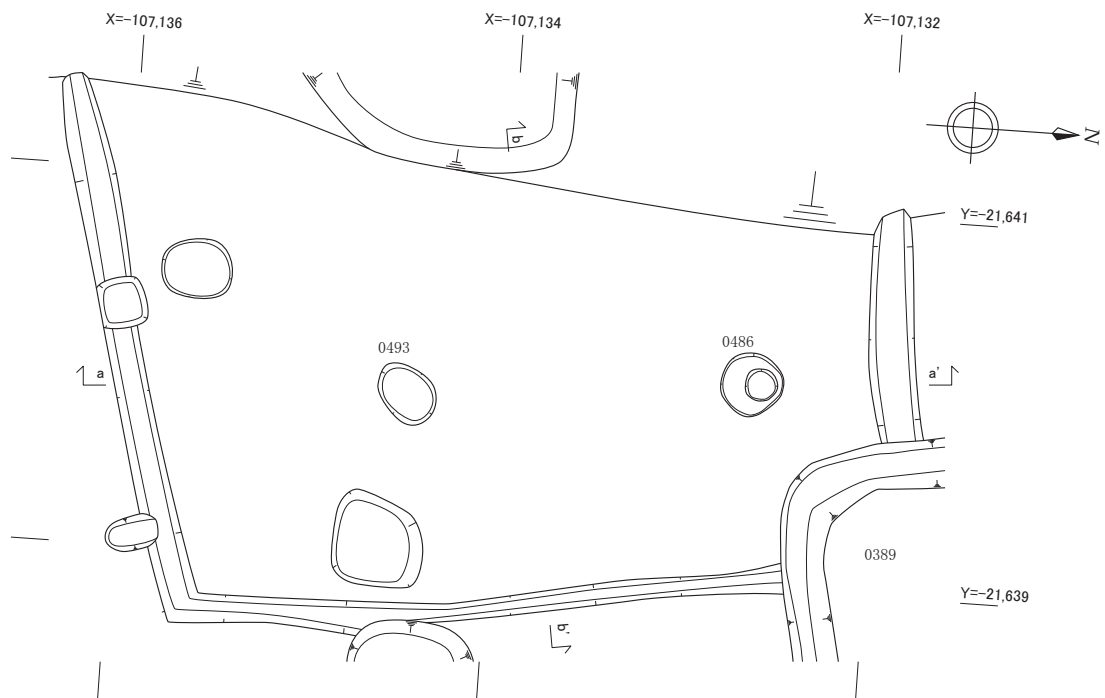
竪穴建物0363、竪穴建物0364・0468平断面図（1：50）



竪穴建物0389（拡張後）平断面図（1：50）

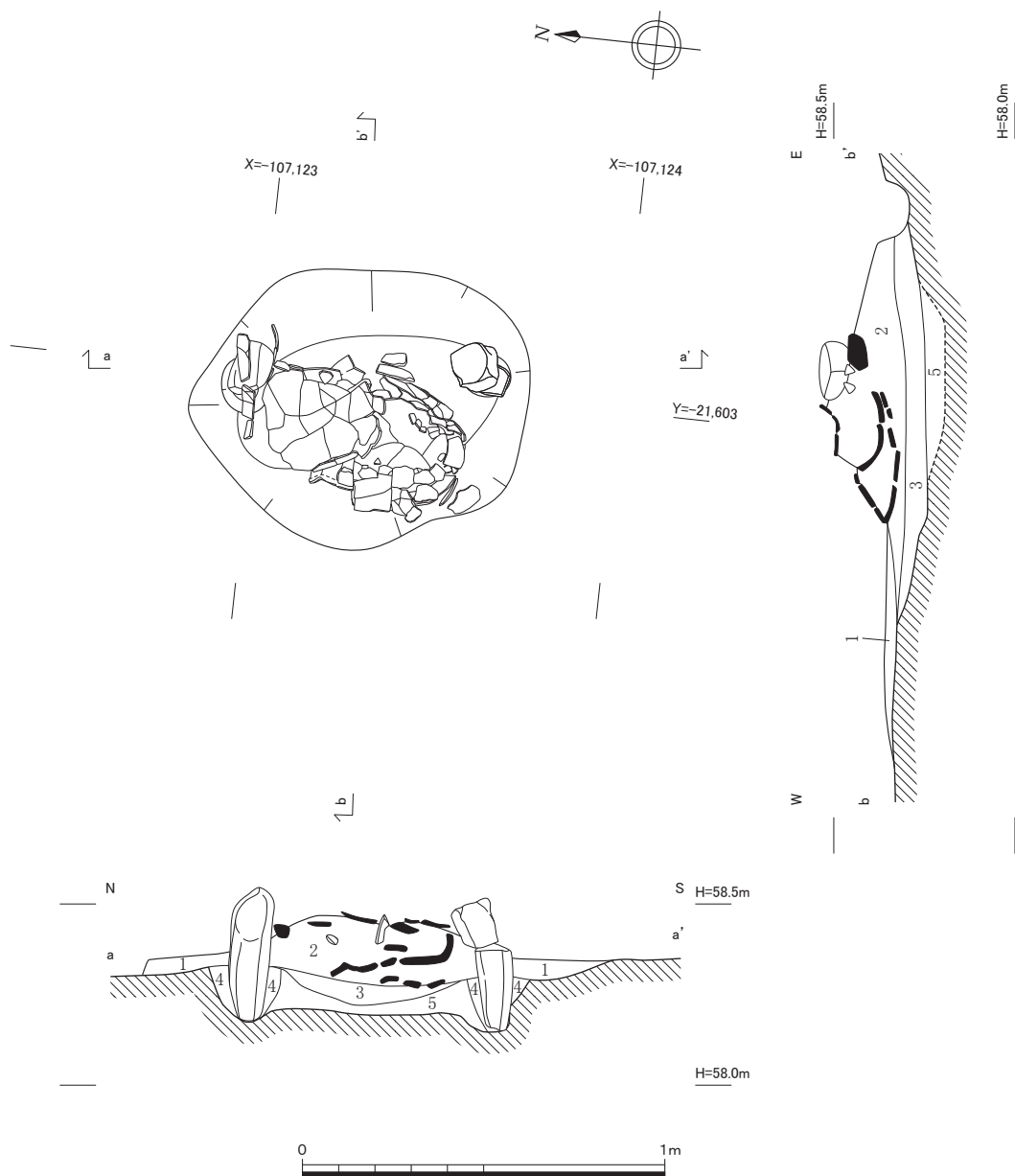


竪穴建物0389（拡張前）平断面図（1：50）



- 1 10YR2/2黒褐色 砂泥 地山ブロック多量混 ϕ 4cmの小石少量混 土器粒混
2 10YR2/2黒褐色 砂泥 地山ブロック多量混 炭粒混

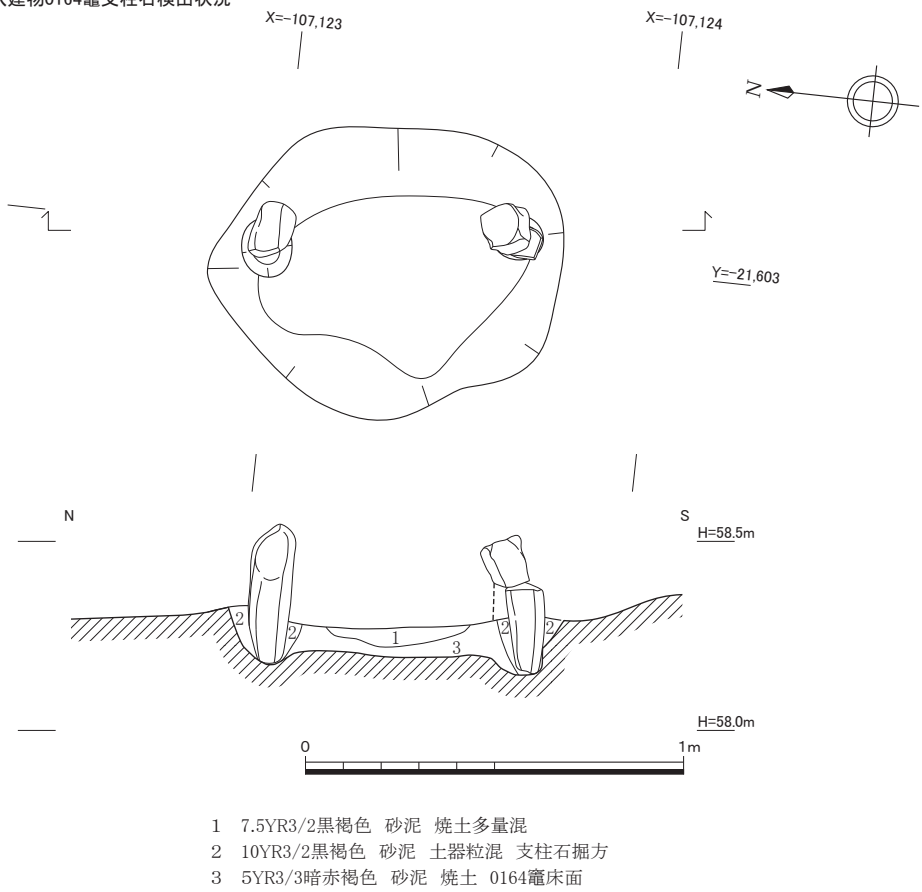
竪穴建物0421 平断面図 (1 : 40)



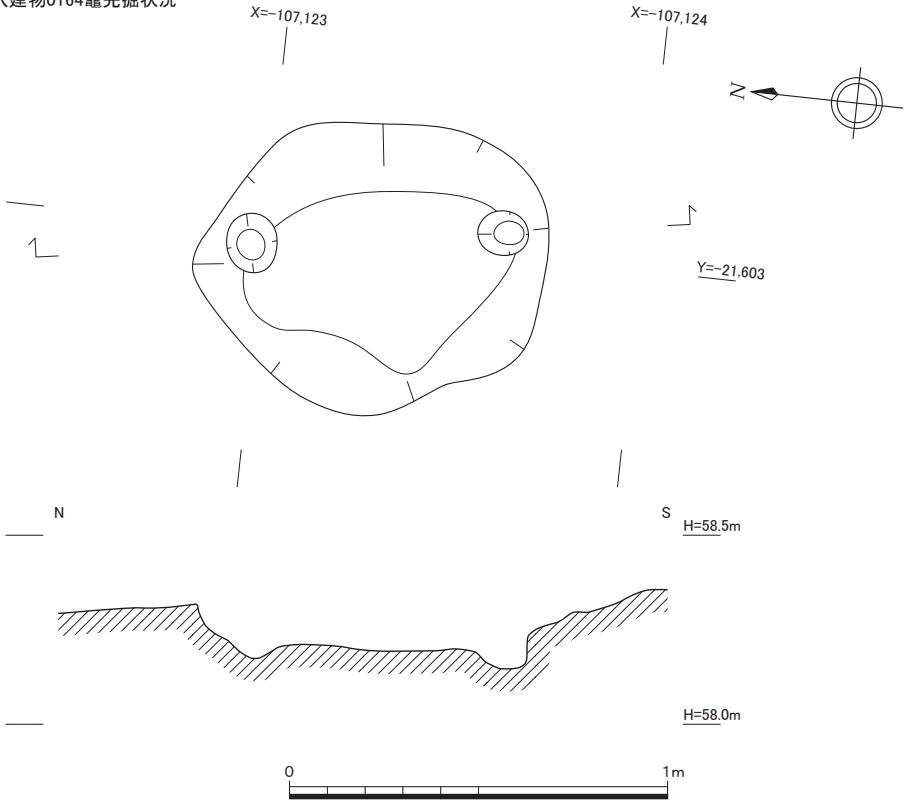
- 1 10YR3/2黒褐色 砂泥 土器粒・地山ブロック混 0164埋土
- 2 7.5YR3/2黒褐色 砂泥 焼土・炭・地山ブロック混 0164竈埋土
- 3 7.5YR3/2黒褐色 砂泥 焼土多量混 0164竈埋土
- 4 10YR3/2黒褐色 砂泥 土器粒混 支柱石掘方
- 5 5YR3/3暗赤褐色 砂泥 焼土 0164竈床面

竪穴建物0164 竈検出状況平断面図（1：20）

竖穴建物0164竈支柱石検出状況

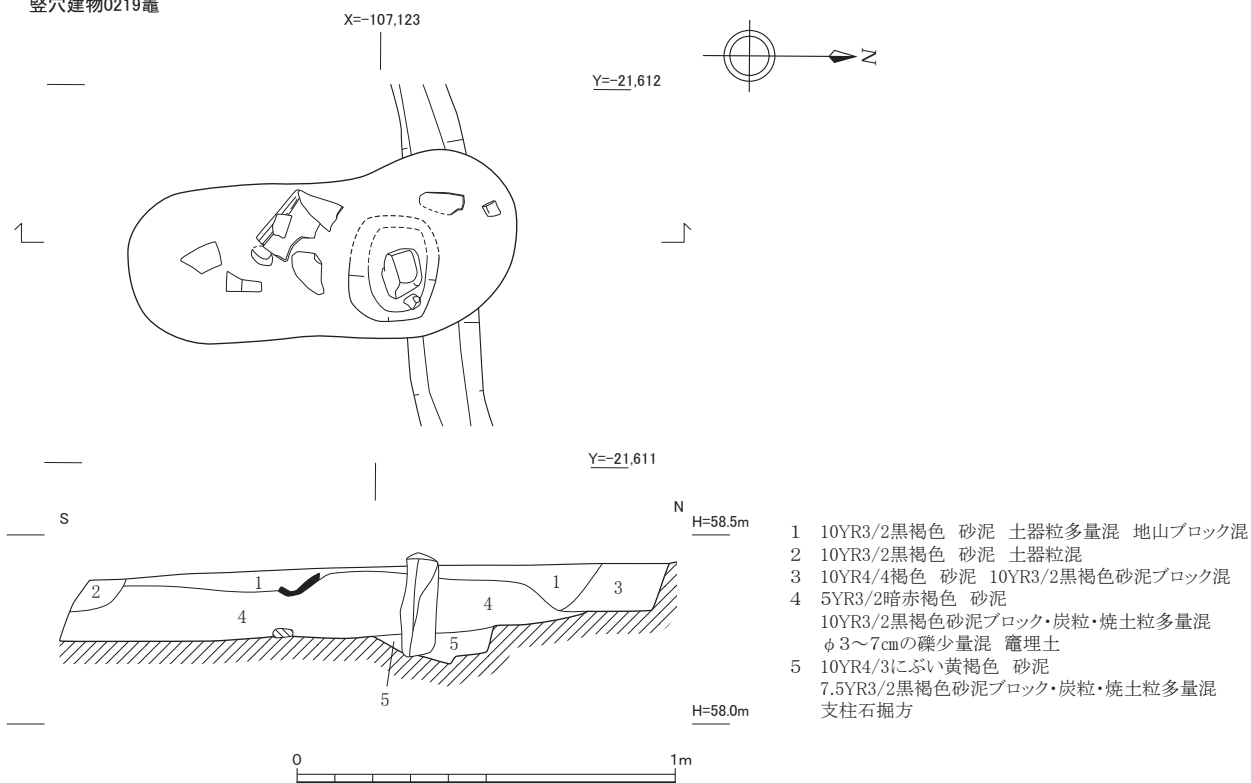


竖穴建物0164竈完掘状況

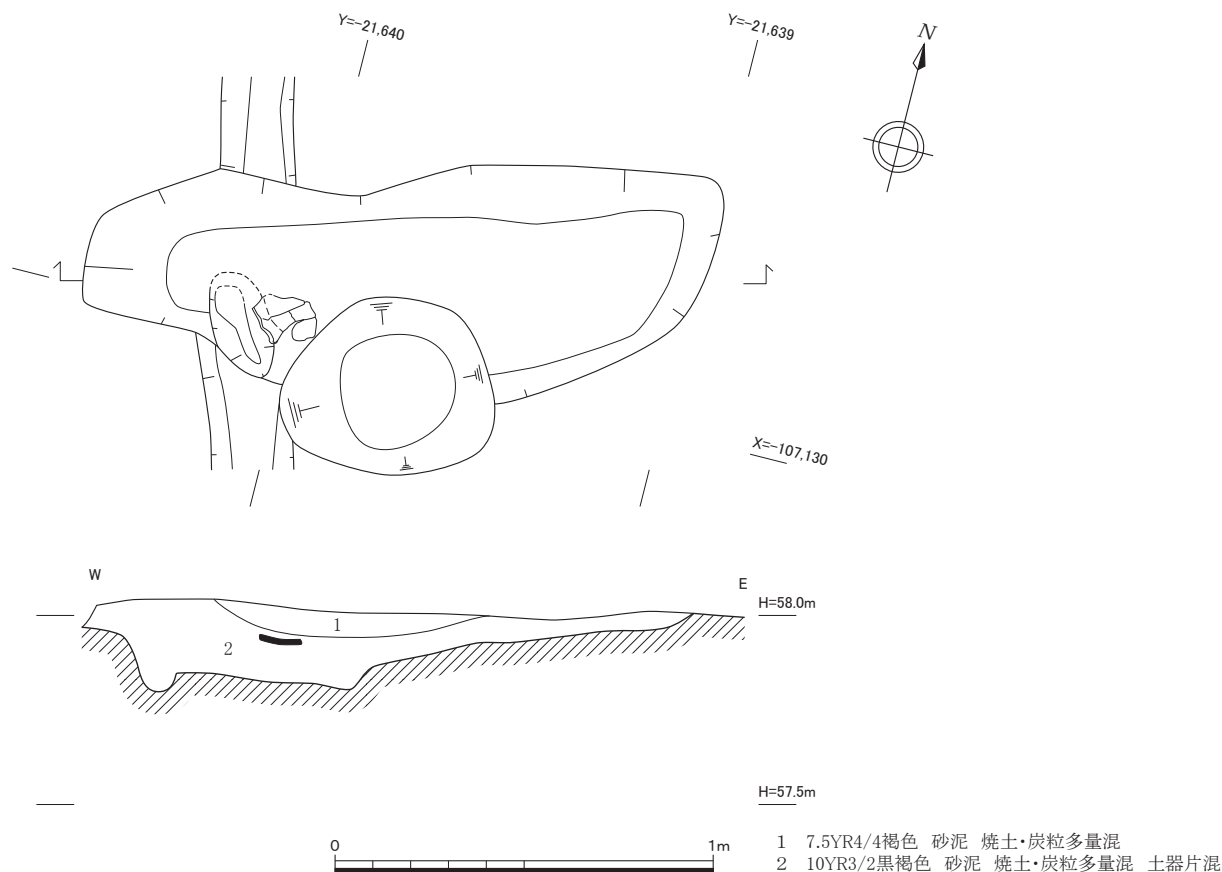


竖穴建物0164竈支柱石検出状況、完掘状況平断面図（1：20）

竪穴建物0219竈



竪穴建物0389竈

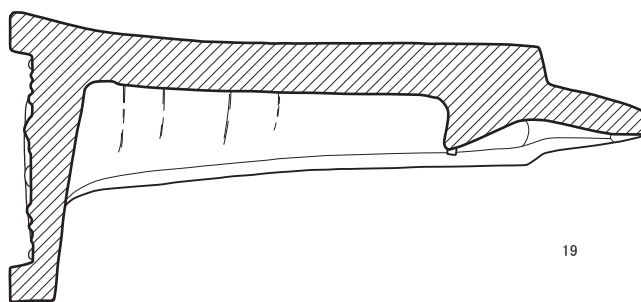


竪穴建物0219竈、竪穴建物0389竈平断面図（1：20）

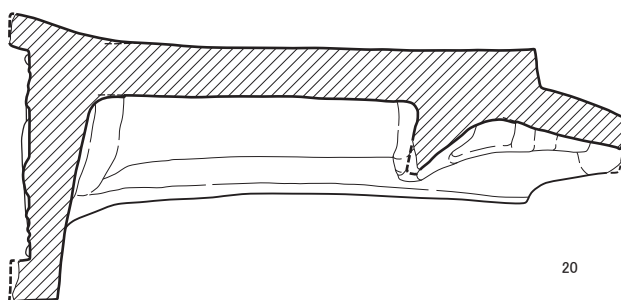
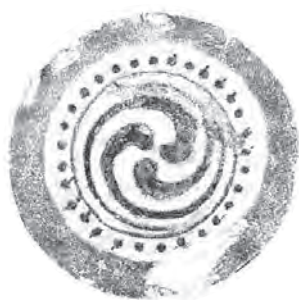


0 20cm

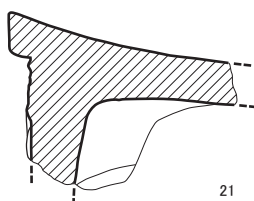
出土遺物1 (1 : 4)



19



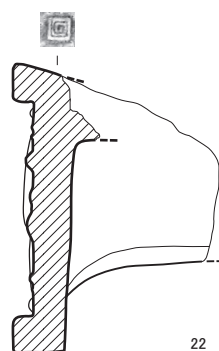
20



21



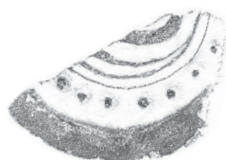
25



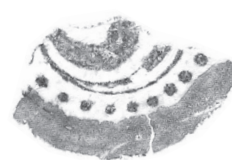
22



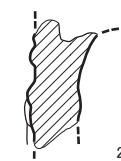
26



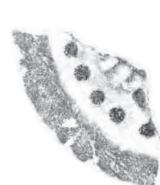
23



27



24

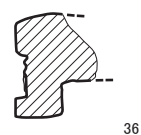
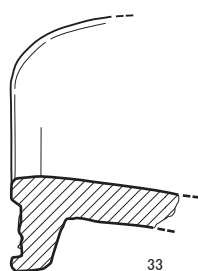
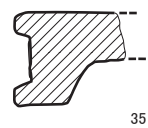
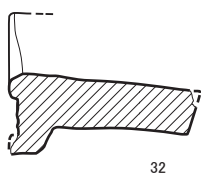
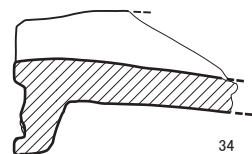
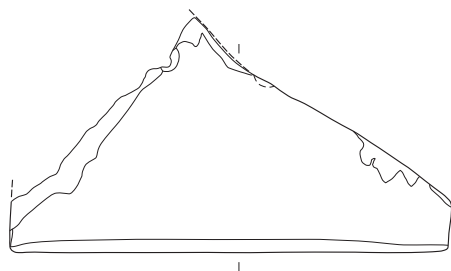
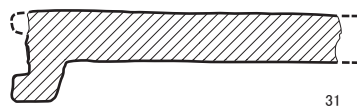
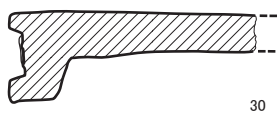
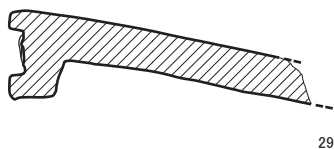


28

19~28: 溝0041

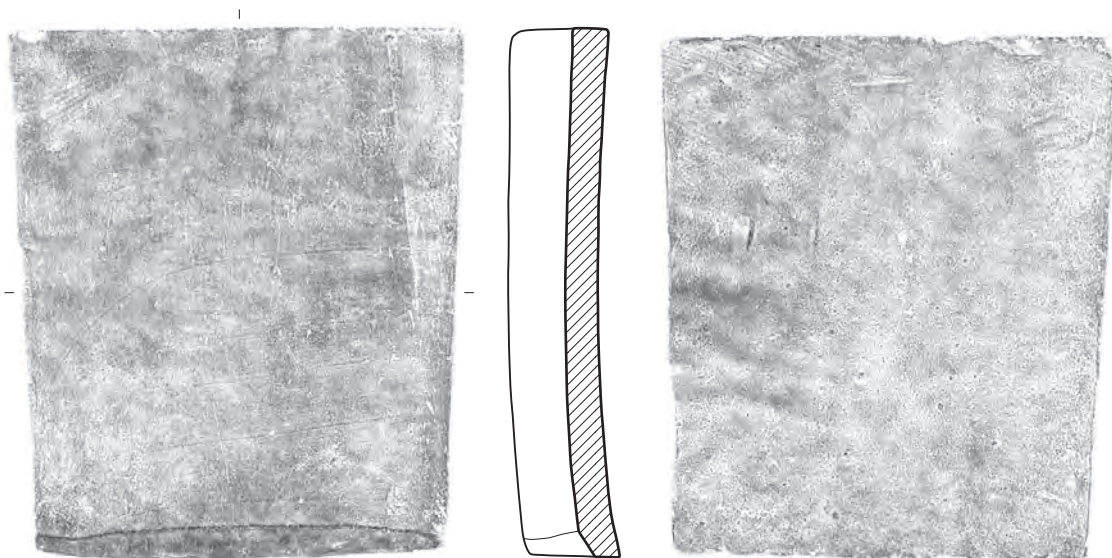


出土遺物 2 (1 : 4)

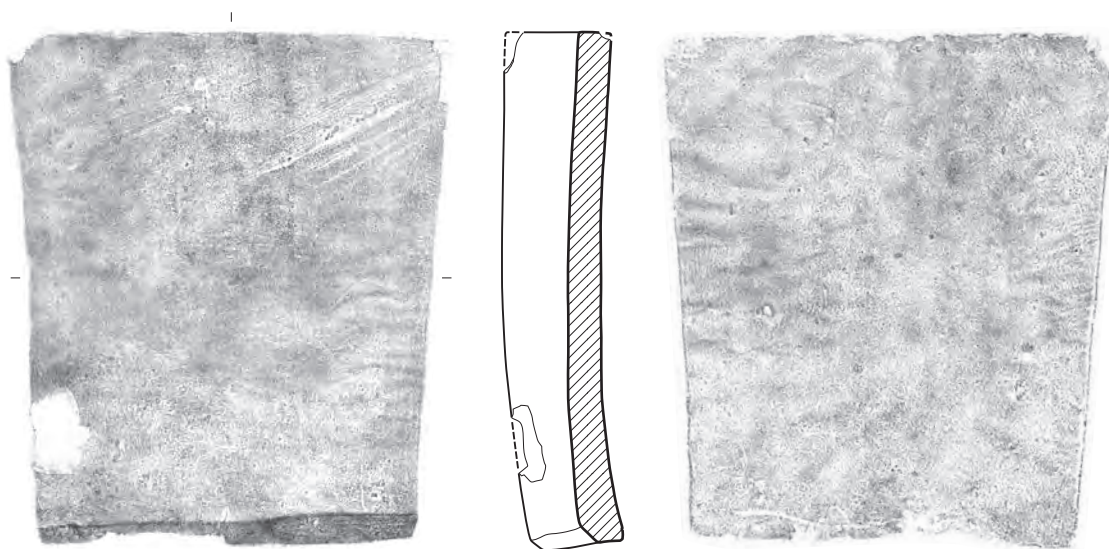


29~36: 溝0041

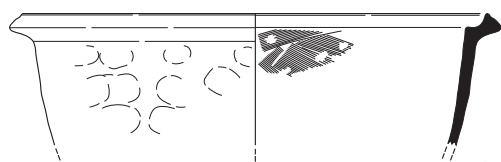




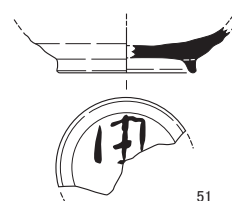
37



38



18

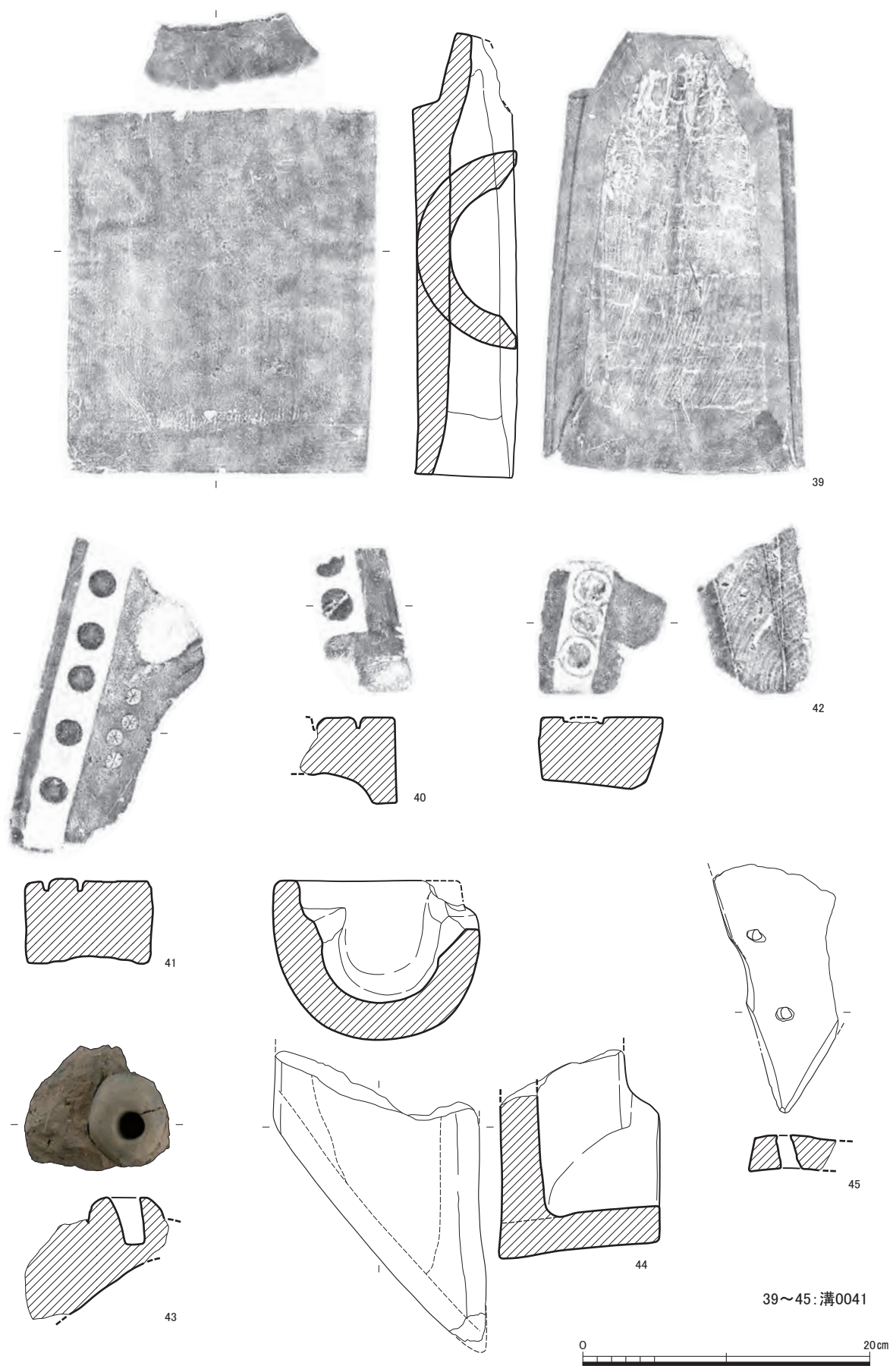


51

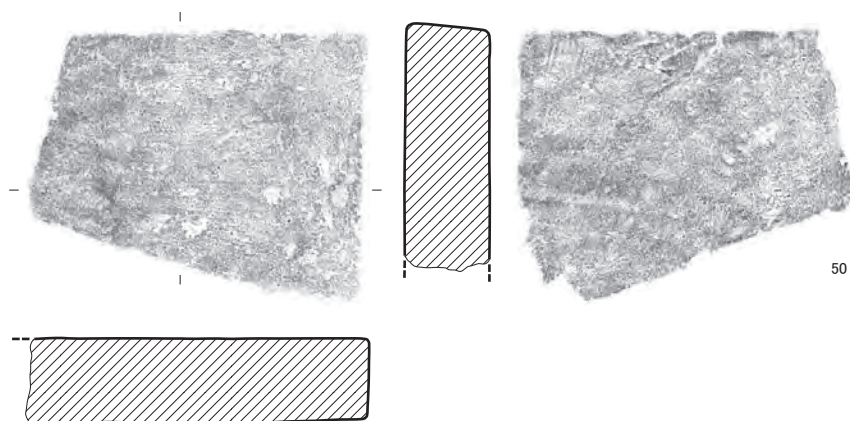
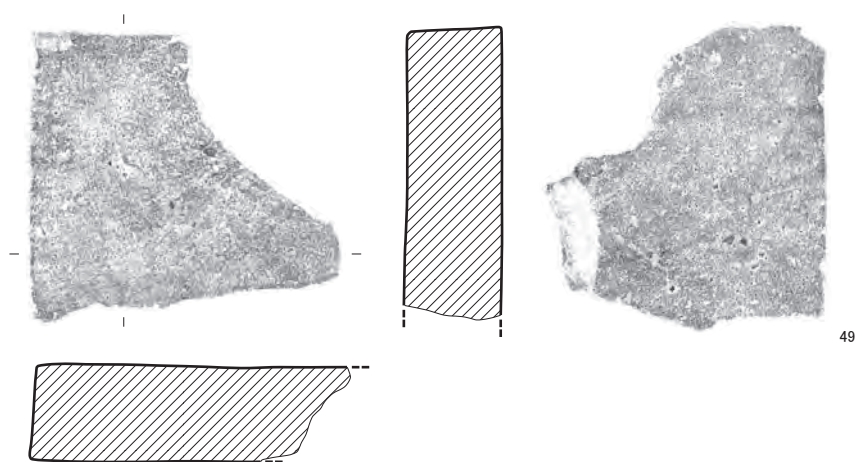
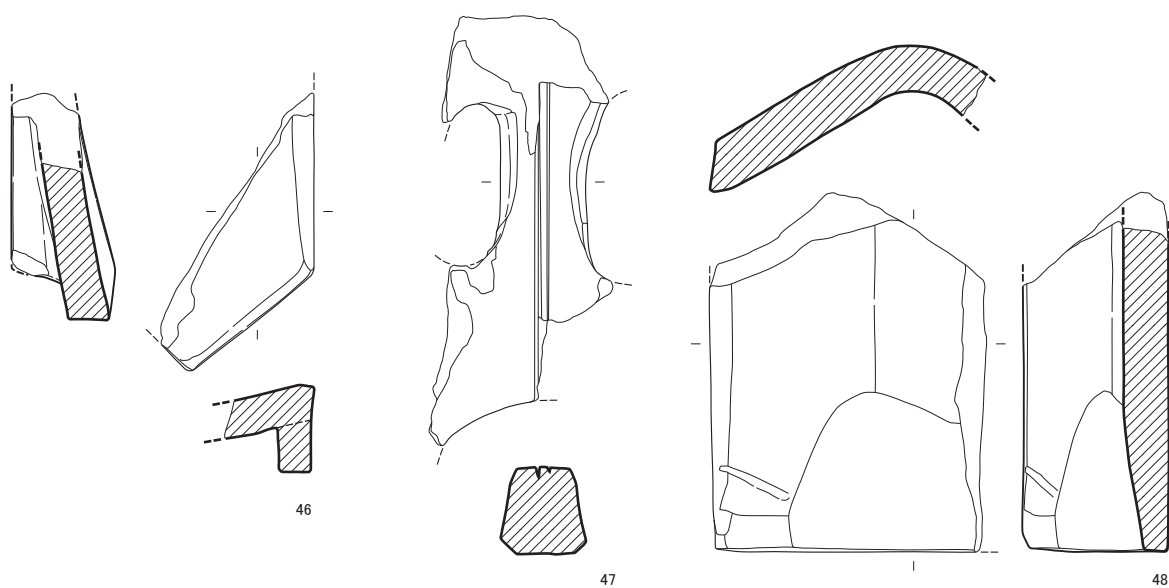
18: 柱穴0089
37·38·51: 溝0041



出土遺物 4 (1 : 4)



出土遺物 5 (1 : 4)



46~50: 溝0041

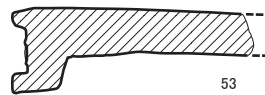




52



53



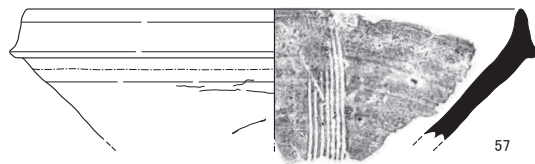
54



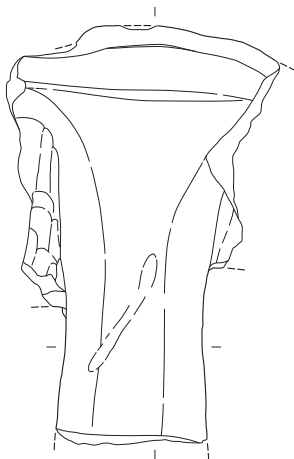
55



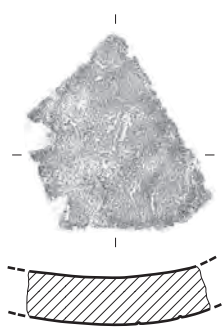
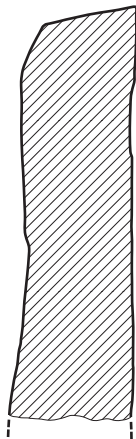
56



57



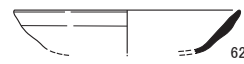
59



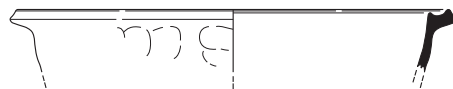
58



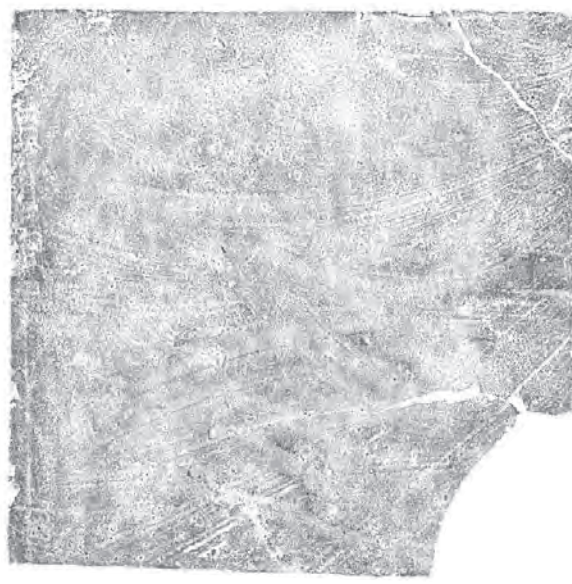
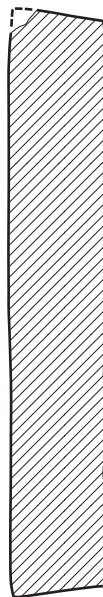
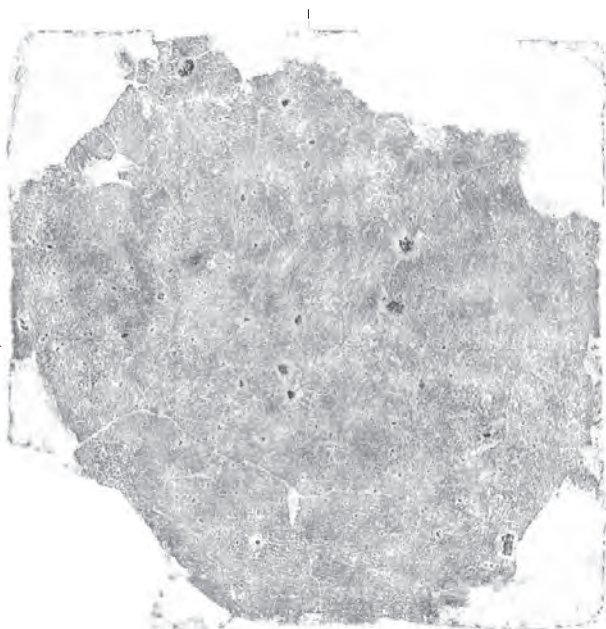
61



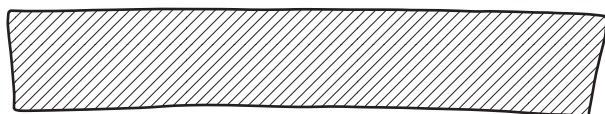
62



63

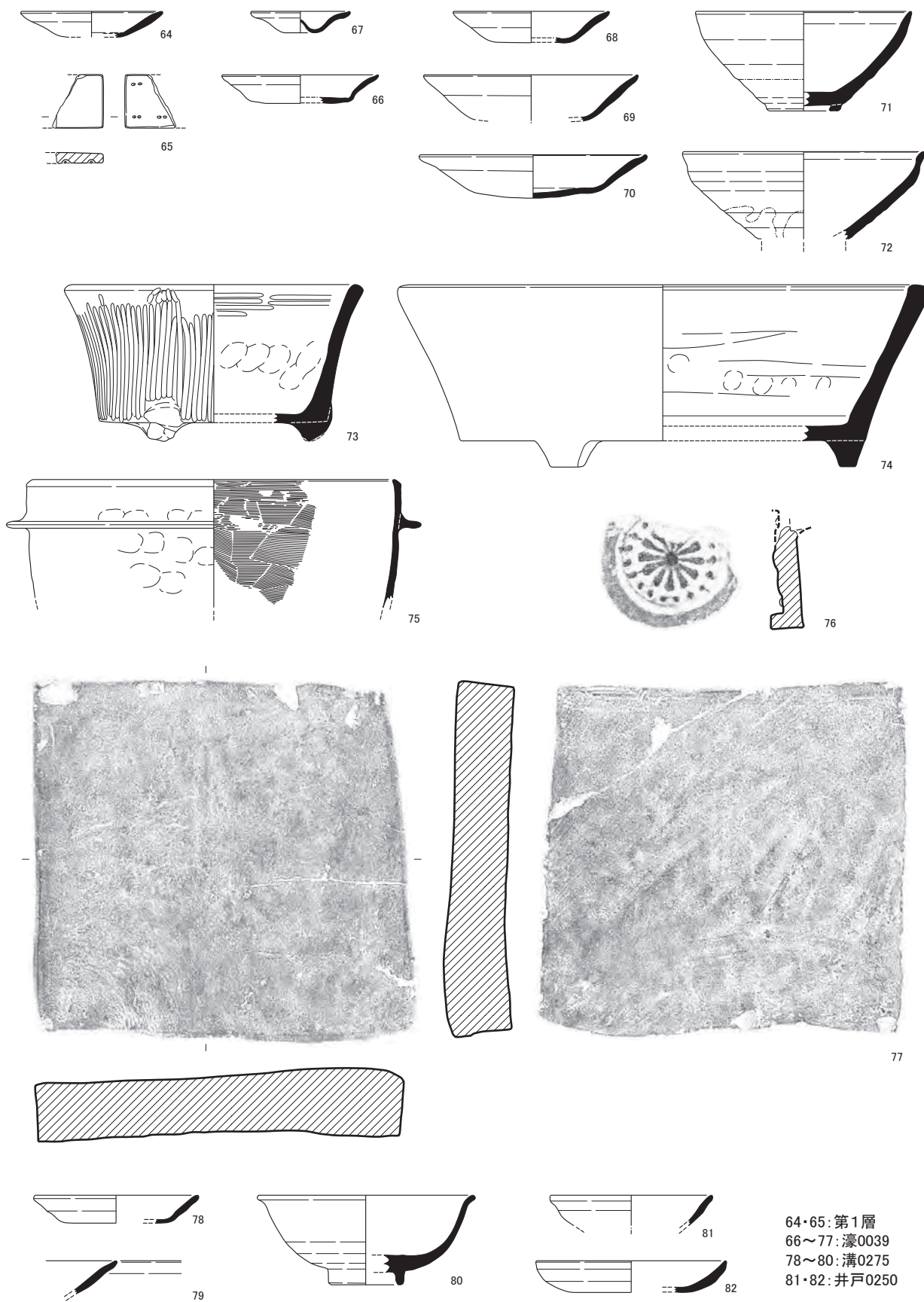


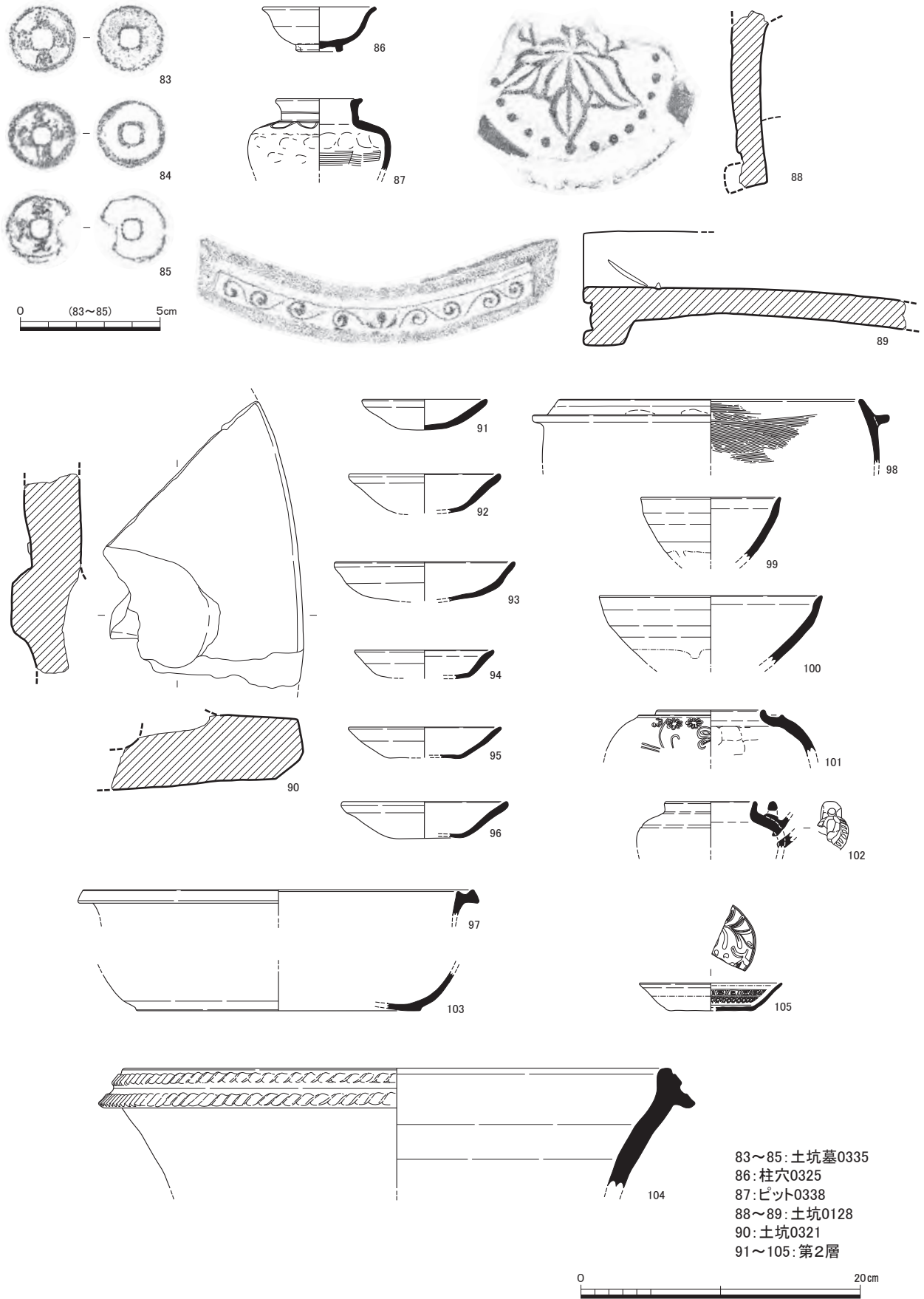
60

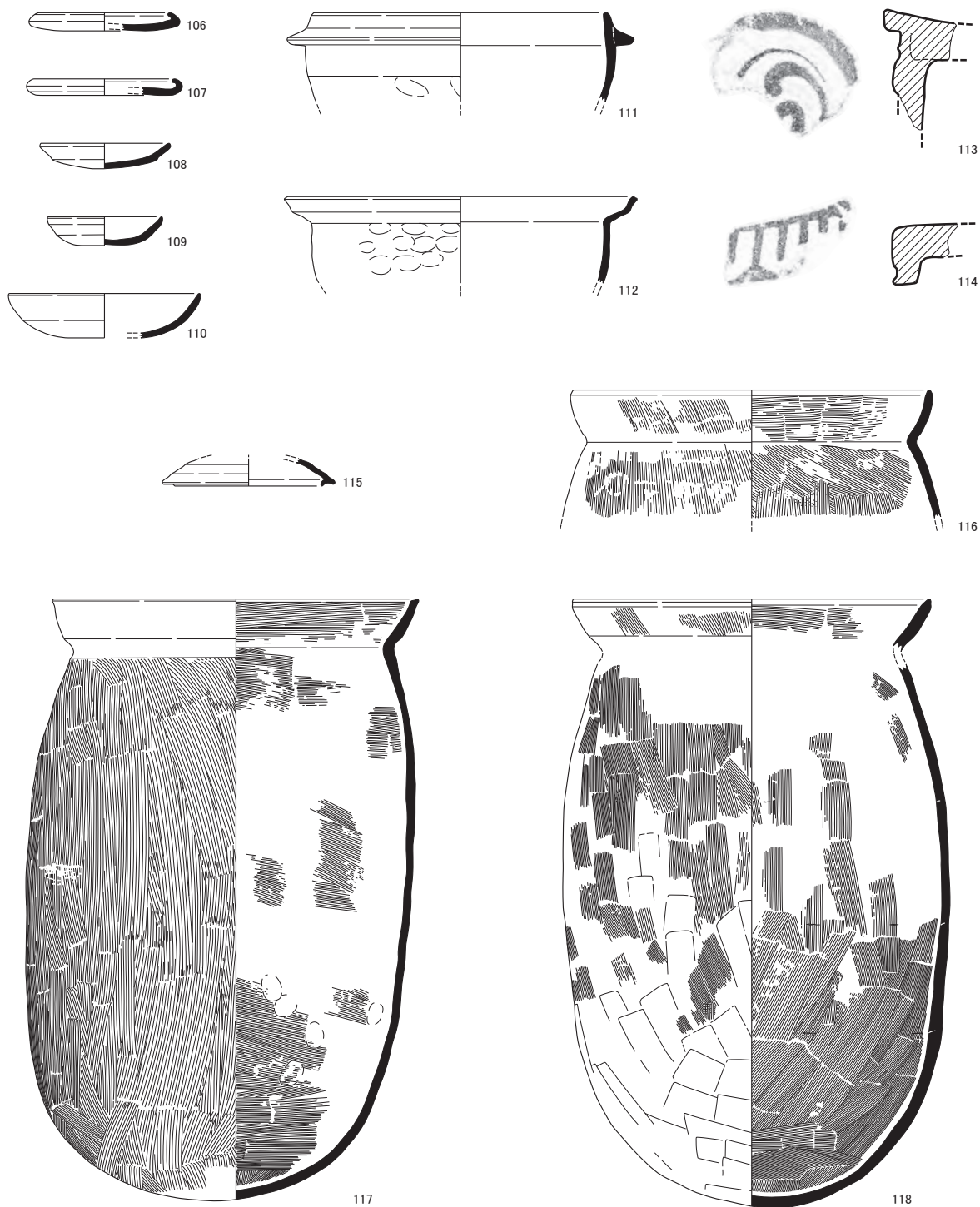


52・53: 溝0124
54・60: 瓦溜り0018
55: 瓦溜り0016
56・59: 瓦溜り0014
57・58: 瓦溜り0075
61: 柱穴0047
62・63: 柱穴0092



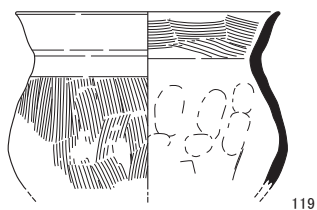




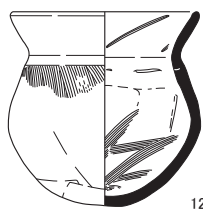


106~114: 溝0145
115~116: 竖穴建物0164
117~118: 竖穴建物0164竈

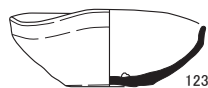
0 20cm



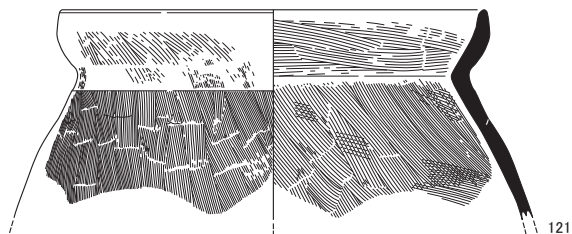
119



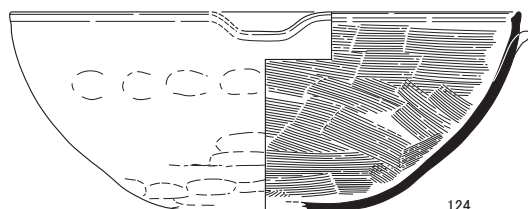
120



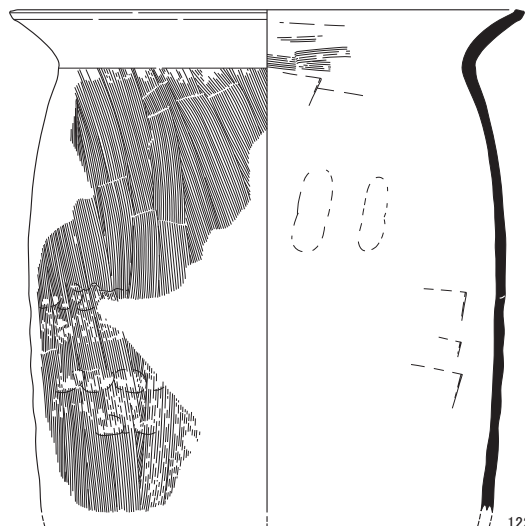
123



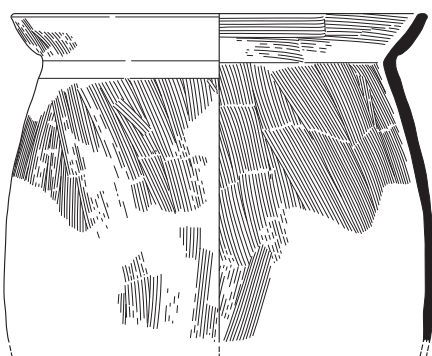
121



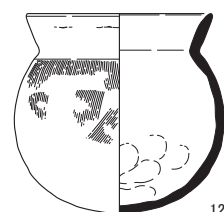
124



122



127



125



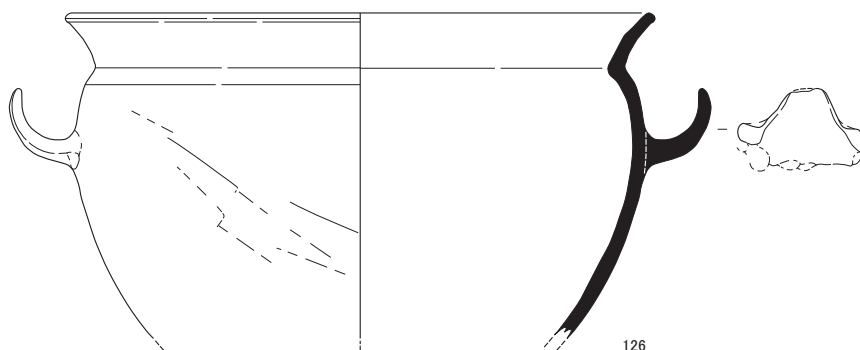
128



129



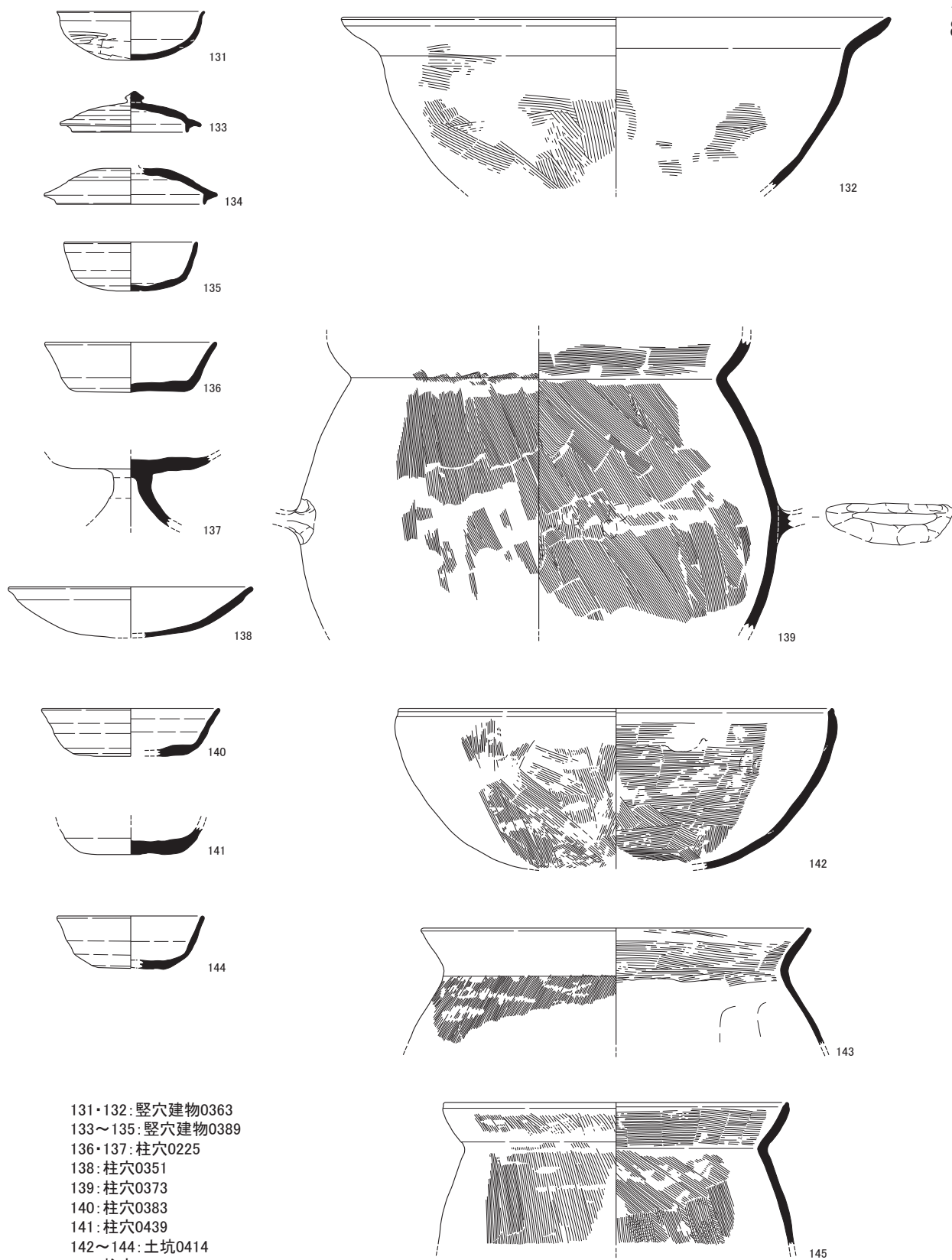
130



126

119~123: 竪穴建物0218
124~130: 竪穴建物0219





131・132: 竖穴建物0363
133~135: 竖穴建物0389
136・137: 柱穴0225
138: 柱穴0351
139: 柱穴0373
140: 柱穴0383
141: 柱穴0439
142~144: 土坑0414
145: 柱穴0466

0 20 cm



1. 調査地全景（調査地より御所方向を望む）



2. 第1面 溝0001検出状況（北から）



1. 第1面 溝0001西壁水面痕跡（東から）



2. 第3面 竪穴建物0389竈検出状況（西から）



1. 第1面 溝0001完掘状況（北から）



2. 第2-1面 調査区全景（東から）



1. 第2-1面 礎石建物0508、溝0041全景（北から）



2. 第2-1面 地中梁D内溝0124掘削後状況（南から）



1. 第2-2面 調査区全景（東から）



2. 第2-2面 濠0039掘削後状況（東から）



1. 第2-2面 柵列0510・0511全景（西から）



2. 第2-2面 柵列0512全景（西から）



1. 第2-2面 土坑墓0335 遺物出土状況（東から）



2. 第2-2面 土坑0148底部礫検出状況（南西から）



1. 第3面 調査区全景（西から）



2. 第3面 竪穴建物0164床面検出状況（西から）



1. 第3面 竪穴建物0218床面検出状況（南から）



2. 第3面 竪穴建物0219床面検出状況（南から）



1. 第3面 竪穴建物0363・0364・0468床面検出状況（北から）



2. 第3面 竪穴建物0389・0421床面検出状況（西から）



1. 第3面 竪穴建物0389（拡張前）状況（東から）



2. 第3面 竪穴建物0164竈検出状況（西から）



1. 第3面 竪穴建物0164竈遺物出土状況（西から）



2. 第3面 竪穴建物0164竈支柱石検出状況（北西から）



1. 第3面 竈建物0219竈セクション断面（東から）



2. 第3面 竈建物0389竈セクション断面（南から）



1. 第1面 溝0001出土遺物



2. 第2-1面 瓦溜り出土土器類



19

1. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦NM1a



20

2. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦NM1b



21

3. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦NM1c



22

4. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦NM2



23

5. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦NM3



24

6. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦NM4



25

7. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦NM5



26

8. 第2-1面 溝0041出土軒丸瓦NM6



27



28

1. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦NM7

2. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦NM8



29

3. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦NH1a



30

4. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦NH1b



31

5. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦NH1c



1. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦NH 2



2. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦NH 3



3. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦NH 4



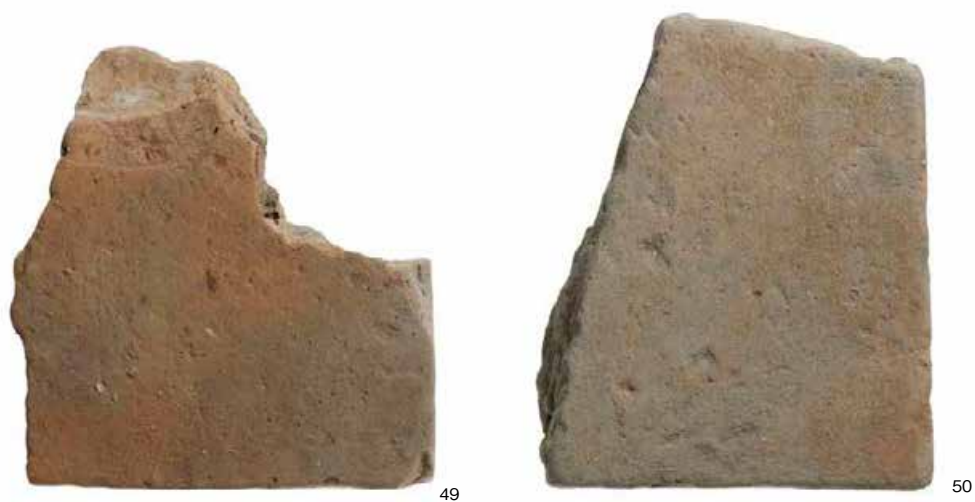
4. 第2-1面 溝0041出土軒平瓦NH 5



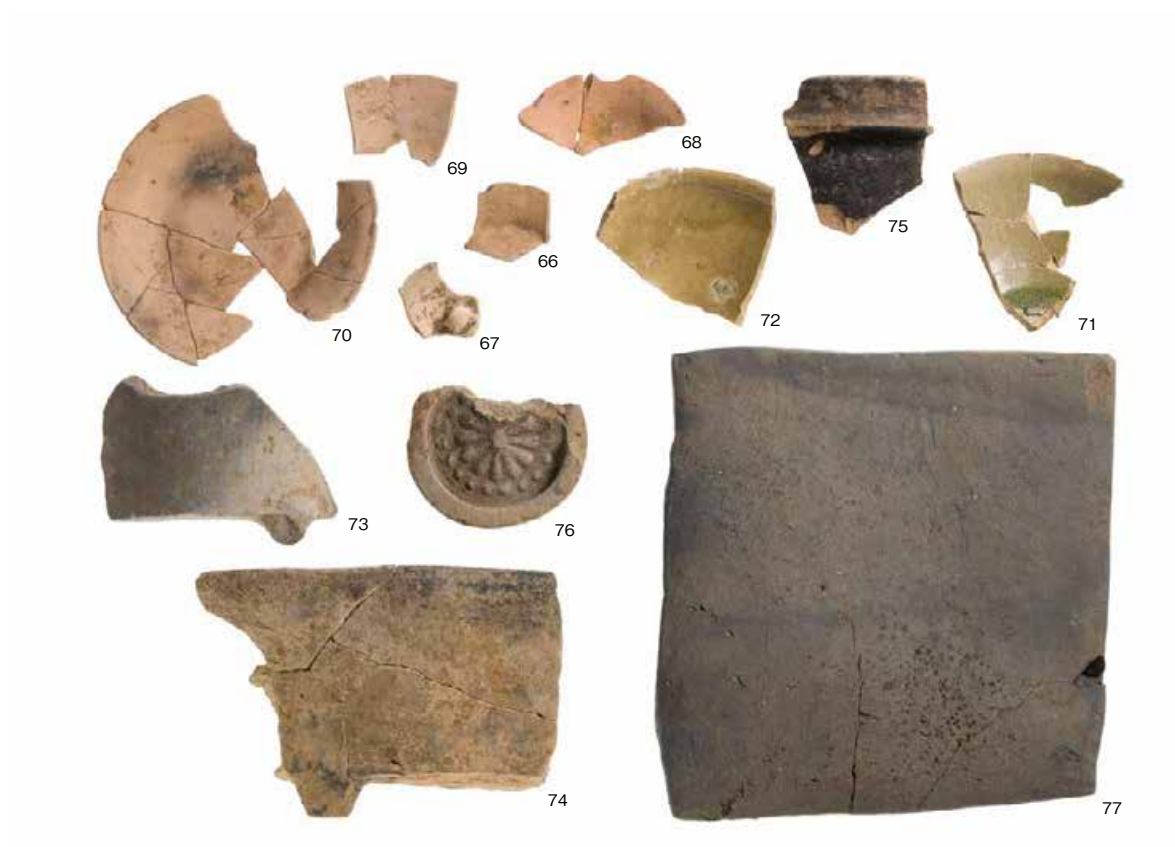
5. 第2-1面 柱穴0047出土水晶製品



1. 第2-1面 溝0041出土鬼瓦



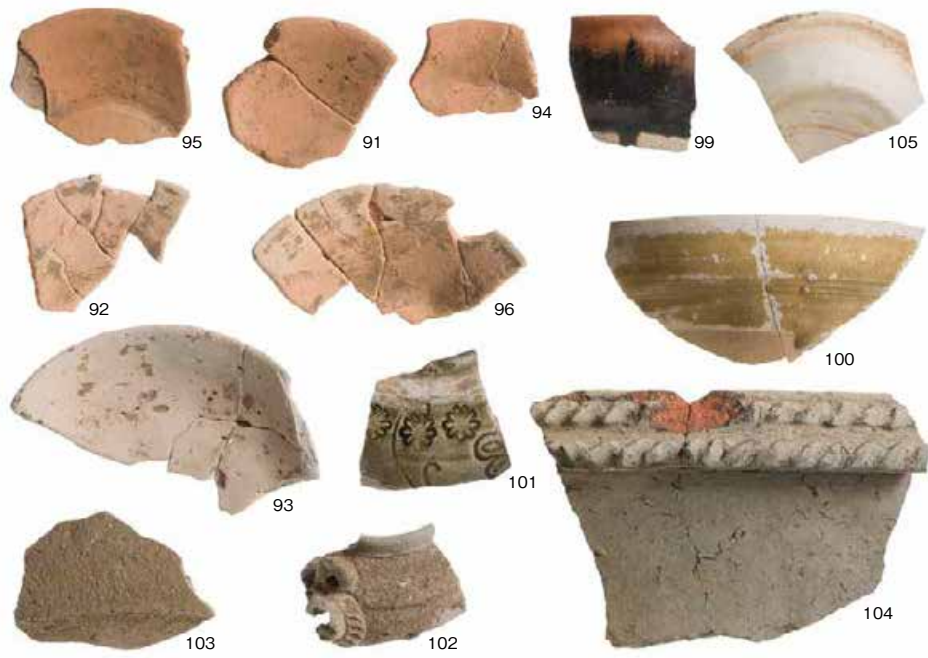
2. 第2-1面 溝0041出土磚



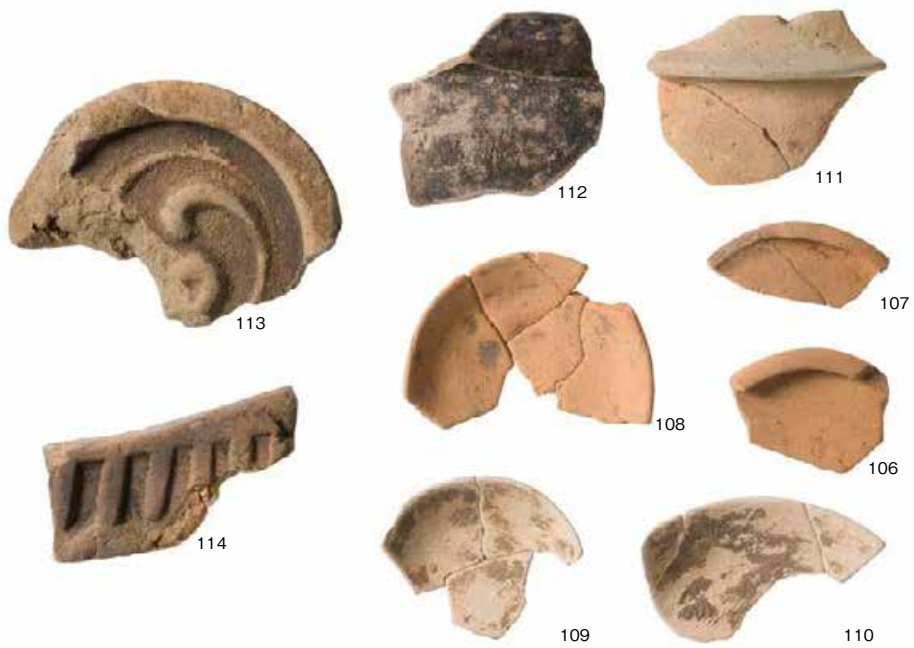
1. 第2-2面 濠0039出土遺物



2. 第2-2面 土坑0128出土瓦



1. 第2層出土遺物



2. 第3面 溝0145出土遺物



1. 第3面 豎穴建物0164竈出土遺物



2. 第3面 豎穴建物0218出土遺物



1. 第3面 豎穴建物0219出土遺物



2. 第3面 豎穴建物0363・0389出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しょうこくじきゅうけいだい・かみごりょういせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	相国寺旧境内・上御霊遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	辰巳陽一 望月麻佑 北野信彦 田邊貴教 吉川絵里							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2020年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうこくじきゅうけいだい・かみごりょういせき遺跡	きょうとしかみぎょうく京都市上京区しょうこくじもんぜんちやう相国寺門前町709ばんち709番地	26100	229169	35度02分02.7秒	135度45分47.1秒	2019年11月27日～2020年4月30日	1,822㎡	既存建物解体事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
相国寺旧境内上御霊遺跡	寺院集落	白鳳時代～奈良時代	竪穴建物 掘立柱建物 柵列	土師器 須恵器 鉄滓		・7世紀後半の竪穴建物群、掘立柱建物など、上御霊遺跡に関わると思われる遺構を検出した。		
		鎌倉時代	溝	土師器 瓦				
		室町時代～桃山時代	濠 溝 礎石建物 柵列 土坑（瓦溜り）	土師器 須恵器 瓦器 陶磁器 瓦		・16世紀前半に開削、埋没したと考えられる濠状遺構、当該遺構埋没後に建てられたと考えられる礎石建物の礎石を検出した。 ・近代に入って構築されたと考えられる石組みの禁裏御用水遺構を検出した。		
		近代	石組み溝（禁裏御用水）	陶磁器 ガラス瓶				

相国寺旧境内・上御霊遺跡 発掘調査報告書

発行日 2020年9月30日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961